

平成 26 年度

目白大学大学院心理学研究科 博士論文

性別違和を有する者の性別移行に関する心理学的研究

目白大学大学院博士後期課程心理学研究科心理学専攻

西野 明樹

指導教員 沢崎 達夫 教授

目 次

要 約

第 1 章 文献的検討

第 1 節	性別違和を有する者に関する歴史的背景	1
第 2 節	性別違和を有する者に関する心理学的研究の動向	27
第 3 節	性別違和を有する者のアイデンティティ	33

第 2 章 本論文の着眼点と目的

第 1 節	本論文の着眼点	53
第 2 節	本論文における概念の定義と整理	55
第 3 節	本論文の目的	58

第 3 章 FTM/X 自認者が語る社会適応と共生（研究 1）

第 1 節	研究 1 の問題と目的	59
第 2 節	研究 1 の方法	61
第 3 節	研究 1 の面接概要	64
第 4 節	共通項の抽出	118
第 5 節	男性への帰属意識と発言内容の違い	134

第 4 章 F to M/X 性別移行過程の検討（研究 2）

第 1 節	研究 2 の問題と目的	145
第 2 節	研究 2 の方法	147
第 3 節	研究 2 で行われた分析のプロセス	152
第 4 節	研究 3 のストーリーライン：社会適応再構築プロセス	163
第 5 節	F to M/X 性別移行に関する考察	167
第 6 節	研究 2 の成果と課題	170

第 5 章 M to F/X 性別移行過程の検討（研究 3）

第 1 節	研究 3 の問題と目的	172
第 2 節	研究 3 の方法	173
第 3 節	研究 3 で行われた分析のプロセス	177
第 4 節	研究 4 のストーリーライン：心理社会的アイデンティティ再構築プロセス	182
第 5 節	M to F/X 性別移行に関する考察	185

第 6 章 未身体的治療期におけるカミングアウト機能の検討（研究 4）

第 1 節	研究 4 の問題と目的	192
第 2 節	研究 4 の方法	194
第 3 節	研究 4 で行われた分析のプロセス	196
第 4 節	研究 4 のストーリーライン：カミングアウト体験プロセス	199
第 5 節	未身体的治療期のカミングアウトに関する考察	202

第 7 章 質的研究知見の数量的検討（研究 5）

第 1 節	研究 5 の問題と目的	207
第 2 節	研究 5 の方法	208
第 3 節	研究 5 の結果	211
第 4 節	研究 5 の考察	220

第 8 章 総括的討論

第 1 節	本論文を構成する研究によって得られた知見	225
第 2 節	性別違和を有する者への心理社会的援助	231
第 3 節	今後の研究課題	234

引用文献	235
------	-----

謝辞	242
----	-----

資料	
----	--

要 約

人々の中には、性自認 (gender identity) と一致しない自らの生物学的性 (biological sex) (または、身体的性別 (physical gender)) や二次性徴に、嫌悪感や忌避感 (性別違和感 (gender dysphoria)) を抱く者がいる。彼らの性別違和感を軽減させる有益な手段には性別移行 (gender transition) があるが、それに踏み出すまでやその最中には、様々な心理社会的葛藤が体験される。社会的制約や偏見に苦悩する者も少なくない。こうした性別移行にまつわる心理社会的苦悩と心理的成長に関する研究成果をまとめたのが、本論文である。

第 1 章「文献的検討」で研究背景、第 2 章「着眼点と目的」で研究目的を述べた後、性別違和を有する方の語りをもとにした 4 つの質的研究から得た知見を、第 3 章「FTM/X 自認者が語る社会適応と共生」、第 4 章「F to M/X 性別移行の検討」、第 5 章「M to F/X 性別移行の検討」、第 6 章「未身体的治療期の性別移行におけるカミングアウト機能の検討」にそれぞれまとめている。第 7 章「質的研究知見の数量的検討」には、これら 4 つの質的研究をもとに立てた仮説を統計的に検証した量的研究の成果を報告した。最終章にあたる第 8 章「総括的討論」ではまず、前章までに得られた研究知見を総括し、先行研究動向に照らしながら本論文の独創的な点を提起した。次に、これらを踏まえて性別違和を有する者の性別移行に対する心理社会的援助の可能性等について討論し、最後に、心理社会的援助の質的向上を見据えた今後の研究課題に言及した。

1. 文献的検討 (第 1 章)

第 1 章第 1 節では、歴史的文献や 1880 年代以降の精神医学史、1960 から 1970 年代にかけて展開されたセクシャルマイノリティ当事者による社会運動、アメリカ精神医学会が発刊する DSM 上の記載に関する変遷、1960 年代のブルーボーイ事件を発端とした本邦独自の医療史等を紐解きながら、性別違和を有する者が置かれてきた社会的現実を概説した。第 2 節では、性別違和を有する者を取り上げた心理学関連領域の論文を、(a) 性同一性障害の発生と状態像に関する研究、(b) 治療および支援の有用性に関する研究、(c) 心理社会的援助の観点から行われている研究という 3 点から概観した。

これらから、これまで性別違和を有する者に対する専門的援助・支援の主流をなしてきた身体的治療 (性ホルモン投与、性別適合手術等) は、性別違和感の軽減には奏功するものの、全般的なメンタルヘルスの回復・向上への寄与は十分でなく、治療後の社会適応にも課題が

あることが示唆された。また、本邦の性別違和を有する者に関する学術論文は、身体的治療の適用判定や性別違和感の強弱の鑑別に関心を向けたものが大半であり、心理社会的援助のあり方に有意義な知見を投じるような研究成果の蓄積が不可欠と考えられた。

性別違和を有する者を説明する際に頻用される医学用語のひとつに、“gender identity”がある。第3節では医学用語としての gender identity と心理学分野で広く知られている E. Erikson によるアイデンティティ概念の相違を論考した。また、後年の Erikson がより本質的と述べたようなアイデンティティの再構築プロセスを提示している質的研究論文、同性愛当事者のアイデンティティ形成におけるカミングアウトの重要性を指摘する事例研究論文、性別違和を有する者の心性を自我統合の文脈で解釈した展望論文等を引きながら、性別違和を有する者の性別移行を“全人的なアイデンティティの再構築”の観点から捉える意義に言及した。

2. 本論文の着眼点と目的（第2章）

第2章ではまず、国際生活機能分類（International Classification of Functioning, Disability and Health：以下、ICF）（World Health Organization, 2001）に照らして、心理社会生物的視座から性別違和を有する者が抱く生きづらさを模式化した（“健康”に「性自認に沿った well-being」，“環境因子”に「社会に既存の性別二元論的価値観」等，“個人因子”に「指定された性別に沿った生育歴・学歴・人間関係」等を置き、「当人の性自認に対してその身体に反映されている性別の特徴が不一致であることに由来する生きづらさ」を“機能・形態障害”（以下、身体的障害）、「当人の性自認とは異なる性別を持つ者として他者や社会に見なされることに由来する生きづらさ」を“活動制限”および“参加制約”（以下、社会的障害）として各要素の相互作用を動的に記述）。

本論文の目的 社会的障害への介入という観点から性自認に沿った well-being 実現に貢献し得る心理社会的援助のあり方に知見を得るため、性別違和を有する者から聴取した語りを質的に分析して性別移行過程で体験される心理的变化を描出し、その肯定的側面に寄与する要因を明らかにすることを目的とした。

なお本論文では、各個が有する性自認の多様性や必ずしも医療機関に頼らずに性別移行を果たす者がいる現状を踏まえ、“性別違和を有する者”について、“少なくとも指摘された性別への不適合感に類似するような性別違和を有することで社会適応上の葛藤があると自認しており、自らの本来的な生き方を実現するために性自認に関する言語・非言語的カミン

グアウトをとまなう性別移行を要する者”という操作的定義を設けた。また、本論文を構成する研究で行ったすべての調査は当事者自助団体等を通じて協力者を募り、医療機関を紹介することは一貫して控えることとした。

3. 質的研究（第 3, 4, 5, 6 章）

研究 1（第 3 章） FTM/X 自認者の社会適応状況および、非当事者との間で生じている齟齬や葛藤について探索的知見を得るため、FTM/X 自認者 15 名に対し、“社会適応と共生社会”をテーマとした半構造化面接を行った。

第 3 節では、(a) 当事者性のカミングアウトにまつわる不安、(b) カミングアウトの目的、(c) “埋没（自らの当事者性をカミングアウトせず、自分の過去や戸籍を隠すことで、あたかも生まれながらの‘男性’であるかのように振る舞って生活すること）”と“適応（自らの当事者性をカミングアウトしながら周囲の理解を得ることで、自分の希望通りの性別で生活すること）”に関する考え、(d) 性別違和を有さない非当事者との共生に必要だと思うことという、4 つの観点に言及する語りを取り上げ、各面接協力者の社会適応と共生のあり様を個別事例としてまとめた。

第 4 節では、先述の 4 観点に言及する 15 名分の語りを類型化することで、面接協力者間の語りの共通項を抽出した。その結果、カミングアウトにまつわる不安は直接的な関係性がある身近な者に対してより強く抱かれること、親へのカミングアウトと友人へのカミングアウトは質的に異なること、FTM/X 自認者は女性として出生した過去から現在へとつながる歴史性を持つ存在を“ありのままの自分”と感じながらも、対他的・対社会的には“男性”として“埋没”することを望んでいること、性別二元論が深く浸透した社会と性別二元論では捉え切れない性別のあり方を持つことで抱かれる心理社会葛藤に苦悩していること等が示唆された。

第 5 節では自認する性別の属性、主とした現在のあり方、主として希望するあり方について、男性への帰属意識を観点に群分けを行い、第 4 節で得た語りの共通項への言及者数を群間比較した。その結果から、大多数が言及する“埋没”志向の背景には、“男性”への帰属感や性別違和の軽減という積極的動機に加え、“男性”として社会的多数派に同化して社会的スティグマを免れたいという消極的動機があることが考察された。

研究 2（第 4 章） 研究 1 は、その結果に F to M/X 性別移行の時間的プロセス性を加えることに成功していない。研究 2 では、研究 1 で収集した FTM/X 自認者 15 名の語りに修正

版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA）を適用し、社会適応に関する動的理論の生成を試みた。その結果、【従来の適応からの前抜け出し期】【望む性での社会適応模索期】【主体的な社会適応再構築期】の3期からなる、社会適応再構築プロセスが生成された。3期のプロセスとともに、性別にまつわる困難の意味合いが変化していくこともわかった。さらに、【主体的な社会適応再構築期】にあるFTM/X自認者は、性別を越えた1人の人間として自らの当事者性を引き受けたり性別二元論に規定された社会に対して働きかけたりすることで、性別に関する一般的な一貫性を持たない者達が“ありのままの自分”で生きられるような社会へと変革する志を有していることが見出された。

研究3（第5章） 一般に、F to M/X性別移行よりM to F/X性別移行の方が、社会的偏見に曝されやすい。そこで研究3では、性別違和感を自覚した頃を起点としたM to F/X性別移行体験を時系列に沿って聴取する半構造化面接を実施し、M to F/X性別移行に関する動的理論の生成を試みた。

MTF/X自認者16名の語りをM-GTAにて質的に分析した結果、【自問自答】から【苦楽ある私だけの人生】に至るまでの心理的变化を説明する心理社会的アイデンティティ再構築プロセスが生成された。このプロセス理論をもとに考えると、生物学的性によって指定された性別から抜け出していくプロセスは、性別違和を有する者が自らの本来的なかつ根源的存在意義を手にするために必須のプロセスと言える。また、彼らの心理社会的アイデンティティが再構築されていく上で最も大きな原動力となる“艱難から解放された感覚”は、性別違和を有する本人自らが、希望する性別でのあり方で生きていくために他者や社会との相互協調を主体的に試行錯誤していくことでもたらされることが見出された。

研究4（第6章） 先述の研究3で見出されたMTF/X自認者が苛まれる対他的性別移行の苦悩の1つに、いつまでも“男（性）”として見なされる現実から抜け出せないことがあった。性別違和を有する者が抱く対他的・対社会的葛藤は、外見上の性別移行がもたらされる以前により強いと考えられる。研究4では、性別違和を有する者13名（MTF/X自認者6名、FTM/X自認者7名）に対し、身体的治療による外見的变化をとまなわない時期のカミングアウト体験を聴取する半構造化面接を行った。分析にはM-GTAを用いた。

その結果、【知ってもらうには言うしかない時期】【必要以上は口にしたくない時期】【対話を通して自分らしさを表現する時期】からなる未身体的治療期のカミングアウト体験プロセスが生成された。また、性別違和を有する者が行うカミングアウトの機能は各期に対応した特徴があり、“生きるためのカミングアウト”、“変化を求めるカミングアウト”、“自己

表現としてのカミングアウト”のように、性別違和を有する者とカミングアウト相手との関係性によって異なる意味が付与されていることが見出された。

4. 量的研究（研究 5（第 7 章））

研究 5 では、研究 1, 2, 3, 4 の結果をもとに、以下 3 つの仮説を立てた。（仮説 1）well-being の伴う性別移行過程ではその人独自の本来的なアイデンティティが再構築される、（仮説 2）“男性” / “女性” に対する同一性の感覚ではなく性別を超越した自我アイデンティティの感覚の強さが性自認に沿った社会生活の実現度と深く関係する、（仮説 3）性別移行過程に伴う肯定的な心理的变化は、性別二元論に由来する他者や社会との軋轢や心理社会的葛藤・苦悩から抜け出そうともがき努めることでよりよく導かれる。これらの仮説を検証するため、日本全国の性別違和を有する者に対する自己記入式質問紙調査を行った。

調査の結果、性別違和を有する者 267 名から有効回答が得られた。このデータについて因子分析等を行い、（尺度 a）“多次元自我同一性尺度”（谷，2001）（性別違和を有する者が回答することを想定して項目を一部改変）をもとにして得た“要性別移行者用多次元自我同一性尺度（MEIS-TG）”の 4 下位尺度得点（要性別移行者対自的アイデンティティ得点，要性別移行者対他的アイデンティティ得点，要性別移行者心理社会的アイデンティティ得点，要性別移行者自己斉一性・連続性得点）を性別移行過程におけるアイデンティティ再構築の指標、（尺度 b）米国で開発された“Posttraumatic Growth Inventory”（Tedeschi & Calhoun, 1996）を西野・沢崎（2014）が邦訳した 21 項目（教示文中にある“苦境体験を通して”との記述を，“あなたの社会生活が身体的性別に基づくものから性自認に沿った性別によるものへと移行していく中で”に置き換えた）をもとにして得た“性別移行過程における Posttraumatic Growth 尺度（性別移行 PTG 尺度）”の 2 下位尺度得点（自己に対する有力感の獲得得点，人間らしい生き方と親しみの再認得点）を性別にまつわる心理社会的葛藤のなかで経験される肯定的な心理的変容の指標とした。

これに、（尺度 c）“ある性別への統一性，一貫性，持続性の感覚”を測るジェンダー・アイデンティティ尺度（GIS）（佐々木・尾崎，2007）（高次下位尺度“現実展望的性同一性”を構成する展望的性同一性得点および社会現実的性同一性得点，高次下位尺度“一致一貫的性同一性”を構成する自己一貫的性同一性得点および他者一致的性同一性得点の 4 得点を主に使用），（尺度 d）外見的性別転換度として回答を求めた，ここ 1 週間見知らぬ他者からのくらい身体的性別とは異なるもう一方の性別とみなされているかの自己評定（“0. 身体

の性別に即してみなされている状態” — “100. 身体的性別と逆の性別としてみなされている状態”), (尺度 e) 性自認に沿った社会生活実現度の指標とした回答を求めた, ここ 1 週間性自認 (必ずしも男・女のどちらかに振り分けられないその人独自の本来のもの) に沿った社会生活が実現しているかの自己評定 (“0. 全く送れていない状態” — “100. 完全に送れている状態”) を加え, 性別移行 PTG 尺度の自己に対する有力感の獲得得点と人間らしい生き方と親しみの再認得点をそれぞれ目的変数, 4 つの GIS 低次下位尺度得点, 4 つの MEIS-TG 下位尺度得点, “外見的性別転換度”, “性自認に沿った社会生活実現度” を説明変数とした重回帰分析 (強制投入法) を行った。

その結果, 自己に対する有力感の獲得得点を目的変数とした場合の調整済み決定係数は $R^2 = .28$ ($p < .01$) で, 有意な関連が認められたのは, 自己一貫的性同一性得点 ($\beta = -.26$, $p < .01$), 要性別移行者対自的アイデンティティ得点 ($\beta = .39$, $p < .01$), 要性別移行者自己斉一性・連続性得点 ($\beta = -.13$, $p < .05$) の 3 つであった。人間らしい生き方と親しみの再認得点を目的変数とした場合の調整済み決定係数は $R^2 = .24$ ($p < .01$) で, 有意な関連が認められたのは, 展望的性同一性得点 ($\beta = .24$, $p < .01$), 社会現実的性同一性得点 ($\beta = -.18$, $p < .05$), 自己一貫的性同一性得点 ($\beta = -.36$, $p < .01$), 要性別移行者対自的アイデンティティ得点 ($\beta = .22$, $p < .01$), 要性別移行者対他自的アイデンティティ得点 ($\beta = .29$, $p < .01$), 要性別移行者自己斉一性・連続性得点 ($\beta = -.25$, $p < .01$) の 5 つであった。

これらの結果から, (a) 過去から現在まで一貫して揺るぎない性自認を保持しているとの自負が心理的成長に負の影響を与えること, (b) 現在から未来に向けて展望が開けていることがエンパワメント (empowerment : 自己の有力化) につながることで, (c) 人間らしい生き方と親しみの再認には, 自己内と他者間の両アイデンティティが正の影響を与えることが明らかとなった。また, 性別移行進捗度に関する 2 つの得点 (外見的性別転換度, 性自認に沿った社会生活実現度) は, 性別移行 PTG 尺度の 2 下位尺度得点いずれとも有意な関連を示さなかった。このことから, 性別移行過程に伴う肯定的な心理的变化は, 性別移行がどの程度進捗しているかという現実的变化から影響を受けない, 極めて内的な感覚であることが推測された。

5. 総括的討論 (第 8 章)

本論文を構成する 5 つの研究からは, (a) 性別違和感を自覚してから性別移行に歩み出すまで, 特に幼少期から思春期にかけては, 自らが “男であるか, 女であるか” が大きな苦

悩と自己嫌悪をもたらすこと、(b) “ありのままの自分”として主体的に生きようとする際、“男性”とも“女性”とも言い切れない自身と社会に既存の性別二元論との齟齬は、内的葛藤として当人の中に内包されていくこと、(c) 性別違和を有する者にとって、性別移行は本来的な当人独自の性自認に沿ったあり方を獲得していくための試行錯誤過程として体験されるものであり、そこで行われる他者や社会との相互協調が心理社会的 well-being の感覚を導いていくこと、(d) 心理社会的 well-being の実現過程には、生物学的性（身体的性別）とは異なる性別であることに関する、他者からの承認が不可欠であること、(e) 主体的な社会適応や心理社会的アイデンティティの再構築は、性別にまつわる心理社会的葛藤の解消と同義ではないこと、(f) 決死の覚悟で行う単発的なカミングアウト体験を重ねていくなかで、自らのあり様を表現して伝えていく継続的なカミングアウト（対話）を希望するようになっていくこと、(g) 出生時の生物学的性と反対の性別に限りなく近づくことではなく、性別を超越した自我アイデンティティの獲得によって、性別移行過程に伴う心理的成長がもたされることが明らかとなった。

これらを鑑みると、外見や社会生活などの目に見える具体的変化がともなう“性別移行”が性自認に沿った心理社会的 well-being を実現させるものとなるには、当人が他者や社会の相互協調を主体的に試行錯誤していくことが有益と考えられる。彼らの性別移行に関わることになった援助・支援の提供者に求められるのは、社会に深く浸透している性別二元論に囚われない当人独自のあり方を協働的に模索することを通して、性別を超越した自我アイデンティティの感覚の獲得をエンパワメントすることと言えるだろう。

今後の研究課題として、性別違和を有する者が直面する特有の社会的課題に注目し、性別違和を有する者の生活の場によりコミットした研究知見を得ていくことが挙げられる。具体的には、就職や就業上の困難、在職中の性別移行、戸籍上の婚姻や家族関係を得られないなかでのライフパートナーシップ形成等を取り上げることが意義深いと考える。

本論文を構成する研究成果

西野明樹 (2008). 性同一性障害 (GID) 当事者の語る社会適応のあり方——FTM 及びその周辺群への心理的援助に関する一考察—— 埼玉大学教育学部学士論文 (未公開). [第 3 章]

西野明樹 (2011). 性同一性障害を自認する当事者の性別移行のなかにみる社会適応再構築プロセス——FTM への半構造化面接から—— コミュニティ心理学研究, 14, 166-

189. [第4章]

西野明樹 (2012). 性同一性障害当事者の性別移行のなかにみるアイデンティティ再構築プロセスについて——半構造化面接による MTF カミングアウト体験の聴取から——
目白大学大学院心理学研究科修士論文 (未公刊). [第5章]

西野明樹 (2013). 未身体的治療での社会的性別移行過程初期における“カミングアウト”
とその意味——性別違和を有する者13名の語りをもとにしたプロセス理論の生成——
GID (性同一性障害) 学会雑誌, **6**, 43-54. [第6章]

西野明樹 (2014). 性別違和を有する者の性別移行過程に見られる心理社会的アイデンティ
ティ再構築プロセス——MTF を自認する当事者16名との半構造化面接から—— コ
ミュニティ心理学研究, **17**, 199-218. [第5章]

西野明樹・沢崎達夫 (2013). アイデンティティの本質をめぐる研究の動向と課題——性同
一性障害の性別移行を観点として—— 目白大学心理学研究, **9**, 129-141. [第1章]

西野明樹・沢崎達夫 (2014). 苦境体験における Posttraumatic Growth に関する研究——
体験者の主観的意味づけに着目して—— 白大学心理学研究, **10**, 11-24. [第7章]

西野明樹・沢崎達夫 (2015). 性別違和を有する者の性別移行と心理的成長に関する研究,
目白大学心理学研究, **11**, 55-71. [第7章]

第 1 章 文献的検討

人々のなかには、出生時に指定された性別（assignment gender）と自らの性別に関する認識との食い違い（性別の不一致（gender incongruence））に違和感（dysphoria）を抱く者（以下、性別違和を有する者）がいる。本章では、こうした性別違和を有する者達に関する国内外の文献を紐解きながら、彼らが置かれてきた社会的現実を概説する。

第 1 節 性別違和を有する者に関する歴史的背景

1 歴史的文献に見る性別違和を有する者

古代ギリシア神話に描かれている両性具有の 2 神

雌雄合体の神アンドロギュノス 古代ギリシアの哲学者プラトン（Πλάτων：B.C.427—B.C.347）の著作『饗宴』のなかに、喜劇作家アリストファネス（Αριστοφάνης：B.C.446 頃—B.C.385 頃）が人間の原初の姿をしたギリシア神に言及する部分が記述されている。その神の姿は球体で、円筒形の首の上に 2 つの顔と 4 つの耳を持つ 1 つの頭があり、背は円く、円筒状の横腹に手と足を 4 本ずつ備えている。似通った 2 つの顔は互いに反対側を向いている。性器は 2 つあり、男性（άνδρας（古希），andras（羅））のものと女性（γυναίκα（古希），gynaika（羅））のものが 1 つずつあり、名を“アンドロギュノス（Ανήργυνή（古希），Androgynous（羅））”と言う。原初の人間はアンドロギュノスのような“男—女”型の種族以外に“男—男”，“女—女”という 2 種族があり，“男—女”が分かれて異性愛の男性と女性，“男—男”が分かれて同性愛の男性，“女—女”が分かれて同性愛の女性となったのだとアリストファネスは発言している。

無意識を“個人的無意識”と“集合的無意識”に分けた C. G. Jung（1875—1961）は、集合的無意識を祖先から引き継がれた普遍的な人類共通の神話的な過去と捉え、集合的無意識の 6 元型（archetyp（独）：archetype（英））のうち 1 つに、“アニマ／アニムス”

を挙げている。“アニマ／アニムス”が考案された背景にある“人は潜在的な可能性として androgynous であるという考え”には、人間の原初の姿をアンドロギュノスとするギリシア神話からの影響が認められる。

両性具有の神ヘルマフロディトス “両性具有 (hermaphrodite)”の語源は、ヘルマフロディトス (Ἑρμαφρόδιτος (古希), Hermaphroditus (羅)) と言う、古代ギリシアの神と考えられている。古代ローマの詩人オウィディウス (Ovidius : B.C.43—B.C.17) の『変身物語 (原題, Metamorphoses (羅))』によると、ヘルマフロディトスは、男性美の典型である男神ヘルメス (Ἑρμῆς (古希), Hermēs (羅)) と女性美の極致である女神アフロディーテ (Ἀφροδίτη (古希), Aphrodītē (羅)) との間に生まれた美少年であった。15歳の時、旅路で水の精のひとりサルマキス (Σάλμακις (古希), Salmakis (羅)) に一目惚れされ誘いを受けるが、頑なに拒んだ。サルキマスいったん引き下がった、ある夏の日、泉で泳いでいるヘルマフロディトスに抱き、自分とヘルマフロディトスが永遠に離れないようにと神に祈った。果たしてその願いは聞き入れられ、ヘルマフロディトスとサルキマスは、どちらの性ももたぬようできてどちらの性ももっているようなひとつの存在となった。ヘルマフロディトスの体つきは、曲線的かつ官能的で女性らしい、豊満な乳房を持つものとなった。男根はその機能を失い、形だけが残った。ヘルマフロディトスは、かつて逞しく男らしかった我が肉体が女性らしい柔らかなものへと変貌してしまったことを嘆き、サルキマスの泉の水を浴びた者は自分と同じような“男女”の身となるようにと呪った。

一方で、両性具有となった後もヘルマフロディトスの美しさには変わりがなく、むしろ男にも女にもない摩訶不思議な魅力の持ち主として崇拝された。芸術の世界においてヘルマフロディトス (両性具有者) は、普通の男性・女性が抱える欠落が補完された理想的人間、あるいは完全性の象徴として描かれることも多い題材である。フランスのルーブル美術館が所蔵するヘレニズム時代 (B.C.300—B.C.100) のギリシア美術を代表する作品、『眠るヘルマフロディトス』もその1つとして知られている。

身体的な性別と異なる性別で生きる者達

本当に男となったイピス 先に挙げた『変身物語』から、もう1つのエピソードを紹介したい。女性が男性に変身する物語である。

あるところに出産を控えた1組の夫婦がおり、夫は妻に、“生まれた子どもが女の子であったら育てるのをやめよう”と言っていた。ところが、出産が迫ったある日、妻の夢に女

神が現れ、妻は“生まれた子が女の子であっても育てるように”との神託を授かることになった。その後しばらくして出産を迎えた妻は、女の子を産み、夫には男の子であったと偽ってその子を育てた。夫は男の子であったことを喜び、祖父の名“イピス”をその子に与えた。そしてそのまま、男の子として育てられていった。

イピス 13 歳のとき、イアンテという娘と恋に落ちた。ふたりは婚約を交わし、妻となるイアンテは、婚礼の日が来るのを待ちわびていた。対してイピスは、女性を愛してもその人を自分のものには決してできない女の身を持つ自身に絶望し、母の夢で神託を宣べた女神に、己の身を男にして欲しいと祈った。やがてその願いは聞き入れられ、イピスは男性としてイアンテと結ばれることとなった。

『変身物語』で描かれているイピスは、出生後の環境や育て方によって後天的に男性としての性自認を形成していったとも理解されるため、性別違和を有する者そのものが描かれているとは言えない。しかし、自らを男性と自認していながら女性の肉体を持つことで抱かれる苦悩や絶望が、紀元前に著された書物にも記述されている点は非常に興味深い。

女らしい若君と男らしい姫君 日本の古典からは、平安時代後期に成立したと言われていた『とりかへばや物語』(大槻・今井・森下・辛島 校注, 1992) に登場する 2 人の兄妹を紹介したい。

平安時代、宮家にも近い血筋を持つ由緒正しき貴族の家に、2 人の兄妹がいた。若君と姫君は異母兄妹であったが顔立ちはよく似ており、どちらの容貌も大変優れていた。兄妹の父は兄妹の美しさをたいそう喜ばしく思っていた。しかし、成長するにつれ若君はひどく人見知りするようになり、御帳の中や几帳の裏で、絵描き、雛遊び、貝合わせのような、女性の遊びばかりするようになった。男子としての教養を教えようと思っても恥ずかしがるばかりで、父が叱れば涙をこぼすのであった。

一方の姫君はいたずら好きで、若い男や童と一緒に、戸外で鞠や小弓をしてばかりいた。父が屋敷の客間で客人達と漢詩や和歌を詠んだり笛を吹いたりしていればどこからか馳せ参じ、誰が教えたわけでもないのに巧みに楽器を奏で、詩や歌を吟じるのが常であった。姫君の男子としての嗜みは目覚ましく、その漢ぶりに父が肝を冷やしていることなど知らない客人達が「こちらの奥方の子どもは姫君だと聞いていたが若君の間違いであった」と誤認してしまう程であった。父はすっかり若君と思い込んで楽しげに姫君の相手をしている客人に対して敢えて訂正を言うこともできず、ただひたすら「とりかへばや(若君と姫君を取り替えたい)」と情けなく思うのであった。

この後、若君は女性として尚侍、姫君は男性として右中将にまで出世するが、様々な予期せぬことが起こる宮廷生活のなかで性別を偽っていることに苦悩するようになり、最終的には身体的性別に沿った生活を送るようになる。結末だけ見れば彼らは性別違和を有する者でなかったとも解釈できるが、記述されている幼少期の様子は性別違和を有する者が示すと言われている状態像にかなり近い。

日本の医療現場で数々の性別違和を有する者達を診ている代表的な医師のひとりに数えられる康(2012)も指摘しているように、性別に違和感を持つ人々は洋の東西に関係なく、昔から一定数存在していたことが類推される。

2 近代精神医学史における性別違和を有する者

精神医学の枠組みの中で、“男性／女性として生まれ男性／女性として育ち、男性／女性的な外見を持ち、男性／女性として女性／男性を性愛の対象にする”という、一般的な性に関する一貫性を持たない者が取り上げられるようになったのは、19世紀終盤頃であった。ここでは、性別違和を有する者が重度の性倒錯（同性愛）とされていた19世紀終盤から、性同一性障害¹（gender identity disorder）として同性愛と区別されるまでの概念理解の変遷を精神医学の見地から概観したい。

反倫理的な精神病理の一類として

近代欧米医学における“性倒錯” 医学関連領域のなかで身体的性別やそれに即して求められる社会的性別（gender）に対して違和感を抱く者を初めて公に取り上げたのは、Fränkel（1853）による症例報告と言われている。1886年には、ヨーロッパ各国の裁判所で精神鑑定を担っていた司法精神医学者の Krafft-Ebing が『Psychopathia sexualism』を著し、性的倒錯者の分類と記述を行った（日本には『變態性慾心理』（Krafft-Ebing, 1886 黒沢訳, 1913）との邦題で出版され、これによって性（別）に関して一般的でない特徴を持つ者を“変態”と呼ぶことが世間に定着していった）。Krafft-Ebing（1886）によれば、

¹ DSM-5 が発刊された 2013 年 5 月以後、“性同一性障害”は“性別違和”と改称され、同時にその概念定義も大幅に改編された。そのほかにも時代によって性別違和を有する者は様々な呼称・概念定義で捉えられてきた。本稿では第 1 章に詳説しているようにこれらの用語を意図的に書き分けているため、留意して読み進められたい。

同性愛の形を取る者は軽症のものから重症のものまで4階級ある。最も軽症な第1階級は同性愛の徴候を示しながらも異性愛の素質を持つ者（現在の両性愛（bisexuality）に近い）で、これよりやや重症な第2階級が性生活でのみ同性愛の徴候が認められる者（現在の同性愛（homosexuality（男女を区別する際には、男性同性愛者がgay、女性同性愛者がlesbian）に近い）、より重症度が高い第3階級が相貌や骨格等の解剖学的見地からは正常な男性／女性として認められるにもかかわらず精神的人格や身体感覚が異性に相当するものに変化している者（現在の性別違和症（gender dysphoria）に近い）、最重度となる第4階級が精神だけでなく体質や骨格等の身体全般（生殖器を除く）が異性に相当するものへと変化していく者（現在の性分化疾患（disorders of sex development）の一部と思われる）となる。当時、一般的な性に関する一貫性を持たない者達は、ひとつの症候群の異なる段階を呈する者として捉えられてきたことがわかる。

1910年代には、身体的性別とは反対の服装をすること（異性装）を特に“服装倒錯症（transvestism）”（Hirschfeld, 1991）と呼ぶようになり、異性装をする主に同性愛者を指し示す言葉として“トランスヴェスタイト（服装倒錯者：transvestite）”が生まれた。だが当時の服装倒錯症は、異性装が一種の性的興奮と結びつけられている異性愛者（DSM-IV-TRで言う“服装倒錯フェティシズム（transvestic fetishism）”）や身体的性別とは反対の性別になることを求めるような性別違和を有する者までも含む、広い概念であった。

こうして一般的でない性（別）のあり方を持つ者に関する研究は、まずは臨床的な状態像をもとにした疾患分類の試みから始まった。しかしながら、その道の研究者でさえも同性愛やフェティシズム、性転換症等の異同を明確に説明することができず、一概に倫理的に好ましくない“性倒錯”と見なされてしまう時代が長く続いた。これらを鑑別する視点を提案する研究論文も複数発表されたが、実態に即していないという理由で当事者団体から厳しく批判されることが多く、その著者が当事者運動の支援者・賛同者であったという事例も少なくなった。

近代日本医学における“変態性欲” 日本では、19世紀終盤を始まりとする欧米諸国に追従する形で研究を進められ、先掲した『變態性慾心理』（黒沢、1913）の出版を契機に“変態性欲”への関心が高まっていった。1921年2月には、女性研究に従事していた筒井春香による監修の下、全6巻からなる『性慾研究叢書』が出版された。その第2編『變態性慾講話』では、筒井春香と高橋北堂が日本人の事例を紹介しながら変態性欲を概説している。以下に転載しているのは、その冒頭部分である。

凡そ性慾なるものは男女両性間に起こる自然的、且つ生理的の性的感情であつて、所謂性交を目的とする心理状態である。而して此性慾は生活慾又は食慾等と同じく、腦中に生ずる生理的心理状態であつて、其の遂行は男子の能動的な作用と女子の受動的な作用とに依つて圓滿に行われ、を正当とするものである。……然るに其の正当なる性慾の傾倒を來たし、不自然的に生理に反する性慾があつて、之を變態性慾又は傾倒性慾、或は又不自然的性慾と稱するのである。而して此の所謂變態性慾者は古來より存する病であつて、其の範圍亦甚だ廣いものであるが、之れを大別すれば即ち男女両性相互間に於ける變態性慾と、色情狂とに區別することが出来る。

（『變態性慾講話』（筒井・高橋，1921 齋藤編 2006）p.3，一部の旧字体を新字体で代替）

『變態性慾講話』のなかに記述されている“男性的女性”の事例概要は、現在の Female to Male の状態像に近い。“男性的女性”は以下のように概説されている。

女子の精神的內容の男性的に變化したるものを男性的女性と云ふのであつて、此の種のもは全く男子に対して不感性的となりて女性を愛し、其の特性としては其の同性に対する色情全く分化し、實際的にも亦理想的にも感情の同情の上上に注がる、ものである。而して之等のもの、十分に發達したるものは、男性的性質ありて同性に対して男子として働き、異性に対しては何等の羞恥をも感ずることがないのである。

（『變態性慾講話』（筒井・高橋，1921 齋藤編 2006）p.27，一部の旧字体を新字体で代替）

現在の Male to Female の状態像は，“男性にして女性的の者”の事例概要に近い。

其の精神的に、自ら女子なりと感覺する……而して此の種のもの、最も好む處のものは、即ち女装をことにあつて、其の平素事情の許す限り常に女服を着けて、女性の如からんことを希望するのであつて、其の愛する男性の歡心を得んが爲めには、或は笑を献し、媚を呈し、頗る努力する處である。斯くして此種のもの、感情は、自ら女性として感ずるも、女性に対しては反撥的である。即ち敵手となる男子に対して、嫉妬を起す等の事は女性と同一の状態にあつて、其の色情的交際は女性にありては同性のもの、即ち男性と見立て、可能なる場合があるも興味はないのである。

（『變態性慾講話』（筒井・高橋，1921 齋藤編 2006）p.48，一部の旧字体を新字体で代替）

筒井・高橋（1921 斎藤編 2006）は、“男性的女性”と“男性にして女性的の者”を、その生殖器は正常で性欲のみが傾倒的である“同性間変態性欲”の下位分類として捉え、“精神的に性的感情の變化する處のものであつて、其の變化は異性に相當する”と述べている。その發生因はすべて性欲異常の観点から考察され、“同性間変態性欲”は“青年男女の營養を害し、神経系統を痛め、遂に精神衰弱に陥らしむ”ものと理解されている。またその防遏としては、罪惡の自覺を促して自ら矯正するようにするほかなく、病態が重い場合には、“攝養法（戸外で適当な運動（夏には水浴）や興奮性の食物を避け、閑暇が生じない程度に精神を安静にすることで克己心を養成すること）”や“結婚療法（その生殖器によって判別される性別を基準にした場合の異性と結婚させること）”を用いるべきとしている。

『變態性欲講話』の発刊から4ヶ月を経た1921年6月、医学博士の羽太銳治による『變態性欲の研究』が、『羽太銳治 性欲学叢書』の第7編として世に出た。書の前半で“變態ならざる性欲、即ち生理的にも心理的にも正常なる處の性欲”、後半で“正常ならざる性欲、即ち不自然なる性欲”について概説している。羽太（1921 斎藤編 2006）は、『Psychopathia sexualism』を著した司法精神医学者 Krafft-Ebing（1886）に倣い、變態性欲に関する3分類（“末梢神経病”、“脊髄性神経病”、“腦性神経病”）のうち“腦性神経病”を狭義の變態性欲と捉えている。“腦性神経病”には4つの下位分類（“殘忍性ゝ慾”、“非殘忍性ゝ性欲”、“性的狂崇”、“同性間性欲”）があり、性別違和を有する者に近い一群は、“同性間性欲”として括られている2つのうち、“先天性同性間性欲”にて記述されている（もうひとつは“後天性同性間性欲”）。

こうした文献からうかがわれるように、近代日本において同性愛や性別違和、生殖器では判別できない性分化疾患は、一様に、“生殖器で判別される性別を基準とした場合に同性であるにもかかわらず異性愛に相当するような性生活を不自然に送る、同性間變態性欲”として理解されてきた。またその治療は、性欲が当人の持つ生殖器によって判別される性別に対して異性である者に向くように精神を矯正するという、異性愛を正当とした考えに根差されていたのである。

精神療法による精神の矯正から性別の適合を図る身体的治療へ

一般的でない性別のあり様を示す者は長らく一種の精神病理として捉えられ、精神を矯正するための治療が行われてきた。こうした風潮に一石を投じたのが、ドイツで生まれた

米国の開業内分泌科医，Harry Benjamin であった。

全米に注目された性転換手術 1952年12月，“米国人男性 George Jorgensen がデンマークで性転換手術（sex change operation）を受けて Christine Jorgensen になった”というニュースが『New York Daily News』に掲載された。Jorgensen 以前に性転換手術を受けた者として報道された者はいずれも当時で言う“半陰陽（hermaphrodite）（現在で言う性分化疾患）”の者で，生物学的には正常男性と判断される者が取り上げられるのはこれが初めてであった（渡部，2002）。決して好意的な報道ばかりでないなか，デンマークから米国に戻った Jorgensen の主治医となった Benjamin は，専門的見地から Jorgensen を強く支持した。Jorgensen の事例をまとめた論文（Benjamin，1953）を発表し，性別違和感を抱く者に必要なのは，ホルモン療法や性転換手術によって性別を適合化する治療であり，性転換手術は性別違和感の軽減を図る精神療法の一手段として容認すべきと主張したのである。

このとき Benjamin が身体の性別を変更したいと願う者を指し示すために論文内で使用した言葉が“性転換症（transsexualism）”である。この言葉がこうした意味合いで用い始めたのは1940年代中盤頃で，米国生まれの David Cauldwell がトランスセクシュアル（性転換者：transsexual）という言葉とともに紹介したと言われているが（Ekins & King，2001），Benjamin（1953）の最大の功績は，手術前の Jorgensen の状態像を男性が女性に閉じ込められた状態と捉えた上で，これを性転換症と紹介したことと言える。これを契機に，性別違和を有する者達が示す特異的な性行動や性役割意識は，性愛が同性愛に向かっていることから生じているのではなく，彼らの根本が身体的性別とは反対のものになってしまっていることから生じているのだという見解が広く知られるようになった。また同様に，自らの身体に関する性別の特徴までも変更を望むトランスセクシュアルは，異性装であることを好む，つまり，特異的な性の特徴が服装だけに表れるトランスヴェスタイトとは区別される存在ではないかという考えも広まっていった。Benjamin が1966年に著した『The Transsexual Phenomenon』は，性別違和を有する者に対する医療臨床の基礎を形作った彼の代表作と言える。

性別に関する諸概念の確立 現在，性別には生物学的性（biological sex）と社会・文化的に形成された性（grammatical gender：ジェンダー）があることが一般に知られている。しかし，医学や性科学の分野で“ジェンダー（gender）”という言葉を用いたとき，それは若干異なる意味合いを持つ。

外傷によって陰茎欠損となった男児の性心理を研究した米国心理学者の John Money は、性器の性 (genital-sex) は完全な男性型とは言えない男児の性役割 (gender role) が明らかに男性型であったという研究結果をもとに、人の性別は、生物学的な要素と心理社会的な要素の両者によって構築されているのではという考えを導き出した (Money, 1985)。Money (1985) は、男児に認められた性の自己意識・自己認知 (性同一性: gender identity) を“ジェンダー”と呼び、それを“男性あるいは女性、あるいはどのどちらとも規定されないものとしての個性の統一性、一貫性、持続性”と定義づけたのである (Money, 1965 東訳 2000)。その後、Money は Richard Green とともに、生物学的性は完全な男性型であるにもかかわらずそれとは反対の女性的性行動が顕著であった男児 5 名に注目し、彼らの性のあり様をジェンダー・アイデンティティ、性役割、無意識に形成されていく性的対象傾向 (性的指向 (sex orientation)) という 3 つの観点から分類した (Green & Money, 1960)。

Green & Money (1960) が生物学的性と反対の性行動を示す者に着目したのに対し、Robert Stoller は、生物学的性と反対の性自認を持つ者に着目し、性同一性についてより踏み込んだ考察を行っている。性転換症と診断されていた正常型の生物学的性を持つ子ども達の様子から案出した“中核的性同一性 (core gender identity)”である (Newman & Stoller, 1968 ; Stoller, 1964, 1968)。Stoller (1964) によれば中核的性同一性は、(1) 生物学的ホルモンの影響 (biological and hormonal influences), (2) 出生時に指定された性別 (sex assignment at birth), (3) 環境と刷り込みに類似する心理学的影響 (environmental and psychological influences with effects similar to imprinting) によって構成される“自分が男性的 (maleness) / 女性的 (femaleness) であるという生来的かつ不変的な感覚”で、生後 2 年間で強化される。

DSM および ICD への掲載と同性愛との分化 現在、精神医学的診断基準の典拠には、世界保健機構 (World Health Organization : WHO) 編纂の『国際疾病分類 (International Statistical Classification of Diseases and Related Health Problems : ICD)』と、アメリカ精神医学会 (American Psychiatric Association : APA) 編纂の『精神障害の診断と統計の手引き (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders : DSM)』とがある。

先に述べたような Money や Stoller の功績により、人の“性別”を生物学的性 (biological sex), 性自認 (gender identity), 性役割 (gender role), 性的指向 (sexual orientation) という観点から多義的に捉えられるようになった。その結果、異同が曖昧な

まま“性倒錯”という括りで理解されていた者のうち、性的指向に特異性がある者を同性愛、性自認に特異性がある者を性転換症として鑑別できるようにもなった。

こうした概念的整理の進展を受け、1979年発表のICDの第9版(ICD-9)では、「性転換症」と「小児の性同一性障害(gender identity disorder of childhood)」が「性心理障害(psychosexual disorder)」、 「青年または成人の性同一性障害」が「その他の特定の性心理障害」のなかに搭載された。同様に、1980年発刊のDSM第3版(DSM-III)でも、第I軸の性心理障害に「性転換症」が搭載され、「小児期の性同一性障害」も記載された。同性愛者にとってDSM-IIIは、同性愛当事者による人権運動の成果として同性愛が診断分類から除外された記念的文獻である。自らの性的指向が同性に向かうことに葛藤し、それを変えたいという持続的な願望を持つ者を分類する「自我違和的同性愛(Ego-dystonic homosexual)」との診断名は残ったが、これも1987年に発刊されたDSM-IIIの改訂版(DSM-III-R)で削除された。この頃から、脱病理化の道を順調に進む同性愛当事者と、ようやくその存在が認知され初めた性別違和を有する者との違いがより明らかになっていった。

1990年に採択された1993年発表のICD第10版(ICD-10)も、性的指向自体は障害とは見なされないとの見解を支持しており、「精神及び行動の障害(Mental and behavioural disorders)」として挙げられたカテゴリーのうち、セクシャリティに特化したものは、「性同一性障害(Gender identity disorders)」、「性嗜好障害(Disorders of sexual preference)」に留まった。この後、1994年にDSM第4版(DSM-IV)、そのテキスト改訂版であるDSM-IV-TRが2000年に出版されたが、おおむねDSM-IIIを踏襲しており、「性転換症」との分類名が「性同一性障害」、「性転換手術」が「性別適合手術(sex re-assignment surgery)」に置き換わった以外に大きな変更はなされなかった。

3 性別適合手術の正当性と脱病理化

精神医学的診断分類上では大きな変更はなかった1970から1990年代であるが、社会的には大きな動きがあった。ここでは、この期間に隆盛を極めたゲイ解放運動やフェミニズム運動から受けた影響も盛り込みながら、DSM-IIIへの「性転換症」掲載前後から1990年代までに性別違和を有する者達が直面した社会との葛藤を記述する。

性転換症／性同一性障害からトランスジェンダーへ

「性転換症」あるいは「性同一性障害」は DSM や ICD に掲載されている精神医学的診断の分類名であり、精神療法、ホルモン療法、乳房切除や性別適合手術がその標準治療として挙げられている。医学分野の枠組みにおいて性別違和を有する人々は、何らかの医学的介入による性別の適合化を要する一群と捉えられていることがわかる。これに対して、自らの well-being（よりよい生）を目指して選択している生き方の1つに性別があるだけで、病気ではないと主張する性別違和を有する当事者がいる。こうした脱病理化を主張する当事者達の多くは、自分達を“transgender（トランスジェンダー）”と呼称する。

この言葉の正確な出自は不明だが、女装活動家のパイオニアとして知られる Virginia Prince による女装家のための全国誌『Transvestia』1969年12月号で使用したのを契機に広まり、1970年代中盤には性別適合手術なしに身体的性別とは反対の性別で生活する事を望む人々を“trans-gender”や“trans people”と呼称するのが一般的になっていた。医療者によって造られ、すでにある種の社会的スティグマを負っていた“transsexual（性転換）”に対し、当事者によって新たに造られた“transgender（性別越境者）”はより人権的配慮の行き届いた言葉として当事者達に好まれ、次第に transsexual や transvestite をも含む包括的な概念として“transgender”が用いられるようになっていった。

同性愛者コミュニティとの協働と確執

社会的スティグマからの解放運動 1960年代から1970年代中盤にかけて、同性愛に対する社会的スティグマ（social stigma）と当事者が負わされている罪悪感・恥辱観に反発する社会的人権運動（ゲイ解放運動（gay liberation））が展開された。“Black is beautiful”をスローガンに展開された黒人解放運動から励ましと影響を受けて始まったこの運動のスローガンは、“Gay is good”とされ、その活動理念をよく体現する2つの言葉が生まれた。

Coming out of the closet 宗教的背景等により同性愛に対する社会的スティグマが強く、同性愛嫌悪（homophobia：ホモフォビア）を理由とした憎悪犯罪（hate crime：ヘイトクライム）も少なくなかった米国同性愛社会において“closet”は、自らの心身を守る代償として真の自分（ここでは性的指向とほぼ同義）を暗く抑圧された窮屈な社会の片隅に押し込めている状態を意味する一種のスラング（slang）であった。“Coming out of the closet（クローゼットから外へ）”には、“罪悪感や恥辱観からひた隠しにしてきた真の自分（ここでは自らの性的指向とほぼ同義）を内的に解放し、それを家族や友人等の周囲に打ち明

けよう”というメッセージが込められている。社会的に忌避され得る自らの特殊な属性（出生や病気、性的指向等）を表明することを指す“coming out（カミングアウト）／come out（カムアウト）”は、この“Coming out of the closet”を語源に持つ当事者用語である。

Gay pride/ Rainbow pride “Coming out of the closet”が自身の内的解放や周囲の身近な他者への打ち明けという比較的プライベートな側面に目を向けているのに対し、“gay pride”は、社会的スティグマの打開に方向づけられている。

1960年代の米国では、性的指向を理由にした解雇や同性間性交渉を事由とした刑事処罰が公然と行われていた。1969年6月、警察から踏み込み捜査を受けたニューヨークのゲイバー「ストーンウォール・イン（Stonewall Inn）」で、その場にいた同性愛者らが警官に真っ向から立ち向かった。この暴動事件を発端とした社会的権力へのデモ運動がゲイ解放運動である。1970年代後半に入ると闘争的で改革主義的なゲイ解放運動は下火となったが、同性愛に対する社会的スティグマからの解放を願う精神は、女性同性愛当事者や両性愛当事者も含んだLGBの尊厳と権利擁護を訴える社会運動（Gay Rights Movement）に引き継がれた。“LGB”は、Lesbian（女性同性愛者）、Gay（男性同性愛者）、Bisexual（両性愛者）の頭文字をとった造語である。社会的認知拡大も視野に入れたイベント要素の強い街中パレード（pride parade）が催され、多様性を意味する虹色をモチーフとしたレインボーフラッグ（rainbow flagあるいはpride flag）がセクシャルマイノリティの尊厳と権利の象徴として掲げられた。

マイノリティのなかのマイノリティ LGB当事者達による社会運動は、同じく性別に関する特異性を持つことでclosetの中にいたトランスジェンダー達をも励ますものとなり、彼らの意識覚醒（conscious raising）にも一定の寄与をもたらした。しかし、トランスジェンダーにとって、LGBコミュニティとの協働は必ずしも順風満帆ではなかった。

先述したように、BenjaminやCauldwell、Stoller等の貢献によって性的指向とジェンダー・アイデンティティは区別され、同性愛と性別違和の学術的異同も明確にされていた。しかし、こうした概念的異同は世間一般にまで浸透はしていなかったため、両者を混同して理解する者が多く、Male to Female（MTF）を“男性でありながら女性のように振る舞う男性”、Female to Male（FTM）を“女性であるにもかかわらず男性のように振る舞う女性”と蔑視する保守主義者も珍しくなかった。それはセクシュアルマイノリティ・コミュニティに属する者やその支援者にも見られ、“‘セクシュアルマイノリティ’対‘社会’”という構図においては協働的關係が構築されていったものの、互いの溝はなかなか埋

まらないままであった。

特に溝が深かったのが、ゲイ解放運動推進派の男性同性愛者と同性愛を自認するトランスヴェスタイト（女性の姿でパフォーマンスを行うゲイ男性（ドラァグクイーン：drag queen）や、男性的な服装を好むレズビアン女性（ブッチ：butch）等）であった。ゲイ解放運動推進派の男性同性愛者のなかには、彼らを同性愛が社会に受け入れられていくことを妨げる汚点とし、セクシャルマイノリティ・コミュニティから疎外しようと画策する者もいたと言われている。

また、トランスジェンダーは、男性至上主義への反発から 1970 年代から 1980 年代にかけて台頭したレズビアン・フェミニズム（lesbian feminism）からも非常に厳しい批判と非難を受けた。当時のフェミニストは男性社会から押しつけられた“女性らしさ”の虚偽性を暴き，“真の女性らしさ”を求めようとする傾向にあり、男性社会によって不当に低い地位に貶められている女性を救い出すことがフェミニスト達の活動目的であった。なかでも男性に対してより強い反発を示していたのが、レズビアン・フェミニストであった。

“男性に全く汚染されていない女性こそ真の女（フェミニスト）”と考えるレズビアン・フェミニストにとって、女性として生まれたにもかかわらず男性であることを求める FTM や男性として生まれたにもかかわらず自らを女性と自認・主張する MTF のあり様は、理解し難い存在であった。顕著な例として、1979 年に出版された『The Transsexual Empire: The Making of She-Male』が挙げられる。著者であるマサチューセッツ大学教授（女性学）の Janice Raymond は、FTM を“同性愛者と呼ばれることを恐れて混乱しているレズビアン”とこきおろし、MTF を“家父長制に与して従来 of 女性に対するステレオタイプを維持するために女だけの空間に忍び込んで攪乱しようとするスパイ”と断罪している。同性愛に対する社会的スティグマ打開の気運は、“人は性別という基準によって男性と女性の 2 群に振り分けられる”という性別二元論（sex/gender dualism）に対する問題意識を伴っていなかったことがわかる。

トランスジェンダーと性別二元論

医療者の取り込み 性別二元論の根強い社会のなかで、強い社会的スティグマや一部の LGB 当事者からの糾弾に遭いながら生きていくため、トランスジェンダーは、既存権力に疑問を投げかけ、差別と闘い、抑圧に抵抗する政治的能力を身につけるようになった。トランスジェンダー、なかでも行動主義的な考えを持つ者達はまず、医学や精神医学の専門

家に対し、“私たちは間違っただけで男性／女性の体で生まれただけであって、生まれたときから正に女性／男性であった”と強調することで、性別適合手術（場合によってはホルモン治療も含む身体的治療）の正当性を訴えた。そして、医学領域の専門家からの支持を助けにしながら、身体的治療を提供し得る医療資源の開拓や法的文書の改訂（たとえば、女性／男性としての身分証明）に情熱を傾けていくことになった。

トランスジェンダー概念の細分化 次第に、トランスジェンダー達の考え方自体も医学の枠組みに傾倒していった。生物学的性と反対の性自認を持つ者のみを正当な性同一性障害（当時）と認め、性別適合手術を要する異性愛者（性別移行後の性別を基準として表記）を、より正当性の高い中核群と捉え始めたのである。こうして、当初はその状態像が反対の性別の様式を示す異性装をする者から性別適合手術を希望する者までを包括的に捉える当事者用語であった“トランスジェンダー”は、大きく3群に細分類されるようになった。

第1群には、身体的性別と反対の性自認を持ち、その性自認に沿った服装や振る舞いはするものの、身体的治療は望まない者が含まれる。彼らはトランスヴェスタイト（MTF-TV／FTM-TV、TVはtransvestiteの略）と呼ばれた。第2群には、身体的性別と反対の性自認を持ち、その性別違和感の解消に身体的治療を求めるが、性別適合手術までは望まない者が含まれる。彼らはトランスジェンダー（MTF-TG／FTM-TG、TGはtransgenderの略）と呼ばれた。第3群には、身体的性別と反対の性自認を持ち、その性別違和感の解消のために性別適合手術までを望む者が含まれる。彼らはトランスセクシュアル（MTF-TS／FTM-TS、TSはtranssexualの略）と呼ばれた。

細分化の功罪 この3分類が示されることで、性別違和感は第1群、第2群、第3群の順に強く、その精神的苦痛・心理的苦悩も同様の順番で重篤だという価値観が付加され、第3群に近づくほど社会から寛容な態度で迎えられやすくなった。しかし、この分類が性別違和を有する者達にもたらしたのは利益だけではなかった。“女性／男性（身体的性別とは逆の性別という意味）だと疑いなく自認し、男性／女性に対して性的魅力を感じる者（性自認を基準として異性愛者であるということ）”，つまり、異性愛TSに近けば近いほど、反対の性別（身体的性別に対して）としての“格が高い”という格付け意識が芽生えたのである。

また、行動主義的トランスジェンダーが行った当時の社会運動は性別二元論の枠組みの範疇を出るものではなかった。結果的に世間には、身体的にも社会的にも、生物学的性に規定された身体的性別（男性／女性）からその反対の性別（女性／男性）に再配置される

性別転換 (cross-gender transition) を求める者達として、トランスジェンダーが印象づけられていった。他の身体疾患の既往や経済的貧困等の理由による身体的治療を受けられない者、既存の身体的治療だけでは十分に生物学的性とは反対の性別と認められ得るほどの外見的变化が得られない者はさらに社会の片隅に追いやられることとなり、“トランスジェンダー”としての団結には亀裂が生じた。“男性から女性／女性から男性”への性別転換に役立つような医療資源の充実を求める動きとより多様な性別をあり方で生きることを制限する性別二元論自体に疑問を投げかけ脱病理化を求める動きとが互いに牽制し合う構造は、2010年代中盤に差し掛かった現在にも認められる。

DSM-IV-TR から DSM-5 への改訂

DSM-IV-TR 出版から十数年を経た 2013 年 5 月、DSM 第 5 版 (DSM-5) が発刊された。これによって、性別違和を有する者を説明する診断概念は大きく変更された。特筆すべきは診断概念から性別二元論を除く努力が行われたことで、その成果は性別違和を有する当事者達から高く評価されていた。ここでは、DSM-IV-TR に対する DSM-5 の変更点を、その背景とともに紹介する。

大分類としての独立 16 の主要な大分類を持つ DSM-IV-TR において性別違和を有する者は、第 11 番目の大分類「性障害および性同一性障害 (sexual and gender identity disorders)」で、「性機能不全 (sexual dysfunctions)」や「性嗜好異常 (paraphilias)」(「服装倒錯的フェティシズム (transvestic fetishism)」はここに含まれる) に続く 3 番目の下位分類「性同一性障害 (gender identity disorder)」として記述されていた。

DSM-5 は、19 の主要な大分類で構成されている。性別違和を有する者はその第 14 番目の大分類「性別違和 (gender dysphoria)」に独立してまとめられており、従来の「性機能不全」は第 13 番目の大分類「性機能不全 (sexual dysfunctions)」, 「服装倒錯的フェティシズム (transvestic fetishism)」, 第 19 分類「パラフィリア障害群 (paraphilic disorders)」の下位分類「異性装症 (transvestic disorder)」として、別に記述されている。性別違和を有する者にとって生殖機能や性的興奮は主問題とならないことを反映した改編と言える。

分類名の改訂 性別違和を有する者達が訴える苦悩を、男女いずれの性別に同一性 (identity) を抱くかという“異性への同一化 (DSM-IV-TR)”の観点からではなく、“指定されてきた性別とその人が経験し、表現する性別との不一致 (incongruence between the gender they have been assigned to (usually at birth, referred to as natal gender) and

their experienced/ expressed gender) (DSM-5) ” という、その人が抱く性別違和感 (gender dysphoria) の観点から捉えるようになった。これにしたがって、分類名も “gender identity disorder (性同一性障害)” から “gender dysphoria (性別違和)” に改訂された。

従来の “性同一性の障害” という分類名は、“生物学的性は正常男性型・女性型だが性別に関する自己認識はその反対の性別に帰属されてしまっている” という意味合いを含んでいた。ところが、臨床現場でよく見られる性同一性障害と診断される者の訴えは、“性自認とは異なる間違っただ性別の体で生まれてしまった” というものであり、その齟齬は性同一性障害当事者が医療者に抱く不満の種ともなっていた。

DSM-IV-TR から DSM-5 への改訂作業に際しては、こうした当事者側の不満と訴えに沿った改編が試みられた。その間に一時公開されたドラフト案では「性別の不一致 (gender incongruence)」との分類名も提案されたが、最終的には、それまで臨床場面で性同一性障害当事者が示す中核的特徴として理解されてきた “性別違和感 (gender dysphoria)” (その人によって経験／表現される性別と指定された性別との間の不一致にともなう苦痛) が分類名に転用されることになった。

biological sex の削除と assigned gender の採用 性別違和を有する者の臨床的特徴や診断基準について説明する際、DSM-5 は “sex” という言葉を用いていない。DSM-IV-TR は “生物学的性 (sex)” を頻用していたが、DSM-5 はこれとほぼ同様のことを指す言葉として、“指定された性別 (assigned gender)” を使用している。

英語で “sex” は、男女の性別 (male/ female) と性的関心 (sexuality) の両方の意味を含む語である。この混同を防ぐことが、“sex” という表記を控えた第一の理由である。“sex” は、生殖能力の文脈から “性染色体、性腺、性ホルモン、そしてあいまいな点のない内性器と外性器のような男性と女性の生物学的指標” と定義されている。第二の理由は、DSM-5 から新たに性分化疾患をとともなう者を診断概念に含むようにしたことと関係する。性分化疾患を持つ者のなかには、生物学的指標において男 (male) の特徴と女 (female) の特徴が混在している者がいる。そのような者が一概には捉えられない生物学的指標の通りに性役割をとるとするのは現実的でない。

これに対して “gender” は、少年 (boy) /少女 (girl)、あるいは男性 (man) /女性 (woman) としての公の (通常法律的に認められている) 役割であり、生物学的要因が社会的および心理学的要因と相互に関連しながら発達していくものとして説明されている。

なお、DSM-5では、“gender”を、生物学的性に加え、心理的、行動的、社会的影響によって表現されるものと定義し、社会構成主義理論で言う“gender（社会的・文化的な性のありよう）”とは異なることが明記されている。

以上のような概念定義の下、DSM-5における“指定された性別 (assigned gender)”は、男性または女性あるいはその他の性別として最初（通常は出生時）に指定された性別を指す言葉に意味づけられている。

多様な experienced/ expressed gender の想定 DSM-IV-TRは、性同一性障害の臨床的特徴の1つとして、彼らが生物学的性とは反対の性 (the other sex) に対する持続的な不快感を持つことを挙げていた。“the other sex”という表現からは、DSM-IV-TRが、性同一性障害当事者が同一感を抱く性として、彼らの生物学的性 (male/ female) とは反対のもう一方の性 (female/ male) のみを想定していたことがわかる。このように、DSM-IV-TRには性別二元論の価値観が強く反映されていた。

これに対してDSM-5は、“他のもう一方の性別または指定された性別とは異なる代わりの性別 (the other gender (or some alternative gender different from one’s assigned gender))”という記述的説明を用い、彼らが経験する性別あるいはなりたいと希望する性別が“男か女か”という固定観念から自由かつ多様なものである可能性を十分に想定している。

性的指向に関する特定用語の削除 DSM-IV-TRでは、性的に成熟した人に与えられる特定用語に性的指向を取り入れていた。“男性に性的魅力を感じる”“女性に性的魅力を感じる”“両性に性的魅力を感じる”“両性ともに性的魅力を感じない”の4つである。しかしDSM-5では、性的指向に基づく下位分類は、その区別が臨床的には有用でないことと理由に削除されている。

DSM-5 と脱病理化の動き

DSM-5 発刊に向けた改訂作業期間中、DSM から“性同一性障害”の表記が削除されるのではないかという憶測が世界中で飛び交った。同性愛がDSMやICDに記載されなくなった過去もあってそれなりの信憑性を持って各国の当事者に受け止められたこの憶測は、医療資源のさらなる充実を望む者、脱病理化を願う者の両者から発信された。前者は性別適合手術を始めとした各種治療の正当性に関する医学的裏付けが失われることや治療を担っている医療資源がますます乏しくなっていくことを危惧した。後者は身体的性別とは異

なる性別で生きることは病理ではなく生き方の選択であることが専門家によって公に支持されることを期待したのである。

トランスジェンダーに関する唯一の国際学会、トランスジェンダーの健康のための世界専門職協会（World Professional Association for Transgender Health : WPATH）が示した見解は、この両者のいずれとも異なった。WPATHは“ジェンダーの非同調性（gender nonconformity）”と“性別違和”を区別している。“ジェンダーの非同調性”は“ある個人のジェンダー・アイデンティティ、性役割、あるいは性表現が、その個人の生物学的性について文化的に規定された規範と異なっている程度”を、“性別違和”は“ジェンダー・アイデンティティと、出生時に割り当てられた性別（および、それに付随する性役割、一次性徴や二次性徴）の食い違いによって引き起こされた不快感や苦悩”を意味する。そして、人生のある時点で性別違和を経験するのは、ジェンダーに非同調な人々の一部に過ぎないとの考えを根底に持つ。

その上で、ジェンダーへの非同調性を精神病理として扱わないことを求める声明を世界に向けて発表し、必ずしも“男（性）・女（性）”に振り分けられない性（別）のあり様を持つ者達に向けられている社会的スティグマの瓦解を試みている。また、この声明と同時に、『Standards of Care (SOC) for the Health of Transsexual, Transgender, and Gender Nonconforming People（トランスセクシュアル、トランスジェンダー、ジェンダーに非同調な人々の健康のためのケアの基準（SOC））』第7版（WPATH, 2012）では、性別違和を有することによって精神障害と診断され得る程に重度な苦悩を持つ者の存在と、その苦悩の軽減には身体的治療が有益であるとの見解を明記している。

WPATH（2012）によれば、“ジェンダー・アイデンティティとジェンダー表現は多様であり、ホルモン療法や手術は、人々が満足できる自己のあり方を獲得するために利用できる多くの選択肢のうちの2つであるに過ぎない”。個々の well-being 実現が叶うような社会を目指すとき、医療資源の充実と社会環境の改善はどちらも不可欠な両輪と言える。

4 我が国の性別違和を有する者

日本精神神経学会・性同一性障害に関する委員会（2012）によれば，“わが国における性同一性障害に関する医療は，法的な問題などのため諸外国に比較すると特有の歴史を辿ってきた”。ここでは，1960年代に起こったブルーボーイ事件を契機とした，性別違和を有する者に関する日本独自の歩みを紹介する。

違法性と医療倫理が問われた暗黒時代から黎明期

ブルーボーイ事件と暗黒の時代 “ブルーボーイ”は“男娼”のことである。ブルーボーイ事件（東京地方裁判所昭和40年（わ）第307号・第339号・同年（特わ）第927号事件2）とは，ある産婦人科医が3人の男娼に対して行った性別適合手術の医療行為について，その正当性が問われた事件のことを指す。東京地裁刑事12部で優生保護法違反の責任を問われて有罪となったあと控訴されたが，1970年11月，東京高等裁判所にて第一審と同様に優生保護法28条（「何人も，この法律による規定による場合の外，故なく，生殖を不能にすることを目的として手術又はレントゲン照射を行ってはならない」）に違反したとして，有罪の判決が申し渡された。

性別適合手術が医療行為として正当でないと判じられたようにも思えるが，実状はそれよりもやや複雑である。以下は，日本精神神経学会・性同一性障害に関する委員会（2012）に転載されている，二審判決の「本件手術に対する評価」に関する記述の一部である。

本件被手術者はいずれも性転向症者であると推認することができる。そこで性転換手術が正当な医療行為として許容されるための前記の条件に照らしてみると，……従って被告人が本件手術に際し，より慎重に医学の他の分野からの検討をも受けるなどして厳格な手続きを進めていたとすれば，これを正当な医療行為と見うる余地があったかもしれないが，格別差し迫った緊急の必要もないのに右の如く自己の判断のみに基づいて，依頼されるや十分な検査，調査もしないで手術を行ったことはなんとしても軽率の誇りを免れないのであって，現在の医学常識から見てこれを正当な医療行為として容認できないものというべきである。

施術を受けた3名は性別違和を事由とした性別適合手術の適用内であった可能性が高く，性別適合手術の施術自体ではなく，十分な診察，検査，検討等なしに施術に至ったという

手続きの不備により有罪と判じられていることがわかる。

しかし、この判決の妥当性は十分に議論されることはなく、“性転換手術は優生保護法違反である”という結論の一部だけが世間に流布して一人歩きしまった。この誤った認識を起源とする“呪縛”となって、日本ではその後しばらく、公の性別適合手術が忌避された。この時期は“暗黒の時代”と呼ばれている。

暗黒時代の夜明けと日本初の公の性別適合手術 暗黒時代の闇を打ち破るために日本精神神経学会・性同一性障害に関する特別委員会によって公表されたのが、『性同一性障害の診断と治療のガイドライン（以下、GID ガイドライン I）』（1997年5月8日付）である。GID ガイドライン I によって、“性同一性障害は医療の対象であり、性別適合手術はその治療として正当な医療行為である”という、専門的見解が公に示されることとなった。1998年10月16日には、GID ガイドライン I の手続きを遵守した性同一性障害に対する正当な治療として、日本初となる公の性別適合手術が施行された（このとき行われたのは FTM に対するものであった）。この事実はテレビや新聞等を通して大きく報道され、性別適合手術の合法性と性別違和を抱える者の存在に関する社会的認知は一定の高まりを見せた。

この手術は“生殖を不能にすること”（この場合、優生保護法違反となる）ではなく、“性同一性障害に対する正当な医療行為”として行われたため、当然ながら、施術に関与した医師等に刑事責任は問われていない。2010年代中盤にさしかかった現在においても、性別適合手術に代替する性同一性障害の治療は存在しないため、性別適合手術に違法性はないとする見解は法曹界でも趨勢を占めており、次第に社会的容認も高まっている。GID ガイドライン I は、正当な医療行為としての地歩が確固たるものになっていく以後の動向に、多大な貢献をもたらしたと言える。

例外の許容と治療効率の向上 GID ガイドライン I は、精神療法（第1段階）、ホルモン療法（第2段階）、手術療法（第3段階）という治療順序を大まかに示していた。そのため、治療を求めて医療機関を訪れる者が増えるにつれ、初診時にはすでに自己流の性ホルモン剤摂取や豊胸手術等を行っている者等の取り扱いに課題が生じた。そこで、先の治療順序を原則としながらも、場合によっては例外を許容することが明記されたガイドラインとして、『性同一性障害の診断と治療のガイドライン（第2版）（以下、GID ガイドライン II）』が策定された。このとき同時に、第2段階に進むための年齢制限が20歳から18歳に引き下げられ、生殖機能に影響を与えない乳房切除術も第3段階ではなく第2段階に位置づけ直された。これによって、ガイドラインに沿った正当な医学的治療として性別適合

手術等の施術を受けられる者の数が飛躍的に増加した。その一方で、性別適合手術施行時には、性同一性障害に見識の深い専門職者によって開催される倫理委員会（以下、性別適合手術倫理委員会）から、事例ごとにその施行が医療倫理に反しないことについて事前承認を得なければならないという形態は GID ガイドライン I からそのまま引き継がれた。

テレビドラマ『3年B組金八先生』

“性同一性障害”という言葉が日本のお茶の間に広めたのは、学校で生じる様々な問題に奮闘する熱血教師を主人公とする国民的テレビドラマシリーズ『3年B組金八先生』の第6シリーズ（2001年10月11日—2002年3月28日）で主要登場人物となった、“鶴本直（つるもと・なお）”と考えて間違いないだろう。FTM 当事者で作家活動にも勤しむ虎井まさ衛氏をモデルとして描かれた人物である。

鶴本直 物語の第一話、海外からの転校生として紹介された直は、くるぶしに届きそうな程に長いスカートを履いていた。髪型はショートカットで、ひどく無愛想だった。

第二話、ある男子生徒と女子生徒が教室でとっくみあいの喧嘩を始めた。喧嘩の当事者は、直と男子生徒1名であった。校長は直を校長室に呼び出し、「もっと女は女らしく、おしとやかにしないとダメじゃないか！」と叱責した。しかし、直は毅然と反論した。「女は女らしくって決め付けられたくありません。男は男らしくってどういうことなんだか、それもわかりません。なぜ白と黒の2つに分けなければいけないんですか。グレーがあってもいいと思う。じゃなければ、私達アジアの黄色は人間ではなくなるわけだし」。このとき、あまりに長いスカート丈についても指導されたが、直は真っ向から対抗した。

めったに会わない父から直に、ダンスパーティーの招待状が届いた。ネクタイを締めてタキシード姿で父に会いに行った直だったが、父は男性の正装で現れたことに落胆し、「お前は女の子じゃないか」と怒りながら直の乳房をわしづかみにした。直は悲鳴を上げながら父を振り払い、会場を飛び出した。自宅に着いた直は、取り憑かれたようにキッチンの引き出しを次々と開け、柄の長いフォークを見つけた。それを手に床に仰向けになると、女のように高い声を出す喉をつぶすため、開けた口から喉にフォークを突き立て、抉るように動かした。

別の日、世間の風評を真に受けてクラスメイトをからかいながら批判するクラスメイトの言動に耐えかねた直は、激昂して相手を殴った。負傷者が出る程に互いに暴れ合うなか、自身が女らしくないことを批判された直は、衝動的に「私は女じゃない、本当は男なんだ」

と言い放ってしまう。騒然としていた教室は静まり返った。直はそのまま負傷した体を引きずりながら帰宅し、母親に教室でカミングアウトしてしまったことを告げながら、「もうあの学校にも行けなくなってしまった」と涙を流す。それ以降、直は不登校となった。

直の発言に衝撃を受けた担任（金八先生）は、当該校の養護教諭やセクシャルマイノリティ教職員ネットワークに参加する他校の教員から、“性同一性障害”というものの存在を知る。そして、衝動的にカミングアウトしてしまった直がどのような苦悩を背負っているかをクラスメイトに理解してもらうため、セクシャルマイノリティについての特別授業等を行う。当該校の養護教諭は、しばらくぶりに登校した直がいる授業で、性同一性障害の発生メカニズムを解説した（ここでは“ホルモン・シャワー説”が断定的に紹介されたものの、実際には複数ある有力仮説の1つに過ぎない）。養護教諭が話終わると、担任は直を指名し、自分のことを説明するように促した。直は自席で起立すると、生まれたときの性別は女だけれど自分は自分を男と認識しているのだと話し、「でも僕は化け物じゃない。必ず本当の自分になります」と同級生の前で誓った。

『3年B組金八先生』の功績 エンターテインメント性の高いバラエティ番組等で“おかま”や“おなべ”と呼ばれる人物がもの珍しい存在として紹介されるような事例は別として、全国放送でこのような真剣さと切実さを持ってFTM当事者が取り上げられたのは、鶴本直の登場がほとんど初めてであった。加えて物語のなかでは、担任や生徒達が“性同一性障害”について知っていくプロセスが丁寧に描かれたため、視聴者も作中の登場人物とともに、その発生メカニズムや臨床的特徴、治療プロセスを知ることになった。

2002年3月、女子競艇選手として優勝を飾ったこともある安藤千夏氏が会見を開き、自身が性同一性障害（FTM）であること、今後は“安藤大将”と改名すること、男性選手として再デビューすること等を公表した。現役競艇選手によるカミングアウトは社会的影響も大きく、世間を驚かせたが、安藤氏の決断を励ましたのも鶴本直であった。このように鶴本直の登場は、それまで身を潜めていた性別違和感を有する者のカミングアウトや治療への歩み出しを励ます大きな力ともなった。

日本国民に与えた余波 しかし、鶴本直はあくまでもテレビドラマの登場人物である。当然のことながら、彼の苦悩をより鮮明に描き出すため、様々な脚色が施されている。校長の指導に真っ向から反発したり男子生徒と殴り合ったりするような、粗暴とも言われかねない言動の男ぶり、黒を基調としたマンションの自室でサンドバッグを叩く姿、フォークで喉を潰すまでする激しい女性の肉体への嫌悪、幼い頃からライオン柄のセーターをせ

がんだという“少年”らしいエピソード等、鶴本直は、“生まれたときから性自認は男だった”ことを視聴者に疑わせないにふさわしい“男よりも男らしいFTM”であった。また、FTMの発生メカニズムとして“胎内で男性ホルモンを浴びることで女性の脳が男性化した”というホルモン・シャワー説のみが断定的に紹介された。

これらによって、“体が女で頭（脳）が男”という一部誤りを含んだ認知までも、世間に広がってしまった（頭（脳）全体ではなく、性自認が男性だと説明するのが医学的には適切）。鶴本直が所謂“トランスセクシュアル”として描かれたことで、性同一性障害であればみな様に性別適合手術までを望むのだという誤解も生まれた。作中で明言はされなかったものの、直に恋愛感情を寄せていたと思われる男子生徒が直の性自認を知って失恋を悟るような描写があったなどにより、視聴者には、“直は男性だから好きになるのは女の子で、男子生徒は同性の友人”というメッセージが伝わってしまった。“性同一性障害の者は身体的性別（男性／女性）と反対の性自認（女性／男性）を持ち、男性／女性に恋愛感情を抱く”と理解することが彼らの心情に沿うことになる、つまり、“体の性が間違っただけで、心の性は普通の人（性別違和を有さない異性愛者）と一緒に”という先入観の形成も避け難かった。

性別適合手術に関する合法性の獲得

「性同一性障害の性別の取り扱いの特例に関する法律」 2003年7月10日、『性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律（以下、特例法）』（平成15年7月16日法律第111号）が成立した（施行は2004年7月16日）。性同一性障害の者が医学的治療として性別適合手術を受け、身体的性別とは反対の性別の者として社会生活を送ることについて、医療者以外の日本国民から一定の容認が見込めるようになったためである。特例法第二条『定義』では、性同一性障害を以下のように記述している（総務省行政管理局, 2004）。

この法律において「性同一性障害者」とは、生物学的には性別が明らかであるにもかかわらず、心理的にはそれとは別の性別（以下「他の性別」という。）であるとの持続的な確信を持ち、かつ、自己を身体的及び社会的に他の性別に適合させようとする意思を有する者であって、そのことについてその診断を的確に行うために必要な知識及び経験を有する二人以上の医師の一般に認められている医学的知見に基づき行う診断が一致しているものをいう。

続いて、『性別の取扱いの変更の審判』を述べる特例法第三条である。

家庭裁判所は、性同一性障害者であって次の各号のいずれにも該当するものについて、その者の請求により、性別の取扱いの変更の審判をすることができる。

- 一、二十歳以上であること。
- 二、現に婚姻をしていないこと。
- 三、現に子がないこと。
- 四、生殖腺がないこと又は生殖腺の機能を永続的に欠く状態にあること。
- 五、その身体について他の性別に係る身体の性器に係る部分に近似する外観を備えていること。

現行医療のなかで4つ目と5つ目の要件を満たすには、性別適合手術を受けるほかない。条文として明述はされていないものの、事実上、特例法は、戸籍上の性別の変更とともに性別適合手術を容認した法律と解釈される。婚姻している者は離婚が必要となること、すでに子を設けていれば性別変更は叶わないこと等の課題は残るものの、特例法の策定と施行は、性同一性障害に対する正当な医療行為として性別適合手術を行うことに法的根拠を与えた法律として、高い社会的価値を持つ。

なお、3つ目の要件「現に子がないこと」は、2008年の第169回国会（常会）にて、参議院本会議（同年6月4日）、衆議院本会議（同年6月10日）とも全会一致で、「現に未成年の子がないこと」に改められている（公布2008年6月18日、施行2008年12月18日）（参議院，2008）。

性別適合手術倫理委員会の撤廃 性別適合手術に法的根拠が与えられたことで、医療倫理の遵守のために行っていた性別適合手術倫理委員会からの個別承認は必要性を失った。

『性同一性障害の診断と治療のガイドライン（第3版）（以下、GIDガイドラインⅢ）』は、特例法との整合性を確保するために、GIDガイドラインⅡを改訂して作成されたガイドラインである。

性別適合手術倫理委員会の枠組みは撤廃され、代わりに性別適合手術適応判定会議の開催とそこからの承認を必要とする形態が採用された。性別適合手術適応判定会議は、領域を異にする専門職が医療チーム（以下、GID医療チーム）を作って行う。その構成員は、性同一性障害の診断と治療に理解と関心があり、十分な知識と経験を持った診療科医師（精

神科医，形成外科医，泌尿器科医，産婦人科医（場合に応じて内分泌専門医，小児科医が加わる）や社会生活を支援する者（心理関係の専門家，ソーシャルワーカー等）である。GID 医療チームは医療ケア全般について検討する際にも機能するが，性別適合手術適応判定会議にはこれに加えて，法曹学者，学識経験者定にも参加を求め，医療の透明性と性別適合手術施行の法的ないし倫理的妥当性を確保することになっている。法曹学者が主に検討するのは，施行が刑法上の傷害罪（刑法 204 条）に問われないために必要な 3 つの違法性阻却事由（刑法 35 条）を満たしているか否かである。3 つの要件を以下に示す。①患者の同意・承諾がある。②治療を目的にしている。③医学的に承認された手段・方法に依拠している。

また，GID 医療チームのもうひとつの役割として，性同一性障害と診断される者が示す症状の多様性に応じて，提供する治療の種類や実施順序，実施時期等を柔軟に検討することが挙げられている。GID ガイドラインⅢはこの多様性について，“この多様性は，「生をどのように生きるのか」，そして「性をどのように生きるのか」という価値観ないし人生観の違いに由来する部分が多いことが明らかになった。これは侵すことのできない基本的人権に属するものであって，可能な限り厳に尊重されるべきである”との認識を示している。この認識に基づき，GID ガイドラインⅡで示されていた段階的治療（精神療法，ホルモン療法，性別適合手術）は廃止され，“当事者にとって最適な治療を構築するためには，治療法などについて十分に説明して理解を得たうえで，自己決定と自己責任の理念のもとに治療法は選択されるべきである……およそ公共の福祉に反しない限り，身体的治療として，ホルモン療法，乳房切除術（FTM）および性別適合手術，性器の形成術のいずれの治療法をどのような順序でも選択できるようにすべきである”ことも明言された。

受診年齢層の若年化と医療との併走

二次性徴抑制ホルモンの使用 青年期以降に身体的治療を求める性別違和を有する者の多くは，ごく幼少期から何らかの性別違和感を抱く。しかし，幼少期に性別違和感を抱く者すべてが，青年期以降も精神医学的診断を満たすような性別違和を示すとは限らない。また，性別適合手術等の手術療法はもちろん，ホルモン治療も，身体に不可逆的な変化をもたらす。そのため，身体的治療の開始には年齢制限が設けられている。ホルモン療法の場合は，18 歳以上である必要がある（18 歳以上 20 歳未満は親の同意が必要）。言い換えれば，18 歳になるまでは，どんなに強い性別違和があったとしても，精神療法（所謂カウ

ンセリング)しか受けることができなかった。

しかしながら、12歳前後に発来する二次性徴にともなう身体的変化は、性別違和を有する者の性別違和感とそれに由来する心理的苦痛を強め、不登校や引きこもり、自殺企図などの諸問題を引き起こし得る。こうした臨床的課題を鑑みて、欧米諸国で試みられるようになったのが、GnRHa (gonadotropin releasing hormone agonist) のような、薬剤によって二次性徴を抑制する治療である。二次性徴抑制ホルモンの作用は思春期の進行を遅らせることにとどまるため、投与を中断すれば速やかに正常な二次性徴が再開される。二次性徴の抑制による性別違和感の軽減と、後に性別違和感が消退した場合の治療の可逆性を両立させ得る点が最大の特長と言える。

GID ガイドラインⅢまでは、未知の副作用等への懸念から、二次性徴抑制ホルモンの使用を認めていなかった。しかし、日本における受診年齢層の若年化や、国際的に GnRHa の治療成果が明らかになってきたこと等を踏まえ、二次性徴抑制ホルモンの使用を前向きに検討する必要性が生じてきた。そこで日本精神神経学会・性同一性障害に関する委員会(2012)は、『性同一性障害の診断と治療のガイドライン(第4版)(以下、GID ガイドラインⅣ)』を策定し、顕著な臨床的必要性が認められる場合には、二次性徴抑制ホルモンの使用を認めるとした。二次性徴抑制ホルモンの投与は2年間が目処とし、2年が経過した時点で従来のホルモン療法への移行あるいは治療中止を検討することも付け加えられた。これに合わせ、二次性徴抑制ホルモン治療を受けた者に限り、18歳以上に制限されていた従来のホルモン療法を12歳から認めるという方針も示された。

当然、二次性徴抑制ホルモンの必要性や投与開始時期には、医師による専門的判断が不可欠となる。また、学齢期の二次性徴抑制ホルモン治療は、希望する性別の制服の着用や学内での通称名の使用、着替えやトイレの使用といった、学校生活での性別に関する取り扱い全般に対する包括的介入を同時に行わなければ、効果が著しく減退する。性別違和を有する者がいかに社会・学校に適応していくのかについて、これまで以上に、医療関係者の適切な判断と裁量が影響力を持つことになっていくと推測される。

性同一性障害医療から社会へ このように、我が国において性別違和を有する者は、性別適合手術等の身体的治療を要する“性同一性障害”として社会的認知が広がってきた。性別違和を有する者による日本の自助団体も、多くが“性同一性障害”や略称の“GID”を含む名を掲げている。日本の性別違和を有する者は、欧米に比して医療の枠組みと高い親和性を持っていると言ってよいだろう。

第2節 性別違和を有する者に関する心理学的研究の動向

FTM よりも MTF が多く発生しているという欧米諸国での疫学調査の結果 (American Psychiatric Association, 2013) に対し、我が国では MTF よりも FTM の医療機関受診者数が圧倒的に多い。要因は未だ解明されていないが、現在も性別観や文化の違いによる影響は否定されておらず、我が国独自の知見を蓄積されていく必要性が示唆される。しかし、性別違和を有する者に着目した研究は諸国で行われているものの、医学論文に比して心理学論文の報告数はごく少ない。そこで本節では、わが国での報告を主軸にしながら、性別違和を有する者に関する心理学的研究の動向を概観する。

1 性同一性障害の発生と状態像に関する研究

発生因解明の試みと遺伝負因の検証 性同一性障害当事者は人の性差に注目する脳科学や性科学分野の研究者からも注目されており、その研究成果から、性同一性障害の発生は心理社会的要因と生物学的要因の双方から影響を受けると考えられている。

たとえば、性同一性障害当事者と非当事者の脳梁 MR 画像から脳梁形状の特徴量 α_c を算出した河村・横田・亀谷・竹田・松村 (1999) や河村・横田・亀谷 (2006) は、生物学的性差ではなく心理的性差が特徴量 α_c の大小に反映されることを報告している。海外では、Coolidge, Thede, & Young (2002) が、双子 314 名 (一卵性双生児が 96 ペア、二卵性双生児が 61 ペア) に対する双生児研究から、性同一性障害に強い遺伝負因を認めている。Gómez-gil, Esteva, Almaraz, Pasaro, Segovia, & Guillamon (2010) は、性同一性障害当事者 995 名 (Male to Female 667 名, Female to Male 318 名) の同胞きょうだい (双子は除く) に性同一性障害が見られるかどうかを検証し、同胞きょうだいの性同一性障害罹患リスクは低いことを明らかにしている。

性別違和感と精神的健康の関連 性同一性障害当事者の抱える性別違和感と精神的健康の関連について調査した研究は各国で行われているが、いずれも性別違和感の強さが精神的健康に負の影響を与えていることを示している (Hepp, Kraemer, Miller & Delsignore, 2005 ; Udeze et al., 2008 ; Sánchez & Vilain, 2009 ; 真鍋・花田・上石, 2000 ; 中塚・

江見，2004；佐倉，2006；塚田，2006；都築，2006；梅宮，2005）。

性別に対する違和感を主訴として性同一性障害治療の中核を担う病院を受診した者が思春期をふりかえって回答した自由記述をもとに，性同一性障害当事者が思春期に経験した社会的，精神的，また，身体的問題を調査した中塚・江見（2004）は，GID 当事者 329 名（MTF 当事者 127 名，FTM 当事者 202 名）のうち，29.2%が不登校，74.5%が自殺念慮を経験しており，強迫神経症やうつ状態等の精神科的合併症を有する者も極めて多いことを報告している。性同一性障害当事者 30 名（MTF 当事者 17 名，FTM 当事者 13 名）に対する真鍋・花田・上石（2000）の調査でも，自傷行為または自殺企図の経験が多く認められている。性同一性障害当事者は，発達段階のかなり早い時期から心理的苦悩を抱えながら生活を送っていることが推察される（山根・名島，2006）。性別違和を有する者のメンタルヘルスに関する課題は，看過できない状況にあると言える。

身体的治療の適用判定に用いた心理検査結果の分析 こうしたメンタルヘルスに関する臨床的課題を踏まえ，性同一性障害当事者の性別違和を軽減させる目的で提供されてきたのが，ホルモン療法や手術療法等の身体的治療である。身体に不可逆的変化を生じさせる身体的治療は慎重な適用判定を要することから，心理検査を実施し，ジェンダー・アイデンティティの揺るぎなさ等を検討することも珍しくなかった。

このような現状を受けてか，日本の先行研究には，数例から十数例の心理検査結果（ロールシャッハ・テストや HTPP テスト等）から性同一性障害当事者のパーソナリティ理解を試みたり，MTF 当事者と FTM 当事者，あるいは性別適合手術までを希望する中核群（トランスセクシュアルと同義）とそれ以外の周辺群との相違点を探ったりするものが多い（江川，2003；児玉，2009；庄野，2001；丹波・大森・人見，2007）。質問紙調査研究には，性役割志向が生物学的性よりも性自認に沿っていることを確認した報告（森・高橋・牛島・中山，2005），性同一性障害当事者の得点が非当事者よりも低いことで妥当性を確認しているジェンダー・アイデンティティ尺度の開発（佐々木・尾崎，2007）等があり，性同一性障害の臨床的特徴として DSM 等で明言されている医学的知見が追認されている。

これらの研究は日本の性別違和を有する者の心理を理解することに一定の貢献を果たす知見と考えられるが，性同一性障害の診断・治療のシステムを持っている医療機関で収集されたデータであることには留意を要する。日本でも欧米でも，性同一性障害医療の最初の窓口は精神科あるいはジェンダークリニックであり，そこでそれまでの性別違和感や“自分史”が聴取される。その際，速やかに身体的治療へと進むため，医師が診断のために質

問する内容やその模範解答例のようなものを DSM の記述やすでに診断を得た者の体験記等から事前学習し、それを踏まえて診療に臨む者が多い実態があるのである。医療機関で収集されたデータをもとにした研究結果は、こうしたバイアスから影響を受けている可能性がある。

2 治療および支援の有用性に関する研究

身体的治療のメンタルヘルス改善効果 性別適合手術の実施によって MTF 当事者の心理的苦痛が軽減されることを実証するため、Udeze et al. (2008) は、MTF 当事者 40 名に対してウェイトリングリスト研究を実施した。介入効果の測定には、精神症状を問う 90 の質問項目からなる SCL-90-R (self-administered Symptom Check List-90-Revised) 等を使用し、性別適合手術実施事前事後で回答を求めた。その結果、事前事後で SCL-90-R 得点に有意な差はなく、性別適合手術によって MTF 当事者の心理的苦痛は軽減されていない実態が明らかとなった。加えて、記述統計を見比べたに過ぎないものの、〈Sexual Problems〉を除く 9 つの下位得点の平均値は、事前よりも事後の方が高くなっている。ホルモン治療の効果を検証した研究 (Dhejne, Lichtenstein & Boman et al., 2011) でも、その効果は性別に関わる問題を低減されるのみで、全般的なメンタルヘルスに対する直接的影響は芳しくない可能性が示唆されている。社会的悪影響によるスティグマがすでに性別移行をしている MTF 当事者のメンタルヘルス悪化にも影響しているとの指摘 (Sánchez et al., 2009) もある。これらのことから、身体的治療によって身体の性別の特徴を身体的性別とは反対に近づけるだけでは、性同一性障害当事者のメンタルヘルスは改善しないことが類推される。

親を対象とした心理教育プログラムの効果 心理社会的援助の観点から GID 当事者の臨床心理学的援助について検討している研究報告は国内外を問わず非常に少ないが、皆無ではない。海外では Di Ceglie & Thümmel (2006) が、児童期・思春期の GID 当事者を子どもに持つ親に対する心理教育プログラム (GID 当事者の発達についての心理教育、同じような立場にある親同士で子どもに対する想いを話し合うグループ・アプローチ等から構成されている) を開発し、その心理社会的援助実践の成果を報告している。論文内では、月に 1 回、90 分のセッションを計 6 回受けた後 (開始から 6 ヶ月後)、グループの参加者

にグループの評価に関するフィードバックシートへの記入を求めたところ、GID 当事者の発達について深い理解と知識が与えられたと述べるものが複数あったと述べられている。

3 心理社会的援助の観点から行われている研究

医学モデルから心理社会生物学的モデルへの転換

これまで、特に日本における性別違和を有する者への支援・援助は、身体的性別の特徴を男／女に近づけていく医学モデル（medical model）に依拠していた。それは、医療が開拓した道筋を辿るために性別違和を有する者達が必要な手続きを踏んでいくという、治療プロセス優先の価値観を生み出していった。

しかし、GID ガイドラインⅢ以降、当人の自己決定・自己責任の理念のもと、ライフスタイルないし価値観に合う最適な治療内容・順序が選択されるべきとの認識が明記されるようになってきている。また、2012年3月に開催されたGID（性同一性障害）学会第14回大会で“医療から社会への発信”がテーマとされたように、今や、性別違和を有する者のQOLに関する広範な課題を解決していくために“社会”という視点が不可欠であることは専門家間でよく共有されている。性別違和を有する者への支援・援助は、従来の医学モデルから、各個の性自認に沿ったよりよい社会生活の実現を目指す生物心理社会モデル（bio-psycho-social model）への転換を促されつつあると言えよう。

心理社会的援助を見据えた心理学研究の台頭

このように支援・援助の視点が転換されていくのと同じように、性別違和を有する者を取り上げた心理学研究の動向にも変化が生じ始めている。

性別に対する同一感の観点から 医学的治療とは異なる観点から性別違和を有する者を捉えた希少な数量的研究のひとつに数えられる佐々木（2007）は、性同一性障害当事者のジェンダー・アイデンティティと典型的性役割の関連を調べる質問紙調査を行っている。調査協力者は性同一性障害を事由として医療機関に通院している者に限られているが、FTM は身体的治療を受けている者の方がそうでない者よりもジェンダー・アイデンティティが高く、MTF では治療の有無による有意差はないことが明らかにされている。続いて佐々木（2011）は、ホルモン治療の有無および性別適合手術の有無の観点から MTF と

FTM をそれぞれ群分けし、ジェンダー・アイデンティティ得点とストレス・コーピングスタイルの関連を調べている。MTF と FTM の別や各身体的治療の有無によって影響関係の正負が逆転する結果が諸処にあり、結果から一定の方向性を見出すことは難しいが、性別違和を有する者の心理社会的支援を模索していく際の参考知見として価値がある。

しかしながら、佐々木による一連の研究にて使用されているジェンダー・アイデンティティ尺度（佐々木・尾崎，2007）は、(a) フェイス項目で答えた性自認によって読み替えが生じる質問項目（“自分が女性（男性）として望んでいることがはっきりしている”他）が複数ある点、(b) 4 下位尺度中“自己一貫性同一性”と“他者一致性同一性”の 2 下位尺度得点が一般大学生よりも MTF および FTM で有意に低いことが妥当性の根拠となっている点、(c) “男性”あるいは“女性”以外の性自認を回答した者は分析から除かれている点、(d) “ある性別への統一性，一貫性，持続性の感覚”という性別違和感と負の関連が強く想定される操作的定義が設けられている点等、性別二元論の反映や“性別”という観点の強調が目立つ。多様な性自認を持つ性別違和を有する者の実態を捉えるには課題がある尺度と言わざるを得ない。

性別移行を通じた心理的变化の観点から これらとは別の流れを成しているのが、性別違和を有する者自身の語りを素材とした質的研究である。その代表的研究者である荘島による一連の報告（荘島（旧姓 湧井），2006，2007，2008a，b，2009，2010）は、強い性別違和と身体的治療の要望をもって医療機関を初診し“性同一性障害の診断と治療のガイドライン”という医療のつくった道筋を順調に進んで性別適合手術や戸籍の性別変更等を行っていくような典型的な成功物語（荘島，2008）ではなく、それ以外の多様な生き方やあり方の選択を尊重し、性別移行にまつわる心理社会的葛藤や試行錯誤を掬い上げようとしている点が特徴と言える。

たとえば荘島（2008）は、“性同一性障害ゆえに苦痛の人生を虐げられてきた²”という“敵対の物語（悪魔物語）”を語り、“悪魔払い”のために身体的治療を火急に求めていた 1 名の FTM との継続的インタビューを行っている。FTM が他者へのカミングアウト等を経て、やがて自分なりのペースでの治療を希望するようになり、“「(今の治療) スピードだと、『今までの自分』にさよならできない」……「手術したくないわけじゃない」と語り直

² 原文のまま“虐げられてきた”と転記しているが、論文の前後の文脈を汲むと“余儀なくされてきた”との意で読み取られる

していく様子からは、医療の提供する治療のプロセスやスピードに従うことと、性別移行前の他者との関係性を維持して性同一性障害と共存しながら“楽に生きていく”ことが相容れないことが見出されている。他者との関係性が“その人なりの性別移行”を促進する可能性が示唆されている点で興味深い知見と言える。ただ、この論文を含む荘島による一連の報告は、ほぼすべて同一人物あるいはその家族を追ったものである。性別違和を有する者が示す性のあり様は多岐多様であるため、彼らへの心理社会的援助に幅広く応用可能な知見とは言い難いという課題は残されている。

第3節 性別違和を有する者のアイデンティティ

発達心理学・臨床心理学分野の専門家のなかには，“gender identity”という言葉から，E. Erikson の “identity” を gender（社会的・文化的性のありよう）の視座から捉えた概念だろうと類推する者がいるかもしれない。だが，性同一性障害医療にて頻用されている医学用語としての “gender identity” には，これとは異なる意味が与えられている。

本節では，E. Erikson によるアイデンティティ概念の要諦を紐解きながら，Erikson 以後の代表的なアイデンティティ研究の動向を概観する。続いて，Erikson がより本質的としたアイデンティティの様相を記述していると考えられる数編の質的研究論文，性別違和を有する者の性別移行をアイデンティティの観点から捉える新たな見解を紹介し，“gender identity” と “identity” の異同に関する理解を深めたい。

1 E. Erikson のアイデンティティ概念とその研究動向

アイデンティティを構成する3つの要素

Erikson のアイデンティティ理論が注目され始めた 1950 年代でのアメリカでは，既存の社会的枠組みでは捉え切れない青年達の問題行動が社会問題となっていた（村澤，2005）。こうした時代背景の下で Erikson（1950 仁科訳 1977-1980）は，反社会的に見える青年達の問題行動の背景に“所属感を渴望する苦悩”を見出し，社会への反発は彼らが社会との距離をつかんでいくために必要な葛藤プロセスだと捉えた。そして，この模索過程のなかで獲得される，“これが私だ”という生き活きとした現実感（a vitalizing sense of reality）のともなう心理社会的 well-being は，「自己アイデンティティ（self identity）」と，「心理社会的アイデンティティ（psychosocial identity）」，そしてこの2つのアイデンティティの相乗関係によって生じる「自我アイデンティティの感覚（a sense of ego identity）」によってもたらされると考えた。

自己アイデンティティに関する研究

青年期におけるアイデンティティの漸成的統合 Erikson（1950 仁科訳 1977-1980）

は、人間の健康な発達、乳児期から成熟期までの8つの各段階に特有な心理社会的危機を通して漸成的 (epigenetic) に展開されると考えた。第5期 (青年期: 12歳-18歳頃) には、第1から4期までに形成され頼ってきた不変性 (sameness) と連続性 (continuity) のすべてが、身体の急激な成長や生殖器の成熟等によって揺さぶられることになる。同時に、大人世代に守られながら発達してきた青年達は、“社会における自立” という大きな心理社会的危機に直面する。その解決にむけた試行錯誤は、それまでとは異なる自立した“個”として漸成的に統合された自我を形成させる。“アイデンティティ”あるいは“アイデンティティの確立”は、この時期に得られる自我の強さを意味する言葉である。

こうして新たな“アイデンティティ”を獲得していくことで“内的な不変性と連続性を維持する各個人の能力が他者に対する自己の意味の不変性と連続性との合致する経験から生まれた自信 (self-esteem)” がもたらされ、“たしかな未来に向かっての有効な歩みを今自分は学びつつあるという確信……つまり、自分が理解している社会的現実にはっきりと位置づけられるようなパーソナリティを自分は発達させつつあるという確信 (Erikson, 1959 小此木訳編 1973)” が育まれていくのである。

生涯にわたる動的プロセスとしてのアイデンティティ アイデンティティの確立を獲得するのに最適な発達期は青年期であるが、アイデンティティがその人の心理社会的発達において重要な主題となるのは、青年期に限らない。むしろ、アイデンティティの確立だけでなく、8つ発達期に設定されている発達主題はどれも、人生のあらゆる時期にそれにふさわしい形をとって人生に立ちはだかると、Eriksonは考えている。

この考えを研究のなか取り込んだのが、アイデンティティの危機と確立を青年期以外にも適用できるように再定義した Whitbourne (1986) である。中年期以降に人々が経験する身体面および認知面での能力低下をアイデンティティ危機の観点から捉えようとした Whitbourne は、アイデンティティの危機を“それまでとは異なる自分への直面”と定義し、その危機を適切に処理するプロセスを“新しい変化をそれまでのアイデンティティで理解しようとする同化 (identity assimilation) ”、“アイデンティティを変化させて新しい環境への適応を試みる調整 (identity accommodation) ”、“同化と調節を交互に使いながら環境とアイデンティティのバランスを保つ均衡化 (identity balance) ”によって説明した。“アイデンティティ維持プロセス”理論と呼ばれている。

心理社会的アイデンティティに関する研究

Whitbourne (1986) による“アイデンティティ維持プロセス”は、アイデンティティ研究の上にもう1つの功績を残した。アイデンティティの発達プロセスに、“環境への適応”という視点を明確に盛り込んだことである。

個と社会との相互作用 Erikson は、“私は私である”という個人領域におけるアイデンティティの確信が所属する共同体のなかで承認され、十分に機能していることを確認していく作業の中に、アイデンティティを見出した。アイデンティティは、“個人の核心 (the core of individual) と彼の共同体文化の核心 (the core of communal culture) に共通するアイデンティティを実際に確証する過程”と説明される (Erikson, 1968 岩瀬訳 1973)。これが自我アイデンティティの感覚を得るために必要なもう1つのアイデンティティ、所属する集団や社会との相互作用を含む、心理社会的アイデンティティである。

Whitbourne (1986) の“アイデンティティ維持プロセス”は、“環境への適応”という観点を盛り込むことで、本来のアイデンティティ概念が持っていた“個と社会との相互作用” (谷, 2002) や、“‘同一’と‘差異’の中で同定確認 (identify) しようとする主体の自発的行為” (溝上, 2002) という、アイデンティティの心理社会的側面までも包括的に説明し得るもの発展し得るものとなった。

他者との相互協調 心理社会的アイデンティティに着目する動きはここ数十年に顕著であるが、その兆しは、1980年代にすでに見られ始めていた。それが、アイデンティティを「関係性」の視点から捉える研究である。たとえば、「個体化の経路 (individuation pathway)」と「愛着の経路 (attachment pathway)」という不可分な2つ経路が同等の価値を持ちながら相互に促進し合う“発達の複線モデル (two-path model)” (Frantz & White, 1985) などである。アイデンティティを「個」と「関係性」の2軸で捉えている岡本 (1997) や宗田・岡本 (2005) 等がこれとほぼ同様の見解を示している。

これに対して、Archer (1993) や Josselson (1994) は、アイデンティティに2つの下位概念があるのではなくアイデンティティそのものが他者との相互関係の間で発達するという見解を示している。本邦では杉村 (1998) がこれと同様の立場からアイデンティティの形成を“自己の視点に気付き、他者の視点を内在化しながら、そこで生じた自己と他者の視点との間の食い違いを相互調整によって解決する作業”と定義している。杉村 (1998) の定義は、主体と他者の双方の行為およびその相互作用を含んでおり、Erikson の言う心理社会的アイデンティティにより近い概念と考えられる。

ただし、Erikson (1968 岩瀬訳 1973) が共同体への帰属感を得るために必要なものとして“自らが所属している共同体の中で価値ある者からの是認”を挙げる時、この“価値ある者”は、その是認を所属する共同体からの是認と受け取れるような者のことを指す。母親や友人等のより私的な“重要な他者”を意味しないことには留意が必要である。心理社会的アイデンティティは、自らが身を置く共同体からの是認と共同体に対する帰属感の双方が実感された時、“自らが社会的現実の中に位置づけられているという確信”と“活き活きとした現実感”をもたらすものとなるのである (溝上, 2002)。

自我アイデンティティの感覚に関する研究

アイデンティティ解釈の誤謬 1968年、Eriksonは、過去20年間に書き上げた自身の論文を『identity: Youth and Crisis』にまとめ、アイデンティティ概念の本質が見失われつつあることに警鐘を鳴らした。多分野・他領域に汎用されていくなかで概念の拡大解釈がくり返され、次第にアイデンティティと“私とは誰か”という問いとが同一視され始めていることを危惧していると、Erikson自らが述べている。

Erikson (1968 岩瀬訳 1973) はこうした拡大解釈に歯止めをかけるため、アイデンティティとは、お互いを否定し合っていた選択力のある二者（あるいは集団）がお互いを連結させ活性化させ合うことによって生じる内的解放を伴う現象であると強調した。そして、本質的なアイデンティティを知るためには、価値体系の矛盾によって避け難い心理社会的葛藤を抱き、健康的な活力を持ち、自らの意志によって選んだものに深くコミットしそれに従っている者（集団）に注目すべきと提言した。

たとえば、人種的差別のために黒人文化を剥奪されたアフリカ系米国人が、驚くべき威厳と不屈の精神を持って黒人としての自己確信を持ち、かつまた米国人としても統合されるような現象である。Eriksonによれば、熾烈な人種差別をくぐり抜けてきた経験を書籍等で陳述するアフリカ系米国人達に認められるような自我の統合(アイデンティティ)は、新たに獲得されたというよりはむしろ、社会的スティグマと偏見によって放棄させられてきた本来のアイデンティティが主体的な闘いによって“回復”されたものと解釈される。

自我アイデンティティの感覚とは、内的葛藤（たとえば、黒人としての自我と米国人としての自我が否定し合っていること）と外的葛藤（たとえば、同じ米国人でありながら黒人であるために白人によって社会的スティグマを背負わされること）に直面した者が、その心理社会的危機を主体的に克服すること（たとえば、アフリカ系米国人としての統合さ

れた自我の獲得) で得られる“熱意の伴う生き活きとしたエネルギーの増大(あるいは、内的解放)”と言える(Erikson, 1968 岩瀬訳 1973)。

本質的なアイデンティティへの回帰 近年、拡大解釈や誤解が繰り返されてきたアイデンティティ概念を見直し、Erikson の考えに回帰しようとする動きが生じ始めている。アイデンティティ確立の達成度を測る方法として長らく主流とされてきた Marcia (1966) の“アイデンティティ・ステータス法 (identity status interview)”なども、鋭く批判され始めている。各個の自我がどの程度確立しているかという観点からその確立状況をいくつかの型に収束させていく方法では、社会との相互作用を含む動的なアイデンティティを捉えられないことがその理由である(谷, 2001)。こうしたより本質的なアイデンティティを数量的に捉えることは難しいが、すでにいくつかの試みが結実している。

たとえば Erikson が著した複数の文献からアイデンティティ概念の構成要素の抽出をした谷 (2002) は、(a) “自己斉一性・連続性”(自分が自分であるという一貫性を持っており、時間的連続性を持っているという感覚)、(b) “対自的同一性”(自分がどこに向かって行こうとしているかよくわかっている感覚)、(c) “対他的同一性”(他者からみられているだろう自分自身が、本来の自分自身と一致しているという感覚)、(d) “心理社会的同一性”(現実の社会の中で自分自身を意味づけられるという、自分と社会との適応的結びつきの感覚) の4つを見出し、これに対応する4つの下位尺度からなる“多次元自我同一性尺度 (Multidimensional Ego Identity Scale)”を開発している。質問紙に落とし込む作業で削ぎ落とされた部分がないとは言えないが、過去に報告されてきたアイデンティティの測度に比して、より包括的なアイデンティティ概念を捉えることに成功している。

Erikson (1968 岩瀬訳 1973) は、自身の言う“本質的なアイデンティティ”を捉えるための研究方法にも言及している。提案されている2つの方法のうち1つは、アイデンティティについて十分に理解する者がアイデンティティの形成過程にある者の主観的体験を丹念かつ綿密に洞察し解釈する方法である。もう1つは、心理社会的危機を経て本質的なアイデンティティの感覚を得た者から主観的体験を聴取する方法である。ただしこの場合、体験の聴取は、その体験からしばらくの間を経た後に行われる必要がある。

前者の方法は、Erikson の言う“洗練された精神分析学”のことを指すが、それを実施する研究者にはかなり高い専門性が求められる。その専門性の評価基準の信頼性自体が新たな議論にも発展しかねず、実現可能性はそう高くないと考えられる。一方後者は、社会構成主義的な文脈のなかで体験者の語り (narrative) を拾い上げていく質的研究として理

解できるため、研究としての実現性が見込める。従来の精神分析学の課題として、環境を内的現実 (psychic reality) としてのみ捉えてきたことで個と環境との相互作用を捉える視点に欠けることを挙げた、Erikson の指摘にも適う。

アイデンティティ概念を捉えることを主目的に据えた研究報告を展望してみても、こうした方法論によってより本質的なアイデンティティを捉えることに成功しているものは見当たらず、実現は極めて困難に思われる。ところが、アイデンティティ研究という枠組みの外を見渡すと、本質的なアイデンティティを捉えていると思われる文献も決して少なくない (永田・岡本, 2005, 2008)。

2 当事者の語りから描き出されるアイデンティティ

社会構成主義的姿勢を持って行われる質的研究では、出来事を経験した人の主観的な語り (narrative) が分析・検討の素材とされるのが通例である。なかでも、様々な理由によって心理的葛藤や苦悩を抱えることとなった人々の語りや面接過程を素材とした質的研究知見には、アイデンティティとの同質性が強く認められる心理的発達・成長のプロセスを描出しているものが少なくない。

罹患や受傷によるアイデンティティの危機と再統合

Whitbourne (1986) は、“アイデンティティ維持プロセス”理論のなかで、加齢による心身機能の低下にともなう“それまでとは異なる自分への直面”を中年期に経験されるアイデンティティの危機と捉えた。これと同じように、心身の機能低下をともなうような疾病の罹患や受傷をした者にとって、心身機能の低下した自分に向き合うことは、罹患／受傷前とは異なる自分への直面を意味する。経時的に心身機能が低下していく加齢の場合とは異なり、多くの場合、比較的短期間で心身機能の低下が引き起こされるため、“罹患／受傷前の自分”と“罹患／受傷後の今の自分”との連続性が断裂されやすい。より重大なアイデンティティの危機として捉えられる。

たとえば、がんを告知されて手術と1年以上の抗がん剤による継続治療を受けた術後2から3年のがん罹患者の社会復帰過程に注目した、浅野・佐藤 (2003) がある。50代から60代までのがん患者10名とその配偶者6名との半構造化面接および記録調査で収集されたデータは看護学分野でよく用いられている現象学的手法によって分析されている。その

結果によれば、がん罹患者の社会復帰過程では、がんを自らの存在に対する脅威と感じていた彼らが“がん罹患”を人生の一大出来事と捉えるようになる、がん罹患によって一度は諦めかけた人生を見直すようになる、がんとともに生き抜きながら自分が生きるこの意味を見出していく等の心理的变化が生じる。筆者等は、こうしたがん患者の心理的变化を“自分とがんとの関係を見定めて新たな自分へと変化していくプロセス”と呼んでいる。

浅野・佐藤（2003）は、アイデンティティの観点からこうしたがん患者の心理的变化を考察してはいない。だが、“死を覚悟してこのまま人生を諦めようとする自分”と“様々な制限のなかで維持療法を続けながら生きる以前とは異なる自分”との間を揺れ動きながら、治癒が不確実な“がん”とうまく付き合いながら“自分らしさ”を回復していく過程は、がん罹患という危機への直面を契機にアイデンティティを統合していく過程として、無理なく理解することができる。

ほかにも、脳卒中によって身体障害を負った者が落胆体験（障害を負った現実への直面、以前には戻れぬ絶望、社会生活能力低下の実感）を経て人生におえる“新たな価値”を見出していくまでの過程を抽出した看護領域の研究（百田・西亀，2002）、受傷によって中途視覚障害を負った者の受傷から社会復帰あるいは障害受容までの心理的变化を考察しているリハビリテーション領域の研究（岡，1996；岡・島崎・望月，1996；大前，2007，2009a，b等）、脊髄損傷によって身体障害を負った者の障害受容過程に注目し、青年期・成人期前期に受傷した者の心理的变化から“新たな脊髄損傷者としてのアイデンティティ再形成”，中年期以降に受傷した者の心理的变化から“これまでに形成してきたアイデンティティの再吟味”を導き出した発達心理学分野の研究（小嶋，2004，2005）などがある。

それぞれの論文は執筆者が専門とする領域の文脈に沿って記述されているため、必ずしも論文内で“アイデンティティ”という言葉を用いておらず、心理社会的側面が含まれてはいない場合もある。しかし、これらの論文において、それまでの自分とは全く異なる自分とならざるを得ないような心身機能の変化に直面した当事者達は、その苦悩と試行錯誤を経ながら以前の自己や現在の危機に向き合い、体験を主体的に意味づけ、やがて新たな自己へと歩みを進めている。過去の歴史性と前途有望なる未来の連結によって“自我アイデンティティの感覚”を再獲得した体験者と捉えるのに不足はなからう。

被差別エスニシティとアイデンティティ

Erikson（1968 岩瀬訳 1973）は、本質的なアイデンティティを知るために着目すべ

き者（集団）が持つ特徴として、価値体系の矛盾によって避け難い心理社会的葛藤を抱いていること、健康的な活力を持っていること、自らの意志によって選んだものに深くコミットしそれに従っていることを挙げた。人生中途の罹患や受傷等によって健康的であった頃に依っていた価値体系が揺さぶられた先述の諸当事者達も、この3つを概ね満たしていると考えられる。しかし、この3つを満たし、かつ、“熱意の伴う生き活きとしたエネルギーの増大（あるいは、内的解放）”が認められるような“自我アイデンティティの感覚”を得る者の多くは、Erikson が挙げたアフリカ系米国人同様、偏見や差別等によって社会から圧迫されてきた社会的少数者を取り上げた論文に比較的に見られやすい。

在日コリアン青年のアイデンティティ再構築 たとえば、自らを朝鮮人／韓国人と自己認識しているにもかかわらず「日本人」と思われることに違和感を抱く在日コリアン青年達を取り上げた金（2007）の論文である（外見のみで日本で生まれ育った若い在日コリアンと日本人と区別することはほぼ不可能である。また、多くの者は民族名と別に持つ日本式の通名を名乗って生活しているため、姓名等の日常的に把握し得る事実情報から区別することも極めて困難である）。金（2007）は、複数の在日コリアン青年（男性6名、女性17名）達から幼少期から現在（調査実施時）までのライフストーリーを聴取していくなかで、“韓国人／朝鮮人／在日”への偏見が存在する日本社会を生きるなかで“在日であること”を隠していた彼らが、やがて“らしさ（koreanness）”を獲得しようと模索していくという共通プロセスの存在を感じるようになった。この共通プロセスを“アイデンティティの模索についてのストーリー”と解釈した金（2007）は、全23名のうち女性17名（日本学校に通った韓国・朝鮮籍者、朝鮮学校に通った韓国・朝鮮籍者、日本学校に通った日本国籍者を含む）の語りを分析することで、彼女達のアイデンティティの再構築過程を描き出すことに成功している。

“韓国人／朝鮮人だという証拠”をほとんど持たない在日コリアン青年達は、朝鮮半島や在日の歴史の学習、朝鮮語の習得、韓国人／朝鮮人との出会い等によって“らしさ（koreanness）”を獲得し、“「民族と出会えた」「基盤ができた」「気持ちに余裕ができた」「乗り越えられた」”等の気持ちを抱く。同時に、日本社会のなかで生きるうちにいつしか内面化させてしまっていた“韓国人／朝鮮人／在日”に対するマイナスイメージは払拭され、“韓国人／朝鮮人／在日”というまなざしを引き受けるだけの“強さ”を得る。“らしさ（koreanness）”の獲得によって自身の立ち位置を確認できるようになった彼女達のアイデンティティは、民族／国家の単位を線引きとした“韓国人”“朝鮮人”のような単一的

なものではなく、よりマージナルな存在としての“在日”に帰結される。かつて在日コリアンであることを隠して暮らしていた彼女達は、改めて“在日”であることを友人に告白したり、それまで伏せていた民族名を常用し始めたりすることで、“在日”であることをカミングアウトする。ある者は“在日”だからこその社会的活動に従事し、また別のある者は、自ら積極的に“在日”としての生き様を日本社会に対して発信する。こうして彼女達は、“在日”であることの誇りとともに、益々充実した人生を送るようになる。

Erikson はアフリカ系米国人作家達の表現活動を“表面的にはあまりにもはっきりと眼にみえるもの、つまり皮膚の色によって特徴づけられた人間としてではなく、むしろ、選択力を持った個人として a)、聞いてほしいし、見てほしいし、また認めてほしい、対面してほしいという、きわめて積極的で強力な要求 (Erikson, 1968 岩瀬訳 1973, pp.421)”と解釈している。在日コリアン青年達に見られるカミングアウトや社会的活動も、彼らが彼ら本来のアイデンティティを構築していくことに目標づけられた“選択力を持った個人”による表現活動として理解することができる。アフリカ系米国人も在日コリアン青年も、所属する社会コミュニティでは偏見や差別の原因となってしまうような属性を持っていたがために、所属する社会コミュニティのなかで彼ら本来のアイデンティティに従って生きようとした時、すべからず、非常な内的・外的（心理社会的）葛藤と試行錯誤を経験することになったのだと考えられる。

アフリカ系米国人と在日コリアン青年の違い アフリカ系米国人のアイデンティティ回復と在日コリアン青年のアイデンティティ再構築には、高い類似性がある。しかし、両者を比べると、そこには決定的な相違点を見つけることができる。これは“回復”と“再構築”という言葉の違いにも現れていると考えられる。

Erikson が例に挙げたアフリカ系米国人達の場合、彼らは、“皮膚の色”という外見を一瞥するだけでわかってしまう事実情報によって社会的烙印を押されてしまう。特別な手段や病気等によって皮膚の色が“黒人”のそれとは異なるものにならない限り、彼らは“黒人”であることをやめることができない。逆説的だが、それを好むか好まないかにかかわらず、“私は黒人である”ことを公言・表現しなくても“黒人”でいることができる。彼らは、“黒人としての私”ではなく、黒人でもある“私”を見て欲しいと訴えている。

これに対し、金 (2007) が取り上げた在日コリアン青年の場合、祖先のルーツや民族名、国籍等を秘匿し続けていれば、社会的烙印を免れられる。事実、彼女達の多くは、社会からの偏見を恐れて“在日”であることを隠してきたし、カミングアウトした相手から否定

的な態度を示されたことをきっかけに“在日”であることを隠すようになっていた。だがしかし、様々な出会いを経ながら“らしさ (koreanness)”を取り戻していった後、彼女達は自らの意志で“私は‘在日’である”ことを言語・非言語でカミングアウトする。アフリカ系米国人達と異なり、彼女達は、他者や社会に向けて“私は‘在日’である”と表明することで初めて、内的にも心理社会的にも“在日”として在ることが可能となるのである。彼女達は、“‘らしさ (koreanness)’ が欠如状態にあったこれまで私”ではなく、“‘らしさ (koreanness)’ を取り戻した今とこれからの私”のために、偏見や差別の含む“在日”へのまなざしが向けられることを承知でカミングアウトを行っている。

両者の違いを端的にまとめれば、アフリカ系米国人達が黒人差別による社会的圧迫のなかで剥奪され続けてきたアイデンティティを“回復”していったのに対し、在日コリアン青年達は、差別や偏見に曝されるようになるかもしれないというリスクを十分に理解しながらも、そのリスクと引き替えに違和感のともなうあり方を脱ぎ捨て、より本来的なアイデンティティを再構築していくのである。

金 (2007) は論文のなかで、在日コリアン青年のアイデンティティ再構築過程を考察する 1 つの観点として、カミングアウトに注目している。第 1 章で紹介したように、“Coming out of the closet”を語源とする“カミングアウト”には、“罪悪感や恥辱観からひた隠しにしてきた真の自分を内的に解放し、社会的に忌避され得る自らの特殊な属性を表明する”という意味合いが込められている。在日コリアン青年のアイデンティティ再構築過程は、“在日”であることを隠して身を潜めていた closet から外へと、自らの足で歩み出していくプロセスとしても理解される。

3 同性愛当事者のアイデンティティ形成

正に“Coming out of the closet”を遂げていった同性愛当事者達のアイデンティティが学術研究の俎上に載せられるようになったのは、1970 年代である。

同性愛アイデンティティ形成の段階モデル

すでにゲイ解放運動が展開されてはいたが、最初の報告は、同性愛のアイデンティティ形成を否定的同一性の形成と説明した論文 (Gonen, 1971) であった。これに対抗する内容を報告したのが Hammersmith & Weinberg (1973) で、同性愛のアイデンティティを

持つことは不適応や同一性形成の失敗ではなく、アイデンティティが確立されていればすなわち、同性愛当事者は同性愛者としてのアイデンティティの確立に成功しているという見解を示した。

その後、Troiden (1979) や Cass (1984) が次々に同性愛当事者のアイデンティティ形成を段階的に説明するモデルを示していった。Troiden (1979) が示したのは、鋭敏化の段階 (第 1 段階)、意識からの排除と関心の高まりの段階 (第 2 段階)、具体化 (カミングアウト) の段階 (第 3 段階)、積極的関与の段階 (第 4 段階) の 4 段階からなるモデルであった。アイデンティティ概念とより強く関連づけている Cass (1989) のモデルは、アイデンティティの混乱 (第 1 段階)、アイデンティティの比較 (第 2 段階)、アイデンティティへの寛容 (第 3 段階)、アイデンティティの受容 (第 4 段階)、アイデンティティの尊厳 (第 5 段階)、アイデンティティの統合 (第 6 段階) の 6 段階からなる。また Troiden (1989) は、1979 年に Troiden 自身が示した 4 段階モデルの内容を精査し、同性愛当事者の内面的変化により焦点化させた 4 段階モデルを示している。この 3 つはいずれも同性愛アイデンティティに対して肯定的姿勢を持っているモデルであるが、なかでも Troiden (1989) のアイデンティティ形成段階モデルは、同性愛当事者に対する回顧面接を始めとした複数の調査結果から裏付けを示しながら提案されており、同性愛を自分に引きつけては考えていない思春期以前を第 1 段階とする統合的なモデルと言われている。すでに Troiden (1989) のモデルを邦訳して紹介している論文 (堀田, 1998) があるため、各段階の名称等は堀田 (1998) の邦訳に倣って、Troiden (1989) のアイデンティティ形成段階モデルを紹介する。なお、Troiden のモデルは、男性同性愛当事者と女性同性愛当事者とを包括的に説明している。

Troiden (1989) のアイデンティティ形成段階モデル

第 1 段階：鋭敏化 (sensitization) ほとんど同性愛というものを自分自身と関連あるものと見ていない、思春期以前の段階である。ただ、自分以外の男児がスポーツを好むのに対して自分は芸術を好むことなどから、自分は同性の仲間とは何か異なっているという感覚は抱かれている。同性愛当事者としての自己定義 (self-definition) に向けて敏感になっている時期と言え、この子ども時代の社会的経験が、後に同性愛を自分の問題として考えるようになる土台となっていく。

第 2 段階：同一性の混乱 (identity confusion) 思春期に相当する。自らの感覚や行動

あるいはその双方について、同性愛当事者としてみなせるのではないかという考えが浮かんでくる。しかし、その考えは、それまでに持っていた自己イメージと調和していないように感じられる。異性愛者（heterosexual）には同一化できないと感じつつも、まだ自らが同性愛当事者であるという見通しは育まれていない。

第3段階：同一性の受容（identity assumption） 思春期後期以降にあたる。この時期には、各個がそれぞれなりの社会的スティグマへの対処を身につけており、自己のアイデンティティという観点においても、現在のアイデンティティという観点においても、自身は同性愛当事者であると認識されている。少なくとも他の同性愛当事者に対してカミングアウトできるようになり、同じ同性愛当事者として他の同性愛当事者とかわったり、性的な接触が試みたり、同性愛のサブカルチャーに親しんだりするようになる。こうした経験を通しながら、同性愛当事者としてどのように社会に適応していくかについて試行錯誤が行われたり、適応スタイルが構築されたりもする。

第4段階：積極的な関与（commitment） 同性愛を人生のあり方として採用している時期で、同性愛アイデンティティと同性愛役割に対する自己受容と満足が特徴である。同性愛当事者としての人生を自ら選択的に生きているおり、自尊心をもって異性愛者にも自身が同性愛当事者であることをカミングアウトすることができる。また、同性愛のサブカルチャーからの励ましを受けて、単なる性的指向や行動の形式ではなく、本質的なアイデンティティ（essential identity）や存在のあり様（state of being）、人生の歩み方（way of life）こそが同性愛アイデンティティであることを悟るようになる。

日本の同性愛当事者のアイデンティティ形成

日本の大学で学生相談に従事していた堀田（1998）は、Troiden（1989）で言う第2期（同一性の混乱）の状態で来談した男子同性愛当事者2名との面接経験をもとに、アイデンティティの混乱から受容までの同性愛アイデンティティ形成過程を提示し、それに沿った“同性愛アイデンティティ形成サポート面接”のあり方を提案している。以下、簡単に紹介したい。

混乱期 中学・高校時代、自身は同性愛かもしれないと思いながらも、他のこと（たとえば、大学受験）に熱中することでそこから意識を遠ざけてきた。しかし、比較的自由さがある大学生になると、自分の同性愛傾向に向き合わざるを得なくなる。自身のなかにある同性愛欲求は認めざるを得ないと思いつつも、自身が同性愛当事者であることは受け入

れられていない。この時期には，“自分は本当に同性愛か”，“これは変わらぬものなのか”，“何が原因で，どうしたら治るのか”という疑問や，“治療を受けるべきなのか”という葛藤が抱かれる。

面接者は，こうした混乱の背景要因として以下3つを想定することができる。1つ目が，(a) 同性愛は異常な性癖あるいは精神障害であるというような“社会的偏見”および，世間的な同性愛蔑視を自身に取り込んで同性愛欲求を秘密にしていくなかで持つようになった不合理な“罪悪感”，2つ目が (b) キャンパスやサークルのなかで多数派を占める異性愛男子学生が女性に対して魅力的であろうとして身につけることに邁進する“ステレオタイプな男性性と自分の性同一性との葛藤”，3つ目が (c) 自分が同性愛かもしれないという自覚を誰にも告げることができず絶えず本当の自分について隠し事を保持し続けなければならないことによって滞る感情表現や自己開始，親密な対人関係の形成不全等のなかで抱かれる“家族（身近な他者）とのギャップ”である。

混乱から受容へ 混乱期には，性同一性に関する葛藤にエネルギーが費やされたり，同性愛かもしれないという不安を強く抑圧したりすることで，学業等の他の活動に対して無気力あるいは抑うつ的になるという事態が生じる。同性愛葛藤が自身の心身不調の背景にあることに薄々気付いていても，あるいは面接者との信頼関係が十分に構築されていなかったり強い心理的防衛が働いていたりする場合，“同性愛”が面接の主題とされることはない。しかし，一旦“同性愛”のテーマが語られると堰を切ったように語りを展開し，自分が意識していた以上に“同性愛”が自分にとって大きな問題であることに気付くことになる。

面接の主題は同性愛アイデンティティの受容，つまり，“真実の自己”の回復となる。この過程では，2つのことが達成されるようなサポート面接を心がける必要がある。1つ目は，(a) “罪悪感の解消と自尊心の回復”である。面接者には，同性愛に対する偏見のない態度，同性愛を自由な性的指向として深く尊敬する態度が求められる。2つ目は，(b) “感情の解放と他者との親密性の育成”である。同性愛当事者の持つ性的指向は，多くの社会においてマイノリティとされる。また，Martin (1982) が言うように，社会的には差別を経験していても，家族等の比較的身近なコミュニティにおいて幼い頃から肯定的な受け入れや誇りの共有を経験できるマイノリティ属性（たとえば，人種や民族）とは異なり，同性愛当事者は，ごく身近な者に対してもそのマイノリティ性を告白できない状態に長らく置かれるため，親密な仲間やパートナーを得るまでに長い孤独の道歩むことになる。こ

の時期には、同じような同性愛当事者との感情的な交流や相互自助が大きなサポート資源となる。

受容期 自分が同性愛当事者であることを受容した上で、同性愛当事者としての人生や将来の生活設計を具体的に考え始めるようになる。この時期には、“自然な欲求に従って同性愛当事者として生きていくのか、不自然であっても異性愛者としての範疇のなかで生きていくのか”や、“どこまで同性愛当事者と名乗って生きていくのか、それとも社会的には隠して生きていくのか”という葛藤を体験することになる。

面接では、(a) 進路決定の迷い、(b) 自己開示の迷い、(c) 対人関係（恋愛関係）の試行錯誤、(d) 家族からの自立等が主題となる。このうち (b)、(c)、(d) は、いずれもカミングアウトと関連が深い。

同性愛当事者であるとの自認が芽生えると、同性愛コミュニティやネットワークに接近するようになる。そのなかで行うカミングアウトは爽快な解放感をもたらす。すると、今まで強く家族や身近な他者に対しても強く抱かれていた“知られたくない”という気持ちに、“知って欲しい”あるいは“知って受け止めて欲しい”という気持ち加わり、葛藤が生じるようになる。また、これまで自己を開示できていなかった反動から、取捨選択のない全面的な自己開示や権利意識の主張へと性急に駆り立てられることがある。こうした急激な変化は周囲との間に不要な摩擦を生じさせることがあるため、留意が必要となる。

カミングアウトすれば、必然的に他者との関係性が変化することになる。同性愛当事者によって構成されているコミュニティに参加すれば、同じ同性愛当事者との出会いも増える。ただ、カミングアウトは必ずしも肯定的結果を導かないし、同性愛当事者同士であれば誰とでも恋愛関係を結べるわけではないため、試行錯誤が生じる。

自分の性的指向を受容できるようになると、自己を肯定する心的な作業が進む。同性愛に関する知識も増え、同性愛そのものへも肯定的イメージが抱かれるようになり、比較的順調に同性愛アイデンティティが形成されていくようになる。

しかしながらその一方で、同性愛に関する知識がほとんどなく、世間一般と同様に同性愛に対して必ずしも肯定的イメージを抱いていない家族とのギャップは広がる。家族には男性としての成長や性役割を期待する側面もあるため、家族の混乱は避けがたい。場合によっては家族間の対立が深まったり、潜在していた問題が顕在化したりすることもあるため、家族から精神的に自立することでこうした対立や葛藤に左右されずに同性愛アイデンティティを形成していけるように励ますことが必要になる。場合によっては、家族への適

切な情報提供や家族自身のサポートも視野に入れることが望ましい。

カミングアウトとアイデンティティ

このように、日本でも海外でも、同性愛当事者のアイデンティティ形成において“カミングアウト”の重要性は高い（堀田，1998；梶谷，2008）。同性愛当事者の場合はカミングアウトにまつわる葛藤が，社会や他者のみならず家族等のごくごく身近な者にまで及ぶことがその一因になっていると考えられる。

アフリカ系米国人と在日コリアン青年の例で比べれば，同性愛当事者のアイデンティティ形成は，本来の自分であるために言語・非言語のカミングアウトが不可欠だという点で，後者との類似性がより高いと考えられる。違いとしては，在日コリアン青年達はごく幼少の頃から“朝鮮人／韓国人であり，日本人とは違う”と感じ，当初は欠如していた“らしさ（koreaness）”を自ら取り戻していくようになったのに対し，同性愛当事者が自身の性的指向に疑問を意識的に持つようになるのは，一般に恋愛への興味関心が高まる時期として知られている思春期以降であることが挙げられる。同性愛当事者は“らしさ”の取り戻しではなく，“同性愛と認めざるを得ない”という不可避感の受諾がアイデンティティの混乱状態を脱する初歩になっていることは興味深い。

相違点として注目したいもうひとつは，“統合”と“選択”の違いである。“黒人かつ米国人”として本来的なアイデンティティを回復したアフリカ系米国人，“日本人でも朝鮮人／韓国人でもない‘在日’”としてアイデンティティを再構築していった在日コリアン青年の例からは，せめぎ合っていた2つの属性が“個”のなかで統合されていったことがうかがわれる。一方，同性愛当事者は，性的指向に関して，多数派の異性愛ではなく少数派の同性愛を選択したと捉えられる。両性愛当事者や，異性愛当事者の顔と同性愛当事者の顔を使い分けている同性愛当事者からはまた違った特徴が示唆される可能性があるが，第1章で述べたように，過去には，一部の同性愛当事者と“男（性）・女（性）”の2項のみでは捉え切れない性別のあり方を持つトランスジェンダーとが深く対立していた。本論文ではこれ以上踏み込まないが，“統合”と“選択”の違いは，注目すべき観点と考えられる。

同性愛当事者の自己形成上の困難

堀田（1998）が記述している同性愛アイデンティティ形成上の困難は，いずれも彼らが抱え得る心理社会的苦悩を捉えている点で示唆に富む。しかしながら，インターネット等

の情報伝達技術の発達や、セクシャルマイノリティに対する一定の社会的認知向上により、新たな困難も生じつつある。比較的新しい文献には、自身も同性愛当事者である杉山（2006）が1999年から2003年の間に実施されたゲイ当事者自助グループでの参加観察（約40名）およびインタビュー調査（4名）の結果を、同性愛当事者の高校生が経験する学校文化における自己形成上の困難という観点からまとめている。

杉山（2006）によれば、高校生の同性愛当事者が直面する困難は大きく5つに分けられる。そのうち4つはTroiden（1989）や堀田（1998）でも指摘されている困難で、(a) 自己受容の困難、(b) 自己イメージ形成の困難、(c) 自己開示・人間関係づくりの困難、(d) 事故回避の困難（親や友人、社会に対し、性的指向が同性愛であるとばれることの回避やばれた後の関係修復の困難性）としてまとめられている。新たな困難の視点としては、(e) 同性愛に関する有用な情報へのアクセス困難（同性間性交渉に関する情報ばかりが多く、同性愛当事者としての悩みやあり方に関する情報は少ない）が見出している。また、異性愛中心性を同性愛嫌悪の再生産と位置づけ、同性同士の友情等を同性愛に結びつけて話題に挙げてわざわざ否定・排除するような“積極的同性愛嫌悪”に加え、同性愛の存在を黙殺して忌避したり同性愛嫌悪を黙認したりする“消極的同性愛嫌悪”の存在にも言及している。

4 性別違和を有する者とアイデンティティ

意外にも、アイデンティティ発達の観点から性別違和を有する者に注目した論文は、国内外いずれの主要な学術雑誌にも見当たらない。それには、gender identity 概念の定義に関する混乱と変遷が少なからず影響していると考えられる。

医学用語としての gender identity

統一的操作的定義の不在 長らく精神医学的診断のテキストとされたDSM-IV-TRは、性別違和を有する者を捉える分類名として“gender identity disorder”を使用してきた。一見してわかるように、分類名自体に“identity”の語が含まれていた。これに加え、障害概念の説明的な記述等では、“gender identity”という語が頻用されていた。特に日本では、内分泌医学、精神医学、社会学、心理学等々、多分野の専門家・研究者がそれぞれの専門性の観点から持論を展開しながら用語を紹介したため、統一的操作的定義として理解する

のはほとんど不可能である。

英語圏での混乱 医学領域で“性の自己意識・自己認知”を意味する言葉として“ジェンダー (gender)”を使用し始めた Money (1985) は、“ジェンダー・アイデンティティ (gender identity)”を“男性あるいは女性、あるいはどのどちらとも規定されないものとしての個性の統一性、一貫性、持続性”と定義づけている。他方、性転換症と診断されていた正常型の生物学的性を持つ子ども達の様子から“中核的性同一性 (core gender identity)”という言葉を出した Stoller (1964) は、それを“生物学的ホルモンの影響、出生時に指定された性別、環境と刷り込みに類似する心理学的影響によって構成される、自分が男性的 (maleness) / 女性的 (femaleness) であるという生来的かつ不変的な感覚”と定義している。性別違和を有する者の心身の機序を説明する、Money と Stoller の仮説は、それぞれ後の医療と研究の発展に偉大な功績を残したが、現在はどちらの仮説も、すべてではないが否定されている。

DSM-IV-TR の邦訳版を見ると、“性同一性 (gender identity) とは、その人の男性または女性としての自己知覚のこと”と明記されている。発生機序の説明を含む前半部分は削除されているが、概ね Stoller (1964) の定義が採用されていることがわかる。

日本語圏での混乱 ところが、我が国の性同一性障害医療の原典とも言うべき『「性転換治療の臨床的研究」に関する審議経過と答申』(埼玉医科大学倫理委員会, 1996) では、用語自体は“性の自己認知 (gender identity)”と邦訳されているにもかかわらず、その指し示すものは“個人が自己の性別、性差について抱く、全ての感覚、認知、実際的な言動、文化的・社会規範や価値観”だと定義されている。どちらかと言えば、Money の定義に近い。また同じ文献内に、“「生物学的性」と「心理・社会的性」が一致するとき、「性同一性 (gender identity) があるという」とも説明書きも認められる。当時の性同一性障害の概念定義に基づくと、性同一性障害と診断される者の生物学的性は male か female どちらかになるので、“生物学的性 (male/female) と心理社会的性 (man/woman) が男女どちらかで一致している状態”が性同一性のある状態なのだと読み解ける。この場合、Stroller の定義に近い。

日本の性同一性障害医療の第一線で活躍する医師のひとり、針間 (2000) は、『「性転換治療の臨床的研究」に関する審議経過と答申』における記述の矛盾を厳しく指摘した上で、“gender identity”の邦訳は従来“identity”が“同一性”と訳されてきたことに倣って“性同一性”を採用し、その定義は Money に倣って“一人の人間が男性、女性、もしくは

両性として持っている個性の、統一性、一貫性、持続性”とすべきと強く主張している。針間（2000）この主張の根拠として、“たとえば男性から女性へ性別移行をしようとしている性同一性障害者の場合は女性の性同一性が存在する。性別学的性（おそらく、正しくは“生物学的性”）と不一致だからと言って gender identity がないわけではない。一致不一致の意味で性同一性を用いるとしたら、性同一性障害者の有する性同一性を否定することいなり、治療の意味においても問題が生じるだろう”という持論を展開している。

針間（2000）の指摘は一見的を射ているように感じられるが、Money は、人間の性別は環境要因によって決まるという考えを持って半陰陽（現在の性分化疾患）の治療にあたった人物である。当然、彼の定義の後半部分“個性の、統一性、一貫性、持続性”は内的感覚だけに言及しているものではない。性自認が“女性”というだけで、男性から女性へと性別移行をしようとする者に女性としての性同一性があると考えるのは無理があろう。

性の自己知覚から社会的同一性への方向転換 性別二元論を基本とし、性分化疾患を除外診断としていた“性同一性障害”の概念理解においては、gender identity を Stoller に倣って“自分が男性的／女性的であるという生来的かつ不変的な感覚”と定義づけ、“生物学的性と心理社会的性が男女どちらかで一致している状態”を性同一性がある状態と捉えることも不可能ではなかった。しかし、DSM-5 で明述されたように、今や、“出生時に指定された性別”、“当人によって経験／表現される性別”、“当人が帰属感を抱く性別”、“心理社会的性別”等々、どれも“男・女”に 2 分できないと考えるのが標準となっている。“性同一性障害”は、大改訂を迫られることになった。

従来の概念理解では、“セックスの生物学的指標が不一致またはあいまいな人（すなわち、半陰陽）にとっては、男性または女性として社会の中で生きている役割および／または男性または女性としての同一化は生物学的指標と必ずしも完全に関連するわけでも予測できるわけでもない。後に、一貫性のある古典的な生物学的指標とは一致しない女性または男性としての同一性を発達させる人もいる”実態を包括的に説明できないためである。

DSM-5 において、性同一性（gender identity）は、“社会的同一性についてのカテゴリーであり、男性、女性、時には男性または女性とも異なるカテゴリーとしての同一化（a category of social identity and refers to an individual’s identification as male, female, or, occasionally, some category other than male or female）”と定義されている。DSM-IV-TR 以前の定義（“その人の男性または女性としての自己知覚”）とは全くことなり、類似性を見出すことの方が難しい。

性同一性とアイデンティティ発達 だが共通しているのは、医学用語としての“gender identity”は、基本的に患者の状態像・臨床像を示すために用いられるため、そこに時間的連続性は含まれていない。これに対して、発達心理学や臨床心理学の分野で取り上げられる“アイデンティティ”は、心理社会的発達の文脈を持っており、“その人の過去の歴史性と前途有望なる未来を連結させるもの”とも説明される。性別違和を有する者に着目した研究論文のなかには“性同一性”に言及するものが散見されるが、時間軸を含まない概念を用いているために、その人の人生における歴史的な文脈や価値観の変遷による意味づけの変容等は掬えていない。性別違和を有する者のアイデンティティ発達への示唆という意味ではあまり適さない先行研究知見と考えられる。

ジェンダー学における gender identity

“gender identity”という語は、ジェンダー学分野の専門用語としても用いられている。ジェンダー学は、男性優位な社会のなかで圧迫されてきた女性を解放する動きのなかで台頭してきた学問分野である。“gender identity (ジェンダー・アイデンティティ)”はジェンダー学分野でよく取り上げられる研究主題だが、医学用語としての“gender identity (性同一性)”とは出自からして全く異なり、一般女性を対象にした調査から導き出された概念である。また、医学用語として“gender”が生物学的要因と社会的および心理学的要因とが相互に関連しながら発達していく性別のことを指すのに対し、ジェンダー学で言う“gender”は“社会的・文化的ありよう”を指す。“gender identity (性同一性)”と“gender identity (ジェンダー・アイデンティティ)”は、言わば同音異義語である。

ジェンダー・アイデンティティは“女性としての志向性”という意味合いを持ち、女性としての社会的性役割意識や結婚や出産、育児などのライフイベントに対する考え方、身なりや服装への興味等を下位概念とする尺度が複数開発されている。ジェンダー・アイデンティティ得点が高い程、伝統的性役割への志向性が高いと言われている。したがって、ジェンダー学分野におけるジェンダー・アイデンティティは、本論で取り扱われる医学用語としての“性同一性 (gender identity)”とも、発達心理学・臨床心理学分野で用いられる自我の統合としての“アイデンティティ”とも質的に異なる概念と考えられる。

アイデンティティの構成要素としての性同一性

人格発達の文脈における性同一性 自身も性同一性障害当事者でありながら精神科医と

してその診療にも携わっている松永（2011）は、その両者の経験から、“心の性別と体の性別の不一致”を「解消する」手段として身体的治療が行われると、心と体の完全な「一致」が理想的になりがちである。しかし、当然ながら、それは不可能なのである”と述べ、
“性同一性障害の治療の目的は、「割り当てられた性別に適合しないユニークな性同一性を、自我同一性に統合させること」である”という見解を示している。自我同一性の包括的な統合状態を最終的に到達され得る最上位概念に据える松永（2011）の見解において、“性別”はその自我を構成する一要素として重要性を持っており、“性同一性”は、人格発達の過程で動的に形成・変化していく“人格的な性の存在様式”と解釈される。

松永（2011）の記述を読むと、性別違和を有する者への治療的介入の目標として掲げられている“自我同一性への統合”はすなわち、Erikson が提唱した“自我アイデンティティの感覚”の獲得を意味していることがわかる。産婦人科医や助産師（多くの場合は性器の形状の視認）によって“割り当てられた性別（＝指定された性別）”に対し、それと相矛盾する“ユニークな性同一性（＝その人独自の性の存在様式）”を持つ者が、その内的葛藤（身体と性自認の不一致）と外的葛藤（性自認と他者から認識される自己の性別との不一致）による心理社会的苦痛・苦悩の解決を助けるものとして、性別違和を有する者への治療的介入を提案していると理解されるためである。本質的には、自我アイデンティティの獲得は治療的介入によって目指されるものではなく、本人が主体的な試行錯誤の結果として得られるものとするのが適当と考えられる。

このように、松永（2011）の見解は、性別違和を有する者の治療的プロセス（多くの場合、性別移行プロセスと同義にもなる）をアイデンティティ発達の観点から捉える意義を示唆している点で注目に値する。しかしながら、松永自身は治療者と当事者の両視点を持ち合わせているものの、松永（2011）ではあくまで治療者の視座から臨床的経験知が示されているため、実際に性別違和を有する者がどのようなアイデンティティ発達を辿るかは詳らかでない。また、性同一性を“人格的な性の存在様式”と捉えていることから推測されるように、個の発達に重点がおかれており、本人の社会適応にとって肝要となる“個と社会との適合性（fitness）”という観点からは十分に論じられていない。

第2章 本論文の着眼点と目的

第1節 本論文の着眼点

心理社会生物学的モデルで捉える性別違和を有する者

性別違和を有する者への支援・援助が、従来の医学モデルから、各個の性自認に沿ったよりよい社会生活の実現を目指す生物心理社会モデル（bio-psycho-social model）に転換されつつあることは先に述べた。人の生活機能を生物心理社会モデルから捉えるには、WHO（World Health Organization）（2001）の提唱する国際生活機能分類（International Classification of Functioning, Disability and Health：以下、ICF）が理解しやすい。

ICFとは ICFは、障害の負の側面を分類するという考えが中心であった従来の国際障害分類（ICIDH）を刷新したもので、個人の健康状態を生活機能というプラス面から見るように視点が転換されている（厚生労働省，2002）。これによってICFは、援助対象者がすでに持つ潜在的機能の開発・増大を見出す視点をもたらし、援助対象者のwell-being（健康状態）に対するよりよい支援・援助を立案することにも貢献する実践的モデルとなった。

ICFにおいて、個人の生活機能と障害とは、“心身機能・身体構造”“活動”“参加”からなる3次元の健康状態に“環境因子”“個人因子”の2つの影響因子を加えた5つの要素の相互作用によって記述される複合的かつ動的なものとして理解される。一つ一つの要素は相互に関連づけられているため、1つの要素が変化することによって、他の1つまたは複数の要素が変化する可能性を持つことになる（WHO，2001）。

性別違和を有する者の生活機能へのICF適用 性別違和を有する者の生活機能と生きづらさにICFを用いると、性自認とその身体に反映されている性別の特徴の不一致を身体的障害（機能・形態障害）、性自認と他者や社会からみなされる自己の性別の不一致によって生じる性自認に沿った社会生活の送りがたさを社会的障害（活動制限・参加制約）という、2つの側面から捉えることができる。これを模式化したのがFigure1である。

身体の特徴を生来的なものからその反対の性別のものへと変化させていく身体的性別転

換は、身体的障害に対する医学的治療によってもたらされる。対して、指定された性別に即した生き方から当人の性自認に沿った生き方へと社会生活を移行していく社会的性別移行は、当人が生活するコミュニティ環境や、必ずしも“男・女”に振り分けられないその人独自の性自認、その人がすでに持っている様々な内的・外的資源を活かして行われる。その人独自の性自認に沿った well-being 実現を見据えたとき、身体的性別転換と社会的性別移行は相補的・相互促進的關係にあり、身体的障害への介入が主となる医学的治療による従来の支援・援助の限界が見て取れる。同時に、従来の医学的治療の観点に心理社会的援助の観点を加えれば、身体的障害と社会的障害の双方にアプローチすることによって、各個の自己決定に応じた複合的な支援の提供によってよりよく性別違和を有する者達の健康増進に貢献できる可能性も視覚的に捉えることができる。

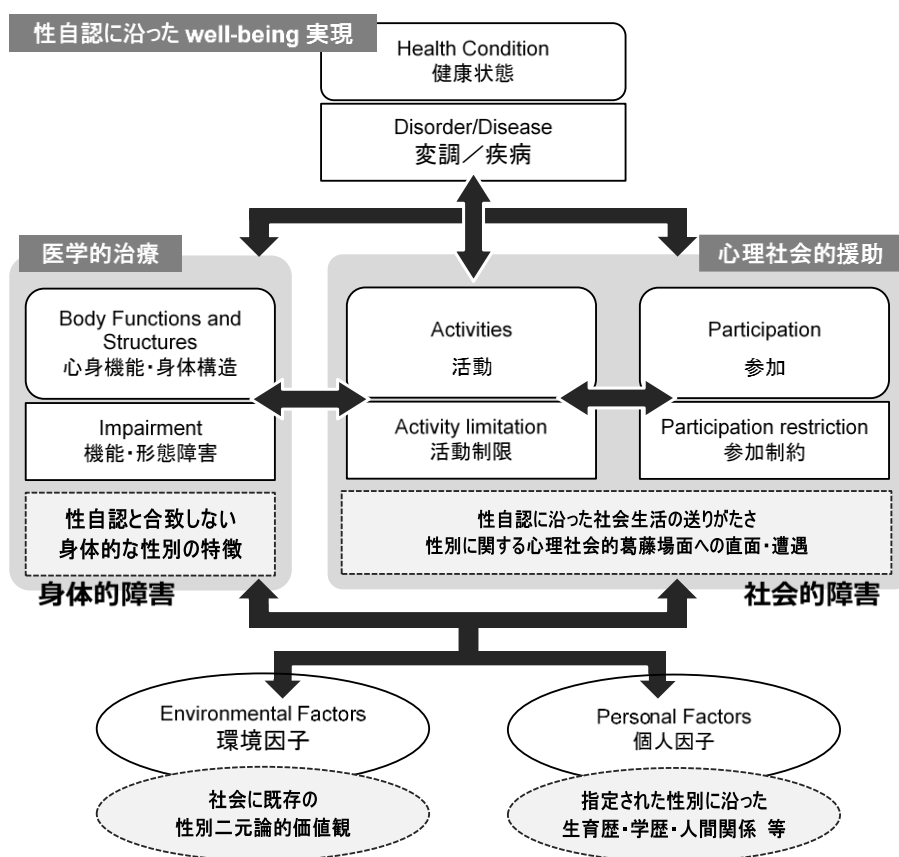


Figure1 性別違和を有する者の生活機能と生きづらさ

第2節 本論文における概念の定義と整理

本論文の基本的発想

本論文の目指すところは、性別違和を有する者の性自認に沿った well-being 実現に対して、紆余曲折を経ながら発展してきた医学的治療の成果と限界を正に肯定し、医療とは異なる心理社会的援助の視点を持ち込むことによってその限界を解決に導くことである。したがって本論文は、身体的性転換と社会的性別移行が複合的相乗的に作用することによって“性別移行”がよりよく促進されるという発想を根底に持つ。だが、本論文で言う“性別移行”にとって、社会的性別移行の要素は不可欠だが、身体的性別転換の要素は含まれていなくとも構わない。また、性別違和を有する者と彼らを取り巻くコミュニティ環境との適合性や、性別違和を有する者自身がすでに持ち合わせている様々な内的・外的資源に関心を向けるため、客観的であることよりも、性別違和を有する者の主観的視点へのコミットを重視する。

性別に関する用語の取り扱い

必ずしも“男・女”に振り分けられない多様な性自認のあり様を尊重するため、性別二元論の反映が認められる DSM-IV-TR に比して性の多様性をより内包していると考えられる DSM-5 におおむね準拠し、“sex” (male/female) を“性染色体、性腺、性ホルモン、そしてあいまいな点のない内性器と外性器のような男性と女性の生物学的指標”，生物学的性に加え、心理的、行動的、社会的影響によって表現される性別のあり様を“gender” (boy/girl, man/woman) とする。したがって、生物学的性が生物学的・遺伝学的に明らかとなっている研究知見等を記述する際には“生物学的性 (biological sex)”，生物学的・遺伝学的根拠はないが本人が身体に反映されている性別の特徴から自認している性別を“身体的性別 (physical sex)”，生物学的・遺伝的根拠が明らかでない性別を説明的記述等のために用いる場合には、指定された性別 (assigned gender) と表記する。

gender identity の区別 DSM-IV-TR では“その人の男性または女性としての自己知覚のこと”を“性同一性 (gender identity)”と定義されていた。本論文では、“その人の男性または女性あるいはそのどちらとも規定されないようなその人独自のものとしてある程度一貫して保たれている性別に関する自己認知”のことを“性自認 (gender identity)”

とする。Money (1985) による“男性あるいは女性、あるいはどのどちらとも規定されないものとしての個性の統一性、一貫性、持続性”との定義を指している場合には、“ジェンダー・アイデンティティ (gender identity)” と片仮名で表記し、人格発達の過程で動的に形成・変化していく“人格的な性の存在様式” (松永, 2011) を意味する場合には、“性同一性 (gender identity)” と表記する。DSM-5 は“性同一性 (gender identity)” を“社会的同一性についてのカテゴリーであり、男性、女性、時には男性または女性とも異なるカテゴリーとしての同一化 (a category of social identity and refers to an individual's identification as male, female, or, occasionally, some category other than male or female)” と定義しているが、極めて記述的であり、その指し示しているものが漠然としているため、文脈に沿ってその都度記述的に説明することとし、用語としての定義づけは行わない。

“性別違和を有する者”の定義

DSM-5 と同様、性別違和を有する者達が訴える苦悩については、“指定されてきた性別とその人が経験し、表現する性別との不一致 (incongruence between the gender they have been assigned to (usually at birth, referred to as natal gender) and their experienced/expressed gender)” という、その人が抱く性別違和感 (gender dysphoria) の観点から捉える。性的指向の如何は問わない。ただし、本論文では社会的性別移行に着目することになるため、日本の戸籍制度上、性別違和を有する者との取り扱いが異なるという理由から、指摘された性別が“男・女”のいずれかである者のみに調査を行っている場合があるため、これについては、その調査あるいは研究ごとに特記する。

先述したように、本論文では、身体的性別転換がともなわない場合も社会的性別移行がともなっていれば、“性別移行”と判断される。日本の性同一性障害医療の現状として、身体的治療を求めなければ医療機関を受診する必要はなく、医療とは一切関係なく独自に性別移行を実現している者がいる。医療機関の受診を躊躇っている者もいる。こうした現状を踏まえ、本論文では、精神医学的診断の有無や身体的治療を希望する程度にかかわらず、“少なくとも指定された性別への不適合感に類似するような性別違和を有することで社会適応上の葛藤があると自認しており、自らの本来的な生き方のために性自認に関する言語・非言語的カミングアウトをとまなう性別移行を要する者”を“性別違和を有する者”とする。

また、性別違和を有する者のうち、性別移行において移行元となる指定された性別が“男(性)”である者を **male to female (or alternative gender different from male)** 自認者（以下、**MTF/X** 自認者）、移行元となる指定された性別が“女(性)”である者を **female to male (or alternative gender different from female)** 自認者（以下、**FTM/X** 自認者）と表記する。これによって、精神医学的診断概念である“性同一性障害／性別違和”やその説明概念としてよく用いられている **MTF** および **FTM** と区別する。

“性別移行”の表記

本論文では、性別違和を有する者が経験／表現するの性（生）のあり様は必ずしも“男(性)・女(性)”に2分されないという **DSM-5** の考えに概ね準拠し、性別移行を“指定された性別に沿った生活から性自認に沿った生活へと移行していく過程”と捉える。そこで“出生時に男性と指定され、その後も男性として生活していた者が、その性自認に沿って女性(あるいは男性とは異なる性別)のあり方による生活へと移行していくこと”を **Male to female (or alternative gender different from male) transition processes**（以下、**M to F/X** 性別移行）、“出生時に女性と指定され、その後も女性として生活していた者が、その性自認に沿って男性（あるいは女性とは異なる性別）のあり方による生活へと移行していくこと”を **Female to male (or alternative gender different from female) transition processes**（以下、**F to M/X** 性別移行）と表記する。

第3節 本論文の目的

1 本論文の目的

人々の中には自らの身体的性別（physical gender）と性自認（gender identity）の食い違い違和感を抱く者がおり、その多くが、その性別違和感に由来する自殺念慮や自殺企図を経験する。従来、彼らの生死に関わる重大な心理的苦痛の軽減は、性別適合手術（gender-assigned surgery）等の身体的治療によって図られてきた。最近はこれに加え、性自認に沿ったあり方での良好な社会適応を援助・支援することの重要性が指摘され始めている。

しかし、性別違和を有する者を取り上げた本邦の心理学的研究の多くは、身体的治療の適用判定や性別違和感の強弱の鑑別に関心を向けており、心理社会援助のあり方に有意義な知見を投じている論文は、ごく少数の事例的検討に留まっている。

そこで本論文では、社会的障害への介入という観点から性自認に沿った well-being 実現に貢献し得る心理社会的援助のあり方に知見を得るため、性別違和を有する者から聴取した語りを質的に分析して性別移行過程で体験される心理的变化を描出し、その肯定的側面に寄与する要因を明らかにすることを目的とした。

2 研究意義

性別違和を有する者に関する国内外の先行研究は“性別違和”や“身体的性別移行”に焦点をあてたものが主流であったが、性別違和を有する者の生きづらさの軽減には、社会的性別移行への着目が不可欠と言える。これまで注視されてこなかった他者や社会との相互作用を主眼に据えた実証的な研究を積み重ねることは、性別違和を有する者の well-being 実現に資する心理社会的援助実践によりよい示唆を与え得る点で意義深いと考える。

第3章 FTM/X 自認者が語る社会適応と共生（研究1）

第1節 研究1の問題と目的

1 研究1の問題意識

性別違和を有する者が抱える心理的苦悩の背景

人は一般に、その人の外見から得られる情報をもとに、その人が“男性”か“女性”かを判断する。外見が“男性／女性”であれば、その人の生物学的性は“男／女”で、性自認は“男性／女性”であろうという判断が瞬間的に行われ、その判断の正誤に疑問を抱くことはほとんどない。これには、“性別はその人のなかで一貫しており、外見が“男性／女性”であれば、すなわちその人は“男性／女性”である”という、経験的学習によって形成された先入観、性別二元論が少なからず影響している。

性別二元論が優勢となっている社会では、“男性”と“女性”の違いが強調され、“男らしさ・女らしさ”という文化的・社会的に共有された価値観が付与された性役割を負うことが暗に求められる。ところが、性別違和を有する者にとって、性別二元論という一種の社会的共有された前提は、自らの性別のあり様と矛盾する。そのために、性別違和を有する者は、社会にある様々な性別区分や性行動の振り分け、性別にまつわる社会的慣習等、日常生活の至るところで心理的葛藤や摩擦を感じることになる(都築, 2006; 佐倉, 2006)。また、梅宮(2005)によれば、“自分が「異常者」「変態」であると思ひこみ悲嘆に暮れていたり、己の現状を受け入れられなくて混乱している”状態にある性別違和を有する者もいる。性別違和を有する者が抱える心理的苦悩の背景には、身体的性別と性自認の不一致という性別違和感に由来する心理的精神的苦痛や、他者からの偏見だけでなく、社会生活を送る中で性別違和を有する者自身のなかにも内面化されてしまった性的少数者への社会的スティグマに起因する自己嫌悪も存在していることがうかがわれる。

性別違和を有する者が置かれている社会的状況

メディアが性別違和を有する者に与えた希望 日本において、2002年以降、性別違和を有する者に関する認知は“性同一性障害”という言葉とともに、一定の広まりを見せ、メディアで取り上げられることも増えた。しかし、性別違和を有する者に限らず、メディアを通じた認知の広がりには、必ずしも社会の寛容さや身近な当事者への受容的・支持的態度にはつながらない。“メディア”という仮想空間のなかの出来事に過ぎないものと捉えられてしまうことも多い。2000年代に認められる“性同一性障害”という言葉の広がりには、性別違和を有さない者（以下、非当事者）よりもむしろ、社会に潜在していた性別違和を有する者達を励まし、身体的治療へと進む道筋を示すことに貢献したとも捉えられる。

社会適応の実態に関する情報の乏しさ しかし、第1章でも紹介したように、社会的偏見、医療資源の乏しさ、満たすことが難しい戸籍の性別変更要件等、彼らが置かれている社会的状況が目覚ましく改善したとは思えない社会状況がある。また、性別違和を有する者自身によって著された手記等からはこうした実態が垣間見られるものの、生育史をふり返りながらその苦悩を独白するものが多く、彼らが現在置かれている社会的状況や社会適応の実態については情報が少ない。

心理学研究分野の研究は、彼らの心理的特徴や心理的機序の解明を目指したものが多く、彼らの置かれている社会的文脈を捉えたものはほとんどない。ある1名のFTMを追いつけた荘島の研究報告（荘島，2008a等）は、FTMの語りを丁寧に掬い上げることでFTMと他者との関係性に示唆を得ることに成功しているが、適応状態にまでは言及していない。

2 研究1の目的

そこで研究1では、性別違和を有する者に対して半構造化面接を実施し、彼らがどのような考えからどういった適応様式をとっているのか、非当事者との間にどのような齟齬や葛藤を感じているのかについて探索的知見を得ることを目的とする。なお、FTM/X自認者とMTF/X自認者では、性別移行に対する社会的偏見の強さ、身体的性別に基づいて生来から身を置いていた性別文化に違いがあり（真鍋・花田・上石，2000）、異なる社会適応上の困難や課題を有している可能性がある。そこで、日本において医療機関の受診者数が多く、わずかながらも先行研究知見が蓄積されているFTM/X自認者に焦点をあてる。

第 2 節 研究 1 の方法

1 面接協力者の選定

性別違和を有する者の持つ性自認の多様性を踏まえ、(a) 身体的性別と性自認が合致しないことにつながる困難を抱えていること、(b) 自らを性同一性障害の当事者と自認していること、(c) インターセックス（半陰陽）の診断を受けていないことの 3 つを面接協力者に求める要件として設定した。なお、研究 1 の面接調査を広報・実施した当時、性別違和を有する者を指し示す言葉として“性同一性障害（以下、GID と略記）”を用いることが一般的であった。そこで、本調査では一貫して“性同一性障害（あるいは、GID）”という言葉を用いることで、面接実施者と面接協力者の共通理解を図った。同様に、現在の性分化疾患についても、“インターセックス（半陰陽）”との表現を一貫して用いた。また、要件 (c) は、戸籍の性別変更に関する法律上の扱いが異なることを鑑みて設定した。

この 3 つの要件を満たすか否かについては、すべて面接協力者からの自己申告に委ねた。精神医学的診断の有無は不問とした。

2 面接協力者の募集からデータ収集までの手続き

面接協力者募集から日時調整までの手続き

性同一性障害を自認する者達が集まって運営している自助グループが主催する交流会や日本 GID（性同一性障害）学会第 9 回研究大会の会場での募集・応募用紙の配布（返送用封筒を添付）、ソーシャルネット・ワーキング・サービス上で運営されている性同一性障害当事者コミュニティ内の掲示板への書き込み等によって、面接協力者を募るための広報を行った。広報を行った期間は、2007 年 2 月から 6 月までで、必要情報（氏名（連絡がとれれば通称名も可）、年齢、自認する性別の属性、カミングアウトの有無、連絡先）を記入した応募用紙の返送、もしくは同様の内容を記した電子メールの送信をもって、面接協力への意思を確認した。応募を受けた者に対して筆者からの折り返し連絡を入れる際には、募集用紙に記載した面接調査の概要を再提示し、協力の意思を改めて確認した。面接協力者となることに同意が得られた場合には、順次、面接の実施日時と場所の調整を行った。

面接協力者募集のための広報に用いた資料等

募集用紙 A4 用紙 1 枚を使用して、筆者の所属と氏名等を自己紹介した上で、以下のような 6 点を明記した。(a) 研究と調査の目的 (研究テーマは「GID 当事者の社会適応のあり様について」と提示)、(b) 調査概要 (筆者と 1 対 1 で 60 から 90 分程度の面接を実施することを明記)、(c) 面接協力者となるための要件 (先述の 3 要件)、(d) 面接内容は録音して後に逐語録を作成すること、(e) 面接へ協力は応募者の自由意思に基づく。また、面接で話された内容は守秘されること、面接の実施場所は筆者の所属する首都圏内にある大学施設内の面接室あるいは面接協力者の居住地近辺にある公共の会議室等を予定していることも記載した。

応募用紙 面接協力を意思表示するためのもので、A4 用紙 1 枚に、氏名 (通称名可)、自認している性別の属性、筆者からの折り返し連絡先等の記入欄を設けた。

返送用封筒 郵送による応募を希望する者が使用することを想定し、80 円切手を貼付した封筒をステープラーで留めて添付した。

半構造化面接について

聴取する質問項目の選定 面接協力者の募集とは別に、性同一性障害当事者による自助グループの主催者に社会適応について聴取するために有用と思われる観点について意見を仰ぎ、社会適応は性別移行の進捗によって左右されるとの助言を得た。また、性同一性障害当事者が著者に名を連ねている性同一性障害に関する解説本や手記等を参照するなかで、“埋没” (“埋没” の定義は後述) という社会適応形態があることを知った。これらを踏まえて考案した質問項目の候補を臨床心理士資格を持つ大学教授 1 名、心理カウンセリングを専攻する大学生 6 名に提示し、筆者を含めた協議を経て 4 つの大問に集約させた。

質問項目の詳細は Table1 に示す。なお、実際の面接で質問③を尋ねる際には、“埋没”を“自らの当事者性をカミングアウトせず、自分の過去や戸籍を隠すことで、あたかも生まれながらの‘男性’であるかのように振る舞って生活すること”、“適応”を“自らの当事者性をカミングアウトしながら周囲の理解を得ることで、自分の希望通りの性別で生活すること”と説明した。

実際の面接の手続き はじめに、面接内で面接協力者をどのように呼べばいいのかについて希望を訊いた。その後、自覚する自身の属性、これまでのカミングアウト経験の有無 (経験があった場合はその相手) を尋ねた。さらに、研究テーマが“性同一性障害の社会

適応と共生社会”であることを伝えてから、面接ではおおきく分けて4つのことを質問すること、質問は話の流れに応じて筆者から提示するためこれまで経験していたカミングアウトについて時系列に話して欲しいこと、多少時系列が前後しても構わないので、途中で思いついたことや後で思い出したことがあった時には遠慮なく話して欲しいことを伝えた。

面接の実施期間 2007年6月から9月まで

聴取内容の記録 ICレコーダーで録音を行い、それをもとに筆者が逐語録を作成した。

Table1 研究1で実施した半構造化面接で使用した質問項目

質問①	自分がGIDであるとカミングアウトする(した)ときに、 何か不安なことはあります(ありました)か？ どのような不安だったか／不安の背景にあった思い／ カミングアウトの場面と状況
質問②	カミングアウトのとき、何を目的にし、何を求めましたか？ きっかけは何だったか／どのような気持ちだったか／ 相手の反応はどうだったか／そのときに残った課題はあったか
質問③	社会に“埋没”することと、“適応”することについてどう考えますか？ “埋没”の利点と欠点について／“埋没”には何が必要か／ “適応”の利点と欠点について／ 現在の自分はどのようなスタンスをとっているか(含 その理由)／ 将来に希望しているスタンスはどのようなものか(含 その理由)
質問④	客観的に見て、あなたを含めたGID全体が社会の一員として 非当事者と共生するには、何が必要であると思いますか？ 当事者に必要なこと／非当事者に必要なこと／ 法制度や社会的慣習等について／ そのほかで“こうなればいいな”“こうしてくれたらいいな”と思うこと

3 倫理事項

面接調査を実施する当日、半構造化面接を開始する前に、研究および調査の目的と内容、エータの収集と記録の方法、守秘義務の遵守とデータの匿名化によるプライバシーの保護、研究終了後のデータの廃棄方法、研究成果の公表方法、面接協力の自由意思、協力の中断・中止・拒否の権利は面接協力者にすべて委ねられていること等を口頭および文書を用いて十分に説明した。これらについてすべて同意が得られてから、録音を開始した。

第3節 研究1の面接概要

1 Aさんの事例

Aさんについて

面接当時20代中盤，自営業，自身の属性をFTMと自覚している。面接実施当時，初対面の人からはほぼ100パーセント男性と認識されていた。ホルモン治療を開始して数年が経っており，名の変更は済んでいる。性別適合手術を受けたいと希望しているが，身体への侵襲性が高く，予後不良となる事例も多く聞くことから，施術を依頼する医療機関や術式等を慎重に検討している段階にある。したがって，戸籍の性別は“女性”のままである。

カミングアウトにまつわる不安：Aさんの場合

初めて他者にGID当事者性をカミングアウトする前や「まだカミングアウトに慣れていない頃」には、「友達から絶交される」ことや「親に絶縁される」こと等、「自分が性同一性障害だっことを受け容れてもらえないのでは」という不安を強く感じた。「自分が性同一性障害であることで家族が親戚から変な目で見られるのでは」、「自分と一緒に苦しめてしまうのでは」という不安もあった。親へのカミングアウトでは、「娘として大事にされてきた事実があるのに“実は娘ではなかったんです”と言うことが，親を裏切る行為になるのではないか」という躊躇いがあった。親への不安が最も強かった。また，服装等で次第に外見的な性別移行を試みていくなかでは、「外見的に男として見られるか見られないかを自分で判断し切れないとき，自分が相手に男として通用するかしないか」ということに不安を抱いた。「外見だけだったら男性に見られるんだな」と思えるようになってから，あまり不安を感じなくなった。

カミングアウトの目的：Aさんの場合

ずっと女性として生きてきて、「素の自分を隠したまま生きることが辛かった」。「素の自分を知ってもらうために」カミングアウトの必要性が生じた。自分を“女性”と認識している人に対して行うカミングアウトでは、「“素の自分”は“男性であること”だから，男性として扱ってもらいたいって気持ち」だった。自身のことを“男性”と認識している人

にするカミングアウトに「特に目的はない」。自分から「積極的にカミングアウトするとい
うのではなく、言わなければならない状況に陥ってしまったからカミングアウトするとい
うのがほとんど」である。たとえば、「戸籍上の性別が問われる場面」や「ホルモン治療を
始めるときや名前を変えるときに親から了承をとるとき」、「恋愛感情を抱いた相手とかな
り親しくなってきたとき」等が挙げられる。

“埋没”と“適応”について：Aさんの場合

埋没するか適応するか、「その選択には、パスできるか（外見だけ見た相手から性自認に
即した性別としてみなされるか）が大きく関係している」と考えている。「パスできていな
い（外見だけ見た相手から身体的性別に即した性別としてみなされる）状態だったら、カ
ミングアウトしなければ“男性”として扱ってもらえない……“男性”として
扱われるにはカミングアウトするしかない、ということになる」。

一方、何も言わなくても相手が自分のことを“男性”と認識しているのなら、カミング
アウトは必要ないし、埋没できる。「カミングアウトすることでかえって相手を混乱させ
てしまう可能性すらあるし、言う意味がない」と感じている。「自分は今、外見では“男性”
と認識されることがほとんどで、ほぼ埋没の状態」だが、「自分の生きてきた過去や戸籍の
性別を隠したり、そのために嘘をついたり、嘘をつくことに慣れてしまったりすることが
嫌」になることがある。だが、それと同時に、「人間は誰しも何かしらの秘密を持っている
のだから、自分が過去や戸籍の性別を隠すことだってそれと同等で、相手に正直に話す必
要はない」とも考えている。

日常生活でほぼ埋没状態にあることで困ることもある。たとえば、「病院で保険証を出す
とき」や「戸籍の性別が必然的にわかってしまうとき」だ。「同僚から温泉に誘われたとき、
服を脱げば身体的特徴で身体的性別がわかってしまうから断らないといけないのに、当た
り障りなく断る口実を思いつけなくて困ってしまった」ことも何度かあった。

Aさんにとって「性同一性障害であることはあくまで自分の一部に過ぎなくて、自分の
“軸”が性同一性障害というわけではない。性同一性障害であることも含めて自分という
ものがある」。「自分から進んでカミングアウトすることはしないし、したくない。けれど、
自分が性同一性障害であることが相手にばれることを嫌だとは思わない」。もし相手に知
られたとしても、「ばれたらばれたで、堂々としていられる」と考えている。

よりよい共生社会に必要なこと：Aさんの場合

最も必要なのは、「性同一性障害を特別なものにならないという意識を、性同一性障害当事者と非当事者の双方が持つこと」だと感じている。前者について言えば、「社会を攻撃することになく自然に溶け込むこと」が必要。「性同一性障害だから経験できることはもちろん、性同一性障害に関係ないことも含めて、人としてさまざまな経験を積むことで自信を持つこと」によって「人としてのキャラクター」を育てる。「周りの人からいかに愛されているかがうまく性別移行していくために絶対に必要」だと実感している。また、「相手に自分のことをカミングアウトしたり伝えたりするとき、言葉の選び方や説明の上手下手が大きく影響する」ため、「相手に受け入れられるかどうかは、相手に対していかに上手に自分を表現するかが大事」だとも考えている。

後者であれば、「当事者が溶け込める程度の認識」を持って欲しい。「全ての人間が戸籍も精神的な性別も、ぴったりそこ（身体的性別）に嵌まらなきゃならないっていう考えがもっと薄れればいい。そう考えると、不必要な男女区別や戸籍制度もなくていい」と思う。

人間関係に限らないことと言えば、「性同一性障害の治療に保険が適用されてない」こと、日本の「性同一性障害への治療に関する技術があまり向上してない」こと、「性同一性障害をちゃんと診断できる医療機関があまりに少ない」こと、「ガイドライン（GID ガイドラインⅢ）に定められている精神的サポートが不十分」であることが今後の課題だと思う。また、「将来、自分達が痴呆になったとき、自分で性自認を主張したり説明したりすることができなくなってしまったとき、戸籍の性別で扱われてしまうのは絶対に嫌だけど、そうされない保障はない」ことを最近危惧し始めたこととして述べた。

以上のようなAさんの、カミングアウト、適応様式、非当事者との共生に関する語りから、Figure2のような模式図が得られた。

2 Bさんの事例

Bさんについて

面接当時 20 代中盤，大学院生，自身の属性を FTMTG と自認している。現在，背が低いこともあり，初対面の人からは性別不明と思われる。名の変更は済んでいるが，ホルモン

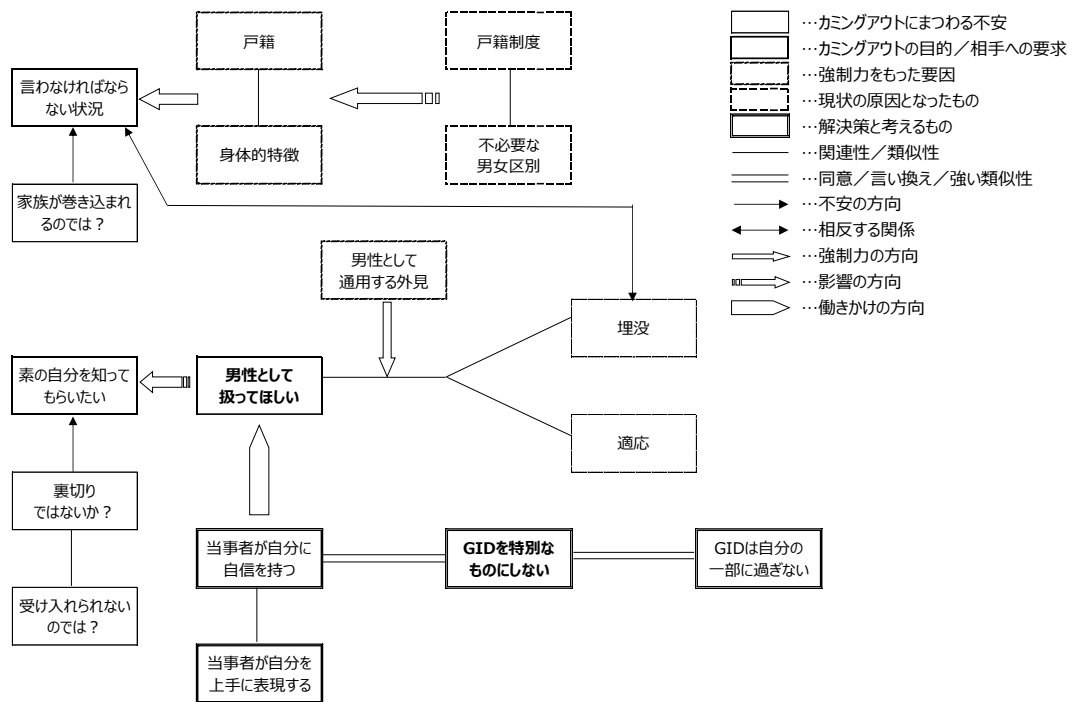


Figure2 Aさんの語りから得た模式図

治療は副作用の懸念もあって、開始を躊躇している。性同一性障害の認知の拡大や偏見の縮小を目指して、性同一性障害の当事者活動にも積極的に参加している。大学院では社会学を専攻し、性同一性障害をテーマとした研究に取り組んでいる。

カミングアウトにまつわる不安：Bさんの場合

初めてカミングアウトした相手は、友人だった。「否定されたり、次から話してもらえなくなったりするんじゃないか」、「否定や拒否をされるんじゃないか。そんなふうには不安で不安で仕方なかった」。それが上手くいくと、「2回目以降も、緊張とか不安はあった。でも、初めてのときが異常なくらいだったから、否定されるかもしれないという緊張感や不安は、どうしてあんなに不安だったんだろうって思うくらい、初めてと比べればあまり感じなかった」。カミングアウトの際には、相手によって、「カミングアウトしても正しく理解されないんじゃないか」、「同性愛と混同されるんじゃないか」、「間違った認識のまま噂が流れて、皆の話のネタにされるんじゃないか」という心配もあった。特に「昔（初期のカミングアウト時）は、自分自身が“男”とか“女”とかの枠組みのようなものに堅かったというか、周りの人がそういう枠組みを持っているんじゃないかっていう気持ち

強くて、そういう人からの目をすごく気にしていた部分があったから、それで不安になっていた」とふり返っている。

学部生時代にしていたアルバイトでは、「相手に気を遣わせたくなかったから」、カミングアウトをしなかった。そのアルバイト先には「制服がなかったから、更衣室もなくて、トイレも男女共用の個室が1つあるだけだったから、どうしても言うんだっていう必要性を感じなかったのかもしれない」。一番の理由は、「そういうことでなんとか普通にやっていて、相手も“Bちゃんは独特だよ”っていう感じで普通に接してくれていた」のに、それがカミングアウトすることで「相手が変に気を遣ってくれるようなことになったら、ぎくしゃくする。それは嫌だな」という思いだった。

最も苦戦したカミングアウトは、家族へのカミングアウトだった。「それまで普通に仲が良くて、会話もある家族だったから、友達のように“嫌われるんじゃないか”っていう不安はなかった」。だけど、「父親がどう反応するか全く読めなかった」。「頭がおかしくなると思われるんじゃないか、そういう不安があった」。当時は「一人暮らししていたアパートから実家に移るときで、だからバレちゃうから言う必要もあったんだけど（男の子の格好をしていること、女の子らしくはない部屋の雰囲気、ジェンダークリニックへの定期通院など）、大学院の受験や引っ越しすることとか、相談したり言ったりしなきゃいけないことがたくさんあるなかで、“今言わなければならない”という焦りも重なって、とにかく大変だった」。

カミングアウトの目的：Bさんの場合

カミングアウトし始めた目的は、「自分の男性的行動に対する意味づけ」だと思う。たとえば、「女子更衣室では絶対に着替ええないこと」、「女子トイレで女友達に出会ったときに“ごめん”と言うこと」、「一緒に女風呂に入るのが嫌で、旅行に誘われても毎回断ること」、「自分の女の子っぽくない髪型や格好」、「自分が大学院で研究する内容」などだ。「みんながどうしてもなんだろうって、不可解に思っているなっていうことはなんとなくその場の空気や表情とかでわかって、変な空気が流れる感じもあって、そういうことについて“実はこういうことなんだ”と意味づけするというのが大きな目的となっていた。

それから、「自分は背も低いし“かわいい”ってよく言われて、それ自体は自分にとっては褒め言葉だし嬉しいんだけど、それを“女だから”と理由づけされるのは嫌というか、不本意」だった。「自分のなかにも、女性っぽさや女性性はあって、それはそれが“自分”

だからいいんだけど，“B は女だから” っていう理由に帰結させている人がいるんだっから、それは間違っている」と訂正したかった。伝えたかったのは、「見た目は女の子に見えるけれど、中身は“こういう人間です”」ということだった。

“埋没”と“適応”について：Bさんの場合

「埋没するか適応するかっていうのには、外見が男性として通用するかどうかが大きく関わっている」と語った。「男性として通用している外見があるなら埋没っていう選択肢を選ぶこともできるかもしれないけど、男性として通用しないなら、それはもう適応するしかないっていうこと」だと考えている。「自分は今、外見的に男性とは認識されないし、“埋没”っていうのは、自分にとって現実的じゃない」。また、「現実的に埋没できるかできないかっていうこと以前に、自分はまず、外見的に男性と認められること自体を求めてない」。「今の身分は大学院生で、男性社会でも女性社会でも生きてないから、現実的な問題として捉えられない」。もし埋没できたならと考えてみると、「埋没するために、嘘をついたり取り繕ったりすることが後ろめたいし、面倒」に感じている。Bさんにとって、「ひとつひとつの嘘は重荷で、たぶん、途中で放棄したくなってしまう。埋没は自分には合わない」。

今現状として適応しているっていうのは、「埋没できないから埋没しないっていう、消極的な理由でやっているわけじゃない」。「“適応”がうまくいくかいかないかっていうのは、周りの反応次第というところがある。周りの反応次第っていうことは、自分がその反応を変えられるっていうことだと思う。周りを変えるのは自分で、変えたいと思うなら、そのために自分が努力すればいい。だから、“埋没”よりもずっとずっと自分に合うし、自分ができることがある」と感じられる。「誰だって話さなきゃわかってもらえないことっていうのはあって、自分も性別以外のことだったら、そうする。“男”とか“女”とか、そういうラベルを違和感なく身につけていない人間は、身につけていられる人は何もせずに相手にわかってもらえるようなところにワンステップがあって、それを一々やらなきゃ自分をわかってもらえないっていうだけ」。「自分がわかってもらいたいなら、そのことを自分で言い出さなきゃ何も変わらないし、始まらない。そういう、自分のことをわかってもらいたいから、っていう気持ちで話して、それで色んな人に自分のことをわかってもらいたい」。

よりよい共生社会に必要なこと：Bさんの場合

「まず思うのは、人間同士である以上、お互いに誠意を持って接しないといけないって

いうこと。自分も便宜上，“当事者と非当事者”っていう分け方をするんだけど、それはあくまでも便宜上のことで、本当はあくまでも“人と人”なんだ”と思うようになった。

当事者側にとって必要なのは、「当事者が誠意を持ってきちんと自分のことを説明すること」だと思う。「当事者が自分の求めることをはっきりと、まずは主張する。主張して、それから説明することが大事。説明っていうのは、押し付けることとは違う。自分の状況をきちんと把握して、それをきちんと説明すること。それが大事」だと考えている。「性同一性障害がどういうものなのかっていうことを知らない相手でも、自分がそのことを話しているときに、そこにもものすごく誠意があるっていうことが見えさえすれば、大事なことはちゃんと伝わる」。自分も友人に、「“よくわかんないけど、いいじゃん？””って言われたことがある」。だから、「相手が性同一性障害について知っているかどうかっていうことよりも、カミングアウトする当事者の側が誠意を持って話しているかどうかっていうことの方がずっと大事」だと考えている。

次に大事だと思うのは、「自分達当事者自身が、性同一性障害を特別なものにしないこと。言い換えれば、性同一性障害を言い訳にしないっていうこと」だと思っている。「性同一性障害だから受け入れられないとか、友達ができないとか、就職できないとか、そういうこと。自分を守るためにも言い訳が必要なときだってもちろんあるし、言い訳じゃなくて本当に性同一性障害だからっていうことが理由になっていることもたくさんあると思うけど、でも、そんなことをしなくても生きていけるようになればいいなって思う。性同一性障害であることがハンディキャップなんだとか思わないし、思う必要もないようになったらいいよねって、そう言いたい」。そのために、「自分達が言い訳にしないこと、同情を買おうとしないことが必要」だと考えている。

最後に、「今言ったことがあった上で、正しい社会認知の拡大とそれによる偏見の縮小」を挙げた。「実際問題として、ホモフォビア、トランスフォビアっていう偏見みたいなものとは別に、そういう人に対して生理的な嫌悪感を抱いてしまう人だっている。それは仕方ないかもしれない。だけど、それがどういうものなんだっていうことをきちんと知っていたら、そうはならないのかもしれない。偏見だって、『あ、違ったんだ』って思えば消えていくかもしれない」。「性同一性障害も、同性愛も、その他のセクシャルマイノリティのことでも、そういうことに関して情報を得たり、学習できたり、そういう知る機会があるっていうのは、すごく大事だし、絶対に必要」だと考えている。「たとえば、性同一性障害の当事者が学校の制服を性自認に合ったものに変えたいと言ったとき、融通を利かして柔軟

に対応してもらうためなんかには、性同一性障害の認知拡大が意味を持つかもしれない」。

「今は性別でわけられちゃっているものがあって、それについては、自分で選べるようになってくれればいい。だけど、本当に必要なのは、戸籍制度の撤廃。今、希望する性別で通用する外見を得た人でも、戸籍のせいで埋没できない。性別適合手術が戸籍の性別変更の要件になっているけど、戸籍の性別を変更したいという理由でリスクの高い手術に踏み出させてしまうのは、おかしい」と思う。「特例法の要件が緩やかなものになればいいのかもしれない。だけど、戸籍がなければ、特例法だっていない！」と言い放った。

以上のような B さんの、カミングアウト、適応様式、非当事者との共生に関する語りから、Figure3 のような模式図が得られた。

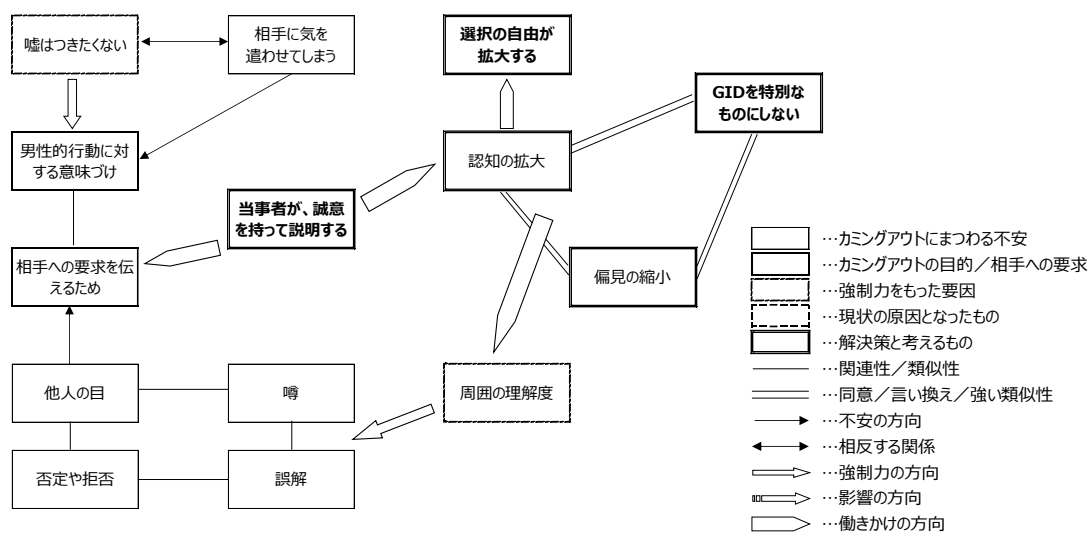


Figure3 B さんの語りから得た模式図

3 C さんの事例

C さんについて

面接当時 26 歳，酒類を出す飲食店の店長として雇われている。自身の属性は FTM と自覚

している。初対面の人からは男性と思われたり女性と思われたりするが、最近は男性と思われの方がやや多い。精神科医から診断を受けているが、戸籍の名の変更は申し立てていない。普段は通称名を使うことでやり過ごせている。ホルモン治療についてはまだ周囲との調整が済んでおらず、いつも周りにいるような人は男として見てくれているなか、副作用があると分かっている治療にわざわざ手を出してよいのかという迷いもあるため、今は決断を見送っている。お店に来るお客さんもほぼ全員が、Cさんが性同一性障害当事者だと知っていて、それが酒の肴になることも珍しくない。

カミングアウトにまつわる不安：Cさんの場合

Cさんが最初に感じた不安は、「受け入れてもらえるかどうか」という不安だった。それは、「友人関係で一回否定されたりしたら、(カミングアウトすることを) やめてしまうかもしれない」と思う程に強かった。「“本当は男なんだ” って言ったとき、誤解されて、同性愛者のように受け止められてしまうことが不安だった」。たとえば、「自分は性的指向が女性だから、それを“ああ、女性が好きだから、それで男だって言ってるんだね” と思われて、性自認が男性なんだっていう本質的なところが伝わらないような気がして、それが不安」だった。実際にカミングアウトした後、「相手はどこまで正しく理解してくれているんだろう,, , と疑問に思うことも意外とあった」。

勇気を出してカミングアウトしても、「自分の希望通りの対応が得られないかもしれない」という不安があった。たとえば、「体を鍛えたようとジムに行くとき、自分は男性用の更衣室を使いたくて、そのために性同一性障害なんだってカミングアウトしたとする。そのとき、ちゃんと男性として扱われるのかはわからなかった」。

相手に男性としての対応を求める気持ちがある反面、「相手に対応の変化を強制してしまうことにも不安」を感じた。自分のことを「女性の名で〇〇って呼んでくれている昔からの友人に、これからは男性名の△△で呼んでくれって言うのは、ある意味強制じゃないか。今まで〇〇って呼んでくれてたのに……呼び方を変えてくれことを言った方がいいのかどうか」と悩んだ。カミングアウトした相手に、「言ってよかったのか、言わない方がよかったんじゃないかって思う瞬間」も経験している。たとえば、「向こうが自分の名前を呼ぼうとして、言い淀んだり躊躇したりする瞬間」である。「相手が話していて自分に話を振ろうとしたときに、〇〇と言いかけたのを飲み込んで“あー” って言ってから“△△はさ、” と話し出す。“〇〇は、…あ、じゃなかった、△△は…” みたいな瞬間、“(気にさせて)

悪いなあ〜” って」思うことがある。

「親に対しては、今もどうしたらいいのかわからない」。カミングアウトする前、「最初は、たぶん受け入れられるだろうなって思ってた。だけど、意外とそれが大反対みたいになっちゃった」。「やっぱり、1回カミングアウトして終わりじゃなくて、ダメなら次、それでもまだなら次。そんなふうにやっていかないといけないと思う。だけど、1回否定されると、次にどう話したらいいのかな、話さない方がいいのかなって、そんなふうになっちゃう」。「相手が友人なら、今はもう会う機会すらあれば話しちゃっているし、特に不安はない。だけど、親とのわだかまりはまだ消えていない」。

カミングアウトの目的：Cさんの場合

最初に行った母親へのカミングアウトは、「治療が目的だった。ホルモン治療がしたかった。胸オペ（＝乳房切除術）も。外性器とか内性器云々までは、そのときまだ考えられてなかった。だけど、とりあえず、男性としての日常生活を送りたかった」。

「同性・異性間の距離を変える」という目的もあった。「自分が男だってカミングアウトする相手にとって、自分は最初から男として付き合いがあった人間じゃない。周りは男の子っぽい女の子として、ひとつの個性ある女の子として自分と付き合ってくれてた。だからやっぱり、男子と自分との距離感っていうのは、同性間の距離とは確実に違う。そこには溝もあった。自分が女の子だったときの距離感とはまた違うけど、どっちかって言えば女の子として見ているときの距離と近かった。その距離をなんとかして縮めたいなと思った」。そのために試みたが、「やっぱり、縮めるのは大変だった。大変というか、なかなかみんなの頭が切り替わらなかった。大変だったけど、やっていくしかないし、とにかくゆっくりゆっくり、何度も」伝えながら、変わっていくのを待った。

相手によって「色々な目的はあったけど、結局どれも、希望の性別で生きることが目的。究極を言えば“自分が楽になって、生きやすくなるため”で、自分のことをわかって欲しいというよりは、“男として生きたいんだ”っていう方が先立っていた」とふり返った。

“埋没”と“適応”について：Cさんの場合

“埋没”という言葉聞いて思うのは、「嘘はナンセンスだっていうこと。外見が変わったとしても、自分の生きるスタンスのようなものは変わらないし、変えない。過去とかは変えられない。自分の過去に対して、消したいものとかは別はない」。だから、「埋没する

という考えはない」と言い切った。

たとえば、「昔の話とかをみんなでするとき。仲が良くなればセックスの話もするし、将来の結婚の話もする。そうするとね、相手に話しておかないと、自分で嘘つくことになる。絶対に。そういう瞬間が多々ある」。学生時代の部活の話になって、「中学の時に何部だっかって聞かれたとする。そのとき、正直にソフトボール部だって答えると、相手は怪訝な顔で“ソフトボールあったの？”って訊く。そこには、“男子なら普通は野球部だよ？野球部がなかったの？なのにソフトボールがあるって変な学校だね”っていう不自然さがある。そういう疑問を抱かれないためには、結局、野球部だって嘘つかないといけない。埋没するためには、嘘をつかざるを得ない」。それまでずっと女の子として生きてきた間、「自分にいっぱい嘘ついてきた。やっと心のまま生きられるようになって、なのにまた嘘つかないといけないっていうのは、それはなんかナンセンスだ」と感じている。ちゃんとカミングアウトして、相手に自分のことを「伝えた方が自分のためにいい」。「昔の過去とかを嘘つきたくないっていう意味で、ちゃんとありのままの自分で相手と向き合いたい」と考えている。

よりよい共生社会に必要なこと：Cさんの場合

最近の性同一性障害当事者は「一方的過ぎるなって思う。カミングアウトして、それで“わかって欲しい、わかって欲しい”って言うけど、どれだけ相手に求めるんだろう。自分はどれだけ相手のことをわかろうとしているんだろうって思う」。「カミングアウトして、ちょっと自分のことを伝えたとする。そうすると相手はわからないから、結構色んなこと聞いてくる。そのときに、“あ、こんなことを聞かれた、最悪”っていうふうに傷つく当事者が多い」ように感じている。

本来人間関係って、一方的に言うものじゃなくて、お互いのことをそれぞれ話して、それによってわかり合ったりお互いの考えを知り合ったり、そういうこと」だと思う。「わかって欲しいっていう気持ちで話すのはいいけど、それだけで終わりじゃなくて、相手からも意見とか感想とか言ってもらって、それでキャッチボールしなきゃ」と思う。「カミングアウトされた相手も、その人のことを知りたいとか、わかりたいとか思って質問とかをしているはず。それに返していかないといけない」と思っている。

当事者がキャッチボールできるようになるには、「当事者が発想を転換させること」が必要だと感じている。「当事者自身が性同一性障害であることを引け目に思ったり、自分を特

別視したりしている」現状をよく見かける。「性同一性障害であることをマイナスなことだと捉えて、“こんなことが出来ない、あんなことも出来ない”って言うのを」よく耳にする。たとえば、「声変わりしてないから、人前で歌が歌えない」とか。それは確かに嫌で辛いことなのかもしれないけれど、それは本人の発想の転換次第で結構変えられちゃったりするんじゃないかなって思う瞬間もある」。最近では、「FTM 当事者が男として子どもを作れないのはしょうがない。男には変わらないけど、できることとできないことがある。そういう自分なりのスタンスを自分のなかで納得しながら持っていくこと」が必要と考え始めている。

会話のキャッチボールが成立するためには、「周りの環境も今とは違うものに変化していく必要がある」と感じている。たとえば、「ある学校の生徒に FTM 当事者の子がいて、女子の制服を着たくないんだって言った時。教師側が“あ、性同一性障害だ。大変だ、男子の制服にしよう”とか。そういう風に先回りして一方的に配慮するんじゃなくて、生徒とちゃんと向き合って、一緒に、“男子の制服を着るのなら、ほかの生徒みんなにも言わないとダメだよ。どうやってみんなに伝えようか”って。そういうことを一緒に考えていけるような環境」を作っていくことが必要ではないかと考えている。「非当事者側が“配慮”という名の下で勝手に全部を“障害だからしょうがない”ってシャットアウトしない」ことが重要と感じている。性同一性障害の社会認知拡大を図る際にも、「当事者が社会に対して声を大にすることよりも、むしろ、ふれあいを通して徐々に理解を深め合っていくこと、知ってもらふこと」が大事だと考えている。

以上のような C さんの、カミングアウト、適応様式、非当事者との共生に関する語りから、Figure4 のような模式図が得られた。

4 D さんの事例

D さんについて

面接当時 20 代終盤で、フリーター（週 5・6 日勤務）をしている。性別の属性を FTM と自認している。現在、初対面の人からは男性と認識されることがほとんどである。東海地方在住のため医療資源が少ないため、遠方のまで通院している。最近、性同一性障害と

の診断を得て、ホルモン治療を受け始めた。名の変更は済んでいる。性別適合手術の希望があるが、資金調達にはこれから年単位の時間を必要としている。また、本人も女性のパートナーも手術リスクを心配しているため、受けるかどうかも含めて検討している。

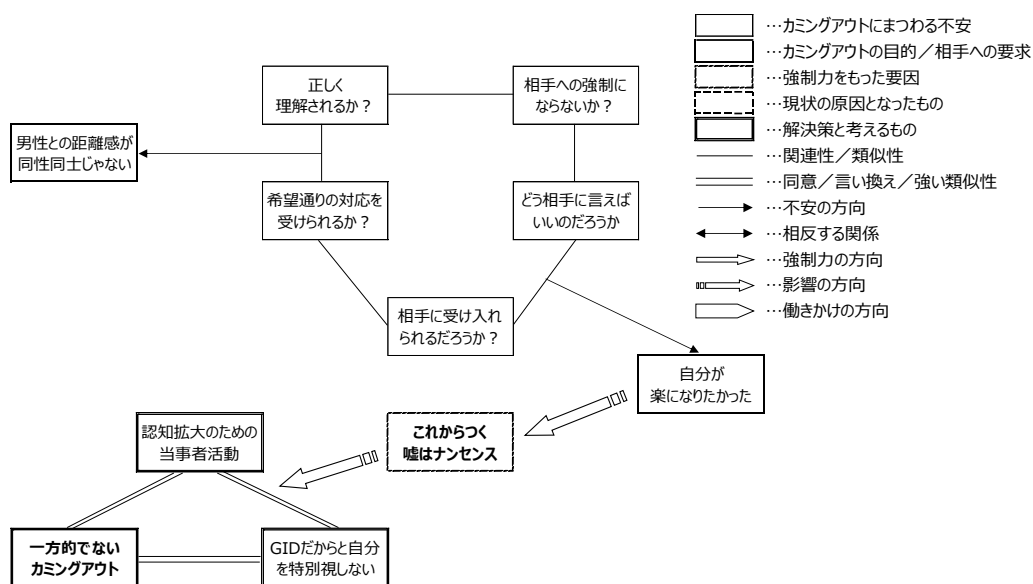


Figure4 Cさんの語りから得た模式図

カミングアウトにまつわる不安：Dさんの場合

主な不安は、「嫌悪されるのではないか」、「相手に迷惑をかけてしまうのではないか」というものだった。前者の不安は、「カミングアウトすることで相手の態度が変化してしまっ、今まで通りの付き合いができなくなるのではないか」という危惧から生じている。後者の不安は、家族や親戚、そのほかの身近な第三者に対して抱かれたもので、「自分と同じように非難の目で見られるのではないかと心配」があった。

カミングアウトの目的：Dさんの場合

最初のカミングアウトは、「自分ひとりでは消化し切れないという思い」で行った。「初めて“性同一性障害”というものを知ったとき、“病院に行かなくちゃ、何かしないと、何かしなくちゃ、っていうのがすごく大きかった。そのとき一人暮らしをしていて、一人で消化できないよくわからないものを友達にぶつけてしまった。そのときに勢いで言っちゃ

った。だから、“助けてくれ”っていうのが一番求めたことだった。助けを求めたんです」と言う。「心の拠りどころが欲しかったんだと思う」ともふり返った。

「少し落ち着いてから」のカミングアウトは、家族、友人、職場に対するもので、その目的は共通して「男性として扱われたい、男性として受け入れてもらいたい」というものであった。「職場では、タイムカードに元々の戸籍上の女性的な名前が書かれていたから、男性的な通称名を書くように変えて欲しい」と求める必要があった。「今の職場で収入を得ながら生きるため」という意味合いもあった。「これから性同一性障害の治療をして、外見とか声とかもどんどん変わっていく予定だった。それでも雇って欲しい、ここで働かせて欲しい」という気持ちがそこにあった。

“埋没”と“適応”について：Dさんの場合

「社会的にも外見的にも完全に男性になったら、埋没したい」と考えている。「戸籍の性別を変更することができたら、FTMとして新しい人間関係を築きたくはない。カミングアウトせずに、普通の“生まれながらの男”と同じようにして人間関係を築きたい」。そのために、「性別適合手術をして、特例法の要件を満たして、戸籍の性別を変えたい」。ただ、現段階で“埋没”しようとした場合、「戸籍の性別や身体的特徴から自分の“女性”としての部分がばれるんじゃないか」という不安がある。「だから今は、しばらくこのまま適応を続けていくつもり」である。

よりよい共生社会に必要なこと：Dさんの場合

自分の経験について言えば、「カミングアウトしたら、“じゃあ、頑張っ”だとか、“大変だね”とか、そんな感じの反応が返ってくる」。今は性同一性障害という「病気を、みんなが知っているっていう状況」になっていると感じている。自分も「カミングアウトやその後の適応はすんなりできている」ため、性同一性障害の認知は「今ぐらい。みんなわかっているかんじのまま」で構わないと考えている。専門家以外の当事者や非当事者に「これ以上求めていることはない」。

逆に医療機関には、「求めたいことがたくさん」ある。「“あっち行って、こっち行って”みたいにたらい回し」な現状が一番の問題だと指摘した。自分達の社会適応向上のためには「スムーズな性別移行が必要」だと考えており、「もっと早くカウンセリング(精神療法)から、オピニオン(身体的治療に進むために必要な2名の専門医からの意見書)が出れば

いい。それが出たら、ホルモン治療して、手術してって、トントン拍子に自分が思うように体を変えていけたらいい」と常々もどかしく感じている。「カウンセリングで性同一性障害ってことがわかって、リアルライフエクスペリエンス(実生活経験(real life experience))が大丈夫だねってことになったら、「さあ、手術しよう」というかんじ」を望んでいる。

特に性別適合手術については、「手術できるようになるまでに必要なガイドラインの面倒な手順とか、判定会議の順番待ちとか、手術は何年後まで予約がいっぱいとか、そういうのがやっかい。もっと簡単にできるようにして欲しい。日本でも、もっと性同一性障害の診断やホルモン治療、手術をやってくれる医療機関が増えて欲しい。性同一性障害の治療がちゃんと一般化して、ほかの病気のようにスムーズに進むようになってくれれば一番いい」と思っている。「早く戸籍の性別を変えたい」のは、「自分のことをFTMだと知っている人ばかりの今のアルバイト仕事を辞めて、男性の正社員として新しい仕事に就くのがどんどん遅くなってしまふ」からだと言う。あるいは、「性別適合手術を受ける前に戸籍の性別変更ができるように法律を変えて欲しい」と思っている。

以上のようなDさんの、カミングアウト、適応様式、非当事者との共生に関する語りから、Figure5のような模式図が得られた。

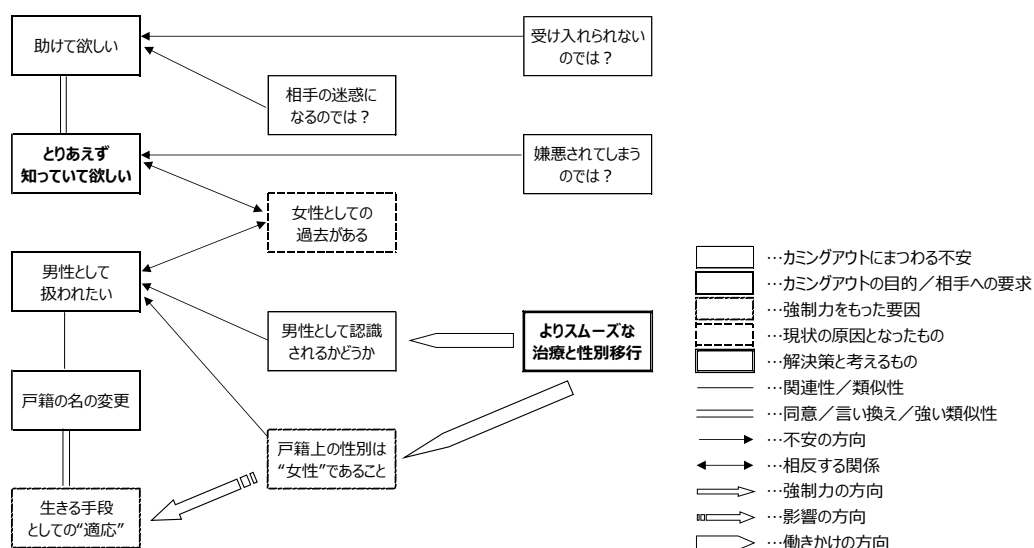


Figure5 Dさんの語りから得た模式図

5 Eさんの事例

Eさんについて

面接当時 40 代終盤、契約社員として働きながら通信制大学で学んでいる。FTMMS と自認している。外見的には年齢相応の男性にしか見えない。初対面の人から女性と思われることはないし、性別を疑われることもない。ホルモン治療を受けてしばらく経つ。現在、家庭裁判所に名の変更を申し立てている。職場や学校では通称名を使用し、ほぼ完全に男性として日常生活を送っている。性別適合手術は受けていない。

カミングアウトにまつわる不安：Eさんの場合

カミングアウトの不安は、「相手に女性として見られているときと、男性として見られているときとで違う」。女性として見られている場合には、「カミングアウトされたことで相手が驚き、拒絶反応のようなものをしてしまったら、その相手との関係性がマイナス方向に変化してしまうのではないかと不安になる。もっと具体的に言えば、「友人関係が崩れてしまったり、途絶えてしまったりすること」で、「相手がどういう反応するかを気にしていた」。カミングアウトする相手は性同一性障害について「きちんと把握していない人のほうが多い。わずかに知っている断片的な情報だけで、「気味が悪い」とか思われてしまうようなことが心配」だった。このような不安や心配は、ごく初期のカミングアウトや、何十年ぶりに再会するような友人へのカミングアウトで感じた。「親しい間柄の人に対するカミングアウトでこれと同じような不安を抱くことはほとんどない」と言う。

男性として見られている場合、「自らカミングアウトすることはない」。ただ、公的な書類には「本名を書かなければならない……本名の下の名前はどうか考えても女性だろうというもので、本名で書いて提出すると、外見と名前とがまったくズレる……常に怪しまれ続けて」、カミングアウトしなければならない状況になる。以前は、こうした「社会制度によってカミングアウトを強制されることに不安」があった。しかし最近では、「ちょっと人が悪くなってきて、不精髭をわざわざ一週間分くらい生やしてから窓口に行く。そうやって、（外見から認められる性別と表記された名や性別の記載からわかる性別との不一致に）困惑する相手の反応を楽しむようにもなっている」と、冗談混じりに言って笑った。

カミングアウトの目的：Eさんの場合

カミングアウトの目的も、「相手に女性として見られているか男性として見られているかによって異なる」。

女性として見られている場合には、「“男っぽい女を演じている”という偽りの状態を続けていても仕方がない……ありのままの自分を受け入れて欲しいという思い」がある。「ありのままの男性としての自分を見てもらいたい、扱ってもらいたい」から、カミングアウトをしている。これまでには、「昔の女性的な名前と呼ばないこと」を求めたことがある。男性としての扱いに関しては「あまりこだわりはなく、相手の中にある（Eさんに対する性別の）認識が男性に変わればいい」。男性としての扱われ方にこだわりがないのは、「外見の男性化が著しくなってくると、相手も、本当に自然に男性として扱ってくるようになる」からだと感じている。「ジェンダーセンシティブ（性差別に敏感で差別が生じないような配慮が十分に行き届いている）」で、「ジェンダーに関する類の研究をしている人が多い」環境に身を置いていることも、こだわらずにいられている一因に挙げた。

男性として見られている場合、「カミングアウトの必要はない」と考えている。現在通っている大学は通信制であるため、書類上の表記と外見とが照合されるような機会もなく、「今のところは何もしていない」。「しなくてもいいならしないけど、改名の手続きが済んだら、学生課かどこかに連絡する必要があるだろう」と予測している。

“埋没”と“適応”について：Eさんの場合

「すべての場面で埋没していても、その人本人がよければそれでいい」と考えている。Eさん自身は、「相手との関係性次第で、臨機応変に“埋没”と“適応”を使い分けている」。「埋没”と“適応”，どちらになるかは、自分がどうしたいかということよりも、相手がどういう立場や人柄であるかに影響」されると感じている。

現在「外見的には完全に男性として認識されている。あんまり深い付き合いではない場合、……（カミングアウトしない方が）かえっていいんじゃないか」と思っている。「特別に言う必要はないでしょうし、相手が自分を男性と判断しているならばその判断に任せよう」という気持ちがある。「そこまで完璧な埋没状態（生まれながらの男性とほぼ同様の状態）になるには、性別適合手術まですべて終了していないと、やはり無理がある。だけど、上辺だけ、本当に表面的な仕事上の事務的なところの関係だけだったら、相手の判断に任せても構わない」と考えている。

「深い付き合いがある人で、(カミングアウトしないでいると)心がうずくというような人であれば、その人にはカミングアウトすればいい」。「そのような相手には、自分が性同一性障害であることをきちんと伝えておいた方がいいでしょうし、伝えなくても向こうは気付きます」。ジェンダーに関して理解がある友人等のなかには、「あえて言わなくても私が性同一性障害だと気付いて、私が気付かれているとわかっていることも見抜く、そんな人もいます。そういう相手に対しては“適応”していることになる」。

現在は概ね“埋没”しながらも臨機応変に“埋没”と“適応”使い分けているが、「“埋没”できなくなる場面で困ることもある。身体的特徴がわかってしまう場面、戸籍の性別や名前が必要な場面」では、自分の意思ではないものに「“埋没”か“適応”かの選択が左右されてしまう」ように感じている。

よりよい共生社会に必要なこと：Eさんの場合

「性同一性障害の当事者も非当事者も、お互いに“性同一性障害”を特別視しない必要がある」。非当事者から「妙な色眼鏡で見られる場合がある」。「今、“障害”という言葉が付いていて使っていますが、“障害”じゃなくて、そういう“状態”，もしくはそういう“症状”のある人間がいるんだよ、ってことをきちんと周知する」。「(正しい理解の仕方を)インフォメーションして、偏見を縮小することが必要」と考えている。

当事者自身も、「自分の状態に対して、“身体障害者”あるいは“知的障害者”とかと近いような意味を持つものとして“性同一性障害”を捉える」ことや、「保護を必要とするような態度をとる」ことをやめる必要がある。「妙に気負ったり、負い目に感じたりせず、ごく自然体であることで」共生社会に近づいていくように感じている。

社会制度としては、「本人が希望すれば変更できるぐらいに」特例法を改正することや、「ジェンダーフリーの観点から性別欄をなくしていくこと」の必要性を感じている。また、「(診断と治療に関する)ガイドラインができたことで当事者の選択肢が極端に減ってしまった」と言い、「性同一性障害の治療に従事しようとする医師がいないこと」、「性同一性障害医療に従事している医師の後継を育てるような体制がないこと」を医療機関の問題として挙げた。

以上のようなEさんの、カミングアウト、適応様式、非当事者との共生に関する語りから、Figure6のような模式図が得られた。

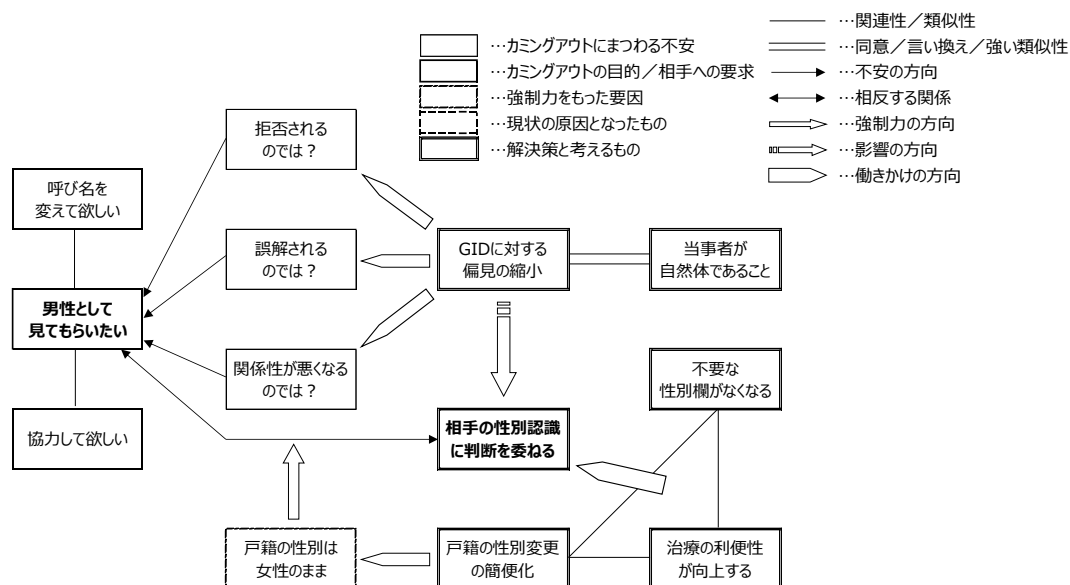


Figure6 Eさんの社会適応のあり方

6 Fさんの事例

Fさんについて

面接当時 22 歳，大学生で，父親の海外転勤にともない，中・高校は米国で過ごした。FTM 当事者と自認し，性同一性障害の診断も得ている。まもなく，戸籍の名を変更し，乳房切除術を受けることになっている。希望すればすぐにホルモン治療を始められる状況にあり，声を変えたい気持ちは強いものの，寿命を縮めることになるのではという心配がある。両親も副作用の懸念から支持的ではなく，今のところは服装や髪型の工夫でやり通すことも視野に入れている。初対面の人に女性だと思われたり，子どもにどちらの性別か尋ねられたりすることもあるが，たいがいは男性として通用している。

カミングアウトにまつわる不安：Fさんの場合

最初，「カミングアウトは確かにしていたけど，カミングアウトする理由が，自分のなかで見つかっていなかった。“不安”っていうよりも“疑問”というかんじだけど，それさえもやもや」していた。「性同一性障害当事者として生きるんじゃなくて，男として生きたい」という気持ちが強くあったが，同時に，「男として生きられるようになりたいけど，そのた

めに性同一性障害当事者にはなりたくない」という気持ちがあった。「みんなから男として認識されることができないなら、“ボーイッシュな女”と思われてもいい」とも思っていた。

「結局、気持ちはあっても……自分でも自分がどうしたいのかわかってない」状態だった。

「相手から予想しない反応が返ってきたときに自分がどう反応したらいいのか……自分さえわかっていないのに、それを相手がわかってくれなんてことがあるのかな？」という気持ちがあった。

自分にカミングアウトされる「相手のことも心配」だった。自分がカミングアウトをすれば、それを受けた「相手も“重いもの”を受け取ることになる」。自分で自分が定まっていないうちに、「自分が我慢していればいいんじゃないか。一々みんなにカミングアウトするんじゃないかと、今ある“ボーイッシュな女の子”っていうイメージをそのまま続けた方がお互いにいいのかもしれない……相手の負担にもならないし、楽なんじゃないか」と思うこともある。

友人に「否定されることに恐怖を感じた。同時に、友達関係にヒビは入らないだろうという軽い気持ちもあった」。最初のカミングアウトは、「インターネットのソーシャルネットワーク上で、自分が性同一性障害なんだってことを日記に書いて更新する」という形で行った。「当然、それを読んでいるときの相手は見えない……自分のカミングアウトに対する相手の反応よりも、見えない噂になってしまうことが嫌だった。……カミングアウトをする以上、その噂によって自分から離れてく人がいたとしても、それは仕方がない」という気持ちにもなった。

“女性”として就職活動を行って内定を得ていた F さんが今一番不安なこととして挙げたのは、「就職先へのカミングアウト」であった。会社に出すエントリーシートや履歴書には必ず性別欄があり、「男性」と書いて内定をもらって、その後に“虚偽記載だから内定取り消し”なんてことになったら困る。かと言って、空欄にすると書類に性同一性障害だからどうこうっていう事情を書いたら、門前払いになるかもしれない。結局、戸籍上の性別を書くしかない。だけど、女性として働くのは無理だし、考えられない」。そこで F さんは、「女性として就活して、採用された後にカミングアウトする」ことにした。実際に内定を得た後には、「人事にカミングアウトして、それが理由で難癖をつけられて内定を取り消されるかもしれない」と心配になった。

カミングアウトの目的：Fさんの場合

ごく初期のカミングアウトでは、「自分が何者であるか固まっていなかったから、それを固める」ことが目的だった。「そのままの自分で話せる相手、相談できる相手」が欲しいという気持ちもあった。大学の友人達にしたカミングアウトには、「性同一性障害っていう存在は、みんなが思っているよりも身近なんだってことを知ってもらいたい」という思いも込めた。

Fさんは、インターネット等を通して性同一性障害について調べていくなかで、「ジェンダークリニックに通って、診断がおりて、治療を始めて、っていう段階があるように……自分が性同一性障害だって確信したら、次にカミングアウトが来て、みたいな段階を踏まなきゃいけないのかなって無意識に」思っていたところがあった。両親へのカミングアウトは、「治療を始めていく段階として、許可をもらうため」との意味合いで行った。「ばれて知られちゃうんじゃないかと、自分から言った方がいい、自分から言うのが当たり前っていう感覚もあったし、親に黙って勝手にするのも愛がないな」という気持ちだった。

相手がFさんのことを女性として認識している場合、「“女じゃない”存在として扱われるために」という目的意識があった。「男性として扱われたいとは思わなかった」。自分を女性と思って出会った人に対して、「(男性として認識されることを)諦めている自分がある。第一印象は一生変わらないだろうし、ずっと自分を女性と思って接してきた、それでいきなり“男として見てください”って言われても、意識的に男として見ることはできても、無意識的に男として認識することは不可能だと思う」。今の自分の過去を見た時、「女として生きてきた部分ってというのが結構長いわけで、そういう女の自分を相手の記憶から消してもらいたいというか、思い出から薄れさせてこれからの自分を見て欲しい……“これからの自分”と付き合って欲しい」という気持ちもあった。

Fさんのことを男性と思って出会った人には、「男として見てもらいたい」。「“女として”とか、“性同一性障害として”相手と接したいわけじゃなくて、“男として”接したい。だから、自分のことを男だと思っている相手には、カミングアウトしない」。「“性同一性障害”とか“自分が女である可能性”を話題に出したくないっていうのもあるし、自分のプライド」もある。「一番自分らしくいられる場所がそこに欲しかった」のだ。

“埋没”と“適応”について：Fさんの場合

Fさんは最近、中学時代の友人に再会してカミングアウトした。その友人と「日常の会

話の中で、性同一性障害に関わる不安や、相手に男性として認識してもらうことができなかったことなどを口に出せた」。その経験から、「“適応”っていう形も自分を楽にしてくれるところがあるのかもしれない」という考えが生まれた。

だが、将来的には「名前を変えて、ホルモン治療して声が低くなって、乳房切除して、自然に何の疑問もなく男だって思われるような外見に」なりたい。「男性と思われるような外見になれば、戸籍に関わるような制度上のことは無理だけど、会社の理解があれば、社会的には男として生きられる」と思う。「性別適合手術はリスクもあるし、怖い。だけど、それをしなきゃ戸籍が変えられない」。だからとりあえずは「ホルモン治療と乳房切除手術を受けてストップして、完全に男性と認識されるような状態を目指す。それで埋没して、絶対にカミングアウトしない。心が男なのだから、当事者としてではなく男として生きるのが普通だと思う」。「“適応”したくないのは、「偏見とか持っている人が怖い」という気持ちがあるからだと言う。「性同一性障害がどんなものなのかを知らない人に自分が GID たと言っても、“普通じゃない”っていう認識が最初にくると思う。いじめに遭うかもしれないし、あんまり近づいてこなくなるかもしれない」。

ただ実際問題として、Fさんは、2つの理由によって「完全には“埋没”できない」状況にある。1つ目は、「まだ、完全に男性として通用するような外見を得られていないこと」、2つ目は、戸籍の名や性別が変更できていないため、「戸籍の性別や名前を偽ることができない公的な書類や証明書を書くときに、それによって自分が“女性”だっていうことがわかってしまう」ことである。

よりよい共生社会に必要なこと：Fさんの場合

性同一性障害当事者と非当事者が互いによりよく生きるには、「当事者が珍しくあっちゃいけない」と感じている。珍しいと、「理解が得られても、好奇心の目で見られちゃう」と考えるからだ。

「性同一性障害の人っていうのは、別に珍しい特殊な存在なわけじゃない。普通に友達として接している人がそういう人かもしれない」ということを知ってもらうため、「正しい認知の拡大によって、性同一性障害を自然なものにすることが必要」だと考えている。ただ、「まだカミングアウトできなくて元の性別のままで生活していたり、すでに“埋没”して隠れていたりする性同一性障害当事者を表に出すっていうのは無理。だから、マスコミが性同一性障害のことを取り上げて、ちゃんとした知識を広めてくれたらいい」。そして、

「メディアで取り上げるときには、当事者と非当事者が手を組んで企画から作りあげた方が、考えが偏らなくていい。非当事者だけでやったら当然偏るだろうし、当事者だけでも非当事者が見たら偏ってて、理解できないと思う。当事者と非当事者の両方の目から見て、それを擦り合わせていくことが一番重要」だと考えている。

“女性”として行った就職活動で内定が採れた会社に対し、男性としての雇用を求めてカミングアウトをした。「直接話した人事の担当者はいい対応をしてくれ、男性として働けそうだった。だが、“会社”という組織での判断では、“女性”として入社することが最良という判断になった」。この経験から、「個人個人っていう単位だけじゃなくて、“社会”としての受け入れ体制が必要」だとも感じるようになった。具体的には、「戸籍の性別が簡単に換えられるようになること」、「ネガティブな意味で使われる性役割の押し付けや、必要のない性別欄が無くなっていくこと」が必要だと語った。

以上のような F さんの、カミングアウト、適応様式、非当事者との共生に関する語りから、Figure7 のような模式図が得られた。

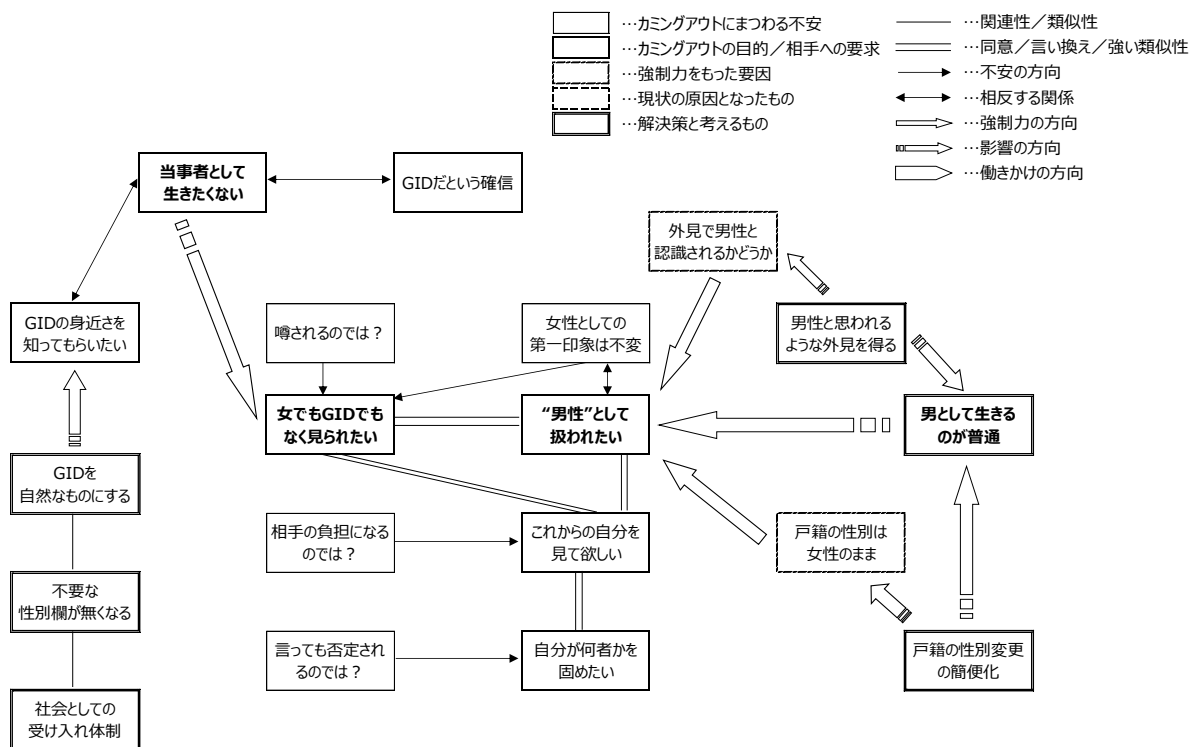


Figure7 F さんの語りから得た模式図

7 Gさんの事例

Gさんについて

面接当時 21 歳，国際色豊かでジェンダーフリーにも積極的な大学に通っている。性同一性障害の診断を受けているが，“性同一性障害当事者”という言葉を使ってカムिंगアウトしたことは一度もないと自負している。自身の性別の属性について，「あえて言えば FTX だけど，男女どちらでもない。性的指向としては両性愛者」と回答した。短髪でメンズファッションを好む中性的な雰囲気だが，相手からは女性と認識されることの方が若干多い。今のところ身体的治療は一切受けていない。名の変更は申し立ての準備を進めているところで，普段は通称名を用いて生活している。

カムिंगアウトにまつわる不安：Gさんの場合

Gさんが一番の不安として挙げたのは，「性同一性障害という枠に収められること」であった。「“性同一性障害”という言葉を用いてカムニングアウトしたときに，異性愛が基本という考えから，“性同一性障害ならば，性自認は男性。性自認が男性なら，恋愛対象は女性”というような考え方をされることがある」。「(自分は) ある意味トランス(性別越境)しているけど，性的指向はヘテロ(異性愛者)じゃない。両性愛者であることは，性同一性障害であることとは次元が違うけど，自分の中では重要なところ。それが“性同一性障害”って言うことで見えなくされるのは，嫌。その言葉によってイメージされることと，自分の感じていることがフィットしない」感覚がある。

親や周囲へのカムニングアウトでは，「相手にどう思われるか」が不安だった。初めてカムニングアウトするようになるまでの間，「様々に葛藤した末にある程度確立されてきた自分なりのアイデンティティを否定され，崩されることが不安の種」であった。

また，「普段は女の子達ばかりの中において，そこには“セクシャルな関係は起こり得ない”っていう前提みたいなものがある。そのなかで“自分はそう(女)じゃない”って言ってしまったら」どうなるかという不安があった。「同性間のスキンシップが過剰な女の子は自分に対してどういうふうを感じるだろうか，それまでの関係性がどう変わってしまうか」などと思った。

Gさんは，目の前に控えている就職活動に大きな不安を感じていた。職場に何か言うとして，「女性ではないので男性として働かせてください」ってというのは，自分の希望には

フィットしない」。「就職活動自体は“女性”として行った方がいいだろうし、その後も男性としての扱いを求めるようなことは自分には合わないと思う」。そこで、「“女性”として採用されて雇用されたとしても、そういう“女性であること”を期待されない職場で働きたい。そのなかで、自分らしくいられればいい」と考えている。

しかしそう考えながらも、「環境が許さないとか、色々な兼ね合いで、うまく（自分らしく）立ち回れなくて、“女性”であることが強調されるようなことになったとき、そのストレスにどれぐらい自分が耐えられるのか、どれぐらい“女性として雇用されていること”に拘束された状態でやっていけるか」を気がかりに思っていた。

カミングアウトの目的：Gさんの場合

自分の中がまだ混乱しているときには、「とりあえず、自分がすごく苦しんでいることを言ってしまった。「特に目的を持っていたわけではなく、自分の混乱の中から助けてもらいたいという気持ち」があった。

自分の中の考えが固まってきてから行ったカミングアウトは、「自身の考えによりフィットした扱い」を求めて行った。「“性同一性障害だと見られたい”とか、病気や障害じゃなくて“トランスジェンダーだと見られたい”とかではなく、“自分がどういうふうに扱われたいか”を伝えるのが目的」で、「“女性”というカテゴリーに自分を含めるのは間違っている、“女性”だという前提で見なすような見方を変えてもらいたい」と伝えている。

以前働いていたアルバイト先ではカミングアウトをしなかった。「“男性として”働きたいわけでもないし、だからといって“女性として”働きたいわけでもない」からだと言う。カミングアウトをしても、「それによって何をどうすることが可能なのかが見えていないし、“男か女か”っていう、相手によって用意された2つの選択肢からうまくどちらかを選べるわけでもなかった」。

“埋没”と“適応”について：Gさんの場合

「“埋没”っていう考え方自体が、自分に合わない」。「埋没”っていう言葉には、“男性として”っていう意味がすでに含まれている。それは、“ジェンダーストレート（身体的性別と性自認が一致している状態）でヘテロ（性的指向が異性愛者）な男性”としてやっていくということ。自分はそういう“普通に埋没できる人”とは違うから、“埋没”することと“自分の考えにフィットした認識をされること”がイコールになるとは限らない」。

別の見方から言えば、「自分の考えと相手の認識がフィットしていればよくて、“男性”として認識されればよいというわけじゃない。カミングアウトしようとしまいと自分の希望通りに生きられる可能性がある」。「相手があんまり男だとか女だとか考えないタイプの人で、自分も男とか女とか意識せずに“自分はこんな感じです”っていうかんじで振る舞っていて、三人称代名詞（“彼”や“彼女”）を使う機会がない。そういう環境であれば、わざわざ言葉でカミングアウトしなくても、自分の希望通りに生活できてしまう」。

同じように、「カミングアウトをしてもしていなくても、自分の考えと相手の認識の間にズレが生じる可能性がある」。「今の社会の中では、基本的に“男性か女性か”っていうのはあると思う。自分から説明しないってことは、自分は“女性”か“男性”，そのどちらかだと思われていることになる。自分の場合は、どちらに思われているにも、自分の考えとズレているように感じる」。

Gさんが「カミングアウトをあえて言葉でする」のは、「カミングアウトすることで、相手の認識と自分の希望するあり方とのズレをなるべく縮めたい」からなのだ。

よりよい共生社会に必要なこと：Gさんの場合

1つ目に、「ジェンダーに関する知識を持つこと」を挙げた。「“男と女がいて、男と女は違うけど、男らしさや女らしさって自由だよ”っていうのを“ジェンダーフリー”と考えている人がいたら、そこには“自分が男だとか女だとかっていう認識は誰しもしっかりあるよね”っていう前提がある。そういう“ジェンダーフリー”の考えであれば、トランスジェンダーの中にも、それに馴染む人と馴染まない人が出てくる」と考えている。Gさんは、「そういう前提のない“本当のジェンダーフリー”についてより多くの知識を持つことが必要だし、そういう知識を持つことは、当事者でない人にとっても、性別に囚われることがもっとなくなるという意味で、メリットがあることじゃないか」と思っている。

2つ目に挙げられたのは、「性同一性障害ですっていう診断書を過剰に用いないこと」であった。「診断書が医療の場だけでなく、ひとつのキーワードとして“免罪符”のように用いられている現状がある。……戸籍の名を変更できるかどうか、学校で自分が望むような制服を着られるかどうか。そういうところでまず診断書が求められる。逆に、診断書がなければ何もしてもらえない。そういう状況が、もう少し緩やかなものになればいい」とのことであった。

最後に、「性同一性障害という枠組みの考え方を見直すこと」を挙げ、「“性同一性障害”

ってというのは、基本的に、“男性か女性か”ってという壁を残している考え方の枠組みだと思う」と述べた。同じ“性同一性障害の当事者”でも、中核群と呼ばれるような医療のレーンに乗れる典型例（性別適合手術まで求めるトランスセクシュアルを指す）とそうでない人とは、得られているものが違う」と感じている。「“性同一性障害”というモデルの括り方を抜本的に見直すか、あるいは、“性同一性障害”という括りをどのように発展的に捉えていけるのかについて考えていかなければならない」との見解を持っている。

以上のような G さんの、カミングアウト、適応様式、非当事者との共生に関する語りから、Figure8 のような模式図が得られた。

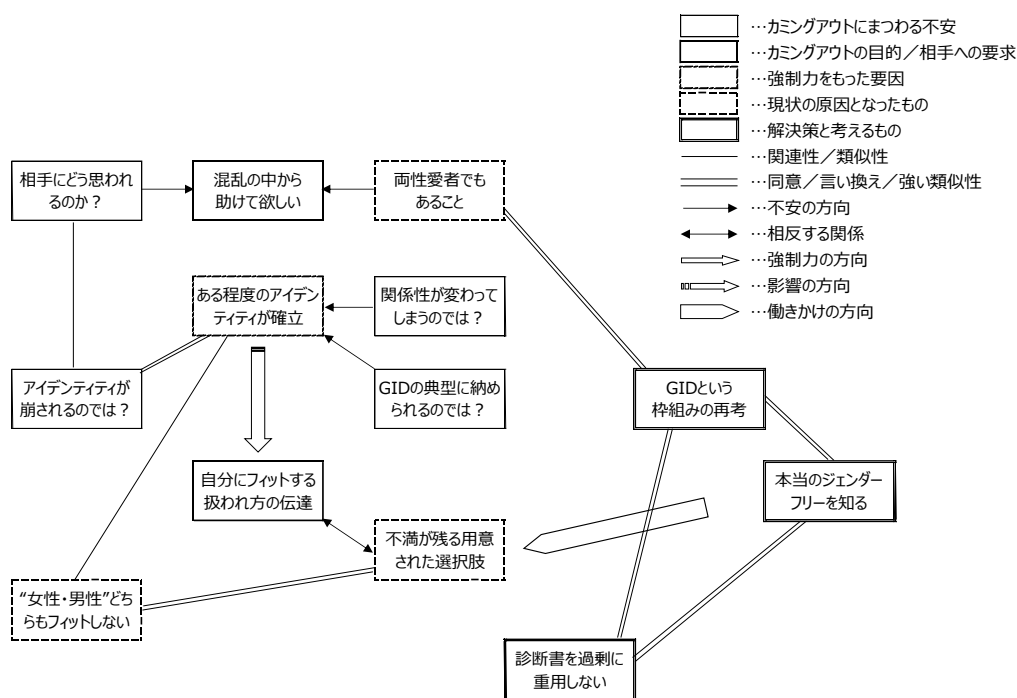


Figure8 G さんの語りから得た模式図

8 H さんの事例

H さんについて

面接当時 31 歳であった。自身で会社を経営しており、若い世代の性同一性障害当事者

に、もっと雇用機会を提供したいと考えている。性別の属性を FTMTS と自認している。性同一性障害の診断を得ており、ホルモン治療や乳房切除術、内性器摘出手術を済ませている。戸籍の名の変更は済んでいるが、性別変更については、要件を満たすために必要な手順が残っている状態にある。短髪で大柄なこともあり、外見的には男性にしか見えない。戸籍の性別変更が済んでいないため、戸籍上の婚姻関係は結べていないが、事実婚状態にある女性パートナーがいる。

カミングアウトにまつわる不安：Hさんの場合

友人へのカミングアウトは、「仲良くしている人だけにした」と言う。「仲良くしているような人だったら、面白おかしく冗談とかを言うくらいはあっても、否定するようなことはないだろうと思った」。「否定してくるような人とは元々仲良くしてなかったから、そもそもカミングアウトしなかった。もしカミングアウトした相手に否定されたとしても、自分は自分であって人に認めてもらうために生きているわけではないから、そういうのは気にしなくてもいいやって思うようにした」とのことだった。

不安を感じたのは、「噂の対象になったり、偏見の目で見られたりすること」についてだった。たとえば、「何かもめ事が起こった際に“性同一（障害）の女だから”と言われてたり、経営している会社の従業員に“こんな人の下で働くのは嫌だ””と言われてたりすることだ。

「偏見が自分に対して向けられるのならまだしも、家族や配偶者までもが偏見の目に曝され、自分の問題に巻き込んでしまうこと」にも不安を感じている。「実際に、一緒に引っ越してきたパートナーは、近所からの偏見に曝されたことで、精神的に追い詰められてしまっている」。家族へのカミングアウトでは、「きょうだいよりも両親へのカミングアウトが心配だった。親のショックを考えてなかなか言い出せなかった。……でも、パートナーと結婚式を挙げようってなったときに、隠しておくわけにはいかないと思った。親はいつまでも生きているわけではないし、最期まで隠して亡くなってから後悔はしたくなかったから、それで話した」と言う。

自分のことを“普通の男性”と思って恋人関係になった相手には、「自分が性同一性障害で、身体的性別という意味では女性として生まれたことをカミングアウトしたら、それきりで関係が終わってしまったり、結婚を断られたりするかもしれない」という不安も感じたことがあった。

カミングアウトの目的：Hさんの場合

Hさんが目的としたのは、「男性として扱われること」だった。「(自分の性自認が男性であることを)隠さずに自分の生き方を認めてもらいたい」という気持ちがあった。友人に対しては、包み隠さずカミングアウトすることで「より分かり合い、もっと仲良くなりたいたい」という気持ちがあった。

“埋没”と“適応”について：Hさんの場合

Hさんは「“埋没”して、男性としての生活を得たいという気持ちが非常に強い」。「すごく仲良くなった人、もしくは同じ性同一性障害当事者の友だち以外には、“生まれながらの男性”に近い存在として認識されたい」とのことで、「性別が女だっていうことは言いたくない」と感じている。それで「“嘘ついてる”とか、“隠してる”とか言われたこともあるけど、それは“男性”として生きていく上では仕方ない」と思っている。逆に、「どうしても社会的に言わなきゃ駄目だっていうことがあるし、困ることも出てくる。そういうときには後でのごたごたした問題が起きるよりはとって、いろんなことを言われるのを覚悟でカミングアウトする方を選択」することになっている。

よりよい共生社会に必要なこと：Hさんの場合

社会に求めることとして、「戸籍の性別変更手続きがもっと簡略化されること」、「公的機関や医療現場で人の名前を呼ぶとき、改名前の当事者を本名で呼び出さないようにするとか、そういう工夫と配慮によって、社会に強制されるカミングアウトが減っていくこと」を挙げた。「性別よりもそれ以前の“人”として関わる」ようにしてもらいたいという気持ちもあるとのことだった。

性同一性障害当事者、なかでも特に、若い世代の当事者に、「今よりもずっとずっと辛くて、生活の糧を得ることも困難で、いじめの格好の標的にされてしまうような、そういう厳しい過去が性同一性障害にはあることを知ってもらいたい」と感じている。そういう歴史を知ることによって、「先人の当事者達は、努力して、苦勞して動いていった。そのおかげで今は比較的楽に生きられるようになったってことを理解してもらいたい。ただただ、“俺は男なんだ”って言っているだけの若い当事者を教育して、当事者側の意識を当事者自身で変えていかないといけない」と考えている。

以上のような H さんの、カミングアウト、適応様式、非当事者との共生に関する語りから、Figure9 のような模式図が得られた。

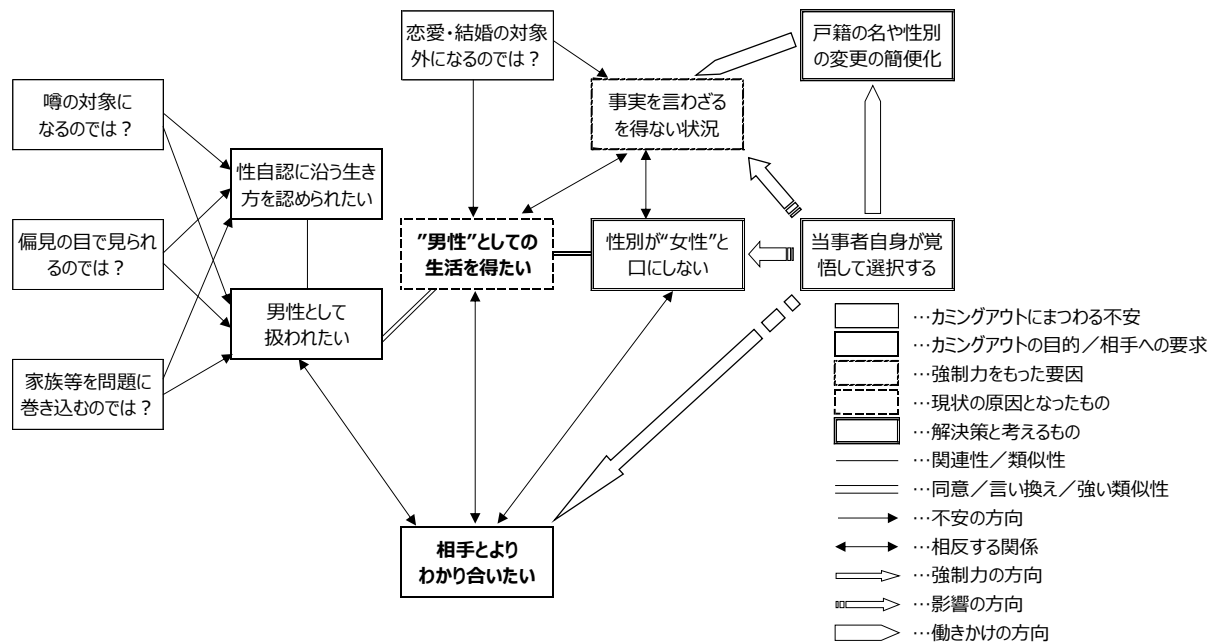


Figure9 H さんの語りから得た模式図

9 I さんの事例

I さんについて

面接当時 20 代後半、公務員として役所に勤めている。数年前、恋人関係にあった女性から別れを告げられた際、なかばやけくそで職場の男性と婚姻関係を結び、今に至る。自身の性別の属性を「FTM?」と答えた。FTM と自認はしているが、男性と婚姻関係にある現状、

婚家で長男の立場にあるパートナーのために子どもを作った方がいいだろうかと悩んでいる心境から、自分は FTM の資格がないのかもしれないという気持ちがあり、自信を持って FTM と断言できないと感じている。結婚してしまったことは、I さんのなかで“割り切

れない事実”となっている。性同一性障害の診断を得ており、20歳頃から面接実施の前年までは経口で男性ホルモンを摂取していた。現在は、職場や親戚・縁者のなかでのパートナーの立場や心情を考えて中断しているが、再開したい気持ちもある。声はホルモン摂取によって低くなったままで、ホルモン摂取の中断から若干薄くなりはしたが、男性のように太い顎髭が生えてくる。肌の質や顔つき、体つきなどは女性の頃に戻りつつある。現在、初対面の人からは男っぽい女性と思われることが多い。

カミングアウトにまつわる不安：Iさんの場合

一番は、「偏見や相手に拒否されること」を不安に思った。友人に対しては、「レズビアンと思われたりして、正しく自分のことを理解してもらえない……それ以前に、“性”に関する事で何か人と違うことがあると言った時点で受け入れてもらえないんじゃないか」という不安になった。「今まで築いてきた関係性が崩れて変化してしまうこと」に懸念を抱き、「いっそカミングアウトせずに今のままでいた方がいいんじゃないか」とも考えた。

Iさんは、職場には何もカミングアウトしないまま、男性ホルモンの摂取を始めた。次第に「声が低くなって、髭とかもちよろちよろと生えてきた。だけど、それを単なる個人差なんだっていうことで留めておいた。自分から、“声が低いんですよ”とか、“ここ、なんか太い毛が生えてきちゃうんですよ”って言うておけば、“そういう体質なんだね”ってことで収めていられる」と言う。ところが同じ状況でも、それを「カミングアウトしてしまうと、“あ、だからそうなんだね”って結び付けられてしまう。“こういう人もいる”ってすんなり受け止められていることが、その瞬間から拒否の対象になってしまう。そんな不安」を感じているとのことだった。

Iさんは現在、戸籍上婚姻関係にある男性と暮らしている。「相手方の家族や親戚にとって自分は“嫁”という認識。普通のお嫁さんをもらったと思っていたところに、(Iさんが性同一性障害であることを知った)他の人から“なんか変なのを嫁にもらって”なんて言われたら可哀想」という思いがある。「今の“嫁”としての立場があるなか、不用意に当事者性をカミングアウトしてはいけないだろう」と、強く抵抗感を覚えている。

カミングアウトの目的：Iさんの場合

友人へのカミングアウトは、「何かの話をしているときに、流れで言うっていう感じ」で、特に目的はなかった。ふり返ってみれば、「自分の素のままを言うことによって、自分のな

かにあるもやもやははっきりさせたかったのかもしれない」。話の流れと言っても、カミングアウトするのは、「この人にはわかってもらえそうだな、言いたいな、っていう感触」を感じられるような友人に限っている。「自分が隠している部分を言えるかどうか」がカミングアウトするかしないかの判断基準になっているとのことだった。「自分の場合、(女性として結婚しているということもあって)現状を相手に見せることしかできない。(こういう現状がある以上は)相手が感じることをどうこう言ったり求めたりすることはできないし、相手に受け入れてもらいたいという気持ちもない」と語った。

“埋没”と“適応”について：Iさんの場合

「(男性と)結婚していること、それによって生じているしがらみがなかったなら、男性として“埋没”したい。男性として生活できるのであれば、カミングアウトする意味がなくなる」とは考えている。しかし、男性と婚姻関係を結んでいるIさんにとって、「“埋没”っていう考えは、今の状況には合わない。(結婚していることを知っているような)身近な人の前では“埋没”はできない」現実を感じている。「男性と結婚したからには、“長男の嫁の仕事”として、子どもを産まないといけない」という責任感、義務感もある。そのため、「迷いや躊躇い、本当の希望」がないとは言えないが、自身に許されていることは、「“結婚”っていうものを維持しつつ、家庭を維持しつつ、その上で自分のやりたいようにやる」ことだと考えている。

Iさんが言うには、「それは、性同一性障害当事者として“適応”することとも少し違う」。「今まで、性同一性障害なんだっていうことを何もカミングアウトせずにやってこられた時期がある。だから、それをこのまま続けることもできるんじゃないか」と思う自分もいる。「自分が“こうしたい”っていうことを通そうとすると、カミングアウトして相手の理解を得て、っていうことになる。相手に気を遣ってもらうことになって、色んな人の気持ちなりなんなりを煩わせる可能性がある」。現状でよいと納得しているわけではなく、「相手を煩わせたくないという気持ち……それでカミングアウトしていない」現状があるということであった。

よりよい共生社会に必要なこと：Iさんの場合

「性同一性障害の認知を拡大していくために、当事者が社会に対して発信していくこと」が必要だと考えている。発信するのは、「社会的立場が確立している当事者」や、「政治活

動をしている当事者」, そのほか「社会の中で“社会的にきちんと生きている”という前提を持っている当事者」である方がよいのではないかと考えている。その理由として, 社会的立場がある程度確立された当事者が「“私がこう(性同一性障害の当事者)ですよ”という形でカミングアウトする……そうすると相手にわかってもらいやすいし, 納得してもらいやすいんじゃないか」という見解を述べた。

認知が拡大していけば, 「体と違う性の方になりたいと思っけていても, その人は別に変な人ではない。普通の人と同じように生活してるんだ, っていうことを広く知ってもらう」ことができると感じている。その結果, 「“性同一性障害”っていうものが“特別なもの”っていうのじゃなくて, “当たり前”になる。当事者らしき人が周囲にいたとしても, “あの人はもしかしたら, 精神的なもの(性自認と身体的性別との食い違い)があるのかもしれない。だからああいう格好しているんだな”って, そういうふうには察して自然に流してくれるくらいになれば楽になる」だろうと期待を語った。

「男女の別を区別しないといけないこともある。だけど, なくせるものはなくしてもいい」とも考えている。「学校の制服なんかも, 一概に“なくしなさい”って訴える必要はない。そうじゃなくて, 選べる自由……“男・女”のどっちかいいか選べる。身体的性別にかかわらず, “男・女”どっちでも選べるような, 自由に選択できる余地があれば」いいのではないかと考えている。

以上のような I さんの, カミングアウト, 適応様式, 非当事者との共生に関する語りから, Figure10 のような模式図が得られた。

10 Jさんの事例

Jさんについて

面接当時 20 代中盤, グラフィックデザインを学ぶため, 大学に通い直している。性別属性を FTMTS と自認している。性同一性障害の診断を得ており, ホルモン療法, 乳房切除術, 性別適合手術を経て, 戸籍の名と性別の変更を済ませている。初対面の人から女性と認識されることは全くない。

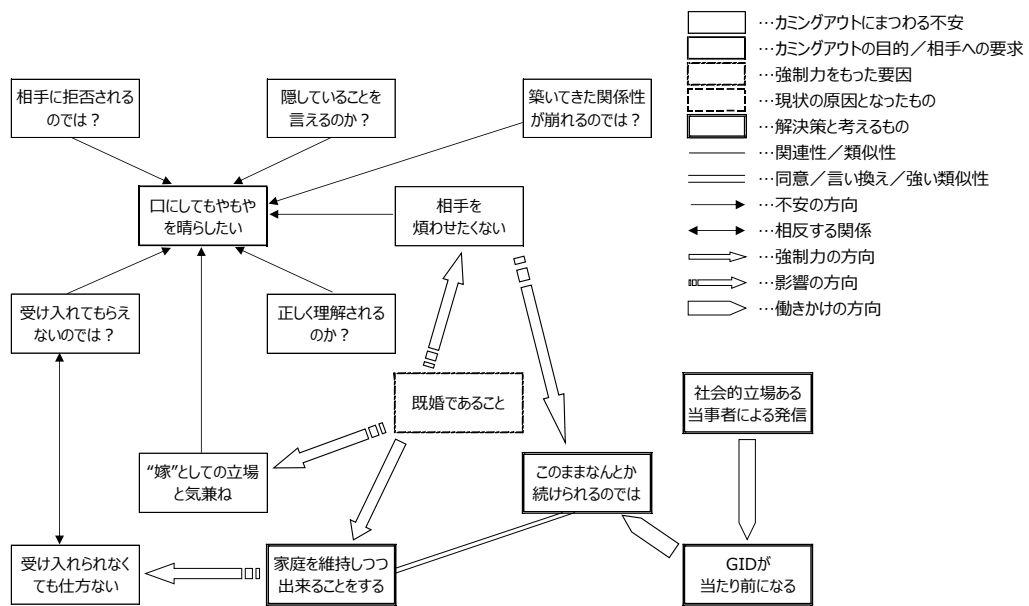


Figure10 Iさんの語りから得た模式図

カミングアウトにまつわる不安：Jさんの場合

初めてカミングアウトした際、「人に言うっていうのが初めてだったから相手がどうい
う反応をするのか、そういう実際のところが想像もつかなかったし、何を言われるかわか
らない」という、先行きのわからない漠然とした不安を感じた。

カミングアウトした「相手から拒絶されたり、誤解されたり、避けられたり、気持ち悪
いと思われたり、変な目で見られたり、否定的に見られたりするかもしれない」という懸
念もあった。「相手に気を遣わせてしまうことや、噂になってしまうこと」も不安だった。

「同性愛と混同されるんじゃないか」、「水商売の“ニューハーフ”とか“オナベ”とか、
すぐにそういう連想されるんじゃないか」というような、自分の性自認が男性であるとい
うことが「正しく認識されない」ことを心配に思っていた。また、相手には「(元々の体の
造りは男性なのにホルモン異常で体が女性化してしまう) 内分泌の異常みたいに、元々男
であったというかんじで認識」されたいという気持ちがあり、「“女から男”っていうよう
な、性別を移行するというようなニュアンスで強く認識されたら嫌だ」との思いがあった。

カミングアウトの目的：Jさんの場合

初めてカミングアウトする前は、「性別に違和感があることや、自分のことを男性だと思

っていることは、ずっと言わないで墓まで持っていこうと思っていた」。だが、ついに「耐え切れなくなって、噴出するみたいな感じで」話すことになった。「ただ聞いてもらいたいっていう気持ちもあったし、自分以外の意見を聞いてアドバイスをもらいたかった…… “自分は（自分の性別について）こう感じていて、（女性として生き続けることに）こういう限界を感じていて、こうしたいんだけど、それについてどう思うか？” というようなカミングアウト」になった。「自分はやっぱりこうしたいんだっていうことがはっきりしてから、女性として対応されることが嫌で居心地が悪かった……相手の中にある自分に対する“女性”っていう性別の認識を“男性”という認識に変えたいという気持ち」でカミングアウトをするようになった。

家族には、「性同一性障害なんだってことで“自分”が定まって、治療について具体的に考えるようになってから」カミングアウトをした。「今こういうふうに感じていて、こういうふうにしていこうと思っていて、将来的にはこういうふうになりたいんだってことを伝えたかった。知ってもらいたかった」からで、「具体的治療に進むのは、親から同意を得てからにしたい」という気持ちがあった。

“埋没”と“適応”について：Jさんの場合

カミングアウトをすれば、「それぞれの相手が持つ、“認識”っていう眼鏡を通して」見られることになる。それによって、「普通の男性として要求されることが減る」かもしれない。だから、「“埋没”というか、性同一性障害のことをなるべく考えないで、忘れて、別のことにエネルギーを使いたい。普通の男性として生活していきたい」と考えている。これまで「普通の男性のように（生まれたときから男性として）生きてきたわけではないから、男性としての経験が足りてない。一般に男性に対して求められることを求めてもらって、その要求に馴染んでいった方が今後“男性”として生きていくためにもいい」と考えている。

一方で、自身が「性同一性障害の当事者だってことを完全に言わないことにすると、たとえば、誰か女性とお付き合いするときとか、女性と結婚しようとするときに相手の家族や親戚にどう対応するかをどうするかっていう課題はあると思う。そういう、気になることはある」とも語った。

当事者のなかには、「過去を隠して生きるのはどうなんだって言う人もいるのかもしれない。だけど、個人的には、（罪悪感や辛さは）全然感じていない」。ただ、「“埋没”してい

る当事者ばかりじゃなくて、カミングアウトして活動している人がいて、そのおかげで（性同一性障害に関する）理解が深まるっていうところもある。そこは少し矛盾していて、ちょっと難しい」と感じている。ある人が身近な存在として性同一性障害当事者に出会う機会は多くない。カミングアウトした相手にとって自分が唯一の事例になる可能性も高くなることから、「性同一性障害のひとつの代表として、自分のことを見られてしまう……自分の言動がほかの当事者や性同一性障害っていうものに対するイメージに与える影響も大きくなる。より自分の行動も気をつけないといけなくなる。面倒なことが多くなって、自由じゃなくなる。肩身が狭くなる」感覚もあるとのことだった。

よりよい共生社会に必要なこと：Jさんの場合

性同一性障害当事者がよりよく生きるためには、「医療の門戸が広がって、もっと医療機関にアクセスしやすくなること」が大事だと考えている。また、多くの当事者が、「小学校、中学校、高校と成長していくなかで色々な問題を抱えている」現状があることを指摘し、「学校での対応はかなり大きい問題になると思う。学校で教育する側にいる人間が、性同一性障害について知ろうとしたり対応を考えたりすることが大事」という考えを述べた。

「当事者の人同士が話す場所っていうのをあまり知らないんで、(当事者同士の馴れ合いになってしまうという意味で) そういう場がいいのかはわからないけど、そういう場で居心地がいいと感じられるところがあればいい」と、ここ最近は感じるようになった。

広く一般の世間については、「(バラエティ番組で笑いのネタにされるような) かえって誤解を招きかねない迷惑な声の上げ方もあるけど、(当事者の辛さや成長を真摯に描くような) いい番組で取り上げられていくってのはいいことだと思う。そういう機会が増えていけばいい」と思っている。「ただ、性同一性障害当事者のあり方は多様だから、“性同一性障害”っていう名前ですべての当事者を十把一絡げに見られてしまうのは心配。あんまり広く世間に知られちゃうことで“埋没”しにくくなる可能性もある」と述べ、そんなふう考えてることはあるけど、答えはない」と率直に語った。

以上のようなJさんの、カミングアウト、適応様式、非当事者との共生に関する語りから、Figure11のような模式図が得られた。

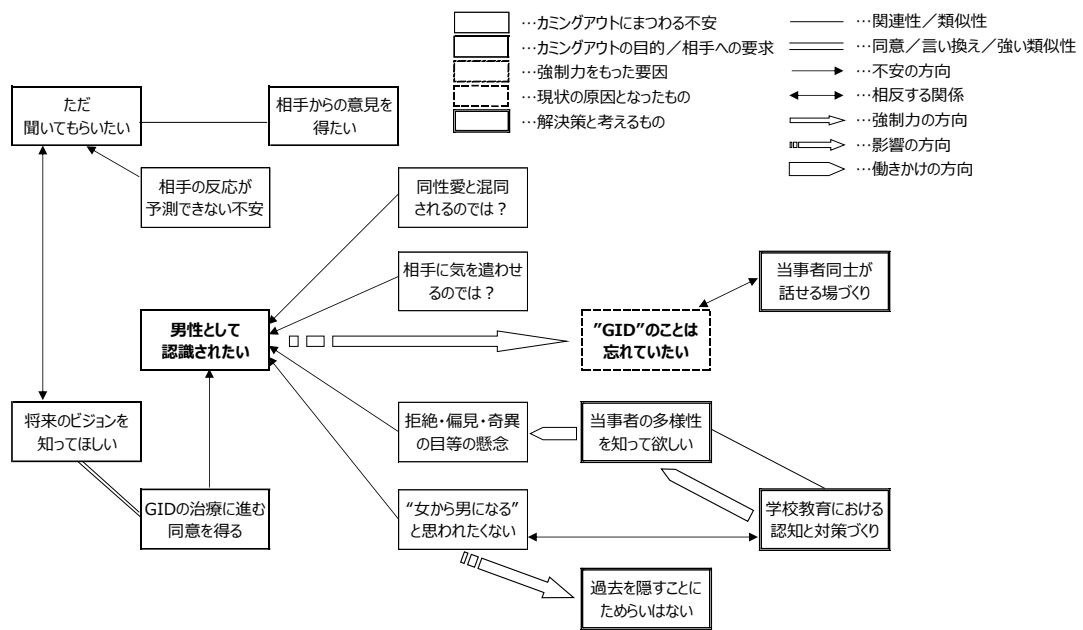


Figure11 Jさんの語りから得た模式図

11 Kさんの事例

Kさんについて

面接当時 20 代前半で、短期大学に在学している。性別の属性は FTM と自認している。同年代の男性と比べると背は低いものの、がたいはどっしりとしている。服装によっては女性と見られることもあるが、メンズファッションをまとっている時には、問題なく男子トイレに入れる。性同一性障害の診断を得ており、これから身体的治療の進め方を検討していく段階にある。戸籍の名の変更は済んでいない。日常生活のほとんどは、一般に男性にしか用いられないような、男性的な通称名を使用して過ごしている。

カミングアウトにまつわる不安：Kさんの場合

親へのカミングアウトでは、不安とこわさを一緒に感じた。「否定されるっていうか、親独特の“認めたくない”っていう反応をされるかもしれない、“あんた何考えてんの？”って言われるかもしれない」と感じた。こわさがともなう不安は、親に対してのみ抱かれた。

中学生時代の友人にカミングアウトした際には、「噂が広がるっていうか、白い目で見られ

るといふか、“あいつ、あれなんだよ” っていう目で見られるのが嫌だな」と思った。その後は次第に「拒否されるのは当たり前、言って理解してもらえなかったら仕方ない」とも思うようになり、不安感は減退していった。高校時代は、「中学でソフトボールをやって、女子高に“女子硬式”で引っ張ってもらってた。だから、部活を辞めるわけにはいかないし、ずっと、ちゃんとは言えない」状況にあった。

最近では就職活動に強い不安を感じており、「“女性”として就活して、それで就職できたとしても、採用されてからカミングアウトしたら“やっぱり不採用です”って言われちゃうのかな。先にカミングアウトしたら就職できないかもしれない」と懸念を語った。

カミングアウトの目的：Kさんの場合

女子高校1年生の時、「性別に関する悩みを一人で抱えながら、女子高の中で女の子としていることに耐えられなくて」、中学時代の友人相手に、初めてのカミングアウトをした。その後は徐々に、高校の部活の友人にもカミングアウトするようになった。「高校では付き合い合っている彼女がいて、将来のこととかを2人で考えるのに耐えられなくなって、……保健室の先生ならかんとかしてくれんと思って、彼女と2人で“付き合い合っているんです”っていう話」をしに行った。そのときには、「もう耐えられない、助けて欲しい、っていう明確な意志みたいなもの」があった。「中学時代の親友とかそのほかの中高の友達には、助けて欲しいって意志はそれほど明確じゃなかったけど、“苦しいから言う”っていうのは全部に共通」していたと言う。

Kさんにとって、“トイレ”は大きな問題であった。学校では、「女子高だから女子トイレしかない。女子トイレに入るのが苦痛で車椅子用のトイレに入ってた」。校外で「高校の友達と遊ぶとき、私服で男の格好をしているのに女子トイレに入らないといけないのも、本当に嫌」だった。「男性として扱って欲しかった……気を遣わないで男子トイレに入れるような方が自分的にストレスを溜めなくて済む。そういうふうに見えるように」カミングアウトしておくという側面もあった。

親に初めてカミングアウトしたときは、「(女の子っぽい)下の名前で呼ばれるのが嫌で、息子として見てもらいたいという気持ち」があった。

“埋没”と“適応”について：Kさんの場合

“埋没”には、「“本当は女なんですよ”と言わずに済む、軽蔑の目で見られなくて済む、

というメリットがある」と言う。「性同一性障害であることを言いたくないという気持ちもある。最初から男性として通用していれば、それを一々言う必要はないし、その方が精神的に楽」だと考えている。

ただ、今は「戸籍も変わっていないし、社会的には“埋没”できない部分がある。もし、戸籍とかが変わっていないまま男性として働くとしたら、騙しているっていう気持ちが強くなってしまう」だろうと思っている。特に「就職とかは、自分のことを信用して雇う人事の人いるわけだし、その上にはその人のことを評価する上司もいる」ため、相手に迷惑がかかるだろうと懸念を述べた。自分の気持ちとしても、「今のままで“埋没”するのは相手を騙すようで苦しい」と感じている。

「女性であることを隠して男子トイレに入るとか、そういうところで“埋没”することについては悪いとは思わない」。だが、今の自分なら、「カミングアウトして、それで仕事に就ければいい」。そうすれば、「戸籍の性別を隠さなくて済むし、そこから男として扱ってもらえることができれば、一番、理想的と言えれば理想的。自分も苦しくない」と語った。

よりよい共生社会に必要なこと：Kさんの場合

性同一性障害の非当事者から「“変わっている”，“変な人”と思われて、好奇の目で見られるのが嫌」だと感じている。「自分らは男として生きたいだけで、本当の性で生きたいだけで、たまたま体が違って生まれてきちゃっただけ。普通の人間で、みんなとすごく違う特別な存在っていうわけじゃない。社会のなかに当たり前にあるものなんだっていう目で」見て欲しいとのことだった。そのために大事だと考えることとして、「当事者がメディアに出たり、政治家になったりして、色んな人にわかりやすく伝えること……法律を変えるだけではできないような、世間一般の色んな人が公共の場で大人として差別的な言葉を使わないような、使う言葉に対して相手の立場に立って配慮するような、そういう形で認知が拡大されていくこと」を挙げた。

また、「自分もそうだから、男に見られたいのはわかる」と心情を汲みつつも、「無理に男の格好をしていると、周囲から浮いて逆に目に付く。完璧に“男”じゃなくても、ちょっとボーイッシュなかんじとかで乗り越えられたりする。自分に合ったペースで自分に合った格好を本人が考えるべき」で、「“男性らしさ”を強調しないこと」が大事だと語った。

社会環境に求めることとして、「男女の区別が必要ない場面では性別を聞かないで欲しい」と言い、「トイレとかも男女ではっきりと分かれているけど、車椅子でも使えるような

男女共用のトイレがもっと増えればいい」との見解を述べた。戸籍の名や性別を変更していない当事者には、その人の戸籍上の名や性別が他者に「わからないような配慮が必要」で、それによって、「病院でフルネームで呼び出されたり、免許証を提示して質問されたり、そういうときにやりとりを聞いた周囲の人たちから、驚きや偏見、好奇の目で見られてしまう……それがなくなればいい」と考えている。

以上のような K さんの、カミングアウト、適応様式、非当事者との共生に関する考えは、Figure12 のように模式化された。

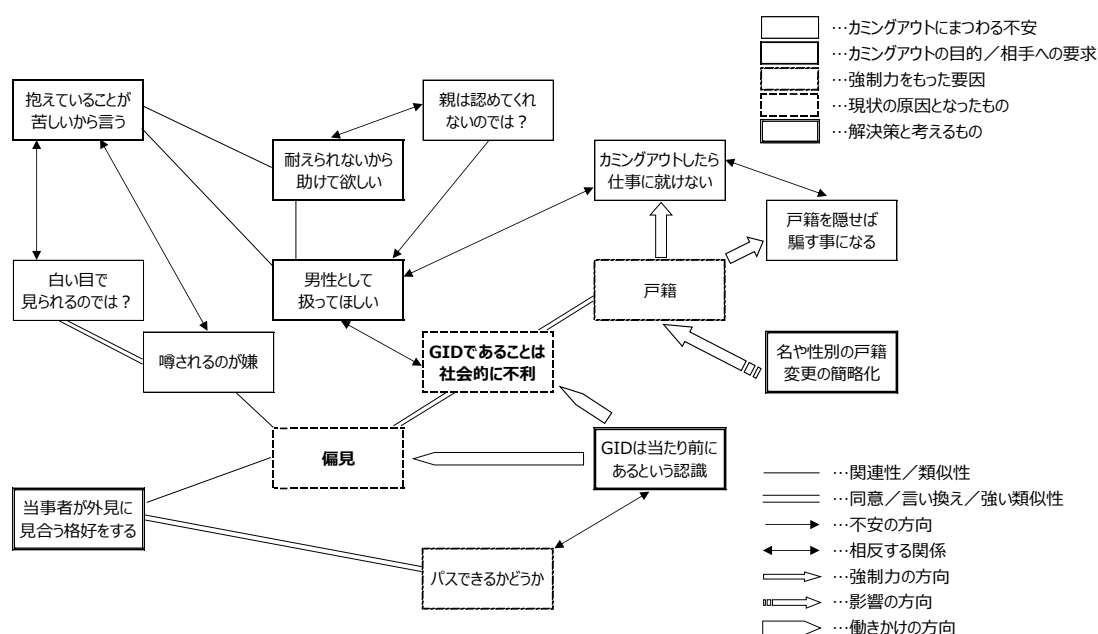


Figure12 K さんの語りから得た模式図

12 L さんの事例

L さんについて

面接当時 20 代前半，大学生 3 年生で，セクシャルマイノリティの社会的啓発等を行う自助的なサークルに参加している。トランスジェンダーを自認しており，性別の属性を問うた際には，“FTM ではなく FT？（はてな）”と答えた。性別違和感があり，性同一性障害の診断を得ようと思えばもらえるだろうが，あえて請求する必要はないのでしていない

と明言した。身体的治療は一切受けていない。身長は女性の平均よりもやや低めな印象だが、体つきは筋肉質で、がっしりとしている。当人も、女性と認識されないことが多いと感じている。

カミングアウトにまつわる不安：Lさんの場合

日本のセクシャルマイノリティが置かれている「社会状況がよくわかっていなかった頃には、漠然と“殴られちゃったら”とか、“(仕事に就けなくて) ご飯が食べられなくなったら”とか、……人からも社会からも拒絶されて自分の人生がボロボロになるんじゃないか」という不安を感じていた。

自分がカミングアウトすることで、「相手に、自分と同じような負担を負わせてしまう」ことも不安だった。「自分が秘密だと思っていなくても、受け取った相手の方ではほかの人には口外してはいけない秘密みたいなものを共有してしまったと感じて、その秘密を抱え込んでしまうんじゃないか」と思ったと言う。これまでの経験のなかで、「実際にそういう心境になってしまった相手を目や耳にしたときには、複雑な気持ち」になったとも語った。

日本の社会状況をある程度知るようになってからは、「“性同一性障害”という概念の枠組みに当てはめて自分のことを捉えられることや、自分の言動の理由を性別に帰属されること自体に」、不安を感じるようになった。

Lさんは、カミングアウトする際、「自分のことを話して理解してもらうためのものではなく、相手とは“じゃあ、あなたはどのようにして自分のことを男性(女性)だと思っているの?”ということも一緒に話し合いたい」と希望している。だが、「カミングアウト元である自分だけが“特別な何かを持っている人”だと思われて自分が特別視されてしまう」ことが少なくない。「一緒に話せないのが不安だし、そうやって自分の考えとか相手の考えへの指摘とかを言い続けていることで、“クレーマー”と思われて疎まれてしまうんじゃないか」という不安も感じるようになってきた。

カミングアウトの目的：Lさんの場合

Lさんが行うカミングアウトは「特に何か目的を持っているわけではなくて、相手に面と向かって“バーン”と宣言する形はとらない」と言う。Lさんの周囲の者がLさんの当事者性を知るきっかけになるのは、「自分が自分のことを状況説明している言葉とか、例えば新宿二丁目に行って何をした、というようなことを小耳に挟んだ相手が、雰囲気を感じ

て“ああ、そうなんだ”って納得する」ことで、「そうやって小出しにした自分の言葉とかが発端になって、あとは一方的に波及的に広がっていく」だろうと考えており、実際にそのような体験もしている。Lさんはこうした周知のさせ方を「戦略的なし崩し」と呼んだ。

このような「“戦略的なし崩し”のカミングアウトをやっていると、相手に勝手に誤解されて、間違った噂が広がってしまうこともある」。その場合、「もし誤解している相手が、自分が本当に友達関係を作りたいような相手だったら、（正しく自分のことをわかってもらうために）言い続けると思う。だけど、そうじゃない相手には“勝手にしてろ”って思う。面倒で、誤解を正すエネルギーも湧かない」とのことだった。

“埋没”と“適応”について：Lさんの場合

“埋没”と“適応”という観点を提示すると、「“埋没か適応か”っていう選択は、一見すると当事者に自己決定の余地があるように聞こえるけど、結局、自己決定なんかじゃない。結局社会状況がそうさせているわけで、埋没させているのも社会だし、カミングアウトさせているのも社会だと思う。そもそも、そのどちらかを選択せざるを得ない状況にさせられた結果、社会に強制された選択肢の中から選択しているに過ぎない」と語った。

「カミングアウトするかしないかは、“埋没”と“適応”を選択していく過程（で決めること）ではなくて、自分自身が“相手とどこまで人間関係を求めているか”」で決めることだというのが、Lさんの考えである。さらに加えて、「相手に“（あなたが私だと思っている私は、私が感じている私とは）違うんだ”って言わなければ、相手に（本来は自己決定されるべき領域まで）踏み込まれたままで、自分が思っているように相手に認識されることはできない。相手に対して“違うんだ”って言い続けることにどのくらいエネルギーを使えるか、自分を正しく知ってもらうために相手にどこまで求めていくかによって」、カミングアウトするかしないかを決めていくものではないかと考えを述べた。

Lさん自身は、「自分はそういうエネルギーを使うのが面倒くさい……自分のしたいことはする。自分のしたくないことはしない」と言い、「でも、それとカミングアウトは一致しない」と自己矛盾を自ら指摘した。その例として、「男子ロッカーを使いたかったら使っちゃう。だけど、そのために男子ロッカーを使う人みんなにカミングアウトすることはない。何も言わずに使って、それを見た人が勝手に察してくれればいい」との考えを示した。

Lさんには、“埋没”したいと考えを持っていた過去もある。その頃、「何かの会員登録（の申し込み）を電話で申請した」ことがあり、自分が女性であることを悟られないよう

に、「戸籍とは違う男性的な名前をオペレーターに伝えた。その後で先方から折り返しの電話がかかってきたけど、自分がなんていう名前で登録したのか忘れてしまって、(自分の名前がわからないことで本人確認がとれない上に不信に思われて)逆に面倒なことになった」とう事態を経験した。こうした経験などもあって、「所謂“埋没”っていうのは、そんなに楽な状態だとは思わない」とのことだった。また、「“女性”だと誤解されているだけでもう何もしたくない」と言い、「普通の人は何もしなくてもいいのに、どうして(自分が“男性”であるために)何かしなきゃいけないんだろう」と、ため息交じりに語った。

よりよい共生社会に必要なこと：Lさんの場合

共生のためには、「誰かが“正しさ”を作ってそれを認め合うんじゃないでなくて、それぞれが本当にしたいことをやって、守りたいことを守ればいい」と言い、「その人がなんであるかということは相手の意見や許可に影響されない自己決定の問題だから、相手の中にある自分へのイメージや、勝手な約束事なんかは無視して生きていけばいい」と語った。

こうした生き方が実現されていくには、誰もが「相手の自己決定を尊重するような社会にならなければならない。どんなことも本人の自己決定の問題だから、そういうところにあれこれ言っちゃいけないっていう考えを、みんなが共有していればいい」と考えている。また、「何かを特別なものだと線引きしないような風潮」も必要となる。「“私たちトランス(ジェンダー)はこう”、“僕たちはこう”って言っているとき、“僕たち”と“私たち”って分けられている。そうすると、“自分の近くにいない人たちだからいいや”ってことになる。たとえ近くにいても、“自分とは違う遠い世界の人達だ”ってことになる。そういう日常にあるようなひとつひとつ線引きに意見していく必要がある」と述べた。

各個の自己決定が互いに尊重されるような社会に向けて、「それぞれが自分を大事にして、お互いがお互いを大事にし合うとしたら、性別をどっちもOKにするだとか、男女別じゃないトイレを作るだとか、そういうことをやっていかないといけない。だけど、すべてのトイレから男女別をなくすようなことには限界があるし、それによってすべてのトランスジェンダーが居心地よくなるとも限らない」。と考えている。たとえば、「学校ではそうできなくても、学校以外のシェルターのような場所で同性代の当事者同士が素直に過ごして交流できるような居場所を作る。それでたいぶ救われるだろうし、そこにいることでそれぞれが色々な気づきを得られると思う」と、構想を語った。

以上のような L さんの、カミングアウト、適応様式、非当事者との共生に関する考えは、Figure13 のように模式化された。

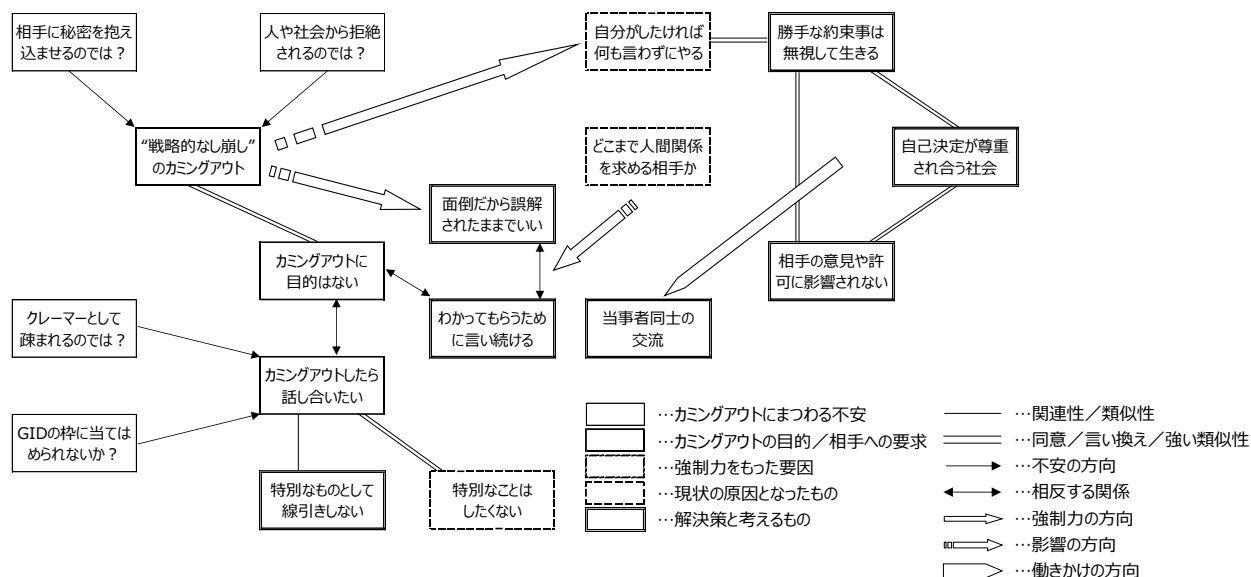


Figure13 L さんの語りから得た模式図

13 M さんの事例

M さんについて

面接当時 30 代前半、フリーターとして生活資金を得ながら、性同一性障害をモチーフとした舞台を性同一性障害当事者等とともに制作・上演している劇団にて、舞台俳優活動を行っている。性別の属性を FTMTS と自認している。性同一性障害の診断を得ており、ホルモン治療を受けている。乳房切除術と戸籍の名の変更は済んでいるが、資金調達が困難であること等により、性別適合手術は受けていない。戸籍の性別も変更されていない。日常生活は男性として過ごしており、他者からもほぼ完全に“男性”と認識されている。

カミングアウトにまつわる不安：Mさんの場合

ジェンダークリニックで「性同一性障害で間違いはないって診断されてから、これは親に言わないといけないと思った。母親はすごくショックを受けだろうっていうのはわかっていて、ずっと入院している母親をすごく傷つけることになるのが辛かった。考えに考えて、手紙にそれまでのことを全部書いて、母親に読んでもらった。母親はショックで1週間で7キロも痩せて、髪の毛も真っ白になっちゃった。ここで言わないともっとひどいことになるだろうと思ったから言うしかなかったけど、悪いことした……罪悪感をすごく感じた」。

知り合いへのカミングアウトでは、「それまで普通にやりとりしてたのに、カミングアウトすることによって、カミングアウトされたその人自身も混乱するだろうし、偏見の目で見られて、それまで普通に付き合っていたのが普通じゃなくなっちゃう可能性がすごく高い」と思って心配だった。

知り合いではない人の前で「自分が性同一性障害だってことを話さないといけない状況って、結構ある。そういうとき、周りの人の反応とか気になる……偏見より、興味の手で見られるんじゃないかっていう不安」を感じたと言う。性同一性障害の当事者に会ったことがなければ、「FTMのことを“体は女性で、心は男だ”っていう、アニメの世界のような、非現実的な感覚で捉えるんじゃないか」と思えるからだ。

カミングアウトの目的：Mさんの場合

Mさんはこれまでのカミングアウトで、「“男として扱われたい”という言葉は一度も使ったことがない」。「ありのままの自分として扱ってもらいたい」気持ちがその背景にある。両親にも、「自分のことを一番よく知ってもらいたい、理解してもらいたい」という気持ちからカミングアウトをした。

友人には、「本当の自分っていうか、本来の自分はこうなんだっていうことを知ってもらいたかった。その上で付き合いっていったかった」。それまでは「何かしら偽っていた部分、なんか隠しているなっていう雰囲気っていうのがあった。不思議なことにそういうのは相手にわかっちゃって、どうしたのって聞かれるけど、答えられない。そういうのが積み重ねて、本当の意味での繋がりっていうか、友人なんだって言えない感じがして、正直に伝えたかった」。カミングアウトをする際は、「そのまんまの俺を正直に言うから、それを聞いて思ったまま、感じたままを話して欲しい」と思っていた。

以前職場で、「“男性”としてというか、そのときはもう男性にしか見えない感じだった

から、“見たまんまで判断してもらって雇って欲しい”ってカミングアウトして、その上で採用されたことがあった。しばらく経ってから突然、“今までに君のような人を雇った前例がなくてどういうふうに扱ったらいいかわからないから、辞めてくれ”って言われた。色々交渉したけど、その時は（採用面接の際に提出した）履歴書の性別欄で男性に丸をつけていた。ちゃんと面接で自分のことを話したのに、“履歴書に書かれていた情報が偽りである。戸籍上は女性なのに男性に丸をした。それは会社と個人の信頼関係を崩すことになる”って理由で解雇された。裏切られたように感じた」経験がある。これがきっかけになって、「履歴書の性別欄には、丸をしないことにした。自分からは何も言わずに、“相手にそのとき見たまんまで判断してもらおう”というカミングアウトをするようになった」と語った。

“埋没”と“適応”について：Mさんの場合

現在の日本の社会状況では、性同一性障害の当事者であることを「隠さないと生活が危うくなる可能性がなくはない。だから、戸籍の性別を隠すことで“埋没”していくことも仕方ない」と思っている。しかし、「外見的には男性として認識されていても、戸籍の性別を変更してないから“埋没”できない。これまでに何回もあるけど、病院で保険証を出した時、保険証の記載と目の前の自分を見比べて、“この保険証は本当にあなたの保険証ですか？”って聞かれる。正社員として働こうとする時に、どうしても自分の身元がわかってしまう。カミングアウトしなければならぬ状況に追い込まれるてしまう」と感じている。

「見たまんま、ありのまんまで付き合ってもらえることが大切」と考えている Mさんは、「生まれながらの男性のように“埋没”したいわけじゃない。「黙っていても“男性”とみなされる外見であれば（“男性”として扱われるために）カミングアウトする必要はないし、（自分を“男性”と思っている相手に、自分は実は当事者なんだと）カミングアウトしたら“埋没”できなくなるってことでもない」と考えている。

もし、今、カミングアウトして（社会保険加入等のために戸籍の性別が“女性”だと明らかになったとしても）会社が受け入れてくれるんだったら嬉しいし、（それで正社員雇用が叶えば）生活も、もっと安定して」助かると思っている。「日本が変わって（戸籍の性別を）隠す必要がない状態になればいい……今は、そうではないから、戸籍の性別（が明らかになる書類の提出等）を求められないようなところで（アルバイトとして）働いて、（履歴書の性別欄を空欄にしたまま提出して雇用者から見た目で“男性”だと判断されたままカミングアウトしないことによって）“埋没”しているという」現状にある。

よりよい共生社会に必要なこと：Mさんの場合

Mさんは、性同一性障害の当事者が「これだけメディアに露出して、色々な本が出ている」ことに言及した上で、「なのに、（偏見や就職差別が散見されるような）現実がまだまだ山ほどある。自分と同じような躰きをしている人はたくさんいる。それまで“埋没”していた人が当事者だってことを公表して、それで環境が変わってしまう。下手したら会社をクビになる。そういう状態に陥ってしまう危険性、すごく高いのが現実」なのだと言った。こうした現実を打破してくために必要と考えていることには、「当事者達自ら動き、発信し、認知を拡大していくこと」を挙げた。

「生きていくためには“埋没”しなくちゃいけないような、この社会を変えないといけなくていう気持ち強い」。認知拡大によって目指すのは、たとえ男性として暮らしていても、戸籍の性別が“女性”あること、女性として暮らしていた過去があること、そんなことが当たり前認められる、“埋没せずに済む社会”である。さらに、「“男と女”っていう区分じゃなくて“人と人”、“人間対人間”で向き合える社会、お互いに認め合える社会」であれば、「身体的に治療していない人たちも、その人たちなりに本当の、そのまんまのその人として見てもらえる」だろうと希望を語った。

互いが「ひとりの人間として見てもらえるような社会」に向けた認知拡大の具体策として、「学校の保健体育の授業とかで、性の多様性とか、人間は“男だから、女だから”っていうことじゃないんだよってことを教える機会を作る」ことを挙げた。

また、「戸籍に性別が表記されていることで、当事者に負担がかかり、頑張らないといけない状態になっている」ことから、「戸籍の性別表記を撤廃すること」にも言及した。「身体的治療を受けたい人は、（性同一性障害に係る身体的治療は保険適用外のため全額負担が必要となる）高額な治療費を支払うために、たくさん働いて稼がなきゃならない。たくさん働くには、社会保険に入らなきゃならない。社会保険に入るには年金手帳が必要になる。年金手帳には戸籍の性別が書かれている。戸籍の性別を変えるには性別適合手術を受けなきゃならない。だけど、その資金を調達できない。稼ぎたくても、戸籍の性別を隠して正社員になることはできない……。そういう、負の連鎖で八方塞がり」になっている現実を踏まえての言葉であった。

以上のようなMさんの、カミングアウト、適応様式、非当事者との共生に関する考えは、Figure14のように模式化された。

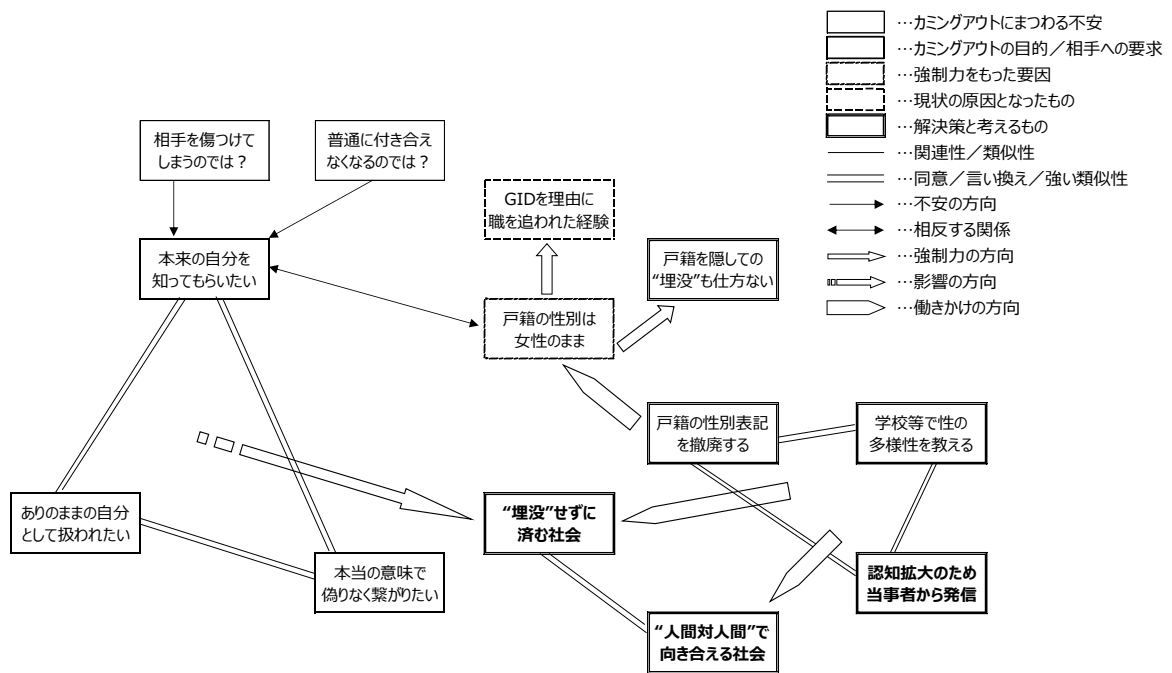


Figure14 Mさんの語りから得た模式図

14 Nさんの事例

Nさんについて

面接当時 24 歳，アルバイトで生計を立てている。Mさんと同じ劇団に所属している。女性でもないし，男性でもないとの自認していることから，自らの性別の属性を“中性(M)”と答えた。性同一性障害の診断を得ている。身体的治療は一切受けていないが，乳房切除の希望はある。服装によっては“男性”と認識されることもあるが，“女性”と認識されることも未だ少なくない。

カミングアウトにまつわる不安：Nさんの場合

初めてカミングアウトをした相手は，母親だった。「カミングアウトする前の不安というより，どちらかというところ，自分は男なのかな女なのかな，どっちなのかなって思っているときの心理状態がすごい不安定で，言うこと自体には大して不安を感じなかった」。

女子高校出身だったこともあり，「自分では女性として生活してきたと思えるような時

期」があったが、その時期にも「なんとなく違和感のようなものはあって」、ふり返ってみると、「それが外に滲んで見えるところがあった」だろうと語った。

「(性別に関する心と身体の) ギャップが激しくなったのが大学時代で、そのとき逆に友人からどうしたのかって訊かれて、それでこうなんだ、ギャップがあるんだって話した」のが友人への初めてのカミングアウトになった。自分から隠していたこと言うのではなく、滲んでしまっていることを友人から問われた形だったため、「(性別に関して違和感があると) 言うことに対しての不安はあんまりなかった」。

カミングアウトの目的：Nさんの場合

初めてのカミングアウトに至ったときには、「自分の精神状態がごちゃごちゃしていて、“誰かに言わないと” っていうのが一番大きかった。あえて目的を挙げれば（頭がどうにかなってしまいそうな）自分を守るため、そのほかに意識したものはなかった」。

友人へのカミングアウトも、自分から求めたものではなかったこともあり、「特に目的を意識することはなかった。内容も、“こうなんだ” っていうことを伝えただけで、何か扱いを変えて欲しいとかそういうことをはっきり伝えるようなことはなかった。ただ、(自分の性別に関する) 相手の認識や自分への対応を変えて欲しいなという思いは、多少あった」。

明確に何かを求めるようなカミングアウトではなかったため、「失敗ではないけど、自分が言ったことに対して“あ、そうなんだ” っていう反応だけで、扱いとか対応とかが変わったかと言えば、何も変わらなかったっていうことはある。それは、(変えて欲しいなと思ってはいても) 自分がはっきりと何か言ったわけではない……しょうがないなっていう部分だと思っている」と語った。

“埋没” と “適応” について：Nさんの場合

Nさんは現在、「色んな人がいて、まだ男性だけど女性っぽい人とか、その逆の人もいるような、そういう（性別が“男か女か” はっきりしていないことが）何か当たり前みたいな（劇団の）世界にいる」。「その世界にいる分には、“女” でいることがそんなに嫌じゃない。“別にいいか” みたいなところが大きくて、そんなに“自分はこうだぞ” っていう主張しなくても生きていられるな」と感じている。そう考えると、“男性としての埋没” も“男性としての適応” も、「どちらもあてはまらないことになる」と話した。

面接実施時点では、まだ「“ありのままの自分” っていうのがはっきりわかっていない

けど、時を重ねていくなかでそれが確立したときには、“ありのままの自分”を認めてもらって、その状態で過ごさせてもらいたい」と考えている。

よりよい共生社会に必要なこと：Nさんの場合

所属している劇団の関係者を除き、Nさんの周囲には、「性同一性障害を“完全に変わった人”と言う声が多く、完全に“NOT”と否定していたり、“元女（おなべ）”と差別的に言ったりする人が多い」という現状にある。Nさんが願うのは、「“ちょっと前までは男の体だったんです”，“女の体だったんです”って言える」ような社会である。「(カミングアウトを) 聞く側も，“あの人、女だったの？”ってもの珍しそうに驚くんじゃなくて，“あ、そうなんだ”って普通に聞いてくれる。それから“それでね”って話していけるような社会になればいい」と考えている。

また、「そこまでいけない人やいかない人（性別適合手術まで完遂できるようなトランスセクシュアル以外の当事者）も増えている、というか元々いたけど出てくる（社会に向けてカミングアウトする）ようになった人も沢山いる。そこに光を当てて欲しい」と感じている。そうすることで、性別に関して“どっちでもいいよ”っていう中間」の選択肢が生まれると考えているからだ。

Nさんは、性別違和を有する者が辛さを感じることとして、トイレ、履歴書の性別欄、学校の制服等を挙げた後、なかでもNさん自身や周囲の当事者が「一番きついのはトイレ」と語った。「自分としては“自分は男だ”って思っているけど“（外見的に男性として通用するかどうかは）まだね”っていう状態のなかで（男子トイレに）入っていくのはしんどい。だからといって女子トイレに入るのも辛い。結局、だれでもトイレ（男女共用トイレ）に入るしかないけど、数が少ないし、設置してないところも多い」と言う。トイレを例に挙げてもわかるように、「（男でも女でも）どっちが使ってもいい”っていうものをもうちよっと増やして」いけば、当事者達を感じる辛さや苦痛も少しは減じるのではないかと考えていた。

以上のような、Nさんの、カミングアウト、適応様式、非当事者との共生に関する考えは、Figure15のように模式化された。

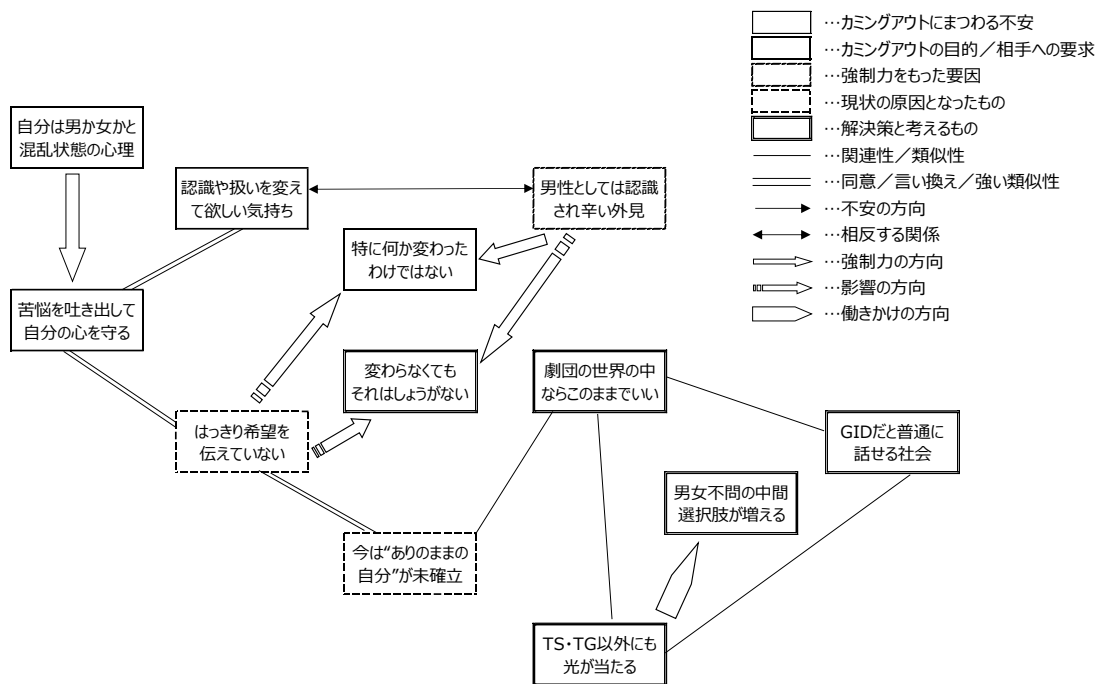


Figure15 Nさんの語りから得た模式図

15 Oさんの事例

Oさんについて

面接当時 20 代後半で、職業を“フリーター”と答えた。性別の属性を FTX (M 寄り) と自認している。性同一性障害の診断を得ているが、始めている身体的治療はない。小柄な体型で髪の毛も肩にかかるくらいの長さだが、男性ミュージシャンを思わせる風体で、女性的な雰囲気はあまり感じられない。“男性”と認識されることが多いと感じている。

カミングアウトにまつわる不安：Oさんの場合

「自分だけが（これがあるがままの自分なんだと）思っている、周りから見た自分っていうのがある……周りが（自分がカミングアウトしたような存在であることを）受け入れてくれるか」が不安に感じていた。カミングアウトすることで、「相手に変に気を遣われたり理解されなかったりして、相手との関係性が崩れちゃうんじゃないか」との不安は、

現在もある。「自分のあるがままを認めて欲しい。それを否定されるっていうことは、人格を否定されるとまでは言わないけど、自分らしくいられなくなること」だと感じており、「(否定されてしまったら)相手との関係がぎくしゃくしてしまう」のではと懸念している。

Oさんにとって、“あるがままの自分になること”は、“‘男性’になること”と同義ではない。そのため、「カミングアウトしたときに、“なんで戸籍は変えないの？”“なんで最後まで手術を望まないの？”“じゃあ、君はなんだい？””って、そういうふうに自分の中途半端さを相手から指摘されはしないか」という不安を持っている。「同性愛者やおなべ（職業的利得のために性別移行しているとの意）との混同や誤解」も危惧しており、「“性同一性障害なんだ”と言ったときに、相手はどこまでわかっている、どこまでわかってくれるんだろう」と心配になる。

「カミングアウトして、どちらかと言えば“男性”として扱われるようになったとして、その場合、戸籍の性別（が“女性”であること）と矛盾する。今の状態では（戸籍の性別は）変えられないし、今後その可能性があるのかと言えば、そのためには性別適合手術としないといけない……自分はそこまで行けないのかなと思う。結局、カミングアウトすることで、自分自身が社会的な立場として中途半端なところに置かれてしまうんじゃないか」という不安がある。

カミングアウトの目的：Oさんの場合

Oさんには、「“‘男性’として扱われたい”という思いと“自分らしくありたい”という思いがあり、その中間を行ったり来たりしている」という感覚がある。家族や友人にカミングアウトしてきたが、その背景には、「自分のことを肯定してほしいという気持ち」や「自分が生きやすいように周りを変えられたらっていう気持ち」があった。

最近になって、カミングアウトによって「自分のそれまで隠していた部分を言えるっていうことは、自分らしさが出せる」ことなのだという感覚も持ち始めている。

家族へのカミングアウトには、「こういうふう生きていくのを認めて欲しい」という意図があったと言う。「女としては生きられない。女として働くのは難しい。どこかに就職するなら、性同一性障害だってことを伝えた上で働きたい」と伝えた。

“埋没”と“適応”について：Oさんの場合

「自分の過去を知っている人は別として、普段生活していくプライベートでは“埋没”

したい」と考えている。しかし、戸籍の性別を変える前の状態にある当事者は、「社会に出て行く上では適応していかないといけない。社会の中で“埋没”しようとしても、どこからは自分の前の性別がばれてしまうリスクがある」と感じている。

Oさん自身も、自分の過去を知らないような人と過ごして生きる上で、「基本的にプライベートでは“埋没”して、仲良くなったらカミングアウトする形でやろう」と考えている。また、昔からの友人等、「“女性”として生きていた頃の人と会うときには、相手に合わせる……学生時代の友人だったら、その人が認識しているような“学生のときの自分”になりきる。そういうので対処できる」だろうと考えている。そういう過去の友人に対して、場合によっては「カミングアウトしてもいいのかもしれないけど、カミングアウトして認めてもらえなかったら、お互いの関係がなくなるかもしれない。相手から否定的に見られるかもしれない」と思っている。

性別適合手術を受けて戸籍の性別が変わっていれば、「“埋没”でいいんじゃないかな」と感じている。「(“埋没”していれば)自分の過去とか言わなくていいし、今の自分を見てもらえるから、楽。過去を知ると、そのギャップで差別される可能性がある」からだ。戸籍の性別が変わった後に、自分の過去を知らずに“男性”だと認識している相手に、「それでもカミングアウトした場合、もし失敗したら、関係が崩れていっちゃう」と思う一方で、「もし成功したら、隠し事がなくなってより生きやすくなる」だろうとも思っている。カミングアウトが「(失敗するか成功するかは、自分がどうかっていうことじゃなくて、相手がどうかっていうことで違ってくる) ことだと感じている。

よりよい共生社会に必要なこと：Oさんの場合

Oさんは、「当事者側から、もっと発信する必要がある」と思っている。「自分のことを理解してもらいたい、周りに認めてもらいたいという気持ちがあるんだったら、自分で努力する部分は努力しないといけない。周りに伝えられる部分があるなら、それをちゃんと自分の言葉で言って、伝える。何か希望する性別が明確にあるなら、それに近づけるようにそれに向けてちゃんと努力する」ことが必要だと考えている。

カミングアウトをする際には、「自分の思いだけを一方的に伝えるんじゃないで、相手側の“こうして欲しい”ってのも受け入れないといけない。相互のコミュニケーションが大切。性同一性障害の当事者って、どうしても視点が偏っちゃう。自分達も広い視野で物事を考えていく必要がある」とも感じている。

〇さんがカミングアウトした相手のなかには、「1回カミングアウトして、とりあえず否定はされなかったけど、どこまでわかっているんだろうって思えるような人」もいた。その経験から、「1回伝えただけじゃわからない。徐々にに自分を知ってもらうために努力しなきゃいけない。……どこをわかってもらえてないんだろうって突き詰めて考えて、徐々に伝えていく……これも、コミュニケーションのなかで努力できること」だと考えている。

「非当事者には、もっと広い心を持ってくれたら」と思っている。「その人の人間性っていうのを見て、性同一性障害であるかどうかに関係なく、個性として認めてくれたらいい。今もそういう人が多いけど、もっと増えてくれればいい。色んな事をひとりの人間の個性として受け止められる社会になればお互いによりよく生きられるんじゃないか」と語った。

そのほか、「戸籍の性別変更がもっと簡単にできるようになること」、「同性婚を認めるなど、異性愛を前提にした婚姻の考え方を改めること」、「不必要な性別欄をなくすこと」によっても、当事者はもっと楽に生きられるようになるのではと考えている。

以上のような〇さんの、カミングアウト、適応様式、非当事者との共生に関する考えは、Figure16のように模式化された。

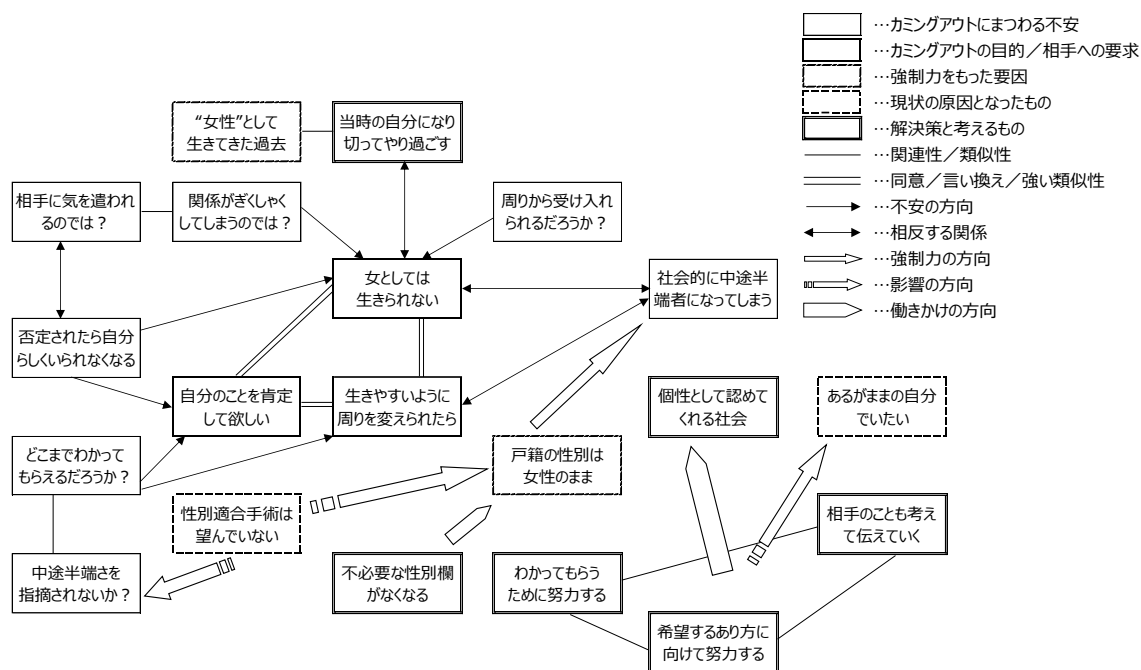


Figure16 〇さんの語りから得た模式図

第4節 共通項の抽出

1 カミングアウトにまつわる不安の共通項

FTM/X 自認者 15 名の語りからカミングアウトにまつわる不安について言及している部分を抜き出していったところ、異なる面接協力者から共通する不安が語られていた。そこで、語らえている意味内容のまとまりを 1 単位として 1 単位ごとにラベルを作成し、意味内容の共通性を基準にラベルをグループ化していった。

全ラベルのグループ化が終了してからグループ内のラベルを再度確認したところ、1 人の面接協力者の語りから作成された複数のラベルが 1 つの同じグループに存在していることが散見された。そこで、本研究の半構造化面接では面接協力者によって面接の所要時間が多少異なっており、語られた回数よりも語られた否か自体に重要な意味があると考えられることを鑑み、1 つのグループ内に同じ面接協力者によって語られたラベルが複数あった場合には、それらを統合して 1 つのラベルにまとめることとした。1 つのラベルに統合し得る程には意味内容が共通していないラベルが認められた場合には、グループの括り自体を見直した。最後に、面接協力者間で語りの共通性を見出すという目的に照らして、2 枚以上のラベルを含むグループのみを採用したところ、Table2 のような類型化が得られた。

Table2 共通して語られた「カミングアウトにまつわる不安」

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	人数 (%)
拒否・否定・嫌悪される懸念	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	13 (86.67%)
関係性の変化や崩壊の懸念	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10 (66.67%)
偏見の目で見られてしまうこわさ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	5 (33.33%)
噂になる心配	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	4 (26.67%)
相手にかかる負担や迷惑への気がかり	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9 (60.00%)
誤って理解される懸念	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	5 (33.33%)
“GID”としてラベルづけられる不本意感	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	3 (20.00%)
GIDを理由に就職差別を受ける懸念	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	6 (40.00%)
社会生活を閉ざされる恐ろしさ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	3 (20.00%)

最も多くの面接協力者によって語られたカミングアウトにまつわる不安は、カミングアウト相手から〔拒否・否定・嫌悪される懸念〕で、15名中13名(86.67%)が感じていた。次いで、カミングアウト相手との〔関係性の変化や崩壊の懸念〕が、15名中10名(66.67%)によって挙げられた。これらに類似する不安の共通項として、〔偏見の目で見られてしまうこわさ〕(15名中5名(33.33%))、〔噂になる心配〕(15名中4名(26.67%))が得られた。また、より社会的要素が強い不安には、〔GIDを理由に就職差別を受ける懸念〕(15名中6名(40.00%))、〔社会生活が閉ざされる恐ろしさ〕(15名中3名(20.00%))があり、2名は両方に不安を感じていた。これら6つは、カミングアウトした当人の不利益に直結する不安と考えられる。カミングアウトした〔相手にかかる負担や迷惑への気がかり〕も、比較的多くの面接協力者によって挙げられていた(15名中9名(60.00%))。

カミングアウトをしたにもかかわらず、〔誤って理解される懸念〕は、15名中5名(33.4%)が挙げていた。誤解のされ方には、同性愛者との混同、性同一性障害の典型例としての画一的理解、職業的利得のために男装している者との混同等があった。

〔“GID”としてラベルづけられる不本意感〕は15人中3人(20.0%)が挙げていたが、その理由は三者三様で、“性同一性障害と認識されることで‘男性’としては認識されなくなること”、“性同一性障害という枠にはめ込まれて両性愛者としての自分がないことにされてしまうこと”、“性同一性障害という概念をも支えている性別二元論によって男女のどちらかに振り分けられてしまうこと”であった。いずれの理由も、その背景に、社会のなかで多数派を占めている“性別違和を有さない異性愛者”を正当とする社会的価値観から与えられる圧迫感がうかがわれた。

2 カミングアウトの目的の共通項

カミングアウトの目的に関する言及についても、カミングアウトにまつわる不安に関する言及に対して行ったのと同様の手続きを執り行い、Table3のような類型化結果を得た。

最も多くの面接協力者から挙げられたカミングアウトの目的は、〔男性として扱って欲しい〕と〔相手の助けや協力が欲しい〕であった(いずれも、15名中8名(53.33%))。前者と近い〔ありのままの自分を知ってもらいたい〕は15名中6名(40.00%)によって挙げられており、〔男性として扱って欲しい〕と〔ありのままの自分を知ってもらいたい〕

の両方を目的として挙げた者は 15 名中 2 名 (13.33%)、このどちらも挙げなかったのが 2 名 (13.33%) であった。[生きやすくなりたい] を挙げたのは、15 名中 2 人 (13.33%) にとどまった。

Table3 共通して語られた「カミングアウトの目的」

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	人数 (%)
男性として扱って欲しい	○	○	○	○	—	○	—	○	—	○	○	—	—	—	—	8 (53.33%)
ありのままの自分を 知ってもらいたい	○	—	—	—	○	○	○	—	—	—	—	—	○	—	○	6 (40.00%)
より分かり合いたい	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	○	○	—	—	3 (20.00%)
生きやすくなりたい	—	—	○	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2 (13.33%)
相手の助けや協力が欲しい	—	—	—	○	○	○	○	—	○	○	—	—	—	○	○	8 (53.33%)
治療への同意や許可が 欲しい	○	○	○	—	—	○	—	○	—	○	—	—	—	—	—	6 (40.00%)
就職のために必要になった	—	—	—	○	○	○	—	○	—	—	—	—	○	—	○	6 (40.00%)

就業・就職にあたって、相手から戸籍に関する情報を求められた経験や、当人の方から必要となることを想定して求められる前に開示した経験を挙げたのは、15 名中 6 名 (40.00%) であった。性同一性障害に関する治療の開始や戸籍の名の変更の申し立てに際して、親の許可や同意は必須ではない。しかし、15 名中 6 名 (40.00%) がそれを然るべき手はずと考え、実際にカミングアウトを行っていた。

〔相手の助けや協力が欲しい〕と感じてカミングアウトに至ったのは、15 名人中 8 名 (53.33%) で、どの面接協力者も、自らの性別や存在について混乱を感じていた頃のこととして語っていた。混乱時の状態像にはいくつかあり、自身が性同一性障害であることを受け入れがたく思っている場合、自らの性自認に揺らぎを感じている場合、内面にため込んだ悩みや葛藤が意図せず噴出している場合、将来の先行き不透明さに圧倒されている場合等が認められた。

〔より分かり合いたい〕という目的は、15 名中 3 名 (20.00%) が述べており、3 名とも、〔相手の助けや協力が欲しい〕を挙げなかった 7 名に含まれていた。この 3 名は、相手との話し合いや偽りのない繋がりを求めており、混乱期を抜け出し、内面的にも社会生活的にも一定の自己確立が得られた後に行われたカミングアウトの目的として語られていた。

カミングアウトの目的を類型化していく際には取り上げられなかったが、目的をもってカミングアウトをしていない、あるいは、カミングアウトの必要性や価値を感じていない

者もいた。前者は自己開示の意味合いが強く、カミングアウトすることそれ自体が目的となっていた。後者には、3つの場合が認められた。ひとつ目は、男性として認識されるような外見が得られており、カミングアウトしなくても男性として扱われている場合である。ふたつ目は、制服や更衣室などが男女の性別によって区別されていないために苦痛を感じる場面自体が少なく、“女性的な振る舞いをしないこと”あるいは“男性的な振る舞いをすること”が暗黙のうちに許容されている場合である。3つ目は現状維持が目的となっている場合で、恋愛関係にある相手に“男性”として認識されたままでいたいという気持ちや、カミングアウトすることで与えられる選択肢のどれもが自分には合わないだろうという一種の諦めがその背景にあった。

3 “埋没”と“適応”に関する考えの共通項

面接協力者の現在および希望するあり方

研究1の面接調査では“埋没”と“適応”に関する考えについて聴取したが、面接協力者は様々な性自認を持っており、また身体的治療の進捗等も異なる。そのためまず、“埋没”と“適応”という観点から、各面接協力者の現在のあり方、および、希望するあり方をまとめた (Table4)。

Table4 各面接協力者の“埋没”と“適応”

	現在のあり方		希望するあり方	
	埋没	適応	埋没	適応
女性として	[B], [F], [G], [I], [N], [O]	[I]	—	—
男性として	A, E', [F], H, J, M, N, [O]	B, C, D, E', F, I, K, O	A, C', D, E', F, H, I, J, K, M, O'	B, C', E', O'
男女どちらでもない ありのままの自分として	G, L	—	G, L, N	—

注) [X]: 一部の場面や相手に対する限定的なXのあり方, X': Xが自ら積極的に“埋没”と“適応”を使い分けている場合

面接実施当時、多くの面接協力者が“男性として‘埋没’”, もしくは“男性として‘適応’”の状態にあった。15名中6名は、一部の場面や相手に対して“女性として‘埋没’”している状態にあった。なお、女性としての“埋没”は、相手から女性として認識されて

いる現状を維持しようとしている状態のこと、女性としての“適応”は、カミングアウトをしながらも、自ら女性としての性役割を果たそうと試みている状態のことを指す。男女どちらでもないありのままの自分としての“埋没”は、男女どちらにも規定されないあり方を志向しており、“男性”としての扱いを求めているため、カミングアウトせずによりのままの自分であることが可能となっている状態のことを指す。

面接協力者達は必ずしも、現在のあり方に満足していない。希望するあり方が“女性として‘埋没’”，もしくは“女性として‘適応’”である者は皆無であった。15名中8名(53.33%)は男性として完全に“埋没”することを望んでいた。自ら積極的に“埋没”と“適応”を使い分けたいと希望する者は、15名中2名(13.33%)であった。

男性としての“埋没”を希望していながら現在は男性としての“埋没”の状態にない者は、“埋没”が実現するために揃っていなければならない条件に言及していた。その条件とは、他者から“男性”として認識されるような外見が得られていること、戸籍の性別が“男性”に変更されていること、これまで築いてきた人間関係から生じるしがらみがないこと等で、実現可能性が低いものも散見された。

“埋没”と“適応”を臨機応変に使い分けることを望むEさんとOさんは、社会的には男性としての“埋没”を志向していても戸籍の性別が求められれば当事者であることが露見してしまう現況があることを挙げ、そのような場面では自らカミングアウトすることを選択すると語っていた。また、“男性”として“埋没”している場面で出会った相手であっても、相手との人間関係が深くなったり、自分自身とその相手と深い人間関係を築きたいと思ったりしている場合には、あえて、自身が性同一性障害当事者であることをカミングアウトしたいという希望を持っていた。

“埋没”と“適応”に関する類型化の結果

カミングアウトにまつわる不安を類型化した際に執った手続きと同様に、“埋没”と“適応”に関する考えに言及している語りの類型化を行った。しかし、発言した言葉自体はほとんど同であっても、前提となっている文脈が“埋没”であるか“適応”であるかで、発言の意味内容が全く異なることがわかった。そのため、途中まで行った類型化を一度中断し、“埋没”、“適応”、“‘埋没’と‘適応’という分け方自体”の3つに分け、それぞれのメリットという観点から、再度類型化を行った。この結果をTable5に示す。

Table5 共通して語られた「“埋没”と“適応”に関する考え」

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	人数 (%)
埋没																
周りの人に負担や迷惑を かけなくて済む	○	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	—	—	2 (13.33%)
女性として生きてきたこと等を わざわざ言わなくて済む	—	—	○	—	—	○	—	○	○	—	○	—	○	○	—	7 (46.67%)
社会的に不利にならずに済む	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—	○	—	○	3 (20.00%)
GIDとして生き続けなくて済む	—	—	—	—	—	○	—	○	—	○	○	—	—	—	—	4 (26.67%)
カミングアウトした相手の反応に 左右されないで済む	—	○	—	○	—	○	—	—	—	—	—	—	—	○	○	5 (33.33%)
適応																
外見で男性と認識されないなら 適応するしかない	○	○	—	○	○	○	—	—	—	—	○	—	○	—	—	7 (46.67%)
戸籍の性別が女性だから 埋没はできない	○	—	—	○	—	○	—	○	○	—	○	—	○	—	○	8 (53.33%)
女性としての身体的特徴は 変えようがない現実がある	○	—	—	○	—	—	○	○	—	—	—	—	—	—	○	5 (33.33%)
過去を隠して嘘をついてまで 埋没したくない	○	○	○	○	—	—	—	—	—	—	○	○	—	—	—	6 (40.00%)
“埋没”・“適応”という考え方自体が 自分にあてはまらない	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	○	—	—	—	2 (13.33%)

あたかも生まれながらの“男性”であるかのようにして生活する“埋没”のメリットとして共通して語られたほぼすべてが、何らかのリスク回避に言及していた。〔周りの人に負担や迷惑をかけなくて済む〕ことは、15名中2名（13.33%）が挙げていた。〔女性として生まれてきたこと等をわざわざ言わなくて済む〕は15名中7名（46.67%），〔社会的に不利にならずに済む〕は15名なか3名（20.00%），〔GIDとして生き続けなくて済む〕は15名中4名（26.67%），〔カミングアウトした相手の反応に左右されないで済む〕は15名中5名（33.33%）によって挙げられていた。

カミングアウトして周囲の理解を得ながら男性としての生活を得る“適応”については、実際には“生まれながらの男性”ではない葛藤とともに語られたものが多かった。〔外見で男性と認識されないなら適応するしかない〕は15名中7名（46.67%），〔戸籍の性別が女性だから埋没はできない〕は15名中8名（53.33%），〔女性としての身体的特徴は変えようがない現実がある〕は15名中5名（33.33%）が語っていた。一方、主体的な意志決定として〔過去を隠してまで埋没したくない〕と述べる者もあり、15名中6名（40.00%）がこれに言及していた。

〔“埋没”・“適応”という考え方自体が自分にあてはまらない〕は、15名中2名（13.3%）の共通項として抽出された。1名は、男性であるか女性であるかではなく、自分の考えと相手の中にある自分への認識がフィットしているかどうかを重視していた。そのため、男

性として“埋没”するか“適応”するかという観点から意見を述べるのが難しいと感じていた。もう1名は、相手が自分を男女のどちらで認識しているかではなく、自分がしたいかしたくないかを判断基準とした自己決定に依る言動をしているため、“埋没”・“適応”という社会から提示された選択肢のどちらも自身の考えを表現するには適当でないと考えていた。

4 よりよい共生社会に必要なことの共通項

性別違和を有する当事者達が社会の一員として非当事者とよりよく共生するために必要と考えることに言及した語りについても、カミングアウトにまつわる不安を類型化した際と同様の手続きを執り行った。全部で14のグループに類型化された後、誰（何）に対してよりよい共生社会に向けた変化を求めているかという観点から、4つの上位分類を得た。この結果をTable6に示す。

Table6 共通して語られた「よりよい共生社会に必要なこと」

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	人数 (%)
当事者	相手に伝わるように自分ことを表現する	○	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	3 (20.00%)
	認知拡大のために他者や社会に働きかける	○	○	○	—	—	○	—	—	○	—	○	—	—	—	7 (46.67%)
	当事者であることを自分のマイナス要素と考えない	—	—	○	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	○	3 (20.00%)
	一方的でない対話的なカミングアウトを心がける	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	2 (13.33%)
	当事者同士で集まれる居場所をつくる	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—	○	—	—	2 (13.33%)
価値観	性別ありきではなくまずは人間として相手を見る	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	—	○	—	2 (13.33%)
	性別の不一致状態を特別視しない	○	○	○	—	○	○	—	—	○	—	○	—	—	○	9 (60.00%)
	みなが見識を高めて自らの偏見縮小させていく	—	○	—	—	○	—	—	○	○	○	—	○	○	○	8 (53.33%)
社会の体制と環境	“個対個”を超えた寛容な社会的風土をつくる	—	—	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—	○	—	2 (13.33%)
	“男・女”の不要な区別を緩やかにする	○	—	—	—	○	○	—	—	—	○	—	—	—	○	5 (33.33%)
	性別の選択肢を増やす	—	○	—	—	—	—	—	○	—	○	—	—	○	—	4 (26.67%)
医療	戸籍の名や性別の変更手続きを簡略化する	○	○	—	○	○	○	—	○	—	—	—	○	—	○	8 (53.33%)
	医療資源の充実と整備を進める	○	—	—	○	○	—	○	○	—	○	—	—	—	—	6 (40.00%)
	治療の保険適用等によって社会保障を適正化する	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—	2 (13.33%)

共生のために必要なこととして最も多くの面接協力者が挙げていたのは、〔性別の不一致を特別視しない〕であった（15名中9名（60.00%））。次いで、〔みなが見識を高めて自らの偏見を縮小させていく〕が多く挙げられていた（15名中8名（53.33%））。この2つはいずれも【価値観】に関するものであった。【価値観】についてはこのほかに、〔性別ありきではなくまずは人間として相手を見る〕も挙げられていた（15名中2名（13.33%））。

【当事者】に関することとしては、〔認知拡大のために他者や社会に働きかける〕が最も多く挙げられていた（15名中7名（46.67%））。ここでの“認知”は、性同一性障害に関わる知識や、典型例でない多様な性のあり方を持つ者の存在等を指していた。

カミングアウトの仕方に関するものには、〔相手に伝わるように自分のことを表現する〕（15名中3名（20.00%））、〔一方的でない対話的カミングアウトを心がける〕（15名中2名（13.33%））が挙げられていた。そのほか、〔当事者であることをマイナス要素と考えない〕（15名中3名（20.00%））、〔当事者同士で集まれる居場所をつくる〕（15名中2名（13.33%））も共通項として抽出された。

【社会の体制と環境】に関しては、〔戸籍の名や性別の変更手続きを簡略化する〕が最も多く挙げられていた（15名中8名（53.33%））。社会のなかに根付いている性別二元論への言及には、〔“男・女”の不要な区分を緩やかにする〕（15名中5名（33.33%））、〔性別の選択肢を増やす〕（15名中4名（26.67%））があった。また、〔“個対個”を超えた寛容や社会的風土をつくる〕必要性についても言及されていた（15名中2名（13.33%））。

【医療】に関しては、〔医療資源の充実と整備を進める〕（15名中6名（40.00%））と〔治療の保険適用等によって社会保障を適正化する〕（15名中2名（13.33%））が抽出された。

5 第4節の考察

カミングアウトにまつわる不安

人間関係にかかわる不安 カミングアウトにまつわる不安として多く挙げられたのは、〔拒否・否定・嫌悪される懸念〕、〔関係性の変化や崩壊の懸念〕、〔相手にかかる負担や迷惑への気付き〕であった。これらはいずれも、カミングアウト相手との人間関係に関する不安と言える。人間関係に関わる不安としては、このほかに〔GIDを理由に就職差別を受ける懸念〕、〔偏見の目で見られてしまうこわさ〕、〔噂になる心配〕もあったが、先に挙

げた3つに比してそう挙げられていない。先に挙げた3つと後に挙げた3つの違いを人間関係の質の観点から見てみると、先に挙げた3つは、相手と直接的やかかわりや会話が成立するような“当人対少数”の関係性、後に挙げた3つは、相手との直接的なかかわりがあまり想定されない“当人対不特定多数”の関係性において生じている不安であることがわかる。

このことから、FTM/X自認者は、直接的なかかわりがあるような身近な相手に対して、より強い不安を抱きやすい可能性が考察される。あるいは、そもそも、カミングアウトをしたいと思ったりその必要性を感じたりする相手は、日頃から付き合いがある身近な相手である傾向があるのかもしれない。

社会生活に関連する不安 [GIDを理由に就職差別を受ける懸念]や[社会生活を閉ざさせる恐ろしさ]は、社会にある偏見や差別を感じ取って抱かれている不安と言える。“男・女”の境界を越境するようなあり方を持つ者は、その能力にかかわらず、安定した収入が得られるような形態で雇用される機会を逸しやすいだろうと思えるような社会的風潮が、日本の現代社会にはあるのであろう。

研究1では、職業や年齢に制限をかけずに面接協力者を募集したが、面接協力者達の多くは、学生やフリーターであった。それなりに安定した職に就いている者であっても自身が自営業の代表を務めていたり、カミングアウトせずに戸籍の性別でやり通したりと、当事者性を持つ者として一般企業に正社員雇用されている者はひとりもいなかった。比較的若年層が多いことや面接調査の実施時期等も考慮する必要はあるものの、性別違和を有する者が“就職”に対して抱く不安は、単なる予期的不安ではなく、実際に社会に存在する課題を反映した現実的な不安や懸念を背景に持つものと理解される。

性同一性障害の理解とラベルづけによる没個性化 当事者の持つ性別のあり様や“男・女”の境界を越境することに偏見がなくとも、性別違和を有する当事者とそうでない非当事者とは、性の多様性に関する知識や価値観、視座の相違がある。

[誤って理解される懸念]と[“GID”としてラベルづけられる不本意感]は、こうした当事者-非当事者間の相違に起因する不安と考えられる。この2つのグループは類似性が高いが、前者は、同性愛当事者や職業的利得のために性別を変更する者等、表象だけ見て大きく括れば共通点がある者と混同され、性同一性障害当事者である自身の訴えや内情をしっかりと理解してもらえない可能性を心配している。一方後者は、“性同一性障害”という言葉で一括りにされてしまうことで、“典型的”な性同一性障害当事者像に当てはめ

て理解され、“個”としての独自性や人間性、所謂“典型例”とは異なる状態像や特徴に目を向けてもらえないことを危惧している。前者が“性同一性障害”の社会認知に関わる課題が背景にあるのに対し、後者は、人が持つ性別の多様性に関する知識や目の前に在る人が持つ性別のあり様に対する個別的理解の求めがその背景にあると考えられる。

カミングアウトの目的

自己の確立具合とカミングアウト 第3節で行った個々の事例的記述を読み通せばわかるように、面接協力者によって語られたカミングアウトの目的には、カミングアウトを行う以前から比較的はっきりと持っていた目的意識と、カミングアウトをしてしばらく経ってからカミングアウト当時をふりかえることで意味づけられていった目的の、2種がある。

カミングアウトの目的に関する共通項の抽出では、〔相手の助けや協力が欲しい〕と〔男性として扱って欲しい〕が、最も多い8名の面接協力者によって挙げられた。これら2つの目的にも、先に述べたような種類の異なりがあると考えられる。

〔相手の助けや協力が欲しい〕は、悩みや混乱が噴出する形で行われたカミングアウトを後に振り返ることで意味づけられた目的と理解されるもので、初めて、あるいはごく初期のカミングアウトによく見られる。自らの性別や存在自体について疑問や混乱が生じているような時期にあるため、相手に何を求めればよいのかも明確でない。

これに比して〔男性として扱って欲しい〕は、事前に相手を選んだりタイミングを見計らったりして行われたカミングアウトであることが多く、ある種の“訴え”や“意思表示”としての意味合いが含まれている。他者に受け入れられるかどうか等の対他的な不安はありながらも、自己の内面では性自認や身体的治療について、ある程度の知識や自分なりの指針、覚悟がある。当人を疑いなく“女性”と認識している他者に〔男性として扱って欲しい〕と表明するには、対他的な不安を凌駕する程に強い、“女性”として在ることの違和感や、“男性”として扱われたいという希望が必要になるのであろう。〔より分かり合いたい〕という目的を持ったカミングアウトは、内的な自己確立に加え、社会的にな自己もある程度確立された際に行われていた。

今回の結果から多くを述べることはできないが、内的混乱状態にある際には、耐え切れなくて噴出するような暴露的カミングアウト、その後内的な自己が確立した場合には相手に意思を表明するような意図的カミングアウト、さらにこれに社会的な自己の確立が加わると相手とのより親密なつながりを目的とした友好的カミングアウトのように、自己の確

立具合に応じて、カミングアウトの目的が変遷されていくのかもしれない。

親へのカミングアウト [治療への同意や許可が欲しい] という目的は、親に対するカミングアウトに特徴的であった。“親だからこそ否定はされないだろう”という、肯定的な期待を持ってカミングアウトに向かった者もいるが、幾人かの面接協力者は、親へのカミングアウトに際して特別な構えや心配を抱いていた。

“親”は、自らの存在の始発点とも言える。“性別”というものはその人の存在の根本に関わるため、“自分の性別は‘女性’ではない”とカミングアウトする重みは、友人よりも親に対して強く感じられるものなのかもしれない。

“埋没”と“適応”に関する考え

“埋没”の妥協案としての“適応” Table4を見ればわかるように、多くの面接協力者は、“埋没”することを希望している。“埋没”して生まれながらの“男性”であるかのように生活すれば、[周りの人に負担や迷惑をかけなくて済む]。[女性として生きてきたこと等をわざわざ言わなくて済む]。[社会的に不利にならずに済む]。[GIDとして生き続けなくて済む]。[カミングアウトした相手の反応に左右されないで済む]。

しかし、“埋没”するには、“男性”と認識され得る外見や、戸籍の性別が男性へと変更されていること（現行法では、性別適合術を済ませていることとほぼ同義）、女性としての身体的特徴が男性的なものに変化されていること等が必要となる。これらを満たすことは容易ではなく、それを実現できる者は多くない。“適応”についての言及から抽出された共通項4つのうち3つは、[外見で男性と認識されないなら適応するしかない]、[戸籍の性別が女性だから埋没はできない]、[女性としての身体的特徴は変えようがない現実がある]であり、“埋没”できない者がやむなく“適応”している現況がうかがわれる。

“埋没”に内包される葛藤 抽出された共通項のなかに、“女性”として生きてきた[過去を隠して嘘をついてまで埋没したくない]がある。これに言及した6名中5名は、“埋没”のメリットにも言及している。うち2名は、希望するあり方も“埋没”である。

[GIDとして生き続けなくて済む]が抽出されているように、“埋没”すれば、生まれたときから自他ともに疑うことなく一貫して男／女として生きてきた“男性／女性”という、社会のなかの多数派に同化することができる。しかし、それはあくまで他者からGIDとして眼差されることはなくなるという意味に過ぎない。自分の生活史をふりかえれば、少なくとも周囲から女性として見なされながら送ってきた過去があり、当人を女性と認識して

いる相手との間で築いてきた人間関係がある。当人の歴史性は、FTM/X 自認者が“生まれながらの‘男性’”でないことを示し続けるし、誰よりも当人自身がそれを知っている。FTM/X 自認者達は、女性として出生した過去から現在へとつながる歴史性をもつ存在が“ありのままの自分”であると知りながら、対他的・対社会的には“男性”として“埋没”することを望むのである。カミングアウトの目的に関する共通項に[よりわかり合いたい]があったが、“埋没”は、こうした葛藤を内包した生き方と言えよう (Figure17)。

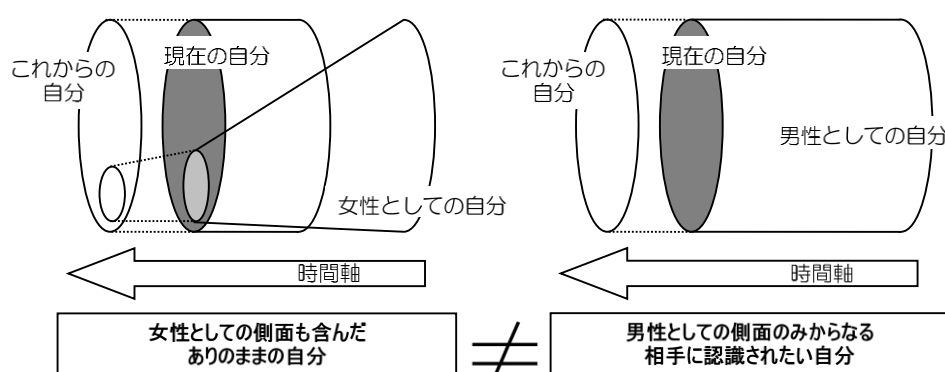


Figure17 ありのままの自分と相手に認識されたい自分の違い

終わりのない努力を要する“適応” カミングアウトし続けることで成立する“適応”を選択すれば、内的にも対他的・対社会的にも、“女性としての側面も含んだ‘ありのままの自分’”でいることができる。“埋没”に内包されるような内的葛藤も生じない。

しかし、“適応”がうまくいくか否かは、カミングアウトした相手が許容的・受容的であるか否定的・拒絶的であるかに依存する部分がある。カミングアウトを済ませた相手とまだ済ませていない相手の間で当人の認識に齟齬が生じたり、両者が一同に介するような場で思わぬ対人摩擦が生じる可能性もある。不本意な噂話が立つかもしれない。

多数派に同化することで社会的不利益を避けられる“埋没”に対し、“適応”は常にリスクを孕んでおり、カミングアウトし続ける勇気と努力が求められる。社会的に当事者運動を展開する者や、芸能活動に従事する者などは、これらのリスクをそのまま引き受けて“適応”を選択しているものと考えられる。

性別二元論へのアンチテーゼ “埋没”と“適応”は、性別違和を有する者が性別二元論の根強い社会に適応していく際にとる典型的適応形態と言える。だが、面接協力者2名の語りからは、[“埋没”・“適応”という考え方自体が自分にあてはまらない]という共通項が抽出されている。

性別違和を有する者が持つ自己イメージ（“自分の中の自分”）は、性別二元論では捉えられない。しかし、相手は性別二元論に基づいて“男性か？女性か？”という視点から当人を認識するため、相手の中にある当人のイメージ“相手のなかの自分”は“自分の中の自分”と一致しないことになる。その際、相手に自分が男女のどちらで認識しているかを参照しながら自らの行動を決めていたのならば、当然、自分の“行動”も性別二元論から影響を受けたものとなる。結果的に、“行動”と“自分の中の自分”までもが不一致状態となってしまう（Figure18）。

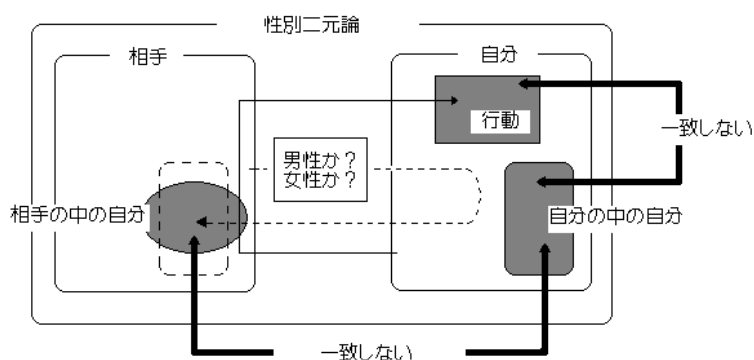


Figure18 相手にどう見られているかを参照して自分の行動を決める場合

この不一致状態を解消させるためには、2つの解決策がある。1つ目の解決策は、Gさんのように、相手に向けて、自分が性別二元論では捉え切れない性のあり様を持つ者であることを伝えることである。これによって、“相手の中の自分”と“自分の中の自分”とがフィットするようになれば、相手が自分をどのような性別と認識しているかを一々参照する必要はなくなる。“自分の中の自分”と“行動”も一致することになる（Figure19）。

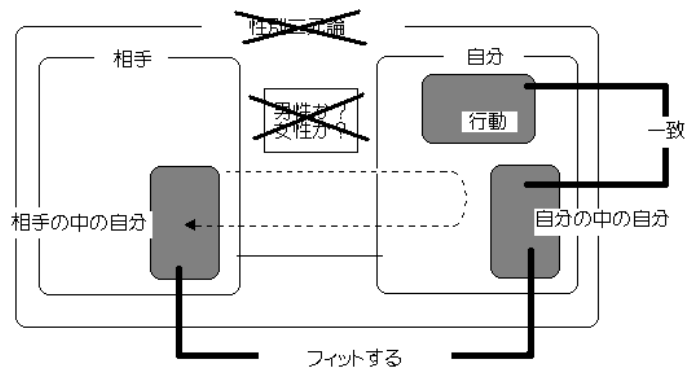


Figure19 性別二元論では捉え切れない性のあり様を相手に伝える場合

2 つ目の解決策は、L さんのように、他者に左右されることのない自己決定に基づいて自分の行動を決めることである。相手が自分を“男性”と認識しているか“女性”と認識しているかを参照せずに行動するため、“自分の中の自分”と“行動”が一致ようになる。ただし、“相手の中の自分”と“行動”は不一致のままとなる (Figure20)。

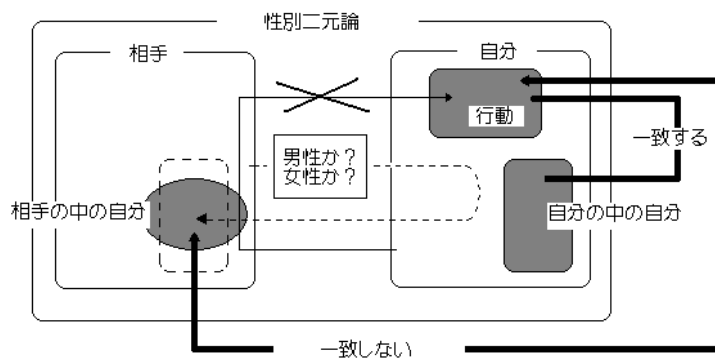


Figure20 性別二元論では捉え切れない性のあり様を相手に伝える場合

2 つの解決策の違いには、性別二元論を瓦解しようとする G さんと、変わらない相手は無視して自己決定した自分の行動を貫けばよいと考える L さんの違いが反映していると考

えられる。後者の場合も、自ら行動で示すことによって相手の中にある性別二元論に疑問を投げかけているため、結果的に性別二元論と対抗することになる点は共通している。

この 2 つの解決策に対して、“男性としての‘埋没’”あるいは“男性としての‘適応’”による解決は、相手が持つ“男性か？女性か？”という問いに“男性”という答えをこちらから与えたり発信したりするものであり、性別二元論には対抗しない。当人は“男性”と認識されるようになった“相手の中の自分”を参照して“男性としての行動”をとるようになるため、“相手の中の自分”と“男性としての行動”は一致する。しかし、Figure17にも図示したように、FTM/X 自認者にとって“ありのままの自分”は、“生まれながらの男性”としての歴史性を持つものではない。“女性”から“男性”に再配置されるだけでは、“男性としての行動”と“自分の中の自分”は一致せず、“相手の中の自分”も“自分の中の自分”と一致しなくなってしまう (Figure21)。

〔“埋没”・“適応”という考え方自体が自分にあてはまらない〕という共通項の背景には、“‘女性’から‘男性’になる”という性別二元論の枠内での再配置では、本来の自分が求めるあり方には到達できないという考えがあるのではないかと考察される。

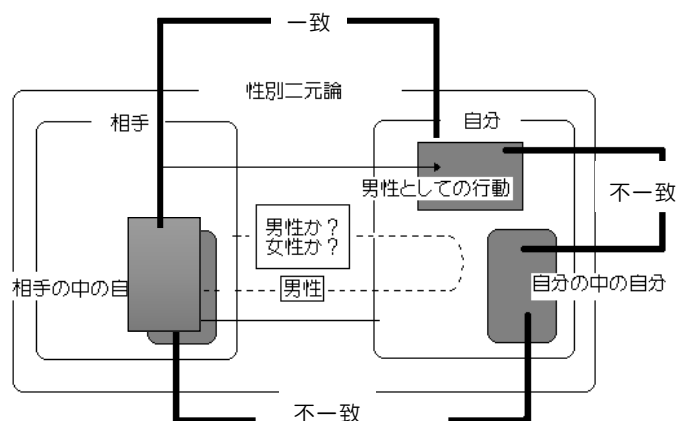


Figure21 “男性”として性別二元論に再配置される場合

よりよい共生社会に必要なこと

性別違和を有する者自身に求める改善努力 性同一性障害の当事者と非当事者がよりよく共生するために必要なものとして、最も多くの面接協力者が挙げていたのは、〔性別の不

一致状態を特別視しない)【価値観】であった。同じく【価値観】に関するものとしては、〔みなが見識を高めて自らの偏見を縮小させていく〕も挙げられていた。これは、当事者と非当事者、双方に対して求められていた。【当事者】については、〔認知拡大のために他者や社会に働きかける〕ことが多く挙げられたが、当事者自身が〔当事者であることを自分のマイナス要素と考えない〕こと、〔相手に伝わるように自分を表現する〕こと、〔一方的でない対話的なカミングアウトを心がける〕こと等、性別違和を有する者達自身にさらなる努力を求める意見が少なくなかった。当事者と非当事者の双方に改善と努力の余地があり、そのためにまず、性別違和を有する者達自身が自らの存在やあり方を表現したり伝え方を工夫したりといった努力が必要と考えられていることがわかる。

性別の多様性を考慮した社会への変化 【社会の体制と環境】に関する共通項には、〔“男・女”の不要な区別を緩やかにする〕や〔性別の選択肢を増やす〕等があった。性別の二元的理解に拠って構築されてきた社会体制を再考し、より性の多様性を柔軟に理解したものへと改変していくことが求められているものと考えられる。一方で、〔“個対個”を超えた寛容な社会的風土をつくる〕が得られており、“個対個”の対人関係においては、性別違和を有するものの存在に関する認知や性別二元論では捉えられない有り様を持つ者への寛容さがある程度が育まれていると認識されていると理解される。これらのことから、FTM/X自認者達のなかでは、個々人の偏見縮小や認知拡大に比して、より大きな社会的変革の要請が高まっている現状がうかがわれる。

自己防衛のための求め 〔戸籍の名や性別の変更手続きを簡略化する〕や〔医療資源の充実と整備を進める〕は、身体的性別とは反対の性別への帰属感や身体的特徴を手に入れるために採られる、代表的手段である。グループ名だけを見れば、性別違和の軽減を目指した求めとも理解される。しかし、本研究で問うたのは、“非当事者との共生のために必要なこと”であり、“性別違和の軽減に必要なこと”ではない。こうした文脈的理解を踏まえると、これらは、“性別二元論”という社会的・認知的枠組みを持つ他者や社会の側が“男・女”の境界を越境する者に抱く違和感を未然に防ぐことができる、一種の自己防衛手段として求められていることが考察される。

第5節 男性への帰属意識と発言内容の違い

第3節および第4節では、性別違和を有する者達は、他者や社会から“男（性）”と認識されたり見なされたりされるような性別の特徴を有しているか否かで、“埋没”が自身の現実的な選択肢となるか否かが変わると感じていることがわかった。そのため、現実的に採っている適用様式と希望している適用様式が一致していない者が散見された。また、適用様式の選択は、その当人の性別違和感の強さや性自認にあり様によっても異なると考えられる。

そこで本節では、(a) 本人が自認する性別の属性、(b) 現在の適応様式、(c) 希望する適応様式という3通りの観点から面接協力者を群分けし、各群の特徴を検討する。

1 面接協力者の群分け

研究1の面接協力者15名のうち、自認する性別の属性が明言されなかった1名を除く14名について、自認する性別の属性を基準とした群分けを行った。その結果、“男性”との同一感が高いと考えられる方から順に、FTMTS群(4名)、FTMTG群(6名)、FTX群(4名)の3群が得られた。また、Table4に基づいて、“主とした現在のあり方”の観点から埋没群(4名)(女性としての“埋没”は除いた)、臨機応変群(1名)、適応群(7名)、ありのまま群(2名)の3群、“主として希望するあり方”の観点から埋没群(10名)、臨機応変群(2名)、ありのまま群(3名)の3群をそれぞれ得た。3つの観点から行った群分けの結果をTable7に示す。

なお、“FTMTS”、“FTMTG”、“FTX”の群分けはすべて本人が自認する性別の属性として自己申告した回答に基づいており、性別適合手術を望むか望まないか等の精神医学的診断や鑑別の如何には依拠していない。自身であえて“TS”と付言するような強い男性への帰属意識がうかがわれる者をFTMTS群、性別違和感があっても“FTM”とは表明されないような男性への帰属感が明確でない者をFTX群、FTMTS群およびFTX群に含めるのは適当でないと考えられる場合は、FTM/X自認者のなかで平均的な男性への帰属感を持つ者として、FTMTG群にまとめた。Table7には、各群に含まれた面接協力者が自認していた属性と、主とした現在の適用様式、主とした希望する適用様式を一覧にして示した。

Table7 自認する性別の属性を基準とした面接協力者の群分けとその内訳

分析上の群分け	自認する性別の属性	主とした現在のあり方		主として希望するあり方	
FTM TS 群	FTM TS	E	臨機応変 ^{b)}	(男性として)	臨機応変 (男性として)
		H	埋没	(男性として)	埋没 (男性として)
		J	埋没	(男性として)	埋没 (男性として)
		M	埋没	(男性として)	埋没 (男性として)
FTMTG 群	FTM	A	埋没	(男性として)	埋没 (男性として)
		C	適応	(男性として)	臨機応変 (男性として)
		D	適応	(男性として)	埋没 (男性として)
		K	適応	(男性として)	埋没 (男性として)
		F	適応	(男性として)	埋没 (男性として)
	FTM TG	B	適応	(男性として)	埋没 (男性として)
FTX 群	FTX (M)	O	適応	(男性として)	臨機応変 (男性として)
	中性	N	埋没	(女性として)	ありのまま
	FTX	G	ありのまま ^{c)}		ありのまま
	FT?	L	ありのまま		ありのまま
—	わからない ^{a)}	I	適応	(男性として)	埋没 (男性として)

a) 自身の性自認と男性と婚姻関係にあることの矛盾のために明言できないという回答であったため、このように表記した

b) 場面や相手によって“埋没”と“適応”を意図的・戦略的に使い分けていることを指す

c) 他者や社会から一般的な“男性”として安易に再配置されたくないと考えていることを指す

2 カミングアウトにまつわる不安に関する発言内容の違い

カミングアウトにまつわる不安に関して、本章第4節で得られた共通項に言及した3観点各群の人数は、Table8 のようであった。

自覚する性別の属性による群分け

FTM TS 群と FTMTG 群では全員が〔拒否・否定・嫌悪される懸念〕を挙げた。しかし、FTX 群は半数にとどまった。これに類似する〔偏見の目で見られてしまうこわさ〕は、FTM TS 群と FTX 群では半数の者が挙げたのに対し、FTMTG 群では6名中1名にとどまった。FTM TS 群では誰も言及しなかった〔“GID”としてラベルづけられる不本意感〕は、FTMTG 群でも6名中1名とわずかだったが、FTX 群では半数の者が言及していた。〔相手にかかる負担や迷惑への気がかり〕は、FTM TS 群および FTMTG 群で多数から言及されていたが、FTX 群では4名中1名にとどまった。反対に、〔社会生活を閉ざさせる恐ろしさ〕に言及していたのは、FTM TS 群および FTMTG 群では皆無、FTX 群では4名中3

名であった。

Table8 「カミングアウトにまつわる不安」の共通項に言及した各群の人数

	自認する性別の属性			主とした現在のあり方				主として希望するあり方		
	FTM TS群 (4名)	FTM TG群 (6名)	FTX 群 (4名)	埋没 群 (4名)	臨機 応変群 (1名)	適応 群 (7名)	ありの まま群 (2名)	埋没 希望群 (9名)	臨機 応変 希望群 (3名)	ありの まま 希望群 (3名)
拒否・否定・嫌悪される懸念	4	6	2	4	1	7	1	9	3	1
関係性の変化や崩壊の懸念	3	4	2	3	1	5	1	7	2	1
偏見の目で見られてしまうこわさ	2	1	1	2	0	2	1	4	0	1
噂になる心配	1	3	0	1	0	3	0	4	0	0
相手にかかる負担や迷惑への気がかり	3	5	1	4	0	4	1	7	1	1
誤って理解される懸念	2	2	1	1	1	3	0	2	3	0
“GID”としてラベルづけられる不本意感	0	1	2	0	0	1	2	1	0	2
GIDを理由に就職差別を受ける懸念	2	2	2	2	0	3	1	4	1	1
社会生活を閉ざされる恐ろしさ	0	0	3	0	0	1	2	0	1	2

主とした現在のあり方による群分け

〔“GID”としてラベルづけられる不本意感〕と〔社会生活を閉ざさせる恐ろしさ〕について、ありのまま群では2名ともが言及しているのに対して他の群では皆無であった。特に目立った特徴はなく、自認する性別の属性を観点とした場合の言及傾向と大差ない。

主として希望するあり方による群分け

〔拒否・否定・嫌悪される懸念〕は、埋没希望群と臨機応変希望群の全員が挙げていたが、ありのまま希望群で挙げたのは1名にとどまった。〔関係性の変化や崩壊の懸念〕も同様の傾向を示していた。〔偏見の目で見られてしまうこわさ〕と〔噂になる心配〕では、埋没希望群の約半数が言及していたのに対し、臨機応変希望群では皆無で、ありのまま希望群は1名が前者のみを挙げていた。〔誤って理解される懸念〕は、臨機応変希望群では全員が言及していたが、埋没希望群では9名中2名、ありのまま希望群では皆無であった。

3 カミングアウトの目的に関する発言内容の違い

カミングアウトの目的に関して、本章第4節で得られた共通項に言及した3観点各群の人数は、Table9 のようであった。

Table9 「カミングアウトの目的」の共通項に言及した各群の人数

	自認する性別の属性			主とした現在のあり方				主として希望するあり方		
	FTM TS群 (4名)	FTM TG群 (6名)	FTX 群 (4名)	埋没群 (4名)	臨機 応変群 (1名)	適応 群 (7名)	ありの まま群 (2名)	埋没 希望群 (9名)	臨機 応変 希望群 (3名)	ありの まま 希望群 (3名)
男性として扱って欲しい	2	6	0	3	0	5	0	7	1	0
ありのままの自分を 知ってもらいたい	2	2	2	2	1	2	1	3	2	1
より分かり合いたい	2	0	1	2	0	0	1	2	0	1
生きやすくなりたい	0	2	0	0	0	2	0	1	1	0
相手の助けや協力が欲しい	2	3	3	1	1	4	1	4	2	2
治療への同意や許可が 欲しい	2	4	0	3	0	3	0	5	1	0
就職のために必要になった	3	2	1	2	1	3	0	4	2	0

自覚する性別の属性による群分け

FTMTG 群では、6名中6名が「男性として扱って欲しい」に言及していたが、FTMTS 群では半数の者しか言及しておらず、FTX 群では皆無であった。「ありのままの自分を知ってもらいたい」は、FTMTS 群、FTMTG 群、FTX 群のいずれでも、約半数の者によって言及されていた。FTMTS 群と FTMTG 群で、約半数の者から挙げられていた「治療への同意や許可が欲しい」であったが、FTX 群では皆無であった。「生きやすくなりたい」と「言わなければならない状況に置かれた」は、FTMTG 群でのみ認められた。

主とした現在のあり方による群分け

「よりわかり合いたい」は、埋没群とありのまま群で挙げられていたが、臨機応変群と適応群では皆無であった。その他は、自覚する性別の属性を基準に群分けした場合と、概ね同様の結果が得られた。

主として希望するあり方による群分け

〔ありのままの自分を知ってもらいたい〕は、臨機応変希望群の2名中2名ともが言及していたが、埋没希望群は9名中2名、ありのまま群では3名中1名にとどまった。また、〔言わなければならない状況に置かれた〕は、埋没希望群でのみ言及されていた。その他は、自覚する性別の属性を基準に群分けした場合と、概ね同様の結果が得られた。

4 “埋没”と“適応”に関する発言内容の違い

“埋没”と“適応”に関する考えについて、本章第4節で得られた共通項に言及した3観点各群の人数は、Table10のようであった。

Table10 「埋没」と“適応”に関する考え」の共通項に言及した各群の人数

	自認する性別の属性			主とした現在のあり方				主として希望するあり方		
	FTM TS群 (4名)	FTM TG群 (6名)	FTX 群 (4名)	埋没 群 (4名)	臨機 応変群 (1名)	適応 群 (7名)	ありの まま群 (2名)	埋没 希望群 (9名)	臨機 応変 希望群 (3名)	ありの まま 希望群 (3名)
埋没										
周りに人に負担や迷惑を かけなくて済む	0	1	0	1	0	1	0	2	0	0
女性として生きてきたこと等を わざわざ言わなくて済む	2	3	1	2	0	4	0	5	1	1
社会的に不利にならずに済む	1	1	1	1	0	2	0	2	1	0
GIDとして生き続けなくて済む	2	2	0	2	0	2	0	4	0	0
カミングアウトした相手の反応に 左右されないで済む	0	3	2	0	0	4	0	3	1	1
適応										
外見で男性と認識されないなら 適応するしかない	2	5	0	2	1	4	0	6	1	0
戸籍の性別が女性だから 埋没はできない	2	4	1	3	0	5	0	7	1	0
女性としての身体的特徴は 変えようがない現実がある	1	2	2	2	0	2	1	3	1	1
過去を隠して嘘をついてまで 埋没したくない	0	5	1	1	0	4	1	4	1	1
“埋没”・“適応”という考え方自体が 自分にあてはまらない	0	0	2	0	0	0	2	0	0	2

自覚する性別の属性による群分け

“埋没”のメリットに関する共通項、〔女性として生きてきたこと等をわざわざ言わなくて済む〕は、FTMTS群とFTMTG群で半数の者によって言及されていたが、FTX群では4名中1名にとどまった。〔GIDとして生き続けなくて済む〕への言及傾向も、これに類似

していた。〔カミングアウトした相手の反応に左右されずに済む〕は、FTMTG 群と FTX 群で半数の者が言及していたのに対し、FTMTS 群では誰も言及していなかった。

〔外見で男性と認識されないなら適応するしかない〕は、FTMTG 群の 6 名中 5 名によって言及されており、FTM 群でも 4 名中 2 名に認められたが、FTX 群では皆無であった。これと類似する言及傾向は、〔戸籍の性別が女性だから埋没はできない〕にも認められた。FTMTG 群で 6 名中 5 名によって挙げられた〔過去を隠して嘘をついてまで埋没したくない〕は、FTX 群で 4 名中 1 名にとどまり、FTMTS 群では皆無であった。〔“埋没”・“適応”という考え方自体が自分にあてはまらない〕は、FTX 群の 2 名のみが言及していた。

主とした現在のあり方による群分け

自覚する性別の属性を基準にした群分けと概ね同様の結果が得られ、臨機応変群とありのまま群は、“埋没”に関する共通項に一切言及していないことがわかった。

主として希望するあり方による群分け

どの語りの共通項についても、臨機応変希望群とありのまま希望群はほとんど言及していないことがわかった。その他、全体の傾向として特徴的な結果は認められなかった。

埋没希望群（全 9 名）だけに着目すると、〔女性として身体的特徴は変えようがない現実がある〕に言及していたのは 10 名中 3 名にとどまるのに対し、〔戸籍の性別が女性だから埋没はできない〕と〔外見で男性と認識されないなら適応するしかない〕は、比較的多数の者によって言及されていることがわかる（順に 10 名中 7 名、6 名）。

5 よりよい共生社会に必要なことに関する発言内容の違い

よりよい共生社会に必要なことに関して、本章第 4 節で得られた共通項に言及した 3 観点各群の人数は、Table11 のようであった。

Table11 「よりよい共生社会に必要なこと」に関する共通項に言及した各群の人数

	自認する性別の属性			主とした現在のあり方				主として希望するあり方			
	FTM TS群 (4名)	FTM TG群 (6名)	FTX 群 (4名)	埋没群 (4名)	臨機 応変群 (1名)	適応 群 (7名)	ありの まま群 (2名)	埋没 希望群 (9名)	臨機 応変 希望群 (3名)	ありの まま 希望群 (3名)	
当事者	相手に伝わるように自分のことを表現する	0	2	1	1	0	2	0	2	1	0
	認知拡大のために他者や社会に働きかける	1	5	0	2	0	5	0	6	1	0
	当事者であることを自分のマイナス要素と考えない	1	1	1	0	1	2	0	0	3	0
	一方的でない対話的なカミングアウトを心がける	0	1	1	0	0	2	0	0	2	0
	当事者同士で集まれる居場所をつくる	1	0	1	1	0	0	1	1	0	1
価値観	性別ありきではなくまずは人間として相手を見る	2	0	0	2	0	0	0	2	0	0
	性別の不一致状態を特別視しない	1	5	2	1	1	6	1	5	3	1
	みなが見識を高めて自らの偏見縮小させていく	3	2	2	2	1	4	0	5	2	1
社会の体制と環境	“個対個”を超えた寛容な社会的風土をつくる	0	1	1	0	0	1	0	1	0	1
	“男・女”の不要な区別を緩やかにする	1	3	1	1	1	3	0	3	2	0
	性別の選択肢を増やす	0	2	1	0	0	3	0	3	0	1
医療	戸籍の名や性別の変更手続きを簡略化する	3	4	1	3	1	4	0	6	2	0
	医療資源の充実と整備を進める	3	2	1	3	1	1	1	4	1	1
	治療の保険適用等によって社会保障を適正化する	1	1	0	2	0	0	0	2	0	0

自覚する性別の属性による群分け

FTMTG 群では 6 名中 5 名が〔認知拡大のために他者や社会に働きかける〕(【当事者】)に言及していたが、FTMTS 群では 4 名中 1 名と少なく、FTX 群では皆無であった。〔性別の不一致状態を特別視しない〕(【価値観】)にも類似する言及傾向が認められたが、こちらは、FTX 群でも 4 名中 2 名が言及していた。

〔相手に伝わるように自分のことを表現する〕と〔一方的でない対話的なカミングアウトを心がける〕(いずれも【当事者】に関する共通項)は、FTMTS 群では全く言及されていなかったが、FTMTG 群と FTX 群ではそれぞれ少数の者が言及していた。同様の傾向は、〔“個対個”を超えた寛容な社会的風土をつくる〕と〔性別の選択肢を増やす〕にも認められた(いずれも【社会の体制と環境】に関する共通項)。これに対して、〔性別ありきではなくまずは人間として相手を見る〕(【価値観】)は、FTMTS 群 4 名のうち 2 名だけ

が言及していた。〔医療資源の充実と整備を進める〕（【医療資源】）は、FTMTS 群にて 4 名中 3 名が言及しており、他の群よりも比較的多数の者が言及していた。

主とした現在のあり方による群分け

埋没群（4 名）において、〔当事者であることを自分の要素と考えない〕および〔一方的でない対話的なカミングアウトを心がける〕（いずれも【当事者】に関する共通項）に言及した者は皆無であった。また、適応群（7 名）では、〔当事者同士で集まれる居場所づくり〕（【当事者】）や〔性別ありきではなくまずは人間として相手を見る〕（【価値観】）、〔治療の保険適用等によって社会保障を適正化する〕（【医療】）への言及が一切なかった。そのほかの結果は概ね、自覚する性別の属性による群分けと傾向を同じくしていた。

主として希望するあり方による群分け

〔当事者であることを自分のマイナス要素として捉えない〕（【当事者】）は、臨機応変希望群の 3 名全員から言及されていたが、他の 2 群で言及した者はいなかった。また、〔“男・女”の不要な区別を緩やかにする〕と〔戸籍の名や性別の変更手続きを簡略化する〕（いずれも【社会の体制と環境】に関する共通項）では、埋没希望群と臨機応変希望群で一定数の者から言及があったのに対し、ありのまま希望群では誰も言及していなかった。埋没希望群の 9 名中 6 名は、“男性としての埋没”を希望していながら、当事者達自身が〔認知拡大のために他者や社会に働きかける〕ことの必要性にも言及していた。

6 第 5 節の考察

自覚する性別の属性による違い

“男性”への帰属意識は、FTMTS 群（4 名）が一番強く、続いて FTMTG 群（6 名）、FTX 群（4 名）の順に強いと考えられる。実際に、FTMTS 群は、よりよい共生社会のために必要なこととして、“男性”への性別移行を励ますような〔医療資源の充実と整備を進める〕や〔戸籍の名や性別の変更手続きを簡略化する〕等に言及する傾向にあった。FTMTG 群に特徴的であった、〔社会生活を閉ざされる恐ろしさ〕（カミングアウトにまつわる不安）は感じていない。一定の“男性”への帰属感が高いことで、“男性”としての社会生活を

比較的見通しやすいためと考えられる。FTMTG 群で多くの者が言及していた〔過去を隠して嘘をついてまで埋没したくない〕（“埋没”と“適応”に関する考え）について、FTMTS 群は誰も言及していないことも特徴的と言える。

非常に興味深いのは、FTMTG 群では 6 名全員が言及していた〔男性として扱って欲しい〕（カミングアウトの目的）について、より強い“男性”への帰属感を有していると捉えられる FTMTS 群では 4 名中 2 名だけが言及していたことである。FTMTS 群はその“男性”への帰属感の強さから身体的治療への志向性も高い。比較的速やかに“男性”と認識され得るような外見が得るため、自分から求めずとも“男性”として扱われる経験も多いが、相手から“女性”として認識されていた時期はないわけではない。

ここで本章第 3 節の事例的検討を見てみると、FTMTS 群に含まれる面接協力者は、“自身の本来の姿は‘男性’だ”という意識が強いことから、“ありのままの自分として生きること”が、“‘男性’として生きること”と極めて近い意味合いを持っており、ほぼ同義とも捉えられることがわかる。このことから、相手に自分の当事者性や性自認を告げ、それをそのまま受け止めた形で扱われることが、そのまま自分の希望通り“男性”として扱われることになるため、あえてそれをカミングアウトの目的には据えないのだと考えられる。

逆に FTMTG 群は、“男性”として扱われることを目的としたカミングアウトを最もよく行っていると言える。“埋没”と“適応”に関する考えについては、6 名中 5 名が〔外見で男性と認識されないなら適応するしかない〕に言及しており、自らが他者から“男性”として認識され得るかどうかに関心を寄せていることが示唆される。また、〔過去を隠して嘘をついてまで埋没したくない〕に言及した者も 6 名中 5 名となっており、“男性”としての生き方を求めながらも、自らを“生まれながらの男性”ではない存在と捉える傾向にあることが示唆される。非当事者とのよりよい共生社会のために必要なものについては、〔認知拡大のために他者や社会に働きかける〕と〔性別の不一致状態を特別視しない〕で言及している人数が多かった。これからから、FTMTG 群は、“GID 当事者”であることを最も引き受けている者達と捉えられる。

FTX 群には 4 名が含まれたが、カミングアウトの不安や目的などを含む 4 観点いずれの共通項についても、概ね 1～2 名が言及しており、4 名全員によって言及されている共通項はなかった。性自認のあり方や考えに個別性が高く、各個が独自の見解や姿勢を持っていることが結果に反映したと推測される。

他の群と比較することで一定の傾向を見い出せることとしては、FTMTS 群および FTMTG 群では誰も挙げなかった〔社会生活を閉ざされる恐ろしさ〕(カミングアウトにまつわる不安)を、FTX 群では 4 名中 3 名が言及していたことが挙げられる。FTX 群は、“自分は‘女性’ではないとの感覚を有しているが、それは“男性”という言葉では捉え切れないものであることを特徴とする。そのため、カミングアウトによって自らの当事者性や性自認が他者に明らかになること、つまり、“男性”にも“女性”にも振り分けられない特異な存在と認識されるようになるだろうとの悲観的予測が、性別二元論の根強い社会での居場所を失う不安を喚起させ、“社会で生きていけないかもしれない”恐ろしさとして体験されるのではないかと考えられる。

主とする現在のあり方による違い

主とした現在のあり方を基準とした群分けでは、埋没群(4名)、臨機応変群(1名)、適応群(7名)、ありのまま群(2名)の4群を得た。しかし、埋没群と適応群の特徴と傾向、2群の異同は、自覚する性別の属性による群分けで得た FTMTS 群と FTMTG 群のものと酷似したものとなった。これには、埋没群4名中3名が自覚する性別の属性で FTMTS 群となった者、適応群7名中5名が FTMTG 群となった者で構成されていたことが影響したと考えられる。また、臨機応変群とありのまま群は、どちらも群の人数自体が少ないこともあってか、特筆すべき差異を見い出すには至らなかった。

群分けの結果から、性別違和を有する者が採っているあり方の現状は、各個が自覚する性別の属性がそれなりに反映したものと考えられることができる。あるいは、本研究において面接協力者によって表明された性別の属性は、その人の内的感覚に基づいた性自認としてのみならず、自身の現在のあり方までも包括した“現状説明”としての意味合いを含むものとなっていたのかもしれない。

主として希望するあり方による違い

主として希望するあり方を基準とした群分けにより、埋没希望群(9名)、臨機応変希望群(3名)、ありのまま希望群(3名)の3群を得た。

埋没希望群(全9名)には、FTMTS 群の4名中3名と FTMTG 群の6名中4名が含まれた。主とした現在のあり方を基準とした際の埋没群は4名だったが、希望するあり方を基準とすることで、適応群であった者から5名が埋没希望群に含まれることになった。こ

の群分けの結果から、面接調査実施時点では主として“適応”の状態にある者であっても、その多くが希望していた適応形態は“埋没”であったことがわかる。より詳しく見てみると、“埋没”すれば〔GIDとして生き続けなくて済む〕という共通項に言及していた4名は、いずれも埋没希望群に群分けされており、“埋没”を志向している。〔周りの人に負担や迷惑をかけなくて済む〕という“埋没”のメリットに言及した2名も、埋没希望群である。これからのことから、FTM/X自認者が“埋没”を志向する背景には、“男性”に対する帰属感や性別違和に由来する心理的苦痛の軽減という個人の自己決定に委ねられた積極的動機のみならず、社会における多数派に同一化することで社会的スティグマを免れたいというような、社会環境によって科せられた消極的動機が存在することが類推される。

“埋没”と“適応”を臨機応変に使い分けていくことを望む臨機応変希望群には、3名の面接協力者が含まれた。この臨機応変希望群3名全員が言及した共通項のなかに、埋没希望群とありのまま希望群では誰からも言及されていなかったものがある。〔当事者であることを自分のマイナス要素と考えない〕（よりよい共生社会に必要なこと）である。〔一方的でない対話的なカミングアウトを心がける〕も、臨機応変希望群の3名中2名のみによって言及されていた。また、これは他の群でも言及されていた共通項ではあるが、〔性別の不一致状態を特別視しない〕は、臨機応変希望群3名全員が言及していた。これからのことから、“埋没”と“適応”を主体的に意図的に使い分けていくことを希望する者は、自身の当事者性を受容的・肯定的に捉えており、他者や相手に自らのあり方や考えを伝えていくことでよりよく相互理解を図っていくような、協調的なカミングアウトを好む傾向にあることが考察される。

第4章 F to M/X 性別移行過程の検討（研究2）

第1節 研究2の問題と目的

1 研究2の問題意識

性自認の多様性と社会適応の多様性

FTM/X 自認者の社会適応のあり方について検討した研究1によって、性別違和を有する者にとって、性自認と他者から認識される性別とが合致した状態は、意識的に決断・表明し、獲得していく必要があることがわかった。また、多くのFTM/X 自認者が希望する“男性としての埋没”には、社会との摩擦を軽減するメリットがあるものの、指定された性別として生きてきた本人の過去を隠すことで新たな内的葛藤が生じうる社会適応形態であることが示唆された。これらのことから、単に“男性／女性から女性／男性へ”というような、性別二元論の枠組みに再配置するような考えのみを前提としていては、当事者本人のなかで培われ、一定の一貫性を持って持続されるようになった性別のあり様や生きる姿勢を十分に捉えることはできないと考えられる。

社会的なあり方を再獲得していくプロセス性への注目

日本精神神経学会性同一性障害に関する委員会（2006）は、性同一性障害当事者の持つ一様でないジェンダー・アイデンティティについて、“「生をどのように生きるのか」、そして「性をどのように生きるのか」という価値観ないし人生観の違いに由来する部分が大きいもの”と述べている。性別のあり様が人間存在の根本をなす1つの要素としてその人の人生に影響を与えている事実を踏まえるならば、性別違和を有する者の社会適応のあり方も性別二元論では捉えきれない多様性を持つことが本来的であると考えられる。同じように、身体的性別に即した生き方から本人に独自の性自認に沿った本来的な生き方へと移行していく過程のなかで生じる本人なりの社会的あり方の再獲得は、性別違和を有する者達がひとりの尊厳ある“個”として社会のなかで生きることとほぼ同義であると理解される。

このように、性別違和を有する者の性自認に沿った well-being 実現に対する支援・援助を考える上で、社会的なあり方の再獲得は、注目すべき重要な主題と考えられる。

本書第3章では、FTM/X 自認者 15 名の語りを素材とした事例的記述と社会適応形式の模式化（第3節）、面接協力者 15 名が語った意味内容の共通項の抽出（第4節）、自認する性別の属性、主とした現在のあり方、主として希望するあり方という3観点を切り口とした“男性”への帰属意識や“埋没”への志向性の強さと社会適応のあり方の関連の探索（第5節）を行った。これにより、FTM/X 自認者が社会のなかで直面している課題の実態、生まれながらの“男性”ではないことで経験することになる心理社会的葛藤のあり様、“男性”としての“埋没”志向を高めている社会環境要因等、一定の探索的知見を得ることができた。

しかしながら、第3章で行ってきたような、高い個別性をそのまま活かした事例的検討、面接調査実施前に立てていた設問を観点とした群分けおよび記述統計による探索的検討では、時間的プロセスを伴う性別移行体験を捉えるには十分でない。自身を性同一性障害当事者と自認していくまでの経緯や、様々なリスクを予測しながらもカミングアウトを決行していくことになる背景や動機、カミングアウトを契機とした当人とカミングアウト相手との関係性の変遷等に知見を得ていくには、その結果に時間的プロセスを包含できるような手法によって語りを再分析していく必要がある。

またその際には、カミングアウトの相手との相互作用、カミングアウトを重ねていくなかで高まっていく自己確立の度合い、自らの社会適応形式の選択に影響を与えていることが示唆された身体的・外見的性別移行の進捗等も考慮に加えていく必要性が指摘される。

2 研究2の目的

研究2では、すでに多様なあり方で社会のなかに生きている性別違和を有する者が経験した（している）性別移行について聴取した研究1で得られた逐語録を素材とし、当事者が身体的性別に拠らない社会的あり方を再獲得していく過程を描出することを目的とする。

第 2 節 研究 2 の方法

1 データの収集

研究 2 で行う質的検討は、研究 1 で実施した半構造化面接をもとに作成した逐語録を素材にして行う。したがって、面接協力者の選定、面接協力者の募集からデータ収集までの手続き、倫理事項については、第 3 章第 2 節を参照されたい。

2 M-GTA によるプロセス理論の生成

研究 2 では、指定された性別に即して“女性”として生きてきた FTM/X 自認者が、その独自の性自認に沿ったあり方へと性別移行していくなかで行う社会適応の再構築について、時間的プロセス性を包含した理論の生成を試みる。また、“社会適応”を取り上げるため、内的な心理的变化だけでなく、社会との相互作用についても理論に組み込まれることが望ましいと考えられる。これらを踏まえて最適な質的研究法を検討した結果、木下(2003)が提唱した修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Modified Grounded Theory Approach : 以下, M-GTA) を採用することが適当と判断された。

M-GTA とは

M-GTA は、Glaser & Strauss (1967) によって提案されたグラウンデッド・セオリー・アプローチ (Grounded Theory Approach : 以下, GTA) の特性を活かしつつ、より実践しやすい修正版として提案された質的研究法である。(a) 人間と人間が直接的にやりとりする社会的相互作用にかかわる、(b) ヒューマンサービス領域の研究で、(c) 研究対象とする現象がプロセス的性格を持っている場合に有効とされており、半構造化面接を前提に考えられた研究法である点が特徴と言える。

GTA の利点と課題

GTA の誕生 1960 年代のアメリカ社会学では、行動力豊かな社会学者によって論理・演繹的に導かれた理論が社会学の研究水準を代表するものとして位置づけられ、そこから導かれた仮説の検証がむやみにくり返されていた。その結果、証明されなかった仮説であっても、そのあり方を省みて問い直すことよりも検証方法の高度化によって対処する時代

的風潮が生まれていた（木下，1999）。この検証偏重の研究に対する問題意識と批判のなかで生まれたのが、データの徹底的重視を原則とする Glaser & Strauss（1967）の立場であり、その立場設定を媒介にして生まれたのが、データから丁寧に分析概念を作り出していく GTA である。GTA の特性として、分析過程において分析概念が創出されると、個々のデータは分析上不要なものとなる。言い換えれば、創出した概念はすでに元のデータを説明し得るものになっている必要があるのである。さらに、創出された概念は、元のデータの事柄に加えて周囲の事柄をも説明し得る可能性を有しており、比較検討作業のなかでさらなる概念的精緻化が図られていく。つまり、GTA の分析過程において重要なのは個々のデータから生成された概念となる。こうして創出された複数の概念が相互に関連づけられ、かつ、1つのコア・カテゴリーを中心にまとめ上げられたものだけが、“グラウンデッド・セオリー”と呼ぶに値する研究結果とされている。

GTA の限界と課題 しかし、GTA には、(a) 分析手続きのなかに方法が明確でない部分があること、(b) データの切片化によって語りの文脈が断ち切られてしまうために深い解釈ができないこと、(c) 時代の流れによる認識論の変遷から質的研究の今日的状況に合致しない点があることの課題があった。GTA のよい部分を継承しながら、こうした3つの課題を克服できるように改変した質的研究法が、M-GTA である。

M-GTA の特徴的分析手技

M-GTA における分析とは、思考の徹底的言語化と選択的判断の積み重ねによる解釈によって、ディテールの豊富な質的データから説明力のある概念をつくり、それを構成単位とする理論を生成することである。さらに、分析過程で行われた思考の言語化と選択的判断が分析ワークシートによって可視化されることで、データの解釈プロセスを他者と共有することが可能となっている。この分析過程の可視化が、M-GTA と他の質的研究法とに一線を画す M-GTA の強みであり、M-GTA の分析結果として生成される理論の信頼性を担保するものとなっている。本項では、M-GTA による特徴的な分析手続きについて述べたい。しかし、本来 M-GTA による分析プロセスは Figure22 のように複合的・多重的に進んでいくため、手続きを時系列に沿って記述することが難しい。そこで、おおよその時間の流れをなぞりながら、M-GTA における特徴的な分析手技を以下に記述する。

分析テーマ M-GTA では、データを分析していく角度と方向性を明確化するために分析テーマを設定する。この分析テーマは研究の目的に即して研究開始時にあらかじめ設定

される。しかし、M-GTA ではデータに密着（grounded on data）した分析を行うため、分析初期においては分析テーマが適切かどうかをデータとの対話によって繰り返し検討する必要がある。データとの対話のなかで分析テーマが決定された以後、すべての分析は分析テーマとの対応を確認しながら行われる。

分析焦点者 M-GTA では、分析対象とするデータ範囲を限定することが分析の第一歩となる。ここでの限定とは、関連性の高い微妙な違いを基準に対象者と非対象者をはっきりわけることである。さらに、この限定の手続きを記述によって開示することで、結果として生成されたグラウンデッド・セオリーは分析焦点者という限定集団から得られた理論として提示されることとなり、提示された理論の適用可能範囲と多様性のある現場で活用される際の実践者による応用可能範囲が明確化される。

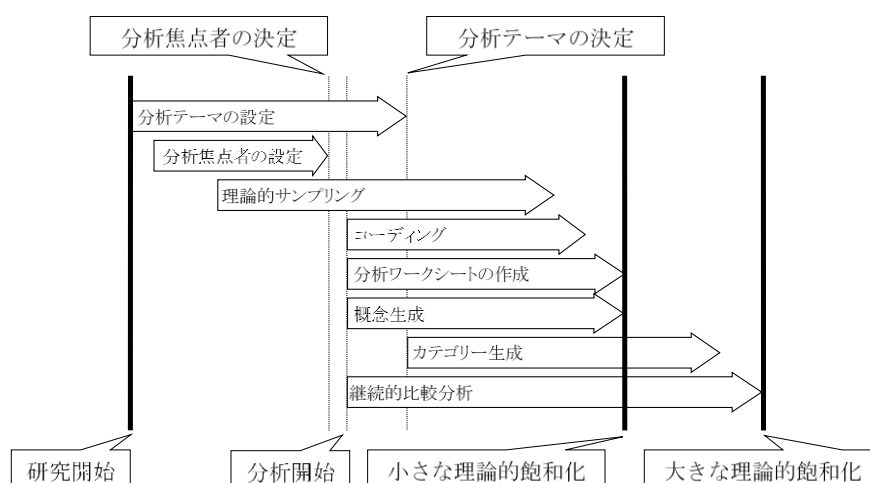


Figure22 M-GTAによる分析プロセス

理論的サンプリング M-GTAは、個人の比較それ自体ではなく、ある特性を共有する集団に着目し、その一員に位置づけられる個人を、集団の特性に照らして比較することで分析を進めていく。面接協力者は、予め着目することに決めた集団（分析過程では面接協力者を集合させた“分析焦点者”と捉えていくことになる）に含まれるような者とし、一定数から語りを聴取することでデータの収集を行う。その際、集団が共有する固有の特性を的確に捉えていく収縮化とその特性をもれなく扱うために必要な程度に視野を広げていく拡大化とを繰り返しながら、分析焦点者の限定範囲を明確にしていく。限定範囲が明確に

なったならば、その範囲内で多様な属性を持つ者から網羅的にデータを収集していきけるように、理論的サンプリングを行う。理論的サンプリングは、研究テーマに照らした理論的・現実的判断を積み重ねていくことで限定範囲内で抜けや偏りのない網羅的なデータ収集を行えるように工夫されたサンプリング方法である。理論的サンプリングのための検討はデータの収集前から分析開始後まで引き続いて行われるもので、理論生成に必要なデータが十分に得られたと判断されたところで終了する。

コーディング M-GTA では、面接データをシステムティックにコーディングすることでデータと生成される概念や理論との対応関係を確保していく。分析の最小単位は、意味のまとまり（以下、具体例）とし、その語りが意味を失う程度に細かな切片化は行わない。切片化によってデータの中に表現されているコンテキストを非連続化するのではなく、むしろそこに反映されているコンテキストの理解を重視し、人間の認識や行為、感情と、これらに関係している要因や条件などをデータに即して丁寧に検討するためである。コーディングの作業はすべて研究テーマに照らして行われ、これによって、収集されたデータすべてのなかから分析の対象となるデータが抽出されていくことになる。

分析ワークシートによる概念生成 一定のデータ収集が行われた後、分析テーマについて最も豊富なディテールが語られていると考えられた逐語録を最初の分析素材とし、抽出された具体例から分析ワークシートを作成していく。1つの分析ワークシートに集められた具体例は、1つの概念のヴァリエーションと見なし、ヴァリエーションを説明するのに適切と考えられる概念の定義と概念名を付ける（概念生成）。

すでに分析ワークシートが立ち上げられている概念（正確に言うと、この段階ではまだ概念として確立されてはいない）に新たな具体例を加えるときには、その都度、概念の定義や概念名がその分析ワークシートに集められている具体例を網羅的に説明し得ているかどうかを吟味し、必要な場合にはより適切な定義や概念名に改変した。分析ワークシートを立ち上げた際、分析ワークシートに具体例を加えた際には、そのときに取り上げている具体例の類似例や対極例を考えたり探したりする。

最初に分析素材とした逐語録から抽出された具体例すべてを分析ワークシートに吸い上げられたら、次の分析素材の検討を始める。すでに生成された概念では説明されない具体例が新たに発見された場合には、新たな分析ワークシートを立ち上げ、新しい概念を生成する。すべての協力者に対して分析ワークシートの作成の手続きをくり返していくなかで、コーディングされた具体例は概念を構成するヴァリエーションとなっていく。さらに、分

析ワークシートごとに得られた概念とデータの対応をくり返し確認することで、grounded on data な概念を生成する。

継続的比較分析とカテゴリー生成 概念生成は分析ワークシートの作成によって行うが、生成される概念と類似する具体例を検討する“オープン化”と、対極にある具体例を検討しながら概念の説明範囲を確認していく“収束化”をくり返すことで、概念の説明力を高めていく。さらに、概念からカテゴリー生成、カテゴリーから包括的なプロセス生成まで“オープン化”と“収束化”を同時進行でくり返し、両者のバランスを理論的サンプリングと継続的比較分析により収束化の方向にまとめていく。このようにしてオープン化を徹底しながら収束へと向かうことによって、論理的な相互関係と自分の解釈の適切さをデータとの対応で確認しながら grounded on data な分析を進める。

理論的飽和化 M-GTA における理論的飽和化とは、分析過程の中で進行する収束化があるところで完了させるために下す判断であり、2段階で行われる。1段階目の理論的飽和化とは、分析ワークシートによって生成される概念ごとに下される“小さな理論的飽和化”である。この小さな理論的飽和化の判断は、1つの概念の定義がその分析ワークシートに載せられた具体例を網羅的に説明しており、対極例についてのデータチェックが十分になされていた場合に下される。2段階目の理論的飽和化は、分析結果全体に対するもので、分析に用いるデータの限定範囲を自覚的に見定めた上で、分析結果の完成度を高めていく。大きな理論的飽和化は、概念間の相互関係、カテゴリー間の関係、全体としての統合性等、それぞれのレベルにて重要な要素が網羅され相互に関連付けられており、論理的密度を持って理論全体が成立していると判断された時点で相対的に判断される。大きな理論的飽和化が判断されたところで、分析終了となる。

第3節 研究2で行われた分析のプロセス

1 理論的サンプリング

M-GTAでは、面接協力者を抽象化した集団である分析焦点者の限定範囲によって、生成される理論の適用可能範囲が定まる。分析焦点者は理論的サンプリングの手続きを経て決定されるが、本研究の素材となる逐語録の出自となる研究1の面接調査は、元々多様な性自認や社会適応形態を持つ者から網羅的にデータ収集を行っていた（Table12）。

そこで、実際のデータ収集手続きと同様の手順で逐語録を読み進めることで擬似的に理論的サンプリングを行い、必要となった場合には追加のデータ収集を行うこととした。なお、ここで使用した逐語録は、研究1の目的に沿って語りの抜き出しを行う以前のものである。そのため、研究1と研究2の素材の大元は共通しているが、実際に素材となったデータ分量は、後者が圧倒的に多い。

Table12 研究1の面接協力者に関する特徴の一覧

自認する性別の属性	面接実施時の年齢	GiDの診断	ホルモン治療の有無	カミングアウトの有無
FTMTS ¹⁾	25歳	有	有	有
	30歳	有	有	有
	31歳	有	有	有
	49歳	有	有	有
FTM	20歳	有	無	有
	22歳	有	無	有
	26歳	有	無	有
	26歳	有	有	有
	26歳	無	無	有
FTMTG ²⁾	24歳	有	無	有
FTX(M) ³⁾	27歳	有	無	有
中性 ⁴⁾	24歳	有	無	有
FTX	21歳	有	無	有
わからない	20歳	無	無	有
	28歳	有	有（中断）	有

¹⁾ TSは、Trassexualの略称

²⁾ TGは、Transgenderの略称

³⁾ 属性について回答する際、「女性ではないことは確実」と付言した

⁴⁾ 「女性ではないが、男性とも言い切れない」ことを理由に「中性」と回答していた

⁵⁾ それぞれ、「今ある言葉では表現できない」、「身体と精神が違うから」と面接内で語られた

擬似的理論的サンプリングの手続き

理論的サンプリングの第 1 段階 GID 学会第 9 回研究大会で行った広報がこれにあたる。応募を受けた者から、自覚する属性と身体的治療の有無が偏らないように留意して依頼を行った。“埋没”しているか否かによって語られる内容に違いがあることが見出された。

理論的サンプリングの第 2 段階 “埋没”せずに“ありのままに生きる”ことを目標に掲げる FTM/X 自認者が主催する性同一性障害当事者自助グループ A の参加者から面接協力者を募ったのがこれにあたる。「希望としては“埋没”したい」との語りがあった。

理論的サンプリングの第 3 段階 “埋没”を志向する雰囲気の高い性同一性障害当事者自助グループ B の参加者から協力者を募ったのがこれにあたる。

これらを経て再度追加のデータ収集の必要性を検討したが、網羅的サンプリングの観点からは網羅しており (Table12)、十分にディテールの豊富なデータが収集されていると判断されたことから、追加のデータ収集は行わなかった。

2 分析テーマの設定

素材とするデータが定まった後、具体的な分析手続きを始めるにあたって、分析テーマを設定した。分析テーマはデータを分析する角度と方向性を明確にする機能を持つ。木下 (2003) に従って、分析初期においては分析テーマが適切かどうかをデータと対応させながらくりかえし検討した。最初に設定した分析テーマは“カミングアウトによって性別移行を進めていくプロセス”であったが、最終的には、“FTM/X 自認者はどのように社会とのかかわりを保ちながら性別移行していくのか”に定まった。この分析テーマの下、F to M/X 性別移行過程のなかに見られる社会適応状態の変化という角度から分析を進めた。

3 分析プロセスの開示

面接協力者 15 名中、もっとも面接時間が長かった者の逐語録を最初の分析素材とし、逐語録から、文章のまとまりを単位として具体例を抽出した。その後、抽出された具体例のなかから類似するものを集め、分析ワークシートを作成した。以下、カテゴリーグルー

プの名を [], カテゴリーの名を { }, 概念名を [], 逐語録からの抜き出した面接協力者の語りを「 」で表記する。

分析ワークシートの作成

1 つの分析ワークシートに集められた具体例は、1 つの概念のヴァリエーションとし、ヴァリエーションを説明するのに適切と考えられる概念の定義と概念名を付け、概念を生成していった。ひとつの概念を生成するごとに、さらにその類似例や対極例を考えながら、最初に分析対象とした逐語録から抽出された具体例すべてを概念にわけていった。2 人目の面接協力者の分析で、すでに生成されている概念に具体例を加えたときには、その都度、概念の定義や概念名がヴァリエーションを説明し得るかどうかを吟味し、より適切な定義や概念名を検討した。すでに生成された概念では説明されない具体例があった場合には、新たに分析ワークシートを立ち上げ、新しい概念の生成を始めた。

分析ワークシートに対する理論的飽和化 15 名分の逐語録に対して分析ワークシート作成の作業を繰り返し、分析ワークシートごとに概念が十分なヴァリエーションに支えられているかどうかの観点から理論的飽和化の判断を下していった。また、理論的飽和化が適切であるかどうかを判断する際には、M-GTA を分析方法として用いた研究論文の指導経験がある大学教授から指導を受けた。

カテゴリー生成から理論的飽和化による分析終了の判断まで 分析ワークシートによって生成された 40 個の概念それぞれを個別比較することによって類似する概念がまとめられ、カテゴリーが構成された。さらに類似するカテゴリーがまとめられ、カテゴリーグループが構成された。続いて、プロセスの中核的概念のまとまりとなるコアカテゴリーグループが抽出された。

理論的飽和化

概念・カテゴリー・カテゴリーグループ間の関係、コアカテゴリーと他のカテゴリーとの動的な関係性を検討しながら継続的比較分析を行った。重要な要素の相互関係と全体としての統合性が確保されたことを相対的に判断し、重要な要素が網羅され相互に関連付けられていると考えられたところで、理論的飽和化の判断を下した。最終的に 40 概念、30 カテゴリー、11 カテゴリーグループが生成された。コアカテゴリーグループは、[GID の特徴である不一致] となった。

4 カテゴリーの生成

上記の手順によって 40 概念, 30 カテゴリー, 11 カテゴリーグループが生成されたが, さらに, 社会適応の観点からプロセスを検討していくなかで, カテゴリーグループ [GID の特徴である不一致] にまとめられた, “不一致の対比物としての [社会にある性別二元論の枠組み]” と, “不一致の特徴そのものである [性別二元論では説明されない自分]” との関係は, {違和感} から {相反}, {相反} から {内的葛藤} という動的な変化の 3 様態を示していることがわかった。

この変化の 3 様態は FTM/X 自認者の社会とのかかわり方の変化と密接に関係しており, 分析によって得られたカテゴリーもこの 3 様態と同様に, 大きく 3 期 (第 1 期: 従来の適応からの前抜け出し期, 第 2 期: 望む性での社会適応模索期, 第 3 期: 主体的な社会適応再構築期) にわけられた。以下, 3 期に共通するコアカテゴリーグループを構成する [社会にある性別二元論の枠組み] と [性別二元論では説明されない自分] に 3 つの様態が抽出されたプロセスと, コアカテゴリーグループに含まれる要素を除いた 38 概念, 28 カテゴリー, 10 カテゴリーグループについて, 概念生成とカテゴリー化のプロセスを時期ごとに記す。

3 期に共通する概念

3 期に共通する概念となった [社会にある性別二元論の枠組み] と [性別二元論では説明されない自分] の 2 概念は当初, 性別二元論では捉えきれない性のあり方を持つ FTM/X 自認者自身の現実を表現する具体例として, 1 つの概念にまとめられていた。しかし, 1 つの概念に含まれる具体例を網羅的に説明する概念定義を設定することができなかった。そこで, 概念に含まれていた具体例がさらに小さな単位でまとめられるかどうかを再検討した結果, 社会にある性別二元論に対する態度である [社会にある性別二元論の枠組み] と, 社会にある性別二元論に照らして自分自身のあり方を客観視している [性別二元論では説明されない自分] の 2 つにわけてまとめられた。

分析の進捗とともに, 生成された概念, カテゴリー, カテゴリーグループなどの主要な要素を関連づけながら動的な理論の生成を試みている際, [GID の特徴である不一致] 以外のカテゴリーグループはそれぞれ時間的流れに沿って 3 つのまとまりに収束され, まとまりごとに 3 期のプロセスが構成された。一方で, [GID の特徴である不一致] はその 3

つのまとまりすべてと関連性を持っており、3期のプロセスに一貫する中核的概念、コアカテゴリーグループに位置づけられた。

さらに、〔社会にある性別二元論の枠組み〕と〔性別二元論では説明されない自分〕に含まれる具体例と3つのまとまりを比較検討したところ、〔社会にある性別二元論の枠組み〕と〔性別二元論では説明されない自分〕はプロセスの時間的流れとともに質的に変化していくことがわかった。その様態はそれぞれ、性別にまつわる不一致が感覚的に漠然と抱かれている〔違和感〕、はっきりと意識され始めた自身のあり方と矛盾する自身の現実や社会の枠組みに直面する〔相反〕、自身の当事者性や自他間の認識の違いが自覚的に引き受けられて共存している〔内的葛藤〕であることが見出された。コアカテゴリーグループ内のカテゴリー概念の名称、構成概念と出現数（率）をTable13に示す。

Table13 3期に共通する概念と具体例

カテゴリーグループ	カテゴリー	概念	出現人数	出現率	具体例
GIDの特徴である不一致	違和感	社会にある性別二元論の枠組み	15人	100%	「一緒に買い物にいても・・・(中略)・・・そのときに(女性によく付けられるような自分の)名前を呼ばれるのが嫌で、男としてみて欲しい」
		性別二元論では捉えきれない自分	15人	100%	「まだ、自分がGIDだと確信していない時期で。FTXかな。FTMかな、そっちかなって、感じ」「自分の精神状態がごちゃごちゃだっただってというのが大きくて」
	相反	社会にある性別二元論の枠組み	15人	100%	「一番きつというか“うーん？”って思うところが、トイレなんです。 “男子” “女子”ってわかれているだけだと」「戸籍の、履歴書の性別欄の丸をするときに、男性に丸をつけていたんですよ。けど、自分のことは話しているにもかかわらず、『情報が、偽りの情報である。あなたは戸籍上女性なのに、履歴書で、男性の方に丸を書いた。それは、会社と個人の信頼関係を崩すことになる』・・・(中略)・・・って言われて・・・(中略)・・・結構やりとりしたんですけど、ダメで、辞めさせられて」
		性別二元論では捉えきれない自分	15人	100%	「戸籍と違う性で生きている場合、いろんな矛盾も生まれてくる」
	内的葛藤	社会にある性別二元論の枠組み	15人	100%	「今の社会の中では、基本的に男性か女性かっていうのはある」「一番きつというか“うーん？”って思うところが、トイレなんです。 “男子” “女子”ってわかれているだけだと」「『戸籍はなんで変えないの？』っていうのと、『なんで手術を最後まで望まないの？』って。『君はなんだい？』って。その、中途半端さが理解されない」
		性別二元論では捉えきれない自分	15人	100%	「女性ではないので、男性として働かせてくださいというのではなくて、そういうのを期待されない職場にいきたい」「社会的な認識と自分の感じているあり方にギャップがある」

第1期：従来の適応からの前抜け出し期

従来の適応からの前抜け出し期（第1期）は、コアカテゴリーグループ〔GIDの特徴である不一致〕と3つのカテゴリーグループ（〔マイノリティであること〕〔性同一性を伝えるためのカミングアウト〕〔予期的な不安〕；8カテゴリー、13概念）によって構成された。各カテゴリー概念の名称、構成概念と出現数（率）をTable14に示す。

Table14 従来の適応からの前抜け出し期（第1期）の構成概念と具体例

カテゴリーグループ	カテゴリー	概念	出現人数	出現率	具体例
マイノリティであること	差別	差別	7人	46.7%	「社会状況とかよくわかってなくて、漠然と、本当に、殴られちゃったらどうしよう」「内定を取り消されちゃうこと。普通の会社って、取り消しちゃう…(中略)…それが一番不安だった」
	周囲からの偏見	周囲からの偏見	4人	26.7%	「性的に、変な人に見られる」「なんか、おかしいんじゃないの？って…(中略)…偏見とか持つてる人だと怖いよ」
性自認を伝えるためのカミングアウト	従来の適応からの抜け出し	従来の適応からの抜け出し	8人	53.3%	「自分が女性だと扱われている前提をずらす」「中身というか気持ちとしては、女の子の気持ちはしてないよ、ってことは伝えたかった」
	性別移行の試み	性別移行の試み	8人	53.3%	「男の自分を受け入れてもらいたいから」「息子としてみて欲しくて」
予期的な不安	自分の未来への不安	将来への不安	2人	13.3%	「ずっと男で生きてても、歳とかとつちやったら…(中略)…戸籍の性で扱われる可能性、高い…(中略)…自分ボケちゃうし、言えないわけだし」「これから就職しないといけない…(中略)…うまくいかな？」
		これまでを失いたくない	3人	20.0%	「自分は変えないんですよ…(中略)…そこまでして変えたいか？今まで、何もしないで、いてこれたじゃないですか」「はっきり言うと、やっぱりなんか変わっちゃうかなあーと思って…(中略)…嫌だったから言わなかった」
		未知のカミングアウト体験	3人	20.0%	「どういう反応するのか、全然わからなかった」「実際の反応っていうのが、想像もつかなかった」
	相手の巻き込み	相手を巻き込む不安	5人	33.3%	「家族と一緒に苦しめる…(中略)…家族が親戚から変な目で見られたりとかしたら嫌」「自分がよくても、一緒になった人が嫌な思いをするだろうし」
		カミングアウトの範囲	1人	6.7%	「カミングアウトしている相手としていない相手の間で、また戸惑いが生じてしまう」
	カミングアウトした相手に抱く不安	気遣いによる態度変化への違和感	3人	20.0%	「セクシャルな関係は起こりえない、みたいな前提があるんだけど、自分はそうじゃないって言ってしまったことで…(中略)…スキンシップが過剰な女の子…(中略)…どう思うか」「相手が気を遣って…(中略)…使わなくていいエネルギーがそっちらに行っちゃうのが嫌」
		カミングアウト後の関係性崩壊	7人	46.7%	「今まで築いてきた人間関係が崩れそう」「一緒にいる人って、ぎくしゃくしたら本当に嫌」
	自分の意図との不一致	勝手に独り歩きする噂	5人	33.3%	「あいつ、そうなんだよ、っていう目で見られるのが嫌」「直接のその人の反応とかじゃなくて、見えない噂としてまわっちゃうのが、すごい嫌で」
		GIDの枠へあてはめられたくない	2人	13.3%	「自分の場合は、性同一性障害っていう枠組みの考え方が馴染まない…(中略)…それをどういふふうを受け取られるのか…(中略)…『典型例みたいじゃないよね』とか。そういう不安」「相手のなかにあるGIDというものと自分が、フィットしない」

GID であることによって、社会参加が脅かされる {差別} と人間性を疑われて「変な人に見られる」ような {周囲からの偏見} は、どちらも GID が社会的にマイノリティであることから受ける理由なき不利益として、[マイノリティであること] にまとめられた。{従来の適応からの抜け出し} は、「女性だと扱われている前提をずらす」ためのカミングアウトであり、{性別移行の試み} は、「男の自分を受け入れて」もらうためのカミングアウトから生成された概念である。どちらも、「希望の精神的性別で生きる」ためには、避けては通れない「現実的な問題」であることから、[性自認を伝えるためのカミングアウト] としてまとめられた。[将来への不安][これまでを失いたくない][未知のカミングアウト体験] は、想起している場面がそれぞれ異なっていたが、「どうなっちゃうんだろう？」という {自分の未来への不安} としてまとめられた。

{相手の巻き込み} としてまとめられた [相手を巻き込む不安] と [カミングアウトの

範囲] は、どちらもカミングアウトした相手を自分自身の問題へ巻き込んでしまうことに対して抱かれている不安であるが、相手を自分と同じ社会的偏見を受ける立場に引き寄せてしまうかどうかで2つにわけられた。{カミングアウトした相手に抱く不安} は、相手が男性ならば“異性から同性へ”，相手が女性ならば“同性から異性へ”と性別の所属が移行する際に「なかなかみんなの頭が切り替わらず」に、変に「相手が気を遣う」事態となるような〔気遣いによる態度変化への違和感〕への不安と、性別のみに限らず「今まで築いてきた人間関係が崩れる」[カミングアウト後の関係性崩壊]に対するものから構成された。

〔勝手に独り歩きする噂〕と〔GIDの枠へあてはめられたくない〕は、どちらも自分の力の及ばぬところで、不本意に自分の当事者性が決め付けられてしまうことへの不安を感じているため、{自分の意図との不一致}としてまとめられた。しかし、〔勝手に独り歩きする噂〕が不特定多数の相手を想定しているのに対し、〔GIDの枠へあてはめられたくない〕は、直接的なカミングアウト「相手のなかにあるGIDイメージ」を想定していることから、別の概念としてまとめられた。{自分の未来への不安}{相手を巻き込む不安}{カミングアウトした相手に抱く不安}{自分の意図との不一致}は、どれも実際のカミングアウトをする以前に予期的に想起される不安であることから、[予期的な不安]にまとめられた。

第2期：望む性での社会適応模索期

望む性での社会適応模索期（第2期）は、コアカテゴリーグループ〔GIDの特徴である不一致〕と3つのカテゴリーグループ〔埋没を阻むもの〕〔埋没への志向〕〔すべてが“男性”ではない〕、6カテゴリー、11概念から構成された。各カテゴリー概念の名称、構成概念と出現数（率）はTable15に示す。

〔埋没を阻むもの〕は、〔戸籍の性別との不一致〕や〔女性的な外見〕、〔女性的な肉体〕という客観的事実から構成される{自分自身が持つ女性的特徴}と、「罪悪感」や「騙している気持ち」などの当事者の内的感情である{埋没のうしろめたさ}の2カテゴリーから構成された。「普通の男性として要求されること」を求める{普通に男性として生きたい}と、「SRSの技術力」や「医療の門戸」「ガイドラインの問題」などの性別移行をサポートする医療資源への期待から生成された{GID治療への期待}は、どちらも“男性”に近づこうとするものとして〔埋没への志向〕にまとめられた。

〔境界人としての寄る辺なさ〕と〔社会からの要請〕〔女としての社会的な立ち位置〕は、社会的な性・生物学上の性・戸籍上の性・性同一性・外見の性・自分自身の性別に対する

認識などが、すべて一貫して“男”“女”のどちらかに二分されないことから派生するものである。〔境界人としての寄る辺なさ〕は当事者の内面に抱かれるもの、〔社会からの要請〕はFTM/X自認者が社会参加する際に生じるもの、〔女性としての社会的な立ち位置〕はこれまでに築いてきた“女性”としての歴史によって積み重ねられているものである。これら3つの概念は{多面的な性の様相}にまとめられた。{一般的でないあり方}は、GIDという存在が稀有な存在として相手に理解されることの難しさをまとめて構成されたカテゴリーであるが、その難しさは、身体的な性別と性同一性が合致しないというGIDの特徴自体について相手に理解してもらうことである〔伝えることの難しさ〕と、GID中核群ではない周辺群の多様なあり方について理解してもらうことである〔GIDに対する先入観との食い違い〕にわけられた。

Table15 望む性での社会適応模索期（第2期）の構成概念と具体例

カテゴリーグループ	カテゴリー	概念	出現人数	出現率	具体例
埋没を阻むもの	自分自身が持つ女性的な特徴	戸籍の性別との不一致	8人	53.3%	「保険証がやっぱ、自分の生きている性と違うから、病院に行きたくない」「公式のものに関するものは本名で書かなければならぬし、本名でいくと、外見と全くずれるので、常に怪しまれる」
		女性的な外見	5人	33.3%	「見た目的にも男として通らない段階のときは大変」「バスでできない期間で、自分が『男として』と言っても、女性として見られてしまう」
		女性的な肉体	3人	20.0%	「体も中途半端だから、バレるんじゃないか」「連なってトイレに行くときどか、温泉旅行に行くような状況になったときに困る」
埋没のうしろめたさ	埋没のうしろめたさ	9人	60.0%	「過去は隠さなきゃいけないし、結構、嘘つかなきゃいけない状況に。嘘つきたくないけど、作り話を作らないといけない…(中略)…そういうのに慣れてきちゃう自分が嫌」「騙している感がある」	
埋没への志向	普通に男性として生きたい	普通に男性として生きたい	8人	53.3%	「男性に対して一般に求められることを求めて欲しかった」「GIDとして生きるんじゃないなくて、男として生きるっていうのが普通かな、っていうイメージ」「埋没したい」
	GID治療への期待	GID治療への期待	4人	26.7%	「病院機関が増えて、スムーズになってくれればいい」「もっとトントン拍子に、治療が…(中略)…思うように体を変えて」「SRSの技術力が上がって欲しい」
すべてが“男性”ではない	多面的な性の様相	境界人としての寄る辺なさ	11人	73.3%	「自分は男として働きたいわけでもないし、女性として働きたいわけでもない」「アンケートとか。男女で○印をつけないといけないのとか。なんで、アンケートなのにつけないといけないの？」
		社会からの要請	5人	33.3%	「結局、自己決定ってない…(中略)…社会状況がそうさせているわけで、だから、埋没させているのも社会だし、カムアウトさせているのも社会」「社会に適応するっていうときに、自分自身が社会的な立場として中途半端になる」
	一般的でないあり方	女としての社会的な立ち位置	3人	20.0%	「結婚したからには、嫁の仕事で、子どもを産まないといけない」「就職のときは、学校から行くと、やっぱり女だから」
		伝えることの難しさ	8人	53.3%	「ちょっと言ったかんじでは、意味がよくわからなくて…(中略)…それがどういことかわからない」「社会的な認識と自分の感じているあり方っていうのはギャップがある」「どこまで相手はわかっているんだろう」「深くはわかってないな」
	GIDに対する先入観との食い違い	4人	26.7%	「性同一性障害っていう言葉が…(中略)…手術するかしないか、っていうレベルじゃなくて、広い意味で効力を持つものになっている」「『トランスです。』って言った瞬間に、違うメニューが出てくる…(中略)…けど、そのメニュー自体が気に入らない」「GIDっていうのが、中核群って言われている人…(中略)…だけじゃなくて、もっと揺らぎのある人…(中略)…もいる」	

第3期：主体的な社会適応再構築期

主体的な社会適応再構築期（第3期）は、コアカテゴリーグループ [GID の特徴である不一致] と4つのカテゴリーグループ [全人的なかかわり] [臨機応変な対処] [社会変革] [GID が自然にある社会], 8カテゴリー, 14概念から構成された。各カテゴリー概念の名称, 構成概念と出現数（率）は Table16 に示す。

Table16 主体的な社会適応再構築期（第3期）の構成概念と具体例

カテゴリーグループ	カテゴリー	概念	出現人数	出現率	具体例
当事者性の受容と統合		自身の特徴としてのGID	7人	46.7%	「自分の軸が性同一性障害なわけじゃない」「当事者が…(中略)…自分を特別視して…(中略)…そういうのが必要ときもちろんあるんだけど。でも、それがなくても、生きていけるようになればいいなって思う。ハンデとか思わないでね」「性同一性障害であっても、普通に生活しているんだよ、という。妙な負いとか、負い目とかもなく、ごくごく普通の人なんだよ、っていうこと」
		ありのままの自分として	5人	33.3%	「環境によっては、カミングアウトしなくても、希望通りの性で生活できてしまう」「自分が言うことで、自分の隠していた部分を言えるっていうことは、自分らしさが出せる」「カミングアウトしたことで、すごい楽っていうか、自分で思っている不安とか…(中略)…そういうちょっとしたことも口に出せるようになる」
全人的なかかわり	人間性での勝負	当事者のキャラクター	2人	13.3%	「GIDがどうのじゃない…(中略)…人として周りから愛されるかどうかっていうのが一番大きい」「前例を変える力っていうのは、その人の人柄だったり…(中略)…人のそういう気持ち次第で変えられるもんだと、僕は思ってる」
		当事者が自信を持つ	2人	13.3%	「人として人間として自信を持っていること」「GIDを抱えていることを引け目とかに感じてたら、うまくいかない…(中略)…出来ること出来ないことがあるくらいで。男には変わらないんだから。スタンスを自分の中で持ってるってこと」
人間同士の歩み寄り		自他相互尊重	5人	33.3%	「自分が自分を大事にして、お互いがお互いを大事にし合う」「人と人である以上、誠意を持ってお互い接しないとイケないのかな、って」「言葉を選ぶ、とか」
		アサーティブなカミングアウト	7人	46.7%	「当事者が自分の求めることをはっきり、まず、主張すること。主張して説明することが大事だと思う。それは、説明っていうのは、押し付けるわけじゃないし、自分の状況をきちんと把握して、きちんと説明することが大事」「攻撃するようなかんじで社会に訴えるのはよくないと思っているから。だからと言って、『認めてください』って、低い腰で言うのも嫌」
臨機応変な対処		混乱の回避	2人	13.3%	「よっぽど大事な人じゃない限り、言う必要がない。言ったところで、『何？』ってなっちゃう。…(中略)…逆に、言ったら混乱が生じる」「相手に合わせるっていうか、前の自分。学生時代だったら、その学生のときの自分になる。なりきるっていうか。周りと合わせる。そういうので対処できるかな…(中略)…とりえず偽れる部分は偽る。言う必要がなかったら、言わない」
		カミングアウトの使い分け	3人	20.0%	「『違うんだ』っていうことを言わないと踏み込まれてしまうし。どこまでそのエネルギーを使えるかっていうか。それは、どこまで求めていくか、っていうことじゃないかな」「自分がそのとき、相手にされたことに、どこまで言いたいかな言いたくないかな、っていうことがすごく大事」
当事者の社会的活動		当事者としての自覚	2人	13.3%	「GIDのひとつの代表として見られてしまうことってあると思うんで。ほかの当事者に与える影響も大きい…(中略)…だから、より行動も気をつけたいといけないし」「若い子ってわからない…(中略)…何年間もそういうの認めてもらえない、って。誰かがやってくれなかったら、今はない…(中略)…いじめられたりとか。だいぶ理解してくれて、少なくなったんで、そういうのを、当事者が理解したほうがいい」
		当事者からの啓発活動	6人	40.0%	「誰かはやらなきゃいけない…(中略)…当事者が声を上げない限りは、気づいてもらえない」「当事者がもっと発信して。自分を理解してもらいたい…(中略)…周りに認めてもらいたいんだしたら」
社会変革		非当事者の態度変化	4人	26.7%	「教育する側にいる人間が、GIDについて知ろうとしたら、対応を考えたり」「何であるかっていうことを決めないっていうこと、そのひとがしたいことを認めるっていう判断」
		GIDの認知拡大	2人	13.3%	「社会の側が…(中略)…情報を学習って言ったらおかしいかもしれないけど、知る機会っていうのは必要」「そういう状態、もしくはそういう症状のある人間がいるんだよっていうことを周知してもらおう」
受け手側の変化		ジェンダー・イデオロギー	2人	13.3%	「『自分のジェンダー・アイデンティティがこうだ』とか言ってしまったら、男らしさとか女らしさとかのルールに乗らなきゃいけない」「ジェンダーの考え方自体に知識を持てる方が、非当事者にとってもメリットがあることだと思うし、当事者を理解するっていう上でもいいんじゃないかな」
		GIDが自然にある社会	4人	26.7%	「本当にその人がしたいことをすればいいし、その人が守りたいことを守ればいい…(中略)…誰かが正しさを作る、認め合ってるっていうことじゃなくて」「特殊なんじゃなくて、普通に友達として接している人がそういう人かもしれないよ、っていう。自然なものとして」「特別じゃなくて、あたりまえにいるような。『あ、どうなんだ』って察して。暗黙の了解」

〔自身の特徴としての GID〕は、「妙な気負いとか、負い目とかもなく」、自分に対して「特別視をしない」で、「自然に溶け込む」ことを大切に思う具体例をまとめてできた概念である。さらにそこにカミングアウトが加わったものは〔ありのままの自分として〕にまとめられた。これら 2 つの概念は {当事者性の受容と統合} にまとめられた。{当事者性の受容と統合} を発展させ、当事者の人柄で勝負しようとするものが〔当事者のキャラクター〕、「色々な経験をしていくこと」によって得た自信を持っていることが周囲からの受け入れにつながるという考えが〔当事者が自信を持つ〕として概念にまとめられた。これら 2 つの概念はどちらも当事者の人間性によって、当事者性を持つが故の困難を克服しようとするものであることから、{人間性での勝負} にまとめられた。

FTM/X 自認者側だけでなく非当事者側も性別以前にお互いに「人と人である以上、誠意をもって」接することを提案しているものが、〔自他相互尊重〕としてまとめられた。当事者が「自分の求めることをはっきり、まず主張すること」にも言及しているものは、〔アサーティブなカミングアウト〕として別の概念にまとめられた。これら 2 つの概念は、{人間同士の歩み寄り} にまとめられた。{当事者性の受容と統合} {人間性での勝負} {人間同士の歩み寄り} は、どれも性別や当事者であること以前に“人間であること”を重視していることから、カテゴリーグループとしてまとめられ、〔全人的なかかわり〕と名づけられた。

カミングアウトの必要性を自ら判断して選択的にカミングアウトを行う〔臨機応変な対処〕のうち、カミングアウトを積極的に使い分ける具体例は、〔カミングアウトの使い分け〕にまとめられ、カミングアウトを控えることで場を納める具体例は〔混乱の回避〕として別にまとめられた。〔社会にある性別二元論の枠組み〕の変革を促すカテゴリー {当事者の社会活動} と {受け手側の変化} は、その主体が当事者であるか非当事者であるかで 2 つにわけられ、まとめて〔社会変革〕となった。

{当事者の社会的活動} は、消極的な働きかけである〔当事者としての自覚〕と積極的な働きかけである〔当事者からの啓発活動〕の 2 つの概念から構成された。また、{受け手側の変化} は、非当事者が積極的に GID について知ろうとする〔非当事者の態度変化〕、「そういう人間がいるんだよということ」が周知されていく〔GID の認知拡大〕、GID に限定せず「ジェンダーの考え方自体に知識を持てる」ようになる〔ジェンダー・イデオロギー〕の 3 つの概念から構成された。また、〔社会変革〕によってもたらされた社会について語られた具体例はすべて〔GID が自然にある社会〕にまとめられた。概念定義の一覧を Table17 に示す。

Table17 各概念の定義

概念名	概念定義
社会にある性別二元論の枠組み	人間の性別を“男性”“女性”という根本的な2つの要素によって区分する性区分法を土台として成立している社会に対する、当事者の認識と態度
性別二元論では捉えきれない自分	生物学的な性別、性自認、外見上の性別、戸籍上の性別などがすべて一貫した“男性”でも“女性”でもないために、“男女”どちらも言い切れない当事者の現実
差別	GIDであることによって差別を受け、社会参加が脅かされること
周囲からの偏見	GIDであることで自分の人間性までも疑われてしまうこと
従来の適応からの抜け出し	自分を女性として認識している相手に“自分は女性ではない”と表明するためのカミングアウト
性別移行の試み	相手から男性としての扱いを受けるために行ったカミングアウト
将来への不安	性別移行をすることでこれから先に立ちはだかるだろう困難に対して抱かれる不安
これまでを失いたくない	性別移行によって、これまで築いてきたものを継続できなくなることへの不安
未知のカミングアウト体験	カミングアウトに対する相手の反応が予測不可能であるがために生じる不安
相手を巻き込む不安	自分が性別移行することで、身近な親しい人たちまでも差別や偏見に巻き込みたくないという思い
カミングアウトの範囲	当事者の当事者性を知っている者とそうでない物が一同に介したとき、知っている者が抱くだろう戸惑い
気遣いによる態度変化への違和感	“女性”であるという前提が崩れることによって、これまであたりまえだったことが特別視されるものとなることへの不安
カミングアウト後の関係性崩壊	カミングアウトすることで、これまで築いてきたカミングアウト相手との関係性が変化してしまうことへの不安
勝手に独り歩きする噂	自分の知らない間にカミングアウト相手に伝えたことが噂として、周囲に流布してしまうのではないかと不安
GIDの枠へあてはめられたくない	GID中核群ではないために、自分の伝えたいことと相手の理解との間に生じる齟齬
戸籍の性別との不一致	戸籍の性別や女性的な名前によって、半ば強制的に当事者性が明らかになってしまうこと
女性的な外見	外見的に男性として通用するかどうか、性別移行の度合いを左右してしまうこと
女性的な肉体	肉体的な女性的な特徴によって、当事者性が明らかになってしまうこと
埋没のうしろめたさ	生来的に男性であったかのように振舞うために、過去を隠したり嘘をついたりすることを感じる、うしろめたさや罪悪感
普通に男性として生きたい	当事者性を明かさないことで、生来的な男性と同等な社会生活を送ることへの願い
GID治療への期待	当事者の性別移行をサポートする社会的・医療的資源への期待
境界人としての寄り辺なさ	二分された“男”“女”のどちらにもあてはまらない存在であるがために、当事者が抱く寄り辺なさ
社会からの要請	本意とは違う態度を取らざるを得ない状況を作り出している社会制度・社会規範
女としての社会的な立ち位置	すでに築いてきた社会的立ち位置によって、性別移行が制限されることを甘受すること
伝えることの難しさ	自分がカミングアウトして伝えても、相手が自分の思ったように理解するまでに求められる試行錯誤やその難しさ
GIDに対する先入観との食い違い	医学的診断上のGIDの枠組みが社会生活を送る一般人にまで浸透したことで生じた、非当事者の抱く典型的な当事者イメージと現実の多様な当事者像との差異
自身の特徴としてのGID	GIDはひとりの人間のある側面に過ぎないとする考え
ありのままの自分として	“男”“女”といった性別にこだわらずに、カミングアウトすることで、自分自身が思うあり方での生活を送ること
当事者のキャラクター	当事者側の人柄によって周囲の環境を変えること
当事者が自信を持つ	当事者性を持っている自分であっても、ひとりの人間としての自信を持つことで周囲の受け入れ方を変え得るという考え
自他相互尊重	当事者である／ないにかかわらず、お互いにひとりの人間としてわかり合おうとすること
アサーティブなカミングアウト	当事者が自らを自覚的に説明することで、自らのよりよい社会生活を作り上げていくこと
混乱の回避	カミングアウトすることでかえって混乱が生じないように、カミングアウトを控えること
カミングアウトの使い分け	自分の置かれている立場や周囲との関係性から、その都度カミングアウトの必要性を判断し、自らの要望や相手への不満を解消していくこと
当事者としての自覚	それぞれの当事者が自らの置かれている社会的立ち位置について自覚を持って、社会的責任のある行動を取る
当事者からの啓発活動	当事者自らが声を上げていくことで、GIDの認知を広めていくことの重要視
非当事者の態度変化	非当事者がGIDに対してより積極的にかかわろうとする態度への求め
GIDの認知拡大	当事者が生きやすい環境づくりのためには、非当事者のGID認知が拡大することが必要だという意識
ジェンダー・イデオロギー	社会にあるジェンダー規範が緩やかになることが、一様でない性同一性についての理解を促進するという考え
GIDが自然にある社会	当事者性が特異なものではなく、あたりまえにあるものとして、ごく自然に認識されている社会環境への希望

第4節 研究3のストーリーライン： 社会適応再構築プロセス

M-GTA を用いた分析によって、社会的適応再構築プロセスのコアカテゴリーグループとして [GID の特徴である不一致] が生成されたが、この不一致は本研究の分析焦点者である FTM/X 自認者の身体的性別と性同一性との不一致を描き出すものであった。これは、当事者が解剖学上の性に関する心理的苦痛に苛まれ続けるという、Udeze, Abdelmawla, Khoosal et al. (2008) の報告と一致する。FTM/X 自認者の抱える性別にまつわる困難が社会適応の全期にわたるものであることがわかる。さらに本研究において、[GID の特徴である不一致] を構成している、[社会にある性別二元論の枠組み] [性別二元論では捉えきれない自分] の2つの概念間の関係は、{違和感} (第1期) から {相反} (第2期)、そして {内的葛藤} (第3期) へと変化していた。つまり、FTM/X 自認者にとっての“性別にまつわる困難”は解消されはしないが、社会適応再構築プロセスの3期にわたって、その意味合いは変化していくことが示唆された。以下、各時期のストーリーラインを示す。

1 第1期 {違和感}：従来の適応からの前抜け出し期

この時期、FTM/X 自認者は [社会にある性別二元論の枠組み] と [性別二元論では捉えきれない自分] の間に違和感を抱いている。性別移行を検討しつつも、踏み出すには至っていない。外見が女性であるため、周囲の誰もが“女性”という大前提の下で FTM/X 自認者と接しており、当人もそれに倣った社会適応を構築している。そこで、性同一性に沿った希望するあり方で生きるためには [性同一性を伝えるためのカミングアウト] を行い、これまでの社会適応から抜け出さなければならない。しかし、[社会にある性別二元論の枠組み] のなかで、[マイノリティであること] から影響を受け、さまざまな [予期的な不安] が次々に想起される。この時期の関係図を Figure23 に示す。

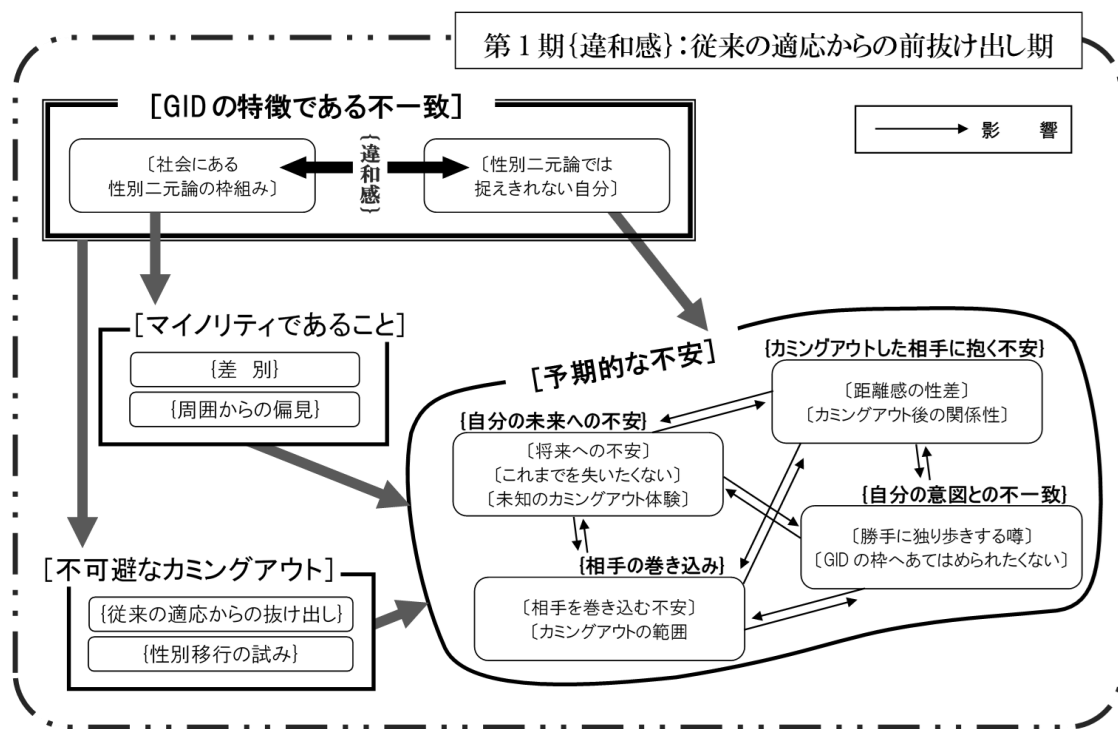


Figure23 従来の適応からの前抜け出し期の関係図

2 第2期 {相反}: 望む性での社会適応模索期

第1期で不可避なものとしていたカミングアウトであるが、この第2期でのカミングアウトは必ずしも不可避ではない。FTM/X 自認者は身体的な治療や周囲へのカミングアウトによって、すでに何らかの具体的な性別移行を始めており、他者から“男性”として認識される場面を経験することが可能となるためである。そこで、[社会にある性別二元論の枠組み]のなかで、カミングアウトせずに {普通に男性として生きたい} と埋没することを望んだり、{GID治療への期待} を抱いたり [埋没への志向] を持つ。

ところが、{自分自身が持つ女性的な特徴} や、それによる {埋没のうしろめたさ} という [埋没を阻むもの] によって FTM/X 自認者の“男性”としての完全なる埋没は断念させられる。そこで、より完全に近い埋没を実現させるために、{GID治療への期待} がますます高まる。しかし、[埋没への志向] が高まる一方で、当事者が現実のなかで“男性”となるのは不可能であり、“ありのままの自分”は [すべてが“男性”ではない]。このよう

に、〔社会にある性別二元論の枠組み〕と〔性別二元論では捉えきれない自分〕という、相反する現実の矛盾に直面しながら、自らの新しい社会適応のあり方を模索していく。この時期の関係図を Figure24 に示す。

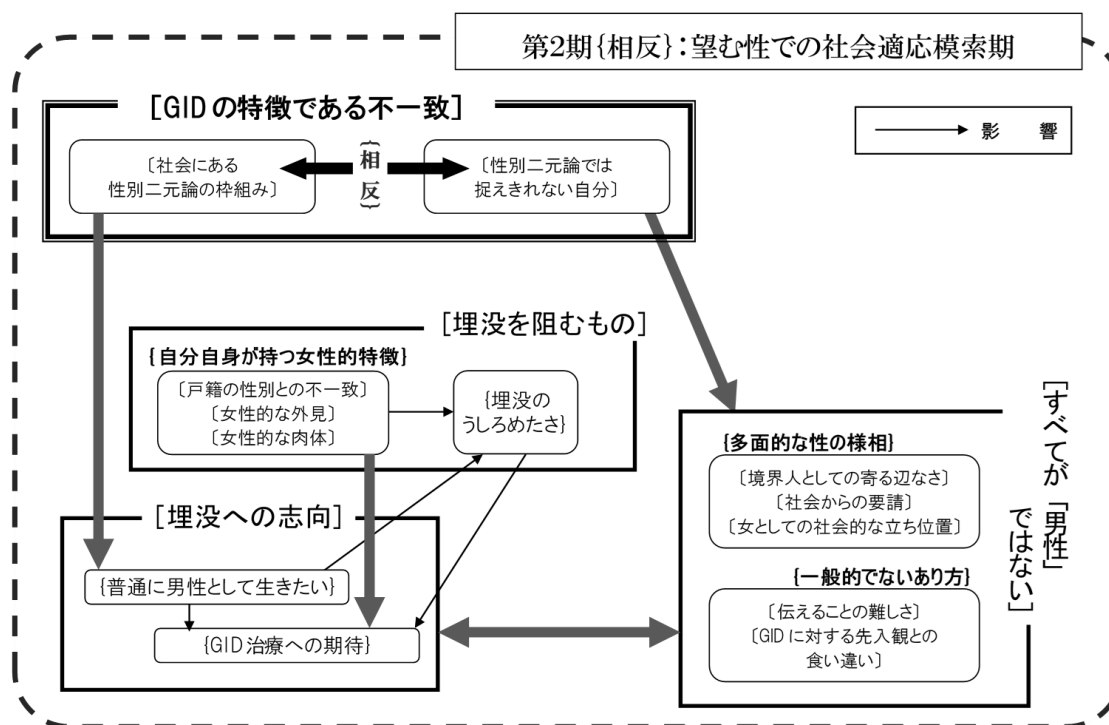


Figure24 望む性での社会適応模索期の関係図

3 第3期〔内的葛藤〕：主体的な社会適応再構築期

この時期はFTM/X自認者が、〔社会にある性別二元論の枠組み〕と〔性別二元論では捉えきれない自分〕の間にある矛盾を〔内的葛藤〕として引き受けることで、主体的に社会適応を再構築していく時期である。〔性別二元論では捉えきれない自分〕を〔全人的なかかわり〕によって積極的にノーマライゼーション化する。また、意識的な〔カミングアウトの使い分け〕やカミングアウトを控えることで〔混乱の回避〕を図り、〔臨機応変な対処〕をする。さらに、当事者が〔人間性での勝負〕〔人間同士の歩み寄り〕を実践していくことや、〔当事者の社会的活動〕、〔受け手側の変化〕といった〔社会変革〕によって、〔社会に

ある性別二元論の枠組み]が[GIDが自然にある社会]へと変化していくことを希望するようになる。この時期の関係図を Figure25 に示す。

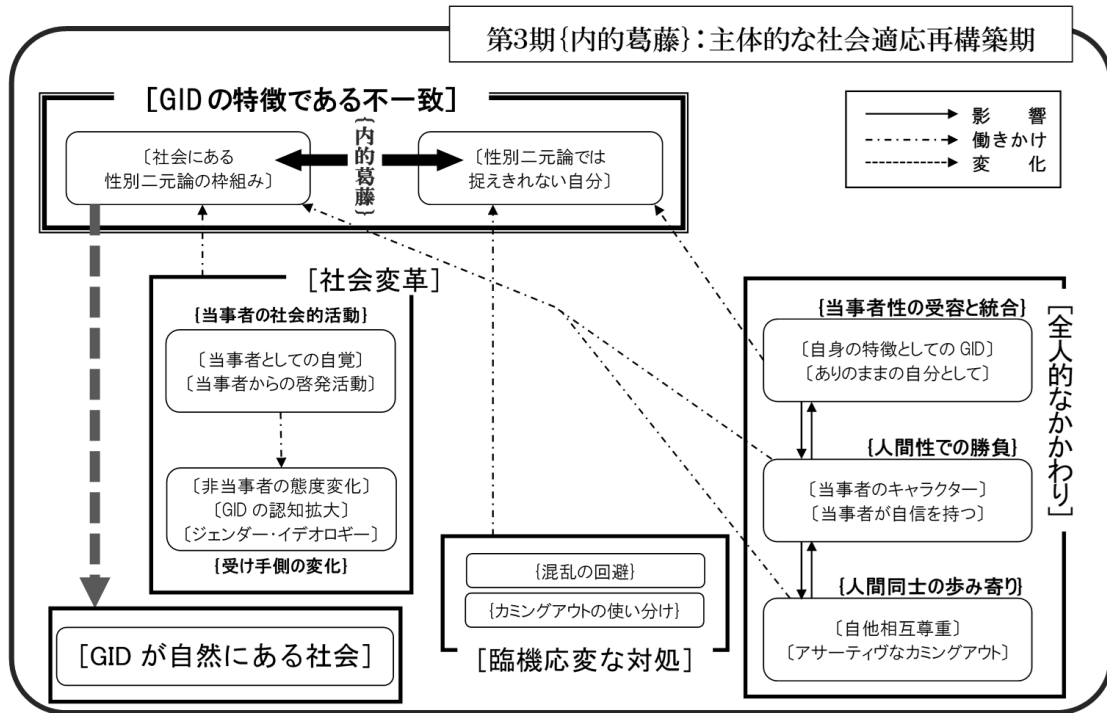


Figure25 望む性での社会適応模索期の関係図

第5節 F to M/X 性別移行に関する考察

1 F to M/X 性別移行における社会適応再構築プロセス

FTM/X 自認者は出生時に女性として性別を指定されており、そもそも“女性”としての適応が本来的な適応であったかどうかは別として、性別二元論に則って“女性である”という前提の下で生きてきた。そのため、「女子高出身」や「元女子バスケ部」などの所属名称からもわかるように、女性として生きてきた歴史が事実として刻まれている。家族も周囲の他者も当事者を“女性”として認識しており、外見上は女性としか言いようがない。だからこそ FTM/X 自認者が望む性で生きるためには、カミングアウトによって自分の性同一性や抱いている違和感を他者に表明しなければならない。従来の適応からの前抜け出し期（第1期）では、FTM/X 自認者がカミングアウト相手に自らの思いを「伝えたかった」のである。このようにして、自身の性同一性を他者に伝えていくことで、これまでの“女性”としての適応から抜け出そうと試み、様々な不安を抱きつつも性別移行に踏み出していく。

周囲へのカミングアウトや他者から“男性”と認識される機会の増加によって、次第に望む性で生活できる範囲が広がり始めると、望む性での社会適応模索期（第2期）に入る。ここでは“埋没するかどうか”の決断を迫られる。それは、埋没するためにはさまざまな下準備が必要とされるためである。また、一度行ったカミングアウトを白紙にはできないため、カミングアウト後に埋没へと方向転換することは非常に困難である。そこで、できるだけ早い段階で女性としての過去を知る人物から遠ざかったり、性別適合手術を受けたりすることで、自身の女性的特徴や歴史を書き換えようとする。しかし現実問題として、FTM/X 自認者が“男性”になることはできず、埋没のために嘘をつくことへの罪悪感が生じる。

一方、性別二元論では捉えきれない自分をそのまま表現して適応していこうと考えても、今度は“男性”でも“女性”でもない“ありのままの自分”を相手に理解してもらうことの難しさや、社会から与えられる二者択一の選択肢の「どちらも選べない」自分を感じる事となる。この“ありのままの自分”と“相手から認識されたい自分の性別”との違いはすでに Figure17 に示した通りである。

このように、“男性”として埋没することへの志向性とカミングアウトして“ありのままの自分”で生きたいという想いの相反する 2 者のせめぎあいは、画一化を求める社会と一様ではない個のあり方との軋轢を表現しているものとも考えられる。

“埋没するかどうか”という問いに具現化されていた社会と個の軋轢は、やがて {内的葛藤} として当事者の内面に収められ、主体的な社会適応再構築期（第 3 期）に入る。これまで当事者は [GID の特徴である不一致] から受動的に影響を受けがちであったが、この時期には当事者からの主体的な働きかけが見られるようになる。これは、小坂（2006）が当事者の職業におけるカミングアウトについて、“性別移行にあたっては場当たりの対応でなく、戦略的な情報操作や対応行動を取ることも重要だ”と述べていることにも合致している。この時期には言葉遣いや服装などの外面的特徴から、“女性”としての前提よりも、相手から“男性”と認識されることが多くなる。そこで、カミングアウトしないことで自らを守ったり、カミングアウトして自らの想いや考えを表明したりと、非当事者には理解されにくい自らの当事者性を受容し、内面の葛藤を自覚しつつも、主体的に相手や社会とかかわりながら社会生活を送り始めるのである。

2 障害受容から当事者性の内包へ

第 3 期において FTM/X 自認者は、[社会にある性別二元論の枠組み] に再配置されることではなく、「性別以前に人間として」生きることを求め、個と社会との葛藤を自ら主体的に引き受けていた。本研究の面接協力者は FTM/X 自認者であり、分析結果として抽出された社会適応再構築プロセスも、F to M/X 性別移行における社会適応再構築を説明するものに過ぎない。しかし、第 3 期に見られる FTM/X 自認者の主体的な社会適応からは、多様な個人の集まりによって構造化された社会が個人を保護する機能を持ち、同時に社会という大きなシステムとして個人を管理して没個性化をもたらすという、人と社会との間にある矛盾を見出すことができる。

リハビリテーションの分野では、阻害されたり喪われたりしている心身機能の回復や代償獲得を目指す医療的介入に加えて、自らの障害の程度を現状認識することで再起を図る心の復帰プログラムとして、障害受容（Acceptance of Disability）をサポートすることの重要性が指摘されている（雨夜，2005）。ここでの障害とは、日常生活や社会生活の制約と

精神的苦痛を含む困難を指しており、本研究の協力者となった FTM/X 自認者の社会適応再構築プロセスのなかで見出された当事者性の内包を、障害受容と理解することもできる。

しかし、本研究によって生成された社会適応再構築プロセスにおける主体的な社会適応再構築期（第 3 期）では、FTM/X 自認者の関心は、障害ではなく社会とのかかわりに向かっている。FTM/X 自認者は生まれながらに持った身体的性別と性自認の不一致を自覚しながら生きてきた。FTM/X 自認者にとって大事なものは社会のなかで自然に生きていくことであり、違和感を改めて自覚することで得られるものは少ない。従来の適応からの前抜け出し期（第 1 期）において、[予期的な不安]を感じながらもカミングアウトしていく姿の背景には、望む性でのあり方に向けた変化への期待があると考えられる。FTM/X 自認者が“ありのままの自分”を実現していくプロセスからは、現状の理解よりもさらに一歩、未来に向かって歩み出そうとすることが、過去から現在そして未来へと一貫した“その人なりの人生”のよりよいあり方を描き出す原動力となる可能性が示唆される。この意味で、FTM/X 自認者が当事者性を内包していくことは、障害受容と同義ではない。障害受容による現状の理解に加え、これまでは手にすることができなかった“ありのままの自分”として生きていける未来への希望が、本研究によって生成された社会適応再構築プロセスには含まれているからである。

第 6 節 研究 2 の成果と課題

本研究では、FTM/X 自認者に半構造化面接を実施することで、F to M/X 性別移行のなかにある社会適応再構築プロセスについて、説明力のある理論を生成することを目的とした。M-GTA を用いた分析の結果、従来の適応からの前抜け出し期（第 1 期）、望む性での社会適応模索期（第 2 期）、主体的な社会適応再構築期（第 3 期）の 3 期からなる社会適応再構築プロセスが生成され、その 3 期のプロセスとともに、性別にまつわる困難の意味合いが変化していくことが示された。さらに、主体的な社会適応再構築期（第 3 期）においては、FTM/X 自認者が性別を越えたひとりの人間として自らの当事者性を引き受けたり、自ら社会に対して働きかけたりすることで自らのよりよいあり方を実現していた。また、[社会にある性別二元論の枠組み] が [GID が自然にある社会] へと変革されることで、“ありのままの自分” で生きられることを期待していることがわかった。

以上のことを踏まえれば、FTM/X 自認者の QOL 向上のためには、身体的性別と性同一性との不一致を軽減させる医学的治療介入だけでは十分ではないことは明らかである。本研究で生成された理論からは、FTM/X 自認者自身が多様な性のあり方を具現するひとりの人間として、自らの当事者性を主体的に包含していく社会適応のあり方について、示唆を得ることができた。さらに、本研究で生成された理論からは、FTM/X 自認者が必ずしも“男性”という既存の性別集団への帰属を求めるのではなく、彼らなりの社会的あり方を独自に再構築していく様子が垣間見られる。このような多様な当事者のあり方からは、性別二元論に基づく性別理解の限界をも読み取ることができる。多様な性のあり方を持つ人々がよりよく共生できる社会を目指して当事者の抱える心理社会的課題の解決にコミットしていくなかで、私たちは当事者の現実からまだ多くのことを学ぶことができるだろう。

本研究の分析方法として採用した M-GTA は、臨床実践での理解と応用の積み重ねによって活かされることを前提とした研究方法であり、臨床実践での応用と積み重ねが分析プロセスの一部として組み込まれている。そのため、実践場面で生じる現象に対して本研究によって生成された理論がどの程度の説明力を持つものかを確認することで、生成された理論の妥当性と有用性を検討していく作業が必要である。また本研究では、実際に得られた全逐語録データから、分析テーマである社会適応再構築プロセスと関連のある具体例のみを抽出して分析を行った。したがって本研究は、当事者の性別移行について社会という

大きなコミュニティの視点から捉えたに過ぎず、家庭・学校・職場などのコミュニティの違いについて十分には検討されていない。また、すべての当事者が本研究で生成された社会適応再構築プロセスの第3期に至るわけではない。本研究の協力者となったFTM/X自認者のなかにも、違和感を抱きながらも“ありのままの自分”を表現し切れずにいる者や、就職差別によって個と社会との矛盾に打ちのめされている者など、さまざまな段階にいる当事者がいた。それぞれの当事者が参加しているコミュニティにおける細やかな援助の実際については、今後のさらなる検討が必要であると考えられる。

しかし本研究では、M-GTAを方法論的根拠とし、15名のFTM/X自認者を分析焦点者というひとりの人間に見立てることで、当事者の社会適応再構築プロセスについての理論を得ることができた。本研究で得られた理論は当事者の抱く困難や選択する生き方を予測する際に応用可能なものであり、性別違和を有する者への心理社会的援助について新たな指針を提供した本研究の意義は大きいと考えられる。本研究によって生成された理論が、当事者によりよいサービスを提供する一助として活用されていくことが期待される。我が国の心理学分野でのGID研究はまだまだ報告が少ない。MTF/X自認者も含めた性別違和を有する者全体のQOL向上に貢献するためには、今後のさらなる実践活動や研究報告の積み重ねが待たれる。

第 5 章 M to F/X 性別移行過程の検討（研究 3）

第 1 節 研究 3 の問題と目的

1 研究 3 の問題意識

研究 1（第 3 章）および研究 2（第 4 章）によって、また、FTM/X 自認者の F to M/X 性別移行における社会適応の再構築について、一定の示唆を得ることができた。しかし、FTM よりも MTF の方が社会的偏見によってスティグマを負いやしく、いじめや不登校経験者、精神症状を呈する者も多い（真鍋・花田・上石，2000）。我が国の主要な心理学研究誌上に心理社会的観点から M to F/X 性別移行に着目した研究は見当たらないが、臨床的関心はより高く、報告が待たれている。

2 研究 3 の目的

研究 3 では、研究 1 および研究 2 と同様、性別違和を有する者の直面する社会的障害へのアプローチに着目し、生活者へのコミットを重視するコミュニティ心理学的視座から、臨床的課題が多いとされている“男（性）”からの性別移行プロセスについて理解を試みるとともに、MTF/X 自認者の潜在的ニーズに沿った心理社会的援助の可能性に示唆を得ることを目的とする。

第 2 節 研究 3 の方法

MTF/X 自認者の示す多様な性別移行のあり方が反映された知見を得るには、研究 2 と同様、当人等の語りを素材とした質的研究が最適と考えられる。そこで、MTF/X 自認者の主観的な M to F/X 性別移行体験を時系列に沿って聴取する半構造化面接を筆者と MTF/X 自認者の 1 対 1 で実施した。面接は IC レコーダーで録音し、それを元に逐語録を作成した。その後、時間的プロセス性が加味された理論の生成を得意とする M-GTA を用いて逐語録を分析した。委細を以下に述べる。

1 面接研究協力者の選定

面接協力者の限定範囲の設定

先行研究と本研究の目的を踏まえ、研究協力者について参加要件を設定した。(a) 性別違和を感じていること、(b) MTF/X 当事者と自認していること、(c) MTF/X 当事者性を持つことで社会適応上の葛藤を有していること、(d) インターセックス当事者性を持たないこと、(e) 日本国籍を有していること、(f) 戸籍の性別変更が済んでいないことの 6 つである。

さらに、研究協力者の安全を確保するための倫理的配慮として、(g) 18 歳以上であること、(h) 自身の性別移行体験について話すことについて強い精神的負荷を予感していないことの 2 要件を追加した。要件 (d) は、戸籍の性別を変更するための手続きや医療的治療の枠組み等の様々な側面において、一般的な性別違和を有する者とは異なる性別移行過程が想定されたために設けた。これら計 8 要件以外はすべて不問とし、要件を満たすか否かは研究協力者からの自己申告によって確認した。

面接協力者の募集方法

身体的治療を希望していない者、一定の身体的治療を受けた後に現在は通院していない者等も含めたサンプリングを行うため、GID（性同一性障害）学会研究大会、当事者自助グループが主催する交流会等で研究協力者を募り、医療機関での募集は控えた。配布した

募集用紙には、本研究が性別違和を有する者の QOL 向上、特に社会のなかでのよりよい性別移行への貢献を目指していることを記して協力を仰いだ。

2 半構造化面接について

リサーチクエスチョン 半構造化面接におけるリサーチクエスチョンは“出生時に指定された性別から現在までどのように性別移行してきたのか”とした。本来“性別移行”には、身体的性別の特徴に関する形成外科的变化や性ホルモン投与による外見的变化も含まれる。しかし、本研究は社会的障害へのアプローチに主眼を置いている。そこで、他者との相互作用が想定されるカミングアウトを具体的な切り口とした。

質問項目の選定 半構造化面接で用いる質問項目は、筆者と大学教員 1 名、臨床心理学専攻の大学院生 2 名との協議によって決定した。その結果、FTM/X 自認者の F to M/X 性別移行について聴取した研究 1 の調査で使用した質問項目を、M to F/X 性別移行の実態と研究目的に沿うように一部改変して用いることとなった (Table18)。

Table18 研究 3 で実施した半構造化面接で使用した質問項目

質問①	性同一性障害当事者 ¹⁾ と自覚してからカミングアウトまでの経緯はどのようなものだったか 当事者性を自覚したか時期／性同一性障害について知った経緯／性別移行を現実的に意識し始めた経緯
質問②	性同一性障害当事者性をカミングアウトするとき、何か不安はあったか どのような不安だったか／不安の背景にあったもの
質問③	カミングアウトするとき、何を目的にし、何を求めたか 何が得られると思っていたか／どのような気持ちを抱いていたか／カミングアウトしたときの状況／カミングアウトした後の相手の反応
質問④	社会に“埋没”することと、“適応”することについてどう考えるか 現在、どのように社会のなかで生きているか／今後、どうやって生きていこうとしているか
質問⑤	非当事者も一緒になってよりよく生きていくためには、何が必要だと思うか 今すでにどんなことができているか／さらにどんなことができるとよいか／希望する将来に向けて自らができる第一歩はどのようなものか

1) 面接実施当時、“性別違和を有すること”を指し示す言葉として“性同一性障害”がもっともよく知られていた。そこで面接内では、筆者と研究協力者間の共通理解を図るため、“性同一性障害当事者”という語を一貫して用いた

3 分析方法

研究 3 では、第 4 章第 2 節に記述した M-GTA の特徴的手技を遵守して分析を行った。

信頼性と妥当性

本研究では M-GTA の分析手続き（木下，2003）を遵守し、必要最低限の分析過程を開示して信頼性確保を試みた。また、筆者と臨床心理学専攻の大学院生 7 名でチームをつくり、筆者を含め 5 名以上が参加した複数回の協議を経て分析初期のオープン・コーディングを行うことで、結果の妥当性確保を図った。分析が適切か否かは、M-GTA を採用した研究の指導経験がある大学教員からスーパービジョンを受けた。

理論的サンプリング

研究 3 の調査では、(a) 年齢、(b) 自認する性別の属性、(c) 雇用形態、(d) 性別違和感に因る現在の苦しみの強さ、(e) 精神科医による性同一性障害診断の有無、(f) 現在のジェンダークリニック通院状況、(g) 身体的治療の完遂度、(h) 戸籍の名の変更の有無を聴取し、それぞれ一定のヴァリエーションが確保されるように理論的サンプリングを行った。

(b) では、面接実施当時の面接協力者自身を表すのもっともふさわしいと考えられる性別の属性について、口頭で自由回答を求めた。(c) では、無職・個人営業・被雇用社員の 3 つの選択肢を口頭で提示し、もっともあてはまるものをたずねた。(d) では、それが主観的なものになって構わないことを明言してから、第三者に性別違和感の強さについて問われた際に何と答えるのか、口頭で自由回答を求めた。(e) (f) (g) (h) はそれぞれ、面接協力者に確認しながら聴取した。

一般に MTF/X 自認者の性的指向は異性愛者が多い FTM/X 自認者に比して多様性を持つと言われている。しかし、本調査では、当初から性的指向を理論的サンプリングの観点としなかった。これは、性的指向は治療方針の決定に大きな役割を果たさず、経過のなかで変遷され得るという臨床現場からの報告（針間，2010）による。なお、DSM-IV-TR（American Psychiatric Association，2000 高橋・大野・染谷訳 2004）で、性同一性障害と診断された者が性的に成熟している場合には記載可能であった性的指向についての特定用語は、DSM-5（American Psychiatric Association，2013）では削除されている。

本研究でも、性的指向を M to F/X 性別移行プロセスと関連づけて語る者はいなかった。

4 倫理事項

面接協力者には半構造化面接の実施前に、研究の目的と方法、想定される身体的・精神的負荷、負荷を最小限にするために講じた対策、負荷が生じた際の対応・措置、面接協力における自由意思の尊重、協力参加を拒否する権利の保障、データ収集とその処理におけるプライバシーの保護、研究成果の公開方法等について、口頭および文書を用いて十分に説明した。その後、同意書への署名によって、インフォームド・コンセントを得た。なお本研究は、『目白大学人及び動物を対象とする研究に係る倫理審査委員会』の審査を受け、承認を得てから実施された。

第3節 研究3で行われた分析のプロセス

1 分析プロセスの開示

分析焦点者の決定

継続的な理論的サンプリングを行い、16名との面接終了時点で、必要事項の各観点において網羅的なデータ収集がなされたと判断した。以後、データの追加は行わなかった。面接実施期間は2011年7月から9月までで、面接場所は都内大学施設であった。

分析焦点者には、研究参加協力のための8要件を満たすMTF/X自認者16名（26歳から53歳、平均年齢40.0歳（SD = 8.93））が含まれることとなった。自己申告された各研究協力者の特徴を一覧にしてTable19に示す。

分析テーマの設定

分析初期には、分析の角度と方向性を明確化するため、データとの対話を繰り返しながら、適切な分析テーマを検討した。その結果、“性別移行を通して自分らしく生きている感覚を獲得していくプロセス”が最終的な分析テーマとなり、“性別移行過程のなかに見られる自他に対する向き合い方”の角度から分析を進めることとなった。

理論生成の手続き

まずは面接の逐語録から自他に対する向き合い方について語られている部分を意味のまとまりごとに抽出し、これを具体例とした。抽出された具体例同士に類似性が認められた場合にはそれを集めて分析ワークシートを作成し、概念化（概念名と概念定義の設定）した。概念に新たな具体例が加えられた際には、概念定義が加わった具体例までも網羅的に説明し得るかどうかを検討し、概念の拡大と収束を繰り返しながら最適な定義の範囲を見定めていった。十分な具体例に支えられた概念には、順次、分析ワークシート単位で理論的飽和化の判断を下した。同時に概念同士の関係を継続的に比較分析し、概念の統合と解体を繰り返した。概念相互の関係、カテゴリー間関係、全体としての統合性が確保されたところで理論全体に理論的飽和化の判断を下し、分析終了とした。生成された23概念の名と定義、代表的な具体例をTable20に示す。

Table19 研究3の面接協力者に関する特徴の一覧

(a) 年齢	(b) 自覚する属性	(c) 雇用形態	(d) 現時点での性別違和による苦しみの強さ	(e) 精神医学的診断	(f) 現在のジェンダークリニック通院状況	(g) 身体的治療の完遂度			(h) 戸籍の名の変更
						ホルモン治療	性別適合手術 睾丸摘出 陰茎切除	造陰	
50代	MTF	無職	中より上	無	1年8ヶ月の通院中	不可 ¹⁾	— 不可 —	未 ²⁾	
20代	MTF	無職	非常に強い	無	通院中	不可	— 不可 —	未	
40代	MTF	無職	強くSRS ³⁾ を望んではいない	無	病院に行くメリットがない	自己流ホルモン摂取 ⁴⁾	— 不可 —	未	
40代	トランスジェンダー ⁵⁾	被雇用社員	SRS、声を変更したい	有	通院中	不可	— 不可 —	○	
40代	MTF	個人営業	どう考えてもやっぱり強い	有	時々お話しに行っている	○	○ 未 ×	○	
30代	MTFTS ⁶⁾	個人営業	非常に強い	有	持病があり治療可か相談中	不可	— 不可 —	○	
20代	MTF	被雇用社員	昔は10のうち9、今は2か3	有	身体的治療のため通院 ⁷⁾	○	近日実施予定	○	
50代	MTFTS	被雇用社員	非常に強い	有	SRSの意見書のため	○	— 不可 —	不要 ⁸⁾	
20代	使いやすいのはMTF ⁹⁾	被雇用社員	今はほとんどない	有	もう必要ないと思っている	不要 ¹⁰⁾	— 不可 —	○	
30代	MTF	被雇用社員	強い	有	行ってもやることがない	○	○ ○ ○ ○	○	
30代	MTF	無職	自分より強い人がいる ¹¹⁾	無	こわくてまだ行けない	不可	— 不可 —	未	
40代	MTFTS	被雇用社員	非常に強い	有	SRSのオピニオンが欲しい	○	— 不可 —	○	
50代	MTF	無職	幼い頃から、非常に強い	無	最近存在を知って1回通院	不可	— 不可 —	未	
40代	MTF	無職	とっても強い	有	通院中	自己流ホルモン摂取	— 不可 —	未	
30代	MTFTS	個人営業	かなり強く、最近特に	有	SRSをしたくて通院	○	— 不可 —	○	
50代	MTF	被雇用社員	5段階で4くらい	有	今は行っても大したことない	○	— 不可 —	○	

¹⁾ 『性同一性障害の診断と治療のガイドライン(第4版)』(日本精神神経学会・性同一性障害に関する委員会, 2012)に沿って身体的治療を進めていくためには、通常、一定期間の継続的通院が必要となる。本人は希望しているがまだ身体的治療に進めない現状にある場合は“不可”、継続中または実施済みである場合は“○”と表記した

²⁾ 現行法制度では、性同一性障害以外の事由で名を変更することも可能なため、名の変更を行っていない場合は“未”と表記した

³⁾ 性別適合手術(sex reassignment surgery)の略語

⁴⁾ 現状では、医療機関によらずとも個人輸入サイトなどを經由して女性ホルモン剤を入手し、自己判断で摂取することができる。GID(性同一性障害)学会等がその危険性に度々警鐘を鳴らしているが、違法性はない

⁵⁾ 人権運動のなかで用いられるようになった言葉で、“生まれながらの身体的性別に基づかない性自認に即して生活することを望む者の総称”との意で用いられていた

⁶⁾ Transsexualの略称で、ホルモン治療に加えてSRSまでを強く望んでいることの自己表現として用いられていた

⁷⁾ 『性同一性障害の診断と治療のガイドライン(第4版)』によれば、性別適合手術を受けるには主治医を通して、精神科医あるいは心理関係の専門家によって作成された意見書を医療チームに提出する必要がある。様々な事例に対応するための細則があるが、ここでは割愛する。詳しくは当該文献を参照されたい

⁸⁾ 従来の名の読みを変更すると女性的な響きのある名となり、読みの変更手続きのみで戸籍の名の変更と同等の満足が得られているとのことだった

⁹⁾ 必要事項を聴取した際、性別は「なんでもありだと思う。あえて言えば、“性別＝自分”だが、「使いやすいのはMTF」と回答した

¹⁰⁾ 脱毛やメイク等の他の手段で、ホルモン治療を受けている者と同様の外見的变化が得られていた。日常生活でも自ら当事者性を明らかにしなければ“女性”として認識されていると語っており、外見的变化や性別移行を求めているとの意ではなかった

¹¹⁾ 「もっと辛い人もいる」「自分はまだ生きていけているから」という発言内容から、このように表記した

2 概念生成とカテゴリー化のプロセス

以下、生成された概念を【 】, カテゴリーを〈 〉, 実際の語りを「 」で示す。

“性同一性障害”という言葉や概念を知る前に抱かれる性別違和の感覚からは、本人のな

かで抱かれる【身体に対する性別違和】と、周囲の人や社会とのかかわりのなかで抱かれる【男性役割の居心地悪さ】の2概念を得た。“男（性）”でもなく“女（性）”でもない自己の存在に向けられた根源的・実存的問いや、自己の存在が揺さぶられた感覚にまつわる具体例からは、【自己の存在への問い】が生成された。その問いに社会的価値判断が加わり、「日陰者」や「きちがい」などの自己嫌悪に至っていると判断された具体例からは【特異な自分への嫌悪】が構成された。これら4概念は、〈自問自答〉にまとめられた。

性同一性障害に関する医学的知識の習得、同じ境遇の当事者との出会い等、M to F/X 性別移行を自らの現実につけて考えたり、自身の未来イメージが描かれたりする契機となった具体例からは、【モデリング対象の発見】が生成された。この概念はそのままカテゴリーとして採用された。

性別移行を検討するなかで抱かれる不安や躊躇いからは、自己の内面に向かう【カミングアウトの不安と躊躇】、周囲の他者への否定的影響を懸念する【相手を傷つけることの懸念】が生成された。人目を忍んで行われる「メイク」や、クローズドな当事者集会での手ばかり探し等、自分なりの性別移行を試みていく具体例は、【性別移行に向けた自分なりの努力と模索】にまとめられた。この対極例として、他者とのかかわりのなかで性別移行を進めていこうとする【カミングアウトの相手選び】が生成された。これら4概念から〈暗中模索〉が構成された。

何らかの具体的な性別移行を実行しても、相手が自分に向ける性別認識が“男（性）”から変わらないことで抱かれた気持ちから、【意図が伝わらないやるせなさ】が生成された。また、当事者と非当事者の間にある分かれ難い壁が浮き彫りにされた具体例は、【非当事者との隔絶感】にまとめられた。性別に関する選択肢が“男（性）・女（性）”のどちらかしかないことで生じた苦痛や困惑からは、【迫られる性別の二者択一】が生成された。この類似例から、MTF/X 当事者性を持つために受ける様々な苦悩に堪え忍ぶ【生きるための我慢】が構成された。これら4概念が〈対他的性別移行の苦悩〉にまとめられた。

性別移行へ歩み出すことで得られた苦難からの解放感や「幸せを感じるようになった」などの癒しの感覚は、【艱難辛苦から解放された感覚】にまとめられた。MTF/X 当事者性を知った他者から、懸念していた否定的反応を得なかった、あるいは肯定的反応を得たことで生じた気持ちは、【性別のあり様を受容された】にまとめられた。「洋服」に関するアドバイスや「メイクしてくれた」等、M to F/X 性別移行についても支持・賛同を得たことで抱かれた気持ちからは、【性別移行することへの積極的支持】が生成された。これら3

概念から〈現状打開の喜び〉が得られた。「もう“男(性)”としては働けない」という思い、他者に「わかってもらいたい気持ち」の高まりなど、“女性”として他者や社会に認められることに必死になる【認めてもらいたい】は、そのままカテゴリーとして採用された。

MTF/X 自認者が、他者や社会に対して主体的に M to F/X 性別移行を進めていこうとする具体例から、〈エンパワメント〉を構成する【自分の気持ちを貫く決意と覚悟】と【社会ではなく私が決める】が得られた。この 2 概念は、内的感覚への言及にとどまるか、具体的な行動変化に至っているかで分けられた。

典型的な MTF と自らのあり様との異同や多様な M to F/X 性別移行のあり方を学び知ることが翻って自分の独自性・固有性を見出しにつながっていった具体例から、【多様性のなかにある自らの固有性】が得られた。自らが望むあり方で生きていくために自身の手で自らをしっかりと位置づけ直していく必要性への言及は、【自分自身の位置づけ直し】にまとめられた。M to F/X 性別移行のなかで現実的困難に直面しつつも、「工夫次第」でやっていることを言う具体例からは、【自分なりに切り拓かれる道筋】が生成された。M to F/X 性別移行によって実現されることの限界を知りながら、それでも今は性別移行以前に比べれば総じてよりよい日常を送れているとの感覚は、【総じれば以前よりずっといい】にまとめられた。これら 4 概念から〈苦楽ある私だけの人生〉が得られた。

Table20 研究3で生成された概念の名と定義および代表的な具体例

概念名	概念定義	具体例
身体に対する性別違和	自らの持つ身体的な性別の特徴が“男”であることへの違和感および、“女”が持つ身体的な性別の特徴を持っていないと抱かれないであろう願望や羞恥心の自覚	「〔水着の〕上が裸でなんとも言えない恥ずかしいかんじがあった」「妊娠・出産したい、授乳したいって気持ちがあった」
男性役割の居心地悪さ	“男(性)”として求められるさまざまなことに応えられない自分への直面や、男性役割に沿って生きることへの違和感・不本意感	「時代が時代だったからしょうがなく、男としてやってましたけど...どうして結婚なんかしたんだろうって」
自己の存在への問い	“男(性)”でも“女(性)”でもない自分に対して抱かれる、自身の存在への根源的な問いとそれによって自己の存在が揺さぶられる感覚	「〔男性としてあることが〕嫌だ嫌だって思って...だんだんと自分の自我が溶けてなくなっていく」「自分が何者なのか」
特異な自分への嫌悪	MTF/X自認者に内在化するセクシャルマイノリティに対する偏見やそれ由来する自己への嫌悪	「もう世の中の的には“変態”の分類」「もう絶対に一生口にてできないだろうと思った」
モデリング対象の発見	同じような悩みを抱える当事者の存在を知ったり実際に目にしたりすることで得られる孤独からの解放感や、自身の未来が啓かれる感覚	「自分も同じように生きていきたい」「瞬間的に自分もこのくらいならできると思った」「実際に実践されている...いい見本になります」
カミングアウトの不安と躊躇	現実の性別移行に先行して抱かれる、カミングアウト相手に自身のMTF/X当事者性を受け容れてもらえないのではないかと不安や、その不安のためにカミングアウトが躊躇されること	「両親に突き放されたら...相当ショック」「拒絶される恐怖...躊躇する面があった」
相手を傷つけることの懸念	自分がM to F/X性別移行に向かうことが、相手の精神的衝撃や負担、マイノリティ属性への巻き込みにつながるのではないかと懸念	「言っちゃいけない...悲しむ」「親が周囲から『育て方が悪い』と言われる」
カミングアウトの相手選び	それまでの相手との関係性やセクシャルマイノリティに対する態度等を鑑み、自らのMTF/X当事者性をカミングアウトできる相手を吟味すること	「逃げない”友だち”を選ぶ」「言っても無理だと思う相手には、絶対しゃべらない」
性別移行に向けた自己なりの努力と模索	自らのMTF/X当事者性を自覚することで、自らの性自認に沿いたいとの想いが抑えきれなくなる、あるいは、その想いに医学的正当性が付与されたと感じることで行われ始める、性別移行に向けた自己なりの具体的行動	「婦人もの〔のスーツで〕会社に行くことしか頭になかった」「女子トイレに入った」「すぐに〔MTFが講師の〕講演に申し込んだ」
意図が伝わらないやるせなさ	カミングアウトしても、どう考えても“男(性)”はしないだろう格好をしても、いつまでも“男(性)”という前提のもとでしか見なされないやるせなさ	「スカート、メイク、髪の毛も伸ばして...なのに“個人的な子”」「結局、“男が女になりたい”っていう理解」
非当事者との隔絶感	自身の性別の特徴やそれによって抱かれる苦難は、非当事者には決して理解されないであろうという孤独・疎外・隔絶感	「一般の方は、女装さん、ニューハーフ、性同一性障害...違いなんてわからない」「私の立場で理解できるかはまた別のこと」
迫られる性別の二者択一	社会生活のなかで、性別について男なのか女なのかと疑惑の目を向けられたり、男女どちらに所属するかの決断を迫られたりすること	「身分を疑われた」「更衣室も入り口から男女でわかれる。どっちかに行くしかない」
生きるための我慢	本意ではない「扱われ方をされたり、MTF当事者性が理由であろう理不尽な采配や差別に曝されたりしても、自分が生きていく上では避けがたい辛さのだと努めて割り切ろうとすること	「辛いけど、自分の都合ばかりは言ってられない」「仕事だからって割り切って...しかたない」「とりあえず〔授業〕単位だけはとって」
認めてもらいたい	自分は男性じゃない／女性なのに、外見からは“男(性)”と見られることに苦しさを感ずき、女性として認められることに必死になること	「結局男性扱いなのが限界...最初から“女性”でやらなきゃ無理」「“これでも女なんだ”って堂々としなきゃって、頑張ってた」
艱難辛苦から解放された感覚	これまでの艱難辛苦から解放されたような喜びや癒やしの体感	「嬉しい。積もっていたことが言えて、非常に幸せを感じるようになった」「自分の抱えていた荷物...それを下ろせた」
性別のあり様を受容された	MTF/X当事者性に関してカミングアウトした相手から、性別二元論では捉えきれない自らの性別のあり様を受容された／受容されていると思えること	「“それでいい”と...ありがたかった」「“女に生まれてこられればよかったのにな”って言ってくれた」「少なくとも軽蔑の目はなかった」
性別移行することへの積極的支持	自らの内面(性自認)が男性ではない／女性であると認められているだけでなく、現実のM to F/X性別移行についても積極的な支持や賛同が得られていると感ずくこと	「〔その仕事は〕“おっさんくさいからやめな”って教えてくれた」「“パーマかけたら”とか、アドバイスくれて嬉しい」「メイクしてくれた」
自分の気持ちを貫く決意と覚悟	人になんと言われようと“自分は女性である／男性でない”ことを確信し、なにがあっても自分の気持ちを貫いていこうと意を決すること	「自分らしさ...これだけは絶対に守ってやろうと思ってた」「誰かに“男だ”って言われても絶対違うと言えろ自信がついた」
社会ではなく私が決める	社会にある二分的な性別理解に迎合して相手や社会にお伺いを立てるのではなく、自ら自分らしくいられる相手や組織を主体的に選んでいこうとする考えやその考えに基づいた行動	「当事者なのを理由に不採用にする会社なら行かない...〔自分も会社を〕ふるいにかけた」「悪口を言われても街中を堂々と歩く」
多様性のなかにある自らの固有性	いわゆる典型的なMTFと自らのこころのあり様の異同を見つめることや、多様なM to F/X性別移行のあり方・進め方を学び知っていくことを通して、多様な人間のあり方のなかに自らの固有性を見出していくこと	「こころの傷つき方の度合いやこころのあり様っていうのは本当に無数にある」「ものすごいグレイゾーンがあることを知っている」
自分自身の位置づけ直し	ひとりの人間として望みあり方で生きていくためには、自分自身がしっかりと、自分を相手や社会のなかに位置づけていくことが必要なのだと感ずくこと	「勇気、人間に対する好奇心、決意...どう思われているかよりも、自分がどう思うのか」「自分を認めて...認められる自分になる」
自分なりに切り拓かれる道筋	MTF/X当事者ならではの社会的困難や理由なき不利益、不当な扱いを受けながらも、そのなかで自分なりの道を切り拓くことができるのだという確かな手応え	「ただ不可能だってするのではなくて、どうやっていけばいいかなって考える」「〔偏見・差別との〕闘いがあったから、今の自分がいる」
総じれば以前よりずっといい	完全には払拭されない性別違和やM to F/X性別移行の限界を知りつつも、できるようになったこと／今後の改善可能性に目を向ければ、現状の日常生活は総じて以前よりよいという感觸が得られていること	「今はダメでも、未来には希望がある...あまり暗い気持ちにならなくてもいい」「諦めとか、現状満足。“認めて！認めて！”はない」

注:具体例の記載中にある〔 〕は、文意を伝えるために筆者が本人の前後の語りから言葉を補ったことを示している

第4節 研究4のストーリーライン： 心理社会的アイデンティティ再構築プロセス

当初彼らは、【身体に対する性別違和】を抱きつつも、他者から求められるように「なんとか“男性”としてやっていこう」とする。だが、「嫌で嫌でしょうがない」ような【男性役割の居心地悪さ】がある。自分が「女の子に近い」のは「なんとなくわかっているけど、性別を移行するとかそういう概念自体」はまだ知らないため、私は「いったい何者なのか」との【自己の存在への問い】が心に浮かんでくる。「変態としか思えない」ような【特異な自分への嫌悪】から、「この気持ちは誰にも言わずに墓まで持って行こう」とも思うが、「このままではもうやっていけない」気持ちもある。こうして、「自分でも説明のしようがない」事態に悩み、戸惑いながら、そのときなりの〈自問自答〉を繰り返していく。

自らを「“男性”とは思えない」。しかし、「どう見ても“女性”ではないことはわかっている」。周囲には「自分と同じような人はいない」ため、「これからどうやっていけばいいのか」わからない。暗澹とした未来しかないように感じていた彼らにとって、同じ境遇の当事者との出会いは「まさに劇的な出会い」となる。〈【モデリング対象の発見】〉に至った彼らは、「自分にもできる」「病気として治療できるものなんだ」と知り、性別移行の先にある希望や可能性を見出す。これが、その後の人生を変えていく大きな内面的転機となる。

内面的転機が具体的行動変化に至っていく道のりは平坦ではなく、〈暗中模索〉を要する。「外見的にはまだ雄」でしかないなかで「“女”として認識してもらおう」ためには、「自分でカミングアウトして認識とか扱いを変えてもらおうか、それが無理なら行動で強行突破するしかない」などと思案が重ねられる。この時期にはまだ、MTF/X自認者のなかで長年抱かれてきた自らの性別のあり方への否定的認識は、払拭されていない。もしカミングアウトした相手に「気持ち悪がられたり」、「拒絶されたりしたらどうしよう」と、【カミングアウトの不安と躊躇】を抱く。家族や親友などが「自分と一緒にくたにされて偏見の対象になりはしないか」といった【相手を傷つけることの懸念】も抱かれる。しかし、このような「自分がダメージを受けることへの不安」も「相手を傷つけてしまうことへの心配」も、M to F/X性別移行を断念させるものとはならない。彼らは、【カミングアウトの相手選び】を始める。【性別移行に向けた自分なりの努力と模索】によってもまた、性別移行が試みられる。

ところが、性別違和を体験したことのない者に「性別が一致していないという感覚はな

なかなか理解されない」。ようやく M to F/X 性別移行に歩み出せても、「男が女になりたいんだ」と「勘違い」されたり、「本当は女性なんだってことを理解しない・できない・したくない」という態度を示されたりすることによって、【意図が伝わらないやるせなさ】を感じる。非当事者である相手との間にある「溝の深さ」への直面は、【非当事者との隔絶感】を抱かせる。「男と女と、どちらの更衣室を使うか」や「あらゆる性別記載欄」で、自ら“男（性）”と表明せねばならない事態に遭遇する。「男と女、どっち？」などと揶揄されれば、「まだ“男性”が残っていること」に愕然となる。こうした【迫られる性別の二者択一】によって、彼らは「心理的に追い詰められていく」。【生きるための我慢】は、それでも「生計を立てていくために“男（性）”としてやっていかなければならない」者に見られる、苦悩に満ちた忍耐と言える。

〈対他的性別移行の苦悩〉によって、“女性”であることを〈【認めてもらいたい】〉との想いは思慕や渴望にまで高じ、MTF/X 自認者は「認めてもらうためならって、なりふり構わず」必死になる。そしてその必死さがゆえに、相手から認めてもらえない際に抱かれる希望と現実との落差は拡大し、「こころの傷つき」も深くなる。〈対他的性別移行の苦悩〉はますます強く感じられるようになっていく。

一方で、M to F/X 性別移行の試みによって〈現状打開の喜び〉が得られることもある。それまで「自分から避けてきた」からこそ、「メイクして女性ものの服を着た自分がショウウィンドウに映るのを見て、嬉し涙が出る」。誰にも話せずにしたからこそ、「“言えた”というだけで肩の荷が軽くなった」と感じる。“男（性）”として過ごさねばならなかったときには得られなかった「これが本当の自分なんだ」という感覚は、【艱難辛苦から解放された感覚】をもたらす。カミングアウトした相手から【性別のあり様を受容された】ことを「何よりもありがたく」感じ、【性別移行することへの積極的支持】は「驚くほどうれしく」、また「すごいハッピーな出来事」として体験される。

次第に、人になんと言われようと【自分の気持ちを貫く決意と覚悟】が定まる。自分の性別のあり方は【社会ではなく私が決める】のだという意識が芽生え始め、〈エンパワメント〉された MTF/X 自認者は、「こころを許して話す相手」や「自分らしくいられる場所」を主体的に選別・決定するようになる。

そして、「典型的な MTF」や“男女どちらか”っていう枠に必ずしもこだわらない【多様性のなかにある自らの固有性】を見出すなか、ひとりの人間として生きていくためにしつかりとした【自分自身の位置づけ直し】の必要をも感じ始める。「完全に自分の希望する

ように」ではないものの、【自分なりに切り拓かれる道筋】が確かにあったのだと気づく。こうして、「ときには辛く、苦勞もまだある」が【総じれば以前よりずっといい】という「現状満足」のもと、〈苦樂ある私だけの人生〉が歩まれるようになっていく。

このストーリーラインは“心理社会的アイデンティティ再構築プロセス”と名づけられ、Figure26 のように図示された。

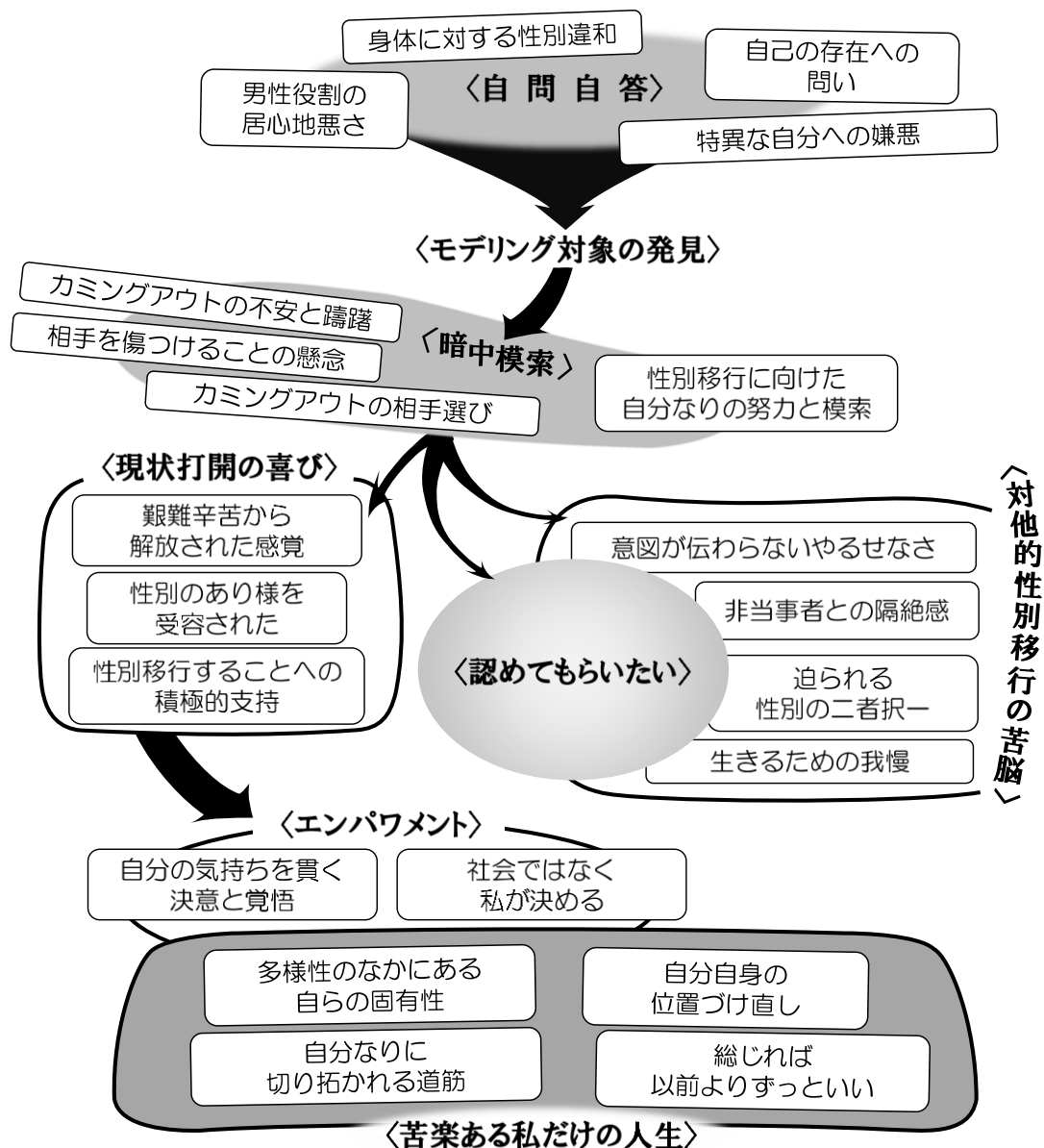


Figure26 M to F/X 性別移行過程にける心理社会的アイデンティティ再構築プロセス

第 5 節 M to F/X 性別移行に関する考察

1 ストーリーラインの適用範囲

面接協力者の限定範囲について

“心理社会的アイデンティティ再構築プロセス”と名づけられたストーリーライン（以下、本プロセス）は、M-GTA を方法論的根拠とし、16 名の MTF/X 自認者を 1 人の分析焦点者に見立てる（木下，2003）ことで得られた。研究 3 で実施された面接に協力するための要件には、“(a) 性別違和を感じていること”，“(c) MTF/X 当事者性を持つことで社会適応上の葛藤を有していること”が含まれている。“(e) 日本国籍を有していること”，“(f) 戸籍の性別変更が済んでいないこと”の要件は、戸籍上の性別が明らかとなる場面（例えば、健康保険証や履歴書等の性別記載欄）において、指定された性別が“男”であることが他者に露見し得る現状にあることを意味する。面接協力者はすべてこれらの要件を満たすと自己申告した者であり、少なくとも主観的には、身体への性別違和（身体的障害）と社会生活上の何らかの制限・制約（社会的障害）の双方を感じていると理解される。

理論的サンプリングについて

各研究協力者の特徴の一覧（Table19）からもわかるように、研究 3 の調査では、自覚する属性や雇用形態、身体的治療の進捗、戸籍の名の変更の有無等について、一定のヴァリエーションが確保されるように理論的サンプリング（木下，2003）を行った。したがって、ある特定の状況にある者を特筆するものではない。また、精神科医から性同一性障害診断を受けていない者からも協力を得ている。“医師から診断を受け、手術を受け、新たな戸籍の性別で生きるという医療における「獲得」の物語……のルールに乗ってゴールに達成した者”を“成功者”と呼んだ荘島（2008）は、成功者ばかりが性同一性障害研究の格好の対象者となっていることを批判し、成功者以外の声や生き様、変容プロセスをすくい上げる必要性を述べている。荘島（2008）の言葉を借りれば、本プロセスは、成功者でない MTF/X 当事者性を持つ MTF/X 自認者の M to F/X 性別移行を説明するものと言える。

2 心理社会的アイデンティティ再構築プロセスについて

性別移行以前の自己嫌悪と社会的偏見

本プロセスの冒頭カテゴリー〈自問自答〉には、【特異な自分への嫌悪】が含まれた。この概念は、“MTF/X 自認者に内在化するセクシャルマイノリティに対する偏見やそれに由来する自己への嫌悪”と定義づけられた。F to M/X 性別移行に関する FTM/X 自認者の語りから“社会適応再構築プロセス”を生成した西野（2011）によれば、FTM/X 自認者は、セクシャルマイノリティ性（FTM/X 当事者性）をカミングアウトすることで、自らや周囲の他者が偏見の目に曝されはしないかと懸念し、カミングアウトに予期的不安を抱く。しかし、“社会適応再構築プロセス”のなかに、本研究の【特異な自分への嫌悪】に含意されているような自己嫌悪を説明する概念は見つけれない。

“自他への向き合い方の変化”を分析の角度として本プロセスを得た本研究に対し、西野（2011）は“社会適応状態の変化”を分析の角度としているため、両研究の結果を単純に比較することはできない。しかし、中塚・江見（2004）が述べているように、FTM は“男勝りの女性”として周囲に受け入れられやすいが、MTF は“女性的な男性”としていじめなどを受けやすい。M to F/X 性別移行に着目した本プロセスと西野（2011）が提示している F to M/X 性別移行の“社会適応再構築プロセス”との異同からは、本人のなかにセクシャルマイノリティに対する社会的偏見が内在化されているという共通項とともに、幼い頃から FTM/X 自認者に比して強い社会的偏見を身に受けてきたことによって、MTF/X 自認者の自己嫌悪の感覚が増大させられている可能性が考察される。

内面的変化の瞬間性と停滞する対他的性別移行

本プロセスを概観すると、〈モデリング対象の発見〉が、彼らが生きた後に性別移行していく上での、非常に大きな内面的転機となることがわかる。それまでひとり苦悩と自己嫌悪に苛まれていた MTF/X 自認者は、同じ境遇の当事者との出会いによって自身の未来イメージを得、「自分も同じように生きていきたい」と、〈暗中模索〉を始める。しかし、〈暗中模索〉から〈対他的性別移行の苦悩〉、〈認めてもらいたい〉と続いていく本研究のストーリーラインに見られるように、「劇的」・「瞬間的」におこる内面的転機に対し、対他的性別移行の進捗は思うようにはいかない。M to F/X 性別移行は、MTF/X 自認者の内的感覚から言えば、“それまでにもあった自らの性自認に沿って生活すること”を意味する。ところ

が、彼らを「疑いなく“男（性）”と認識していた」者の目に M to F/X 性別移行は、“それまでとは異なる性別で生活し始める”こととして映る。当人よりもそれを目の当たりにする者が、M to F/X 性別移行に際して、戸惑いや混乱を感じることは想像に難くない。本研究で示された、反復されながら増幅される〈対他的性別移行の苦悩〉と〈認めてもらいたい〉気持ちの円環的連鎖は、このような M to F/X 性別移行の出発点に関する認識の違いとそれゆえに生じる周囲の戸惑いや混乱として理解することもできる。

もちろん、MTF/X 自認者の〈対他的性別移行の苦悩〉は、このような認識の相違だけでは説明されない。FTM/X 自認者のなかには、他者から“男（性）”として認識され得る程度の外見的变化を得、身体や自身の過去のすべてが“男（性）”ではないことを受容し始めた後、一概に“女（性）”から“男（性）”に置き換えられることに内的葛藤を抱く者がいる（西野，2011）。ところが、本プロセスの【迫られる性別の二者択一】に見られるように、MTF/X 自認者は、いつまでも“男（性）”という前提から抜け出せないことに苦悩を感じる。一般に、FTM/X 自認者が他者から“男（性）”と認識されるような外見的变化を得ることよりも、MTF/X 自認者が他者から“女（性）”と認識され得ることの方が困難であると言う。性別違和を有する者の生きづらさに性別二元論という環境因子が影響し得ることはすでに第 2 章で示したが、“女（性）”と認識され得る外見的变化を得がたい MTF/X 自認者の M to F/X 性別移行において、その悪影響はさらに看過できない。性自認に沿った本来的な生活を実現していく過程とも言える M to F/X 性別移行において、その苦悩を増大させ得る社会的価値観（性別二元論）には、変革の余地が認められよう。

他者からの承認と心理社会的 well-being の実感

M to F/X 性別移行はときに、MTF/X 自認者に〈現状打開の喜び〉をもたらす。本研究の〈現状打開の喜び〉は、3つの概念で構成されていた。そのうち1つは、M to F/X 性別移行に踏み出したこと（【艱難辛苦から解放された感覚】）、残り2つは MTF/X 当事者性や M to F/X 性別移行についてカミングアウト相手から承認を得たことに関する（【性別のあり様を受容された】【性別移行することへの積極的支持】）。

ここで、本プロセスにおいて、自らの性自認や MTF/X 当事者性については、すでに〈モデリング対象の発見〉でおおむね自己肯定が得られていることに注目したい。それにもかかわらず彼らは、【自分の気持ちを貫く決意と覚悟】を決するまでに、カミングアウト相手からの承認を必要としていた。その人に心理社会的 well-being の感覚をもたらすものとし

て、“個人の核心 (the core of individual) が所属するコミュニティの核心 (the core of communal culture) においても機能することを、試行錯誤しつつ確証していく極めて主体的な意志決定の過程”を提示し、それを心理社会的アイデンティティと呼んだ Erikson (1968 岩瀬訳 1973) の言葉は示唆に富む。心理社会的アイデンティティの獲得は、自らが所属しているコミュニティのなかで“価値ある者”から是認されることを不可欠とするのである (Erikson, 1968 岩瀬訳 1973)。近年は、アイデンティティの形成プロセスを“自己の視点と自己に内在化された他者の視点との食い違いを他者との相互協調によって解決するプロセス” (杉村, 1998) とする向きもある。

このようなアイデンティティ理解に基づけば、〈モデリング対象の発見〉によって M to F/X 性別移行を具体的に検討することは個人の核心にまつわるもの、そして、【性別のあり様を受容された】ことは、心理社会的アイデンティティの獲得にとって不可欠となる“価値ある者”からの是認として了解できる。本プロセスにおいてカミングアウトは、自らの性自認と他者から認識されている自己の性別との食い違いを他者と相互協調させていくための、具体的手段となっているのだろう。こうしてカミングアウト相手からの承認は、他者からは不可視な性自認への対自的自己肯定を他者との相互関係にも広げていくことを助け、他者からの目にも顕在化される性別移行という具体的現象を自ら推し進めていく原動力を生み出すのだと考えられる (〈エンパワメント〉)。本プロセスの最終カテゴリーとなった〈苦楽ある私だけの人生〉に含まれた 4 概念からも、他者や社会に対して自らを主体的に位置づけ直し、残存する苦悩や苦難を身に受けつつも、自分なりの希望ある未来を描き、心理社会的 well-being を実感している MTF/X 自認者の姿が見出される。

3 M to F/X 性別移行とコミュニティにおける心理社会的援助

現代医療をもってしても、性別違和を有する者が完全に性自認に合致する身体を得ることは叶わず、性別違和の解消は難しい。しかし、コミュニティにおける心理社会的援助実践の目指すところはその人にとっての心理社会的 well-being の実現であり、問題の根本的解決に限定されない。コミュニティのなかで MTF/X 自認者に出会うこととなった心理社会的援助実践者にとって、自他や社会にある性別二元論の持つ影響力を知ることは、彼らの心理社会的苦悩や社会適応上の困難をよりよく理解するための基礎となる。そして、心

理社会的援助実践者が M to F/X 性別移行を他者との相互協調過程として捉え、MTF/X 自認者と当人達をとりまく周囲の者との協働的關係の構築を助ける者として機能することで、彼らの性別移行に向けた〈暗中模索〉が〈現状打開の喜び〉という成功体験をもたらすものとなるように援助することが可能となるだろう。このような〈現状打開の喜び〉によって力が得られたならば、彼らは、社会に対する自らの位置づけを変化させていくことができる。彼らがよりよい社会生活を実現していく資源は、彼ら自身のなかにもあり、それは協調的な社会のなかでよりよく発揮されていくと言える。

本プロセスでは、性別違和を有する者と当人から当事者性をカミングアウトされた者(カミングアウト相手)との相互協調が主に描出されているが、これには、カミングアウトを切り口とした半構造化面接からデータを収集したことの影響が指摘される。実際には、カミングアウト以外の手段もあろう。例えば、児童期・思春期にある性同一性障害の子を持つ親を対象に性同一性障害の特徴的な発達に関する心理教育プログラムを行った di Ceglie & Thümmel (2006) は、プログラムへの継続参加によって、親が我が子の特徴的発達について深い理解と知識を得たと報告している。性別違和を有する者の特徴や起こり得る葛藤などを周囲の他者に情報提供することは、MTF/X 自認者の周囲の他者に内在化されている二元的な性別の捉え方について再考を促すこととなるであろう。こうした情報提供を MTF/X 自認者の生活するコミュニティのキーパーソン(教師や上司など)に行い、当人と周囲の他者との相互協調促進に向けた協働關係を構築することができれば、そのコミュニティ内における MTF/X 自認者の活動制限や参加制約を組織的に打開していくことができるかもしれない。

あるいは、性別二元論(環境因子)に目を向け、MTF/X 自認者と社会との適合性向上を図ることもできる。社会的価値観は一朝一夕には変革されないが、多様な性自認のあり様やそれに沿った生き方を広く非当事者に公知していくことで、“男(性)・女(性)”の別にとらわれない生き方について個々の意識覚醒(consciousness raising)を進めることは意義深い。社会に既存の二元的性別区分や性別表記のあり方について再検討を促すアドボカシー(advocacy)もまた、MTF/X 自認者達が生活するコミュニティ環境を整備していくためには欠かせない。いずれにしても、心理社会的 well-being を実現し得る M to F/X 性別移行のためには、MTF/X 自認者と周囲の“双方に”，相互協調のために対話しようとする姿勢と用意が求められるのであろう。

“性別”という、個人の存在の根本にかかわる事柄について違和感を抱き、それに由来

する心理的苦痛に苛まれることとなる MTF/X 自認者にとって、他者との相互協調の場に立つこと自体が大きな課題となることも忘れてはならない。コミュニティにおける心理社会的援助者が性別移行体験者でない限り、〈自問自答〉のなかにある MTF/X 自認者に未来を啓かせていたような“モデリング対象”の役割を完全に代替することは難しい。しかし、一様でない性別のあり方を持つことが決して“【特異な自分への嫌悪】を抱くべきものではない”ことを明に暗に伝え、彼らを励ますことは不可能ではない。

奇しくも Erikson (1968 岩瀬訳 1973) は、熾烈な人種差別を経験した黒人作家達の陳述を、“皮膚の色によって特徴づけられた人間としてではなく、むしろ、選抜力をもった個人として、聞いてほしいし、見てほしいし、また認めてほしいし、対面してほしいという、極めて積極的で強力な要求”と解釈し、そこから、“回復すべきもの”としてのアイデンティティ再獲得を見出している。M to F/X 性別移行は、“指定された性別”に従って生きざるを得なかった MTF/X 自認者達が主体性を獲得し、その主体的決定によって、より本来的な性自認に沿った生活を回復していくための試行錯誤過程と言える。ひとりひとりの MTF/X 自認者のアイデンティティ再獲得に向けて協働し、ときに支える際、エンパワメント (empowerment) の視点は多くの示唆を与えてくれるだろう。

4 本研究の成果と課題

本プロセスは、その人の well-being につながる資源を見出そうとする ICF (WHO, 2002) の考え方を取り入れることで性別違和 (身体的障害) とは異なる観点から MTF 当事者の抱える生きづらさを捉え、面接協力者の募集から理論生成に至るまで、絶えず生活者の置かれている現実へのコミットを試みるコミュニティ心理学的視座に身を置くことで得られた。M to F/X 性別移行をよりよく理解し、心理社会的観点から MTF/X 自認者の潜在的ニーズを予測する一材料として、応用可能性があるだろう。

一方、半構造化面接で聴取された“語り”自体の客観的正確性は断言できないこと、募集形式で行われたことで社会的関心の高い者や一定の精神的健康度が保たれている者にサンプリングが偏った可能性を否定できないことは、本研究の課題と言える。

分析方法に採用した M-GTA は、研究協力者を分析焦点者というひとりの人間に見立てることで、説明力の高いプロセス理論を生成することを得意とする。M-GTA の特性上、

〈自問自答〉から〈苦楽ある私だけの人生〉までの1つの方向性を持つものとして描かれた本プロセスであるが、すべてのMTF/X自認者達が〈苦楽ある私だけの人生〉に至ることを示すものではなく、到達することを奨励するものでもない。実際のM to F/X性別移行では、さまざまな困難とそれによる性別移行の停滞が起こり得る。ひとりひとりの個性については、M-GTA 以外の方法論を用いた研究報告が必要であろうし、本研究者の分析焦点者には含まれなかった、戸籍の性別変更を済ませている者や、20代未満の若年者、インターセックス当事者性を持つ者等のM to F/X性別移行も、別に検討する価値がある。性別移行は身体的治療等による外見的变化の進捗に影響されることが予測されるため、外見的变化の伴わない時期の性別移行に焦点を当てた研究も興味深い。

性別違和を有する者についての心理学研究は少なく、特に、心理社会的援助に有力な示唆を投じる報告は乏しいと言わざるを得ない。性別移行はコミュニティのなかで行われるものであり、性別違和を有する者の性別移行に着目した研究知見は、コミュニティにおける心理社会的援助が広く人々の心理社会的 well-being に貢献していく際の一助をなすものとして、その発展が求められよう。

第6章 未身体的治療期における カミングアウト機能の検討（研究4）

第1節 研究4の問題と目的

1 研究4の問題意識

ここまでに、性別違和を有することで社会的適応上の葛藤を抱いていると自認している複数の当事者（FTM/X 自認者 15 名，MTF/X 自認者 16 名）と半構造化面接（カミングアウトを切り口に性別移行体験を聴取）を実施してきた。M-GTA を用いた質的分析の結果からは、それぞれ、F to M/X 性別移行過程における社会適応再構築プロセス（従来の適応からの前抜け出し期，望む性での社会適応模索期，主体的な社会適応再構築期），M to F/X 性別移行過程における心理社会的アイデンティティ再構築プロセス（自問自答していた MTF/X 自認者が苦楽ある私だけの人生を実感していくまでの過程）が抽出されている。

この2つの質的研究知見から論考される M to F/X 性別移行と F to M/X 性別移行の共通項として、(a) 性自認に沿った本来的な生活を送る上でカミングアウトは不可避であること、(b) カミングアウト相手からの支持・受容や社会からの承認が性別移行を助けること、(c) 性自認と他者から認識されている自己の性別との食い違いを他者との相互協調のなかで解消させていくなかで心理社会的 well-being がもたらされることが見出されている。

一方で、F to M/X 性別移行過程からは抽出されなかった社会との軋轢や対他的性別移行上の苦悩が M to F/X 性別移行過程から抽出されている。FTM/X 自認者は他者から“男（性）”として認識され得る程度の外見的变化を得た後に、身体や自身の過去には“女（性）”が残っていながらも他者から一概に“男（性）”とみなされることに内的葛藤を抱く。しかし、“女（性）”として認識され得るような外見的变化を得難い MTF/X 自認者は、いつまでも“男（性）”として見なされる現実から抜け出せないことで対他的性別移行の苦悩に苛まれる。これらのことから、対他的葛藤がより強く抱かれる外見的变化以前に注目することで、社会的性別移行上の心理社会的葛藤をよりよく理解できる可能性が指摘される。

2 研究4の目的

そこで研究4では、身体的治療由来の外見的变化が伴わない社会的性別移行過程初期に焦点を当て、当時のカミングアウト体験の追想とその語り直しを促す半構造化面接によって収集されたデータを質的に分析する。また、本人の性自認と本人に対する他者の性別認識とが不一致の状態にあるなかでは、M to F/X 性別移行と F to M/X 性別移行との差異性はごく小さいと考え、MTF/X 自認者とFTM/X 自認者とを区別しない。

これらによって、性自認と外見（本人に対する他者の性別認識）とが不一致の状態にある者が辿る社会的性別移行過程、および、そのなかで行われる“カミングアウト”に当事者が見出している意味を可視化し、彼らの持つ心理社会的葛藤のよりよい解決に資する心理社会的援助のあり方に示唆を得ることを研究4の目的とする。

第 2 節 研究 4 の方法

1 調査協力者の要件と募集方法

調査協力者の限定範囲の設定

先行研究知見と本研究の目的を踏まえ、面接協力者について参加要件を設定した。(a) 要性別移行者と自認していること、(b) 性別違和に関するカミングアウト経験があること、(c) 少なくとも生活の一部ですでに性別移行を経験していること、(d) インターセックス当事者性を持たないこと、(e) 幼い頃から日本に定住していることの 5 つである。さらに、調査の安全性を確保するための倫理的配慮として、(f) 18 歳以上であること、(g) 性別移行体験を聴取されることに強い精神的負担を予感していないことの 2 要件を追加した。なお、要件 (d) は、戸籍の性別を変更するための手続きや医療的治療の枠組み等の様々な側面において、一般的な要性別移行者とは異なる性別移行過程が想定されたために設けた。これら計 7 要件以外は不問とし、要件を満たすか否かは調査協力者からの自己申告によって確認した。

面接協力者の募集

身体的治療に由来する外見的变化の伴わない社会的性別移行過程初期についてより豊富なデータを得るため、GID（性同一性障害）学会研究大会、性別違和を有する当事者が運営する自助グループ主催の交流会等で募集用紙を配布し、面接協力者を募った。医療機関での募集は控えた。募集用紙には、性別違和を有する者の QOL 向上、特に社会のなかでのよりよい性別移行への貢献を目指す研究であることを付記して協力を仰いだ。

2 半構造化面接での聴取内容の決定

半構造化面接のリサーチクエスションは、“当事者性のカミングアウト体験を通じた自身の内面と他者との関係性の変化について”とした。具体的な質問項目については筆者と大学教員 1 名との協議によって決定し、当事者性に関する主要なカミングアウト（初めての

カミングアウトから3回目までを目安)について当時の体験を追想して語るよう求めた後、現在の視点からその語り直しを促し、初めてのカミングアウトから現在に至るまでの内面的変化について尋ねた。カミングアウト体験の聴取時には、その当時の身体的治療の進捗と外見的变化の程度を確認した。半構造化面接(1回あたり90から180分)は、2008年から2011年までの間に面接協力者と筆者の1対1で行い、ICレコーダーで録音した。

3 分析方法

面接の録音データから作成した逐語録を素材とし、M-GTAによる質的分析を行った。分析手続きの信頼性および妥当性を保持するため、M-GTAの分析手続きを遵守し、M-GTAを分析手法とした研究の指導経験がある大学教授からスーパービジョンを受けた。

理論的サンプリング

(a) 自認する性別の属性(含 性的指向)、(b) カミングアウト相手、(c) カミングアウト当時と現在(面接実施時)における外見のパス度(他者から指定された性別と反対の性別として認識される度合い)、(d) 現在の社会適応状態について、それぞれ一定のヴァリエーションが確保されるように理論的サンプリングを行った。

(a) については、調査協力者自身を表すのに最も適切と考える性別の属性について口頭で自由回答を求めた。(d) については、“他者に自身の過去や当事者性を隠し、生来的に性自認に沿った性別であったかのようにして日常生活を送ること”を“埋没”、“当事者性を隠さずに積極的にカミングアウトしながら生きること”を“適応”と説明してから、“埋没”、“適応”、両方を使い分ける“臨機応変”のなかから択一するよう求めた。

4 倫理事項

調査協力者には、研究の目的と方法、面接の録音と逐語録作成における個人情報保護、収集されたデータの厳重な管理と研究終了後の破棄、学会発表や学術雑誌投稿による研究成果の公表等について、口頭および書面で十分に説明し、同意が得られてから半構造化面接を実施した。

第3節 研究4で行われた分析のプロセス

1 分析プロセスの開示

分析焦点者の決定

先述した5つの観点から理論的サンプリングを行った結果、MTF/X自認者6名、FTM/X自認者7名の計13名（19歳から49歳、 $M=26.7$ 歳）が分析焦点者となった（Table21）。

Table21 研究4の面接協力者に関する特徴の一覧

自認する性別の属性	年齢	カミングアウト相手	カミングアウトした経緯	外見のパス度 ^{a)}		現在の社会適応状態	今あなたにとってカミングアウトとは？（今後の意向 ^{b)} ）
				当時	現在		
FTM	22	親友	自発	△		適応	自己実現の手段（+）
		身近な友人	自発	△	◎		
		旧友	自発	○			
元MTFTSのレズビアン	23	両親	露呈 ^{c)}	×		埋没	わかってもらいたいけど知られたくないもの（-）
		旧友	訊かれた	×	◎		
		身近な友人	自発	×			
女性(MTF)	30	当事者集会で会ったゲイ男性	話の流れ	×		適応	ありのままの自分をさらけ出すこと（+）
		身近な友人	自発	×	×		
		母親	自発	×			
FTM	40	職場の知り合い	露呈	×	◎	埋没	自分の今一番の課題（+）
		好きな女性	露呈	△			
MTF	49	女装クラブで会った男性	露呈	×		適応	理解してくれる人を増やすためのもの（+）
		妻	自発	×	△		
		職場の上司	自発	△			
MTFTG(S)	21	身近な友人	訊かれた	×		適応	理解の壁を越えて本当の自分をさらけ出す（+）
		身近な知人	話の流れ	×	△		
		好きな男性	自発	×			
女性(FTM)	27	親友	自発	×		適応	自己紹介のようなもの（+）
		旧友	自発	×	○		
		身近な友人	自発	△			
FTM（自分では男性と認識）	27	母親	自発	×		臨機応変	自分らしく生きていくための表現方法・関門（+）
		身近な友人	自発	×	◎		
		職場の上司	自発	×			
FTMTG（TSでは断じてない）	23	母親	自発	×		埋没	自分の意図を知ってもらうために必要なこと（-）
		親友	自発	×	◎		
		性交渉目的で会ったゲイ男性	自発	○			
FTM	23	職場の上司	訊かれた	×		適応	自分の覚悟を確認するためのもの（+）
		好きな女性	自発	×	×		
		両親	自発	×			
MTF	22	母親	自発	×		適応	相手と親しくなることをもたらしてくれる（+）
		身近な友人	自発	×	×		
		身近な友人	自発	×			
MTF	22	親友	話の流れ	×		臨機応変	自分が生きていく通過点の手続き（-）
		身近な友人	自発	△	○		
		家族	自発	×			
FTM	19	親友	訊かれた	×		臨機応変	意思表示のための最良の手段（-）
		身近な友人	自発	×	△		
		両親	自発	×			

a) ×: 身体的性別が優位, △: 中性的で相手の認識不明, ○: 未治療だが完全にパス, ◎: 身体的治療によって変化済

b) +: 機会があれば積極的にカミングアウトする, -: どうしても必要になったとき以外はカミングアウトしたくない

c) 露呈: 当事者であることを決定づける証拠を突きつけられ、不本意ながら言わざるを得ない状況に陥った場合

分析テーマの設定

分析の角度と方向性を明確化するため、データとの対話を繰り返しながら適切な分析テーマを検討した。その結果、“社会的性別移行過程初期におけるカミングアウトにまつわる他者との相互作用”が分析テーマ、“未身体的治療の要性別移行者から見たカミングアウトの機能”が分析の角度となった。

理論生成の手続き

逐語録から当事者性カミングアウトの意図やそれを契機として生じた自他の変化に言及する部分を意味のまとまりごとに抽出し、これを具体例とした。具体例同士に類似性が認められた際にはそれを集めて分析ワークシートを作成し、概念化(概念の名と定義の設定)した。概念に新たな具体例が加えられた際には、その定義が加わった具体例までも網羅的に説明し得るかどうかを検討しながら概念の拡大と収束を繰り返し、最適な定義の範囲を見定めていった。

十分な具体例に支えられた概念には、順次分析ワークシート単位の理論的飽和化の判断を下した。同時に概念同士の関係を継続的に比較分析して、まとまりのある複数の概念によって構成されるカテゴリーを抽出した。個々の概念およびカテゴリー間の相互関係すべてを俯瞰した際の統合性が十分に確保されたところで全体が理論的飽和化に至ったと判断し、分析を終了した。最終的に採用された18概念の概念名と定義をTable22に示す。

この18概念5カテゴリーは、1つの流れをもったプロセスとして動的に関連づけられていながら、時間軸に沿って大きな3つのまとまりを持っていた。この3つのまとまりは他者にカミングアウトすることについてどのような思いを抱いているかと関連しており、第1期から順に、『知ってもらうには言うしかない時期』、『必要以上は言いたくない時期』、『対話を通して自分らしさを表現する時期』と名付けられた。最後にこの3期からなる動的プロセスを“未身体的治療期のカミングアウト体験プロセス”と名付けた。

以下、3つの時期を『 』、各時期に行われるカミングアウトの特徴を《 》、カテゴリー一名を〈 〉、概念名を【 】, 面接協力者の語りを「 」で示す。面接協力者によって語られた内容を理解しやすくするために、筆者が前後の語りの文脈を踏まえて言葉を補った部分は〔 〕で括った。

Table22 研究4で生成された概念の名と定義および代表的な具体例

概念名	概念定義	具体例
悟られてはいけない	あたかも指定された性別に合致する性自認を持つ者であるかのように、また時にはその性別“らしさ”を強調して振る舞うことで、自らの当事者性を他者に悟られないように意識して努めること	「言えなくて、自己解決…その気持ちだけを抑えて、なんとか[指定された性別で]やっていけないかって」「恋愛の話題は避けてた」
カミングアウトする資格がない	他者にカミングアウトするには、性自認に沿った相貌やどのような性別で生きたいのかについてある程度方針が固まっている必要があるとの考え	「自分に対して[身体的治療を]全部やってから”っていう厳しいところがあった」「自分でも自分のことがよくわかってなかったから」
信じてもらえないのでは	相手は自分のことを疑いなく男性/女性と認識しているのだから、カミングアウトしてもにわかには信じてもらえないだろうという悲観的推測	「そんな気がしてたよって言ってもらえるくらいの外見になるまで…言ったって誰も信じてくれない…意味がないって思ってた」
関係性崩壊の懸念	カミングアウトによってこれまでに築かれてきた相手との関係性が悪化・断裂してしまうことへの恐れ	「会話とかもしてくれなくなったら…っていう、不安」「言うことによって相手が何か変わっちゃうんじゃないかって…こわかった」
これは“自分”じゃない	指定された性別に沿った男性/女性らしさに倣い、表面上繕ったまま本当の自分を隠していることを耐え難く思うこと	「仲間に何かを隠して一緒に過ごすことが、自分のなかですごい不快」「自分に嘘をつきたくない…本当の姿を知って欲しい」
今、この人ならば	それまでに築いてきた信頼関係や相手の人間性及び性別に関する価値観等の情報を元に、カミングアウト相手に受容的・支持的反応を期待すること	「“言ってもいいかな”っていう雰囲気何から感じ取ろうと頑張って、感じ取って…“言ってもいいだろう”っていう人を選んで」
拒絶されないありがたさ	当事者性にかかわる事柄についてカミングアウトしても、拒否・否定・拒絶を顕さないでいてくれることに安堵・感謝の念を抱くこと	「拒否されなかったことで、一瞬は安心しました」「否定はしないでくれた…それだけでも十分だったかなあ」
性自認への自己肯定と自信	カミングアウトした事柄について相手が受け止めてくれたり理解しようと努めてくれたりする姿を見聞きして相手からの支持を感じること	「こういうふう考えててもいいのかなっていう“救われた感”」「受け入れられたことで、“自分はこれでいいんだ”って」
異性/同性から同性/異性になれた	カミングアウトによって、以前の異性が同性、以前の同性が異性となって、それぞれ新たな交友関係が形成され直されていくこと	「服とかメイクとかの話ができる。こんな青春を送りたかった」「男[=指定された性別]同士じゃなくて女の子なんだって思ってた」
相手の言動に対する配慮不足感	カミングアウトした事柄を受け止めるだけではなく、自分に対する性別認識や性別がかかわってくるような言動について、指定された性別に沿ったものから性自認に沿ったものへと変えて欲しいと思うこと	「娘じゃなくて未だに息子」「何回訂正しても、私のことを“彼”とか“～な男”みたいに表現」「女の子グループの一員って認識のまま」
説明して誤解される煩わしさ	自らの状況をわかってもらうのに様々な解説が必要となることや、そこで便宜的に用いる「言葉」が相手の受け止め方によって不本意な誤解や典型例へのあてはめに発展してしまうことの煩わしさ・面倒さ	「自分は内面的にどんなシフト…その移り変わりを一から十まで説明できない」「そうとしか見られなくなっちゃうのが、一番嫌」
現実を見られる気まずさ	身体や指定された性別に沿って送られてきた生育歴等の性別に係る現実が強調・顕在化され得る場や話題に、カミングアウトを済ませている相手と居合わせることに気まずさを感じる	「身体的なもの[=女性]とはギャップ…男扱いし過ぎてこっちのコンプレックスに触れる」「トイレとかどっちに。体は男だって知ってる」
引き戻されたくない	相手から指定された性別として認識されたくないという思いから、自身の当事者性や性別(別)に関する話題にのぼったり、指定された性別に沿って行動せざるを得ない場面を目撃されたりすることを避けたいと願うこと	「“生理”とかそういう単語は言えない」「男性と横並びで用を足す…カミングアウト後は、逆にすぐ考えざるを得ない…すぐく嫌」
もっと女性/男性として扱われたい	自分のことを指定された性別で認識している者がいる場所での日常生活を送りやすくしていくためには、自分は外見とは異なる性自認を持っている者だということを相手に伝える必要があると考えること	「“言ってもいい”から“言った方がいい”に…知ってもらった方が楽。相手も困らない」「よりよく生きるのに必要…唯一の意思表示」
素直な自分らしさの実感	支持的・受容的カミングアウト体験が積み重ねられていくなかで、自分ありのままの素直な自分らしさを手にしつつあり、それが相手からも認められつつあるのだという実感が強められていくこと	「ずっとモヤモヤしてたのがなくなって、なんでも楽しい…スッキリ。カミングアウトすることで、自己実現…自分が自分でいられる」
“男・女”のこだわりからの脱却	「性別」の多様なあり方を自ら経験的に知っていくなかで、個の持つ多様な性別のあり方について寛容な態度を身につけていくこと	「120%気合いを入れた“女”じゃなくて、パンツスーツも着る自然な“女性”に」「同じ当事者のなかにも色んな人がいるって気づいた」
性別違和経験有無としての意味づけ	カミングアウト相手に、要性別移行者特有の内面的機微や社会的葛藤、居心地悪さ等を十分には理解・配慮してもらえないことを、性別違和を抱いた経験の有無によるものだと意味づけること	「性別が食い違っていないわけだから、そこまでして変えたい理由、わからなくて当然」「気づかないのはしょうがない」
対話がしたい	自分をよりよく知ってもらうことでより生き易く齟齬や気まずさのない日々を送れるようにと、言いっぱなし・聞きっぱなしのカミングアウトではなく、自分と相手との対話的なやりとりがあるカミングアウトをしていきたいと思うこと	「[疑問は]訊いてくれた方が、自分のことを知ろうとしてくれるって思える」「その話題に触れられなくなる方が“厄介だな”って思う」

注:具体例の記載中にある[]は、文意を伝えるために筆者が本人の前後の語りから言葉を補ったことを示している

第4節 研究4のストーリーライン： 未身体的治療期のカミングアウト体験プロセス

M-GTAによって抽出された未身体的治療期のカミングアウト体験プロセスのストーリーラインを以下に記述する。ストーリーラインの俯瞰的理解を補うために、概念間の関係性を視覚化した結果図は、Figure 27に示した。

第1期：知ってもらうには言うしかない時期

研究4の分析焦点者は、出生時に性別に指定されたように、“男性／女性”として周囲から扱われてきた。幼い頃から彼らは、周囲から認識されている性別（＝指定された性別）に合わせて「男性的に振る舞ったり」、「つくって女ノリしたり」することで、“男・女”の別が強調されがちな日常をやり過ごす術を身につけていく。「性別の悩み」（＝性別違和）は他者に【悟られてはいけない】ものとして、心中に秘められる。同じような性別違和を有する者の存在を知っても、「外見は完全に雄のまま」では【カミングアウトする資格がない】し、たとえしても【信じてもらえないのでは】と、不安を抱いたり自己卑下に陥ったりする。これまで疑いなく“男（性）／女（性）”だと認識されながら築いてきた家族間・友人間の【関係性崩壊の懸念】もあり、「心は違うんだ」と言い出せない。

しかしこうした〈不安・懸念〉がある一方で、表面上は“男性／女性らしく”取り繕っている自分や、相手が自分に対して持っている性別認識に対して、【これは“自分”じゃない】という思いがせり上がってくる。「このままじゃやっていけない」との思いから行われる《生きるためのカミングアウト》は、意図せずに当事者性が他者に露見してしまった場合（露呈）を除けば、【今、この人ならば】と時機を見計らって行われる。そのため、「思っていたよりもずっといい反応」が得られることがほとんどで、カミングアウト相手から完全に拒否・拒絶されるようなことはない。「明らかな反対はなかった」相手の態度に対して、【拒絶されないありがたさ】を感じる事となる。

第2期：必要以上は口にしたくない時期

カミングアウト相手から拒否・拒絶されなかったことで、【性自認への自己肯定と自信】を得た彼らは、【異性（同性）から同性（異性）になれた】ような、〈ひとときの成功感〉

を抱く。だがまもなくして、「認めてくれるかどうかと理解できるかできないかは違う」ことに気づく。日常の些細なやりとりのなかで、「悪気はなくても…本質的には理解してくれてないこと」がわかり、がっかりしたり苛立ちを覚えたりする（【相手の言動に対する配慮不足感】）。相手の先入観や「偏った知識」によって言葉（例えば、性同一性障害）が歪めて理解されれば、丁寧な説明も単なる徒労に終わってしまうように思われる（【説明して誤解される煩わしさ】）。

また、「いくらカミングアウトが成功しても」、実際には指定された性別の特徴を持つ者として過ごさねばならない場面や期間がある。それにより、指定された性別としての【現実を見られる気まずさ】が新たな悩みとして生じる。【自分と相手の齟齬】が生じることをなるべく避けたい彼らは、相手が自分の指定された性別を思い出すような事態・言動を避けることに苦心するようになる（【引き戻されたくない】）。〈指定された性別からの抜け出し欲求〉を持つ彼らは、「とにかく相手にちゃんと行動を変えてもらうため」や、「カミングアウトした人としていない人が混在してどう行動したらいいかわからなくなるような場面」を減らすため等、目的や必要に応じて《変化を求めるカミングアウト》を行うことになる（【もっと女性／男性として扱われたい】）。

第3期：対話を通して自分らしさを表現する時期

カミングアウトを重ねていくなかで、「[身体的]治療は何もしていないのに、男らしくなったと言われる」。「化粧でかなり女の子に見られるようになった」等、身体的治療を受けずとも、外見上の性別の特徴がある程度変化して見えるようになることがある。こうした変化の自覚は、「無理に“男として見てもらおう”とか“男らしく”じゃなくて…自分らしく生きていけば、それが周りから見たら“男”なんだ」のような、【素直な自分らしさの実感】をもたらす。さらに、「“当事者だからって括るな”とか“差別って嫌だよな”とか言ってる自分自身が、意外に当事者とそうじゃない人をわけて見てたこと」等の気づきを経て、【“男・女”のこだわりからの脱却】も起こり始める。

第2期には、相手の配慮不足（【相手の言動に対する配慮不足感】）や無理解（【説明して誤解される煩わしさ】）が感じられており、相手に《変化を求めるカミングアウト》が行われた。しかしこの時期には、「自分の見た目と生物学的な性別が食い違っている」状態を経験したことがない相手と「完全には理解し合えないのは当然」だと、理性的に意味づけ直される（【性別違和経験有無としての意味づけ】）。〈全人的な視点の獲得〉が進んでいき、

「自分が悪いわけでも相手が悪いわけでもない…自分らしく生きようとしたらこうなった [=性別を移行することになった]」のだから、「自分がどうしたいのかをちゃんと考えて」、それから相手と【対話したい】と希望するようになっていく。

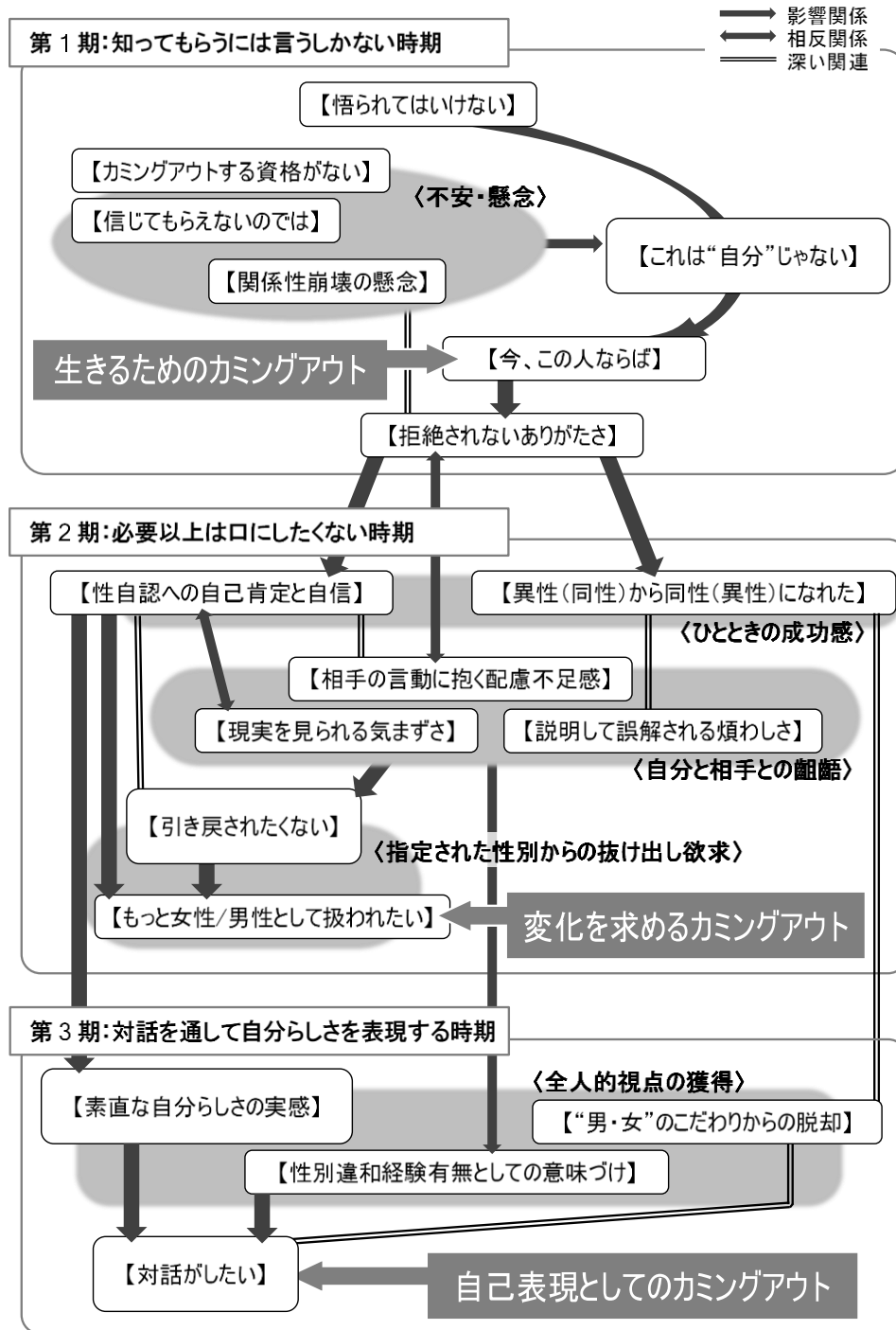


Figure27 未身体的治療期のカミングアウト体験プロセス

第5節 未身体的治療期のカミングアウトに関する考察

1 質的データ収集の適切性

研究4で実施した調査では、面接協力者について、(a) 要性別移行者と自認している、(b) 性別違和に関するカミングアウト経験がある、(c) 少なくとも生活の一部ですでに性別移行を経験している、(d) インターセックス当事者性を持たない、(e) 幼い頃から日本に定住していることの5要件を設けた。M-GTAを方法論的根拠とした理論的サンプリングの結果、13名の面接協力者が分析焦点者となった。自覚する性別の属性(含 性的指向)やカミングアウト相手等の各観点において一定のヴァリエーションが確保されているのは、Table21の通りである。面接協力者から聴取されたカミングアウトの経験は、いずれも身体的治療による外見的变化が生じる以前に行われている。したがって、“未身体的治療の要性別移行者におけるカミングアウト体験プロセス”は、“社会的性別移行過程初期におけるカミングアウトにまつわる他者との相互作用”という分析テーマを検討するに適う質的データに根ざして生成されたプロセス理論と見なして差し支えないと考えられる。

2 未身体的治療期のカミングアウト体験プロセスについて

“未身体的治療期のカミングアウト体験プロセス”には、『知ってもらうには言うしかない時期(第1期)』、『必要以上は口にしたくない時期(第2期)』、『対話を通して自分らしさを表現する時期(第3期)』があり、各期に対応するように、異なるカミングアウトの機能(《生きるためのカミングアウト》(第1期)、《変化を求めるカミングアウト》(第2期)、《自己表現としてのカミングアウト》(第3期))が発揮されていることが可視化された。

性別違和に由来する心理的苦痛と社会の中で生きる上での実存的絶望

性別移行に伴う経時的な心理的变化を俯瞰するプロセス理論を生成している本邦の質的研究において、カミングアウトは、性別移行を進めていくための具体的手段として重要な機能を担うものとされてきた。しかし、本研究で得た《生きるためのカミングアウト》(第1期)は、性別移行に直結してはいない。これは、社会的性別移行過程初期における心理

社会的葛藤とカミングアウトの機能をより詳細に分析したことで見出された新たなカミングアウト機能と言える。

《生きるためのカミングアウト》は、それまで【悟られてはいけないもの】として心中に秘めてきた自らの当事者性や性別違和を相手に吐露することを指す。指定された性別に沿った男性／女性らしさを表面上繕ってきた彼らは、やがて、【これは“自分”ではない】と感じられるような生き方に耐え切れなくなる。そして、【今、この人ならば】という機会に際して、それまで隠してきたことを相手に独白する。

これまで、性別違和を有する者によく見られる生死に関わるメンタルヘルス上の問題（自殺企図や希死念慮等）は、自らの肉体に対する嫌悪感や第二性徴から解放されたいという強い願望を含む、性別違和感に由来すると強調されてきた。この文脈において、性別に関する不一致は身体的性別と性自認との齟齬として説明される。次第、性別違和を有する者の抱く心理的苦痛は、その当人の内面で生じていることになる。しかし、社会との相互作用という視点を取り入れると、当人達が感じている性別に関する不一致は、自分が他者や社会に対して表現している性別と性自認との間、性自認と周囲の他者が自身に対して持っている性別認識との間にも生じていることがわかる。性別違和を有する者に見られる“生と死”に係る苦悩は、“このまま（＝指定された性別に沿ったあり方）では生きていけない。だが、本当の自分（＝性自認に沿ったあり方）で生きようとすれば、これまで他者や社会との関係性のなかで形作られてきた自分の社会的死を引き受けねばならない”という、極めて実存的な絶望としても理解することができるだろう。

性別違和を有する者の支援・援助に携わる者は、性別違和による心理的苦痛と社会との葛藤による心理的苦悩の両者を念頭に置きながら当人の性自認を支持的に肯定し、彼らの“生”を励ます必要がある。家族の来談が期待できる場合や学校や職場等のコミュニティに参入している場合には、周囲のキーパーソンに性別違和を有する者に特徴的な心理や直面しやすい困難、想定される心理社会的課題等を伝えたり、コンサルテーションを行ったりする等して、性別違和を有する者を支え励ます体制を協働的に構築していけるとよいだろう。

要性別移行者の身近な他者との心理的隔たり

《生きるためのカミングアウト》（第1期）は、「拒絶されるのではないか」といった悲観的観測を抱きながらも、相手と時機を選んで決死の覚悟で行われる。そのため、カミン

グアウト相手から拒絶されなければ、それだけで嬉しさや喜びが感じられる（【拒絶されないありがたさ】）。【性自認への自己肯定と自信】や、【異性（同性）から同性（異性）になれた】と感じ、“これでやっと本当の自分になれる（＝性自認に沿ったあり方で生活できる）だろう”という期待を持つ（〈ひとときの成功感〉）。

しかし、『必要以上は口にしたくない時期（第２期）』には、こうした〈ひとときの成功感〉が、【相手の言動に抱く配慮不足感】や【説明して誤解される煩わしさ】（〈自分と相手との齟齬〉）、【引き戻されたくない】（〈指定された性別からの抜け出し欲求〉）等の否定的感情の誘因にもなる。Table21 やストーリーラインからわかるように、社会的性別移行初期のカミングアウトは、旧友や家族等の親近者を相手に行われる。

その多くは性別違和を有したことの無い者であり、カミングアウトを受け止めることはできても、カミングアウトによって訴えられた性別に関する不一致感やそれに由来する心理的苦痛・苦悩を体験的に理解することは叶わない。また、長い間疑いなく男性／女性と生きてきた当人への性別認識を瞬時に書き換えることは容易でない。指定された性別らしき外見が目に入っていれば、目の前の当人を性自認に沿った性別のあり方を持つ者として認識し直すのはなおさら難しく、一定の時間を要することもやむを得ない。一方、《変化を求めるカミングアウト》を行う時期にある当人は、さらに性自認に沿ったあり方で生きたい、先へ先へと進んでいきたいと願う。決死の覚悟でカミングアウトをした当人の立場から見れば、自身への性別認識や言動を早々に改めてくれない相手に、苛立ちやもどかしさを感じることもまた、人間の自然な心の動きとして了解できる。

このように、《変化を求めるカミングアウト》が行われる『必要以上は口にしたくない時期（第２期）』には、性別違和を有する者とそれを体験的には理解できないカミングアウト相手との間に心理的隔たりが生じ得る。性別違和を有する者と身近な他者との関係性が、最も危機に瀕しやすい時期と考えられる。

性別違和を有する者の支援に携わる者は、両者の関係がなるべく良好に保たれるよう、調整役として機能する必要があるだろう。当人とともにカミングアウトの進め方について作戦会議を立てるなかで、カミングアウトによって得られるだろう望ましい変化はもちろん、それに加えて、当人、カミングアウト相手、そしてその相互関係のなかで生じうる心の動きについて事前に心理教育できるとよいかもしれない。

他者との相互協調手段としての対話

『対話を通して自分らしさを表現する時期（第3期）』に至ると、〈自分と相手との齟齬〉は、相手の配慮不足や無理解ではなく、性別違和を有したことがあるかないかという経験の差によるものと捉え直される。第2期で行われる《変化を求めるカミングアウト》は、【もっと女性／男性として扱われたい】という思いで行われていた。しかし、『対話を通して自分らしさを表現する時期（第3期）』には、必ずしも男女のいずれかに振り分けられない“自分らしさ”をもって生きることが大事にされる（【“男・女”のこだわりからの脱却】）。

性自認と他者から認識されている自己の性別との食い違いを他者と相互協調によって解消させていくための具体的手段としてカミングアウトが行われるため、カミングアウト相手からの承認をより受けやすくなる。これによって、他者との関係性も安定化する。性別違和を有したことの無い者とは性別違和や性別の不一致に関する事柄について体験を共有できないことを理解した上で、これまで行ってきたカミングアウトを自省し、対話による相互理解の深化を希望するようになる。これが『対話を通して自分らしさを表現する時期（第3期）』の特徴と言える。

この時期にある性別違和を有する者は、すでに社会の中でエンパワーされており、積極的な心理社会的援助の必要性は低い。うまくいったカミングアウトに貢献していた工夫や状況の振り返り、今後の社会生活の展望を具体化・明確化していく話し合い等、当人が持ち合わせている内外の資源や力を引き出しながら、さらなる心理社会的 well-being 実現を下支えしていくような、促進者としてのかかわりが望まれる。

3 本研究の成果と課題

“未身体的治療期のカミングアウト体験プロセス”は、性別移行を行う者であれば誰もが経験するであろう、身体的治療由来の外見的变化が伴わない時期の心理的葛藤や変化を説明する際に参照できるプロセス理論と言える。特定の時期における心理的变化を詳細に取り上げることで、『知ってもらうには言うしかない時期（第1期）』、『必要以上は口にしたくない時期（第2期）』、『対話を通して自分らしさを表現する時期（第3期）』の3期が見出された。性別移行に歩み出そうとする性別違和を有する者の心理をよりよく理解するために活かし得る新たな知見と言える。研究4の面接協力者には含まれていないため、拡

大解釈にならぬよう留意する必要があるが、身体的治療を適用できない若年層や他の身体疾患との兼ね合い等、諸事情のために身体的治療を受けられない者の社会的性別移行を理解する際にも、ある程度参考にできると考えられる。

また研究 4 では、カミングアウトが持つ 3 つの機能が可視化された（第 1 期《生きるためのカミングアウト》、第 2 期《変化を求めるカミングアウト》、第 3 期《自己表現としてのカミングアウト》）。さらに、3 つのカミングアウト機能の違いに着眼することで、各カミングアウト体験期における心理社会的援助の方向性にも一定の示唆が得られた（第 1 期：性自認の支持的肯定と周囲の支援体制の構築、第 2 期：要性別移行者との作戦会議と心理教育、第 3 期：カミングアウトの成功要因や今後の社会生活展望の話し合い）。

一方、半構造化面接で聴取された過去の体験の“語り”の客観的正確性を保証することはできない。面接協力者は、研究 4 で実施したような面接調査において自身の体験を内省的に語れるような精神的健康を有している者に偏った可能性がある。これらは研究上の課題と言える。

未身体的治療期のカミングアウト体験プロセスは、時間軸を包含した時間的プロセスとして描かれている。しかし、実際の体験では、このプロセスを逆行したり、ある段階からある段階に飛躍したりする可能性も十分にある。また、第 3 期に至ることが望ましいというような価値観が付与されたものでもない。あくまでも、性別違和を有する者それぞれの心理を理解しよう努める際、ひとつの標準的な道しるべとして参照されることを望みたい。

今後の研究課題としては、研究 4 の分析焦点者には含まれなかった 18 歳未満の若年者やインターセックス当事者性を持つ者の性別移行に着目していく必要性が指摘される。また、M-GTA 以外の方法論を用い、より個別的な体験プロセスを検討していくことも意義深い。性別違和を有する者が直面する主要な課題として想定される、就業生活（例えば、就職活動や在職性別移行）やパートナーシップの構築プロセスも着眼の価値があると考えられる。

第7章 質的研究知見の数量的検討（研究5）

第1節 研究5の問題と目的

1 研究5の問題意識

FTM/X 自認者 15 名の語りを質的に分析した研究 2 では、3 つの期からなる“社会適応再構築プロセス”が抽出された。第 3 期にあたる主体的な社会適応再構築期では、“‘男性’とみなされるのは楽だが、真に受け入れられたいのは女性として生きてきた歴史や残存する女性的な部分を包含したありのままの自分である”という内的葛藤が存在していた。

MTF/X 自認者 16 名の性別移行体験過程に関する語りを素材とした研究 3 では、“心理社会的アイデンティティ再構築プロセス”が抽出された。心理社会的アイデンティティの再構築を促す最大の原動力は“艱難から解放された感覚”で、“苦楽ある私だけの人生”を歩んでいる感覚は、必ずしも葛藤の解消や心理的苦痛からの解放を要していなかった。

研究 4 で得た“未身体的治療期のカミングアウト体験プロセス”にて見出された 3 つのカミングアウト機能のうち、3 番目にあたる“自己表現としてのカミングアウト”は、必ずしも“男・女”に振り分けられない自分らしさを伝えるために行われていた。

これらの知見を総合的に鑑みると、性別移行を通じた well-being の実現や良好な社会適応は、身体的性別転換度よりも社会的性別移行に伴う性別にまつわる心理社会的葛藤の内的引き受けや性別を超越した自我そのものの統合性と深い関連を持つことが予測される。

2 研究5の目的

研究 5 では、これまで質的研究によって示唆されてきた性別移行を通じた自我の統合を“性別移行を通して再構築された性別を超越した自我アイデンティティの感覚”と捉え、苦難や苦悩が伴う性別移行を通じた肯定的な心理的变化との関連を数量的に検証する。

第 2 節 研究 5 の方法

1 調査概要

実施方法

2014 年 5 月から 7 月にかけて、性別違和を有する者を対象に質問紙調査を行った。調査用紙の配布・回収は、日本国内の性別違和を有する者あるいはセクシャルマイノリティ当事者による自助団体が主催する交流会等に筆者が出向いて行った。同日程に複数団体の交流会が開催される等の事由によって筆者が出向けない場合には、主催団体を代表する者に回付・回収を委嘱した。その他、団体の運営するホームページやブログ、メーリングリスト、ソーシャルネット・ワーキング・サービスの掲示板で調査を告知して協力を求めた（紙面で配布したものと同様の教示文および項目が記載されたフォームにラジオボタン形式で回答して最後に送信する WEB アンケートを使用）。

依頼文では、以下の 3 つを調査への参加要件として提示した。(a) 性別違和を有する（有していた）、あるいは、性同一性障害（GID）当事者 2 と自認していること、(b) アンケート調査に協力できるような心身の健康を有していること、(c) 20 歳以上であること（15 歳から 19 歳までは保護者の同意があれば参加可能）。回答方法の教示はすべて文章で行った。

2 使用測度

フェイス項目

年齢と身体的性別を空欄に書き入れるように求めた。身体的性別については、次のような説明を併記した（“ここでいう身体的性別は、あなたが出生時に指定された（戸籍上の）性別、性染色体によって判定される性別、あなたの生来的な身体的特徴に反映されている性別等のことを指しています”）。

性別移行過程におけるアイデンティティの再構築

E. Erikson のアイデンティティ理論をもとに作成された“多次元自我同一性尺度”（谷、

2001) の項目を一部改変し、性別違和を有する者の性別移行を通じたアイデンティティ再構築を捉え得るものとした全 20 項目に回答を求めた。項目改変に際しては、性別違和を有する者の性別移行過程を記述する研究論文(西野, 2011, 2013, 2014)を参考にしながら筆者等 2 名で協議を行い、多次元自我同一性尺度の開発者である谷からも改変および使用の許可を得た。

多次元自我同一性尺度は、“自己斉一性・連続性”(自分が自分であるという一貫性を持っており、時間的連続性を持っているという感覚)、“対自的同一性”(自分がどこに向かって行こうとしているかよくわかっている感覚)、“対他的同一性”(他者からみられているだろう自分自身が、本来の自分自身と一致しているという感覚)、“心理社会的同一性”(現実の社会の中で自分自身を意味づけられるという、自分と社会との適応的結びつきの感覚)の 4 下位尺度(各 5 項目、全 20 項目)から成る。大学生への調査で十分な信頼性と妥当性を持つことが検証されており、自我同一性が課題となる青年期から成人期以降まで幅広く使用可能とされている。性別もそれ以外もすべて含めた“あなた自身”について、“1. 全くあてはまらない” — “7. 非常にあてはまる”の 7 件法で回答を求めた。

性別にまつわる心理社会的葛藤のなかで経験される肯定的な心理的変容

“Posttraumatic Growth Inventory”(Tedeschi & Calhoun, 1996)を西野・沢崎(2014)が邦訳した 21 項目を使用した。posttraumatic growth (PTG)は、“それまで持っていた信念や価値観では抱えられないような心理的衝撃の伴う出来事に曝された者が、そうせざるを得ない状況下での精神的もがきを経験するなかで生起される肯定的な心理的変容の体験”のことを指す。精神的健康や苦悩の軽減とは次元が異なる。教示文中にある“苦境体験を通して”との記述を、性別移行を説明する文章(“あなたの社会生活が身体的性別に基づくものから性自認に沿った性別によるものへと移行していく中で”)に置き換え、“0. 全く経験しなかった” — “5. 非常に強く経験した”の 6 件法で回答を求めた。

ジェンダー・アイデンティティ尺度(佐々木・尾崎, 2007)

低次因子“展望的性同一性”と“社会現実的性同一性”から成る高次因子“現実展望的性同一性”, 低次因子“自己一貫的性同一性”と“他者一致的性同一性”から成る高次因子“一致一貫的性同一性”を構成概念とする全 15 項目の尺度である。

“多次元自我同一性尺度”(谷, 2001)の 4 因子構造を踏襲した上で一部項目を加える等

して作成された尺度で、性別違和を有する者の得点が性別違和を有しない者の得点に比して有意に低いことを根拠に妥当性が検証されている。原版の尺度には、最初に性別の回答を求め、それによって質問文を読み替えて回答する項目がいくつか含まれていた（例“現実の社会の中で、女性（男性）として自分らしい生き方ができると思う。”）。本研究では、“女性（男性）”との表記を“身体的性別とは異なるもう一方の性別”に変更し、“1. 全くあてはまらない” — “7. 非常にあてはまる” の 7 件法で回答を求めた。

性別移行進捗度

外見的性別転換度 外見的な性別移行の度合いを調べるため、見知らぬ他者からどのくらい身体的性別とは異なるもう一方の性別とみなされているかについて調べるための項目である。ここ一週間の自分の状態を“0. 身体的性別に即してみなされている状態” — “100. 身体的性別と逆の性別としてみなされている状態” のなかから数字で答えるよう求めた。

性自認に沿った社会生活実現度 性自認（必ずしも男・女のどちらかに振り分けられないその人独自の本来のもの）に沿った社会生活が実現している度合いを調べるための項目である。ここ一週間の自分の状態を“0. 全く送れていない状態” — “100. 完全に送れている状態” のなかから数字で答えるよう求めた。

3 倫理事項

調査実施前には、調査の目的と方法、調査は団体とは別に筆者等の責任下で行われていること、調査協力は各人の自由意思に委ねられていること、回答途中で体調不良や心理的負担を感じたときには回答を中断して欲しいこと等を含む倫理事項について口頭および表書きで説明し（WEB 調査は文章のみ）、質問項目への回答によってこれらに対する同意を意思表示するよう求めた。

第3節 研究5の結果

1 研究5の回答協力者

回収された調査用紙（339名分）から、回答に不備があったものを除き、326名分の有効回答を得た（有効回答率96.2%）。身体的性別の内訳は、“男性”（男，雄，♂，MTF等）と回答した者（以下，MTF/X自認者）が119名，“女性”（女，♀，Female，FTM等と回答）と回答した者（以下，FTM/X自認者）が207名であった。年代の内訳は10代が15名，20代が129名，30代が88名，40代が63名，50代が22名，60代が9名で，平均年齢はMTF/X自認者が38.8歳（ $SD=12.6$ ），FTM/X自認者が30.5歳（ $SD=8.6$ ），全体で33.5歳（ $SD=11.0$ ）であった。

2 測度の精査

使用尺度を精査した結果を以下に記述する。

要性別移行者用多次元自我同一性尺度

逆転項目の得点を反転させた後，谷（2001）に倣って，因子数を4に固定して因子分析（最尤法，Promax回転）を行ったところ，20項目すべてが，谷（2001）が想定していた下位概念に対応する形で収束した（Table23）。各下位尺度のアルファ係数（Cronbach）は， $\alpha=.82-0.89$ であった。そこで，下位尺度ごとに項目得点を単純加算した数値を〈要性別移行者対自的アイデンティティ〉得点，〈要性別移行者対他的アイデンティティ〉得点，〈要性別移行者心理社会的アイデンティティ〉得点，〈要性別移行者自己斉一性・連続性〉得点，20項目の合計得点を要性別移行者用多次元自我同一性尺度（Multidimensional Ego Identity Scale of Transgenders：以下，MEIS-TG）得点とし，性別移行を通して再構築された性別にまつわる自我アイデンティティの感覚の指標とした。

Table23 要性別移行者用多次元自我同一性尺度

項目内容	I	II	III	IV	谷(2001) ^a
第1因子〈要性別移行者対自的アイデンティティ〉 ($\alpha = .89$)					
3 自分が何を望んでいるのかわからなくなることがある。[R]	.95	.11	-.14	.03	II
4 自分が何をしたいのかわからなくなると感じる時がある。[R]	.93	.01	-.07	.07	II
8 自分がどうなりたいたいのかわからなくなっている。	.73	-.02	.09	-.09	II
15 自分が望んでいるあり方がはっきりしている。	.60	.01	.16	-.08	II
12 自分の人生において、自分のすべきことがはっきりしている。	.44	-.12	.40	-.10	II
第2因子〈要性別移行者対他的アイデンティティ〉 ($\alpha = .87$)					
19 自分のまわりの人々は、本当の私をわかっていないと思う。[R]	.03	1.01	-.11	-.05	III
17 人に見られている自分と本当の自分は一致しないと感じる。[R]	.03	.73	.03	-.03	III
1 自分は周囲の人々に自分のことをよく理解されていると感じる。	-.05	.69	.16	-.18	III
7 本当の自分は人には理解されないだろう。[R]	.08	.65	-.05	.05	III
20 人前での自分は、本当の自分ではないような気がする。[R]	-.04	.61	.13	.17	III
第3因子〈要性別移行者心理社会的アイデンティティ〉 ($\alpha = .89$)					
9 現実の社会の中で自分の可能性を十分に実現できると思う。	.10	-.04	.85	-.11	IV
11 現実の社会の中で、自分らしい生き方ができると思う。	.06	.03	.84	-.06	IV
5 現実の社会の中で、自分らしい生活が送れる自信がある。	.02	.10	.74	-.03	IV
18 自分らしく生きてゆくことは、現実の社会の中では難しいだろうと思う。[R]	-.06	.22	.54	.21	IV
16 自分がありのままに能力を発揮できる場所は社会にはないような気がする。[R]	-.04	.19	.48	.16	IV
第4因子〈要性別移行者自己斉一性・連続性〉 ($\alpha = .82$)					
10 生来的性別に沿って生きていた頃の自分を過去に置き去りにしてきたような気がする。[R]	-.14	-.03	-.09	.85	I
14 今のままでは次第に自分というものの一貫性を失っていってしまうような気がする。[R]	.05	.04	.07	.72	I
2 性別移行を始める前の自分をなくしてしまったように感じる。[R]	.06	-.09	-.13	.67	I
13 「生まれてから今までに一貫するような自分はない」と感じる時がある。[R]	-.09	.05	.06	.65	I
6 いつものまにか自分が自分でなくなってしまったような気がする。[R]	.33	-.07	.14	.54	I
因子間相関					
	I	—	.41 **	.53 **	.48 **
	II		—	.69 **	.52 **
	III			—	.51 **

因子抽出法:最尤法(Promax回転)

N=326.

** $p < .01$.

a I : 自己斉一性・連続性, II : 対自的同一性, III : 対他的同一性, IV : 心理社会的同一性
 注) 質問項目の末尾にある[R]は逆転項目であることを示す

性別移行過程における Posttraumatic Growth 尺度

各項目について平均値と標準偏差を算出したところ、先行研究で“Spiritual Change”を構成している2項目双方に床効果が認められた。この2項目を除く19項目について探索的因子分析(最尤法, Promax 回転)を行ったが、1項目の共通性が.20を下回った。この1項目を除外して残る18項目について再分析を行ったところ、共通性はどれも.30を超えたが、3項目が2つの因子に.30以上の負荷を示し、その差は.10未満であった。これら3項目を除き、残り15項目で再度同様の因子分析を試みた結果、2因子構造が得られた(共通性はすべて.30以上)。第1因子(8項目)にまとまった項目は、先行研究で“Personal Strength”や“New Possibilities”, “Initiative”を構成していたものが大半であった。第2因子にまとまった7項目中6項目は“Relating to Others”を構成していた項目であった(Table 24)。

信頼性係数(Cronbach)は、第1因子から順に $\alpha = .90$, $\alpha = .88$ であった。従来のPTG

の測度が 4 から 5 つの下位尺度を持っていことを考えるとより単純な構造と言えるが、アルファ係数の高さが申し分ないこと、内容的妥当性が認められることを鑑み、この 15 項目を「性別移行過程における Posttraumatic Growth（以下、性別移行 PTG）尺度」として採用した。尺度得点および下位尺度得点は項目得点を単純加算した数値とし、それぞれ、性別移行 PTG 尺度得点、〈自己に対する有力感の獲得（Empowerment）〉得点、〈人間らしい生き方と親しみの再認（Interpersonal Relationships）〉得点とした。

Table24 性別移行過程における Posttraumatic Growth 尺度

項目内容	I	II	PTGI ^a	PTGI-J ^b	PTGIA ^c
第1因子〈自己に対する有力感の獲得(Empowerment)〉 ($\alpha = .90$)					
10 自分は困難に立ち向かうことができるとわかった	.92	-.13	III	III	III
11 自分の人生に対してより良く取り組めるようになった	.79	.04	II	II	II
4 自分を信頼する気持ちが持てるようになった	.76	-.04	III	III	—
19 思っていたよりも自分は強い人間だということがわかった	.69	.05	III	III	III
12 物事の結末を、うまく受け入れられるようになった	.63	.12	III	III	—
7 新たな自分の生き方が見つかった	.51	.28	II	II	II
3 新たな事柄に興味を持つようになった	.48	.13	II	II	V
17 変化の必要な事柄について、自ら変えていこうと試してみるようになった	.46	.26	II	II	V
第2因子〈人間らしい生き方と親しみの再認(Interpersonal Relationships)〉 ($\alpha = .88$)					
21 自分が他の人たちを必要としていることがわかった	-.16	.85	I	I	I
16 今ある人間関係を大切にしようと努力した	-.02	.76	I	I	I
8 他の人たちに親密感を持つようになった	.12	.69	I	I	I
15 他者に対して、より思いやりの気持ちが強くなった	.15	.63	I	I	I
6 問題に直面したとき、人を頼りにしてもいいということがわかった	.09	.60	I	I	—
20 人間のすばらしさを強く実感した	.27	.56	I	—	—
2 自分が生きている価値を改めて考えた	.20	.40	V	IV	—
因子間相関					
	I	—			
	II	.76 **			

因子抽出法:最尤法(Promax回転)
N=326.

** $p < .01$.

a I: Relating to Others, II: New Possibilities, III: Personal Strength, IV: Spiritual Change, V: Appreciation of Life

b I: Relating to Others, II: New Possibilities, III: Personal Strength, IV: Spiritual Change and Appreciation of Life (Taku, Lawrence & Calhoun et al., 2007)

c I: Relating to Others, II: New Possibilities, III: Personal Strength, IV: Spiritual Change, V: Initiative (西野・沢崎, 2014)

ジェンダー・アイデンティティ尺度

この尺度は、すでに性同一性障害当事者への調査から妥当性・信頼性が確認されている。全 15 項目中 4 項目（“自分が身体的性別とは異なるもう一方の性別としてどうなりたいかははっきりしている”他）に天井効果が認められたが、この 4 項目は性別違和を有する者が抱く特徴的な感覚が反映される項目と考えられる。そこで、15 項目をそのまま採用し、佐々木・尾崎(2007)に従って算出した数値を、ジェンダー・アイデンティティ尺度(Gender Identity Scale: 以下, GIS) 得点, 高次下位尺度得点(〈現実展望的性同一性〉得点($\alpha = .86$),

〈一致一貫的性同一性〉得点 ($\alpha=.86$), 低次下位尺度得点 (〈展望的性同一性〉得点 ($\alpha=.80$), 〈社会現実的性同一性〉得点 ($\alpha=.85$), 〈自己一貫的性同一性〉得点 ($\alpha=.79$), 〈他者一致的性同一性〉得点 ($\alpha=.82$)) とした (Table25)。

Table25 ジェンダー・アイデンティティ尺度

項目内容
現実展望的性同一性 ($\alpha=.86$)
展望的性同一性 ($\alpha=.80$)
2 自分が身体的性別とは異なるもう一方の性別として望んでいることがはっきりしている。
5 自分が身体的性別とは異なるもう一方の性別としてどうなりたいかはっきりしている。
8 自分が身体的性別とは異なるもう一方の性別としてすべきことが、はっきりしている。
社会現実的性同一性 ($\alpha=.79$)
3 現実社会の中で、身体的性別とは異なるもう一方の性別として自分らしい生き方ができると思う。
6 現実社会の中で、身体的性別とは異なるもう一方の性別として自分らしい生活が送れる自信がある。
10 現実社会の中で、身体的性別とは異なるもう一方の性別として自分の可能性を充分に実現できると思う。
13 身体的性別とは異なるもう一方の性別として自分らしく生きてゆくことは、現実の社会の中では難しいだろうと思う。[R]
一致一貫的性同一性 ($\alpha=.86$)
自己一貫的性同一性 ($\alpha=.79$)
1 過去において、自分の性別に自信がもてなくなったことがある。[R]
4 過去において、自分の性別をなくしてしまったような気がする。[R]
7 いつからか自分の性別がわからなくなってしまったような気がする。[R]
11 今のままでは次第に自分の性別がわからなくなっていくような気がする。[R]
14 自分の性別に迷いを感じることもある。[R]
他者一致的性同一性 ($\alpha=.82$)
9 人に見られている自分の性別と本当の自分の性別は一致していないと感じる。[R]
12 身体的性別とは異なるもう一方の性別としての自分は、人には理解されないだろう。[R]
15 人前での自分の性別は、本当の自分の性別ではないような気がする。[R]

$N=326$.

注1) 質問項目の末尾にある[R]は逆転項目であることを示す

注2) 佐々木・尾崎(2007)が“女性(男性)”としていた部分を“身体的性別とは異なるもう一方の性別”に改変している
(該当項目は質問2, 3, 5, 6, 8, 10, 12, 13)

3 相関分析の結果

外見的性別転換度と性自認に沿った社会生活実現度

“外見的性別転換度”と“性自認に沿った社会生活実現度”の2つに回答を求めた。
MTF/X 自認者と FTM/X 自認者の回答は Table 26 のように分布していた。

Table26 性別移行進捗度に関する度数分布（人）

	度数（％）			
	外見的性別転換度 ¹⁾		性自認に沿った社会生活実現度 ²⁾	
	MTF/X自認者	FTM/X自認者	MTF/X自認者	FTM/X自認者
0— 20	24 (20.17)	25 (12.08)	9 (7.56)	22 (10.63)
21— 40	8 (6.72)	21 (10.14)	18 (15.13)	23 (11.11)
41— 60	19 (15.97)	27 (13.04)	27 (22.69)	39 (18.84)
61— 80	32 (26.89)	36 (17.39)	23 (19.33)	30 (14.49)
81—100	36 (30.25)	98 (47.34)	42 (35.29)	93 (44.93)
合計	119 (100.00)	207 (100.00)	119 (100.00)	207 (100.00)

1) “0. 身体的性別に即してみなされている状態”—“100. 身体的性別と逆の性別としてみなされている状態”

2) “0. 全く送れていない状態”—“100. 完全に送れている状態”

この2測度間で Pearson の積率相関係数を算出したところ、有意な中程度の正の相関が認められた ($r = .54, p < .01$)。

性別移行進捗度と各使用尺度

性別移行進捗度として回答を求めた“外見的性別転換度”と“性自認に沿った社会生活実現度”が GIS および MEIS-TG, 性別移行 PTG とどのように関連しているのかを検証するため、それぞれの測度間で Pearson の積率相関係数を算出した (Table27)。

Table27

外見的性別転換度および性自認に沿った社会生活実現度との相関分析 (Pearson)

	外見的性別転換度	性自認に沿った社会生活実現度
ジェンダー・アイデンティティ尺度		
〈現実展望的性同一性〉得点	.46 **	.40 **
〈展望的性同一性〉得点	.24 **	.19 **
〈社会現実的性同一性〉得点	.52 **	.47 **
〈一致一貫的性同一性〉得点	.46 **	.49 **
〈自己一貫的性同一性〉得点	.41 **	.42 **
〈他者一致の性同一性〉得点	.51 **	.56 **
要性別移行者用多次元自我同一性尺度		
〈要性別移行者対自的アイデンティティ〉得点	.21 **	.30 **
〈要性別移行者対他のアイデンティティ〉得点	.34 **	.52 **
〈要性別移行者心理社会的アイデンティティ〉得点	.41 **	.55 **
〈要性別移行者自己斉一性・連続性〉得点	.24 **	.36 **

* $p < .05$, ** $p < .01$.

性別移行進捗度と GIS GIS の各下位尺度得点はいずれも“外見的性別転換度”と“性自認に沿った社会生活実現度”の双方に弱から中程度の有意な正の相関を持っていた。高次下位尺度〈現実展望的性同一性〉得点とその低次下位尺度〈展望的性同一性〉得点および〈社会現実的性同一性〉得点では、“外見的性別転換度”との相関と“性自認に沿った社会生活実現度”との相関はほぼ同等であった（順に $r = .24-.52, p < .01$, $r = .19-.47, p < .01$ ）。同様に、高次下位尺度〈一致一貫的性同一性〉得点とその低次下位尺度〈自己一貫的性同一性〉得点および〈他者一致性同一性〉得点も、“外見的性別転換度”と“性自認に沿った社会生活実現度”とにほぼ同等の相関を示していた（順に $r = .41-.51, p < .01$, $r = .42-.56, p < .01$ ）。

性別移行進捗度と MEIS-TG MEIS-TG の各下位尺度得点はいずれも 2 つの性別進捗度の指標双方に有意な正の相関を示していた。また、いずれの下位尺度得点も“外見的性別転換度”よりも“性自認に沿った社会生活実現度”との間により強い相関を示していた（順に $r = .21-.41, p < .01$, $r = .30-.55, p < .01$ ）。

性別移行進捗度と性別移行 PTG 尺度

性別移行 PTG 尺度を構成する 2 下位尺度得点のうち、〈自己に対する有力感の獲得〉得点は、微弱ではあるものの、“外見的性別転換度”と“性自認に沿った社会生活実現度”の双方に有意な正の相関を示していた（順に $r = .12, p < .01$, $r = .20, p < .01$ ）。一方、〈人間らしい生き方と親しみの再認〉得点は、いずれの測度とも有意な相関を示さなかった。性別移行 PTG 得点は、微弱ではあるが“性自認に沿った社会生活実現度”との間で有意な正の相関を示していたが（ $r = .20, p < .01$ ），“外見的性別転換度”とは無相関であった。

性別移行過程における心理的成長とアイデンティティ

ジェンダー・アイデンティティおよび性別移行過程におけるアイデンティティの再構築について、性別にまつわる心理社会的葛藤のなかで経験される肯定的な心理的変容との関連を調べるため、GIS の各下位尺度得点および MEIS-TG の各下位尺度得点と性別移行 PTG の各得点との間で Pearson の積率相関係数を算出した（Table28）。

GIS と性別移行 PTG 尺度 〈現実展望的性同一性〉得点とそれを構成する〈展望的性同一性〉得点および〈社会現実的性同一性〉得点の間には、それぞれ有意な弱い正の相関が認められた（ $r = .23-.39, p < .01$ ）（ $r = .26-.33, p < .01$ ）（ $r = .17-.36, p < .01$ ）。

これに対して、〈一致一貫的性同一性〉得点とそれを構成する〈自己一貫的性同一性〉得点、〈他者一致的性同一性〉得点は、GIS の〈自己一貫的性同一性〉得点と性別移行 PTG 尺度の〈人間らしい生き方と親しみの再認〉得点との間にごく弱い負の相関 ($r = -.13, p < .05$) が認められた以外はすべて無相関であった。

Table28 GIS および MEIS-TG と性別移行 PTG 尺度の相関分析 (Pearson)

	性別移行過程 における PTG尺度得点	〈自己に対する 有力感の獲得〉得点	〈人間らしい生き方と 親しみの再認〉得点
ジェンダー・アイデンティティ尺度			
〈現実展望的性同一性〉得点	.34 **	.39 **	.23 **
〈展望的性同一性〉得点	.31 **	.33 **	.26 **
〈社会現実的性同一性〉得点	.29 **	.36 **	.17 **
〈一致一貫的性同一性〉得点	-.02	.05	-.10
〈自己一貫的性同一性〉得点	-.06	.01	-.13 *
〈他者一致的性同一性〉得点	.04	.09	-.03
要性別移行者用多次元自我同一性尺度			
〈要性別移行者対自的アイデンティティ〉得点	.36 **	.43 **	.23 **
〈要性別移行者対他的アイデンティティ〉得点	.26 **	.27 **	.21 **
〈要性別移行者心理社会的アイデンティティ〉得点	.28 **	.34 **	.18 **
〈要性別移行者自己斉一性・連続性〉得点	.00	.09	-.10

* $p < .05$, ** $p < .01$.

MEIS-TG と性別移行 PTG 尺度 〈自己に対する有力感の獲得〉得点および〈人間らしい生き方と親しみの再認〉得点は、〈要性別移行者対自的アイデンティティ〉得点、〈要性別移行者対他的アイデンティティ〉得点、〈要性別移行者心理社会的アイデンティティ〉得点との間で、それぞれ有意な弱から中程度の正の相関を示していた ($r = .23— .43, p < .01$) ($r = .21— .27, p < .01$) ($r = .18— .34, p < .01$)。〈要性別移行者自己斉一性・連続性〉得点との相関はどちらも有意でなかった。

4 重回帰分析

性別移行過程における心理的成長の促進要因を調べるため、性別移行 PTG 尺度の〈自己に対する有力感の獲得〉得点と〈人間らしい生き方と親しみの再認〉得点をそれぞれ目的変数、4つのGIS低次下位尺度得点、4つのMEIS-TG下位尺度得点、“外見的性別転換度”、“性自認に沿った社会生活実現度”を説明変数とした重回帰分析(強制投入法)を行

った (Table29)。

Table29 性別移行過程に伴う PTG に関する重回帰分析 (強制投入法)

	性別移行過程に伴う Posttraumatic Growth 尺度			
	〈自己に対する有力感の獲得〉得点 $R^2 = .28^{**}$		〈人間らしい生き方と親しみの再認〉得点 $R^2 = .24^{**}$	
	β	t	β	t
ジェンダー・アイデンティティ尺度				
〈展望的性同一性〉得点	.07	.95	.24	3.24 **
〈社会現実的性同一性〉得点	.06	.68	-.18	-2.00 *
〈自己一貫的性同一性〉得点	-.26	-2.51 **	-.36	-3.31 **
〈他者一致的性同一性〉得点	.02	.17	.11	1.01
要性別移行者用多次元自我同一性尺度				
〈要性別移行者対自的アイデンティティ〉得点	.39	5.20 **	.22	2.78 **
〈要性別移行者対他的アイデンティティ〉得点	.12	1.63 †	.29	3.93 **
〈要性別移行者心理社会的アイデンティティ〉得点	.13	1.49	.15	1.75 †
〈要性別移行者自己斉一性・連続性〉得点	-.13	-1.96 *	-.25	-3.54 **
性別移行進捗度				
外見的性別転換度	-.02	-.24	-.01	-.15
性自認に沿った社会生活実現度	.08	1.14	.00	-.05

† $p < .1$, * $p < .05$, ** $p < .01$.

〈自己に対する有力感の獲得〉得点について

調整済み決定係数は $R^2 = .28$ ($p < .01$) であった。4 つの GIS 低次下位尺度得点のうち〈自己一貫的性同一性〉得点に有意な負の関連が認められたが ($\beta = -.26$, $p < .01$), 他の 3 下位尺度得点は関連を持っていなかった。MEIS-TG では, 〈要性別移行者対自的アイデンティティ〉が有意な正の関連 ($\beta = .39$, $p < .01$), 〈要性別移行者自己斉一性・連続性〉得点が有意な負の関連 ($\beta = -.13$, $p < .05$) を持っていた。性別移行進捗度の関連はいずれも有意でなかった。

〈人間らしい生き方と親しみの再認〉得点について

調整済み決定係数は $R^2 = .24$ ($p < .01$) であった。4 つの GIS 低次下位尺度得点のなかで有意な正の関連が認められたのは, 〈展望的性同一性〉得点であった ($\beta = .24$, $p < .01$)。有意な負の相関は〈社会現実的性同一性〉得点と〈自己一貫的性同一性〉得点に認められた (順に $\beta = -.18$, $p < .05$, $\beta = -.36$, $p < .01$)。〈他者一致的性同一性〉は有意な関連を持っていなかった。MEIS-TG の 4 下位尺度得点のうち, 有意な正の関連が認められたのは〈要性別移行者対自的アイデンティティ〉と〈要性別移行者対他的アイデンティティ〉得点であった (順に $\beta = .22$, $p < .01$, $\beta = .29$, $p < .01$)。〈要性別移行者自己斉一性・連続性〉得点は有意な負の関連 ($\beta = -.25$, $p < .01$) を持っていた。性別移行進捗度の関連はいずれも有意でなかった。

も有意でなかった。

第4節 研究5の考察

1 GISとMEIS-TG

本研究で得られたMEIS-TGの4つの下位尺度は谷(2001)が多次元自我同一性尺度を開発した際に想定した自我アイデンティティの感覚に関する4つの下位概念に即応していた。各下位尺度のアルファ係数も十分な値を示した。性別に関する重大な心理社会的危機(ここでは性別移行)を経験する性別違和を有する者が再構築していく自我アイデンティティの感覚を捉え得る尺度として、MEIS-TGが一定の妥当性・信頼性を有していることが示唆される。

本研究で行った調査では、MEIS-TGだけでなく、同じく多次元自我同一性尺度(谷, 2001)に性別の要素を加えて改変した尺度とされているGIS(佐々木・尾崎, 2007)にも回答を求めた。もともなった尺度は同じだが、MEIS-TGが性別移行を経験した(経験しつつある)者の自我の同一性を捉えるために開発されたのに対し、GISは“ある性別への統一性, 一貫性, 持続性の感覚”を捉える尺度として開発されている。同一性の感覚を抱く先を、その人の“自我”としているか“ある性別(男(性)あるいは女(性))”としているかがこの2つの尺度の最も大きな相違点と言える。

2 GISおよびMEIS-TGと性別移行

GISと性別二元論

GISが“外見的性別転換度”および“性自認に沿った社会生活実現度”との間に示した相関を見てみたい。わずかではあるが、高次下位尺度(現実展望的性同一性)とそれを構成する低次下位尺度は“性自認に沿った社会生活実現度”と、もうひとつの高次下位尺度(一致一貫的性同一性)とそれを構成する低次下位尺度は“外見的性別転換度”とより強く相関していることがわかる。

〈現実展望的性同一性〉を構成している項目はどれも“身体的性別とは異なるもう一方の性別(佐々木・尾崎(2007)では“女性(男性)”であった)”という言葉を含んでおり、

性別二元論が隠喩されている項目として読み取れる。一方、〈一致一貫的性同一性〉にこうした項目は1つしかない。この違いが、“見知らぬ他者から身体的性別とは異なるもう一方の性別とみなされている度合い（身体的性別転換度）”と“性自認（必ずしも男・女のどちらかに振り分けられないその人独自の本来的なもの）に沿った社会生活が実現している度合い（性自認に沿った社会生活実現度）”との相関にも反映されたと考えられる。

MEIS-TG と性自認に沿った社会生活実現度

MEIS-TG の各得点は、GIS の〈一致一貫的性同一性〉と同じように、“外見的性別転換度”よりも“性自認に沿った社会生活実現度”との間に強い相関を示していた。MEIS-TG は多様な性自認でのあり方を許容し得る項目から構成されているからかもしれない。しかしここで、MEIS-TG は教示文で“性別もそれ以外もすべて含めた‘あなた自身’”について尋ねており、明確に性別について問うている項目は〈要性別移行者自己斉一性・連続性〉の4項目中2項目にとどまっていることに注目したい。西野（2014）の質的研究知見によれば、性別違和を有する者は指定された性別に即したあり方を抜けだして自らの本来的な性自認に沿ったあり方へと歩いていく性別移行を通して、必ずしも男・女の別にとらわれない心理社会的アイデンティティを再構築していく。相関係数のみで多くを述べることはできないが、本研究で明らかとなった MEIS-TG と性自認に沿った社会生活実現度の正の相関は、こうした西野（2014）の見解を支持するものと考えられる。

2 性別移行 PTG について

性別移行 PTG 尺度の構成概念

PTG は、精神的健康度や困難・苦悩の解消とは次元の異なる概念であり、哀しみや苦しみと心理的成長は併存し得るとの考えを根底に持つ心理学的概念である。先行研究ではおおむね4から5因子構造を持つとされてきたが、本研究では2因子構造が抽出された。米国で開発された原版の尺度と見比べると、性別移行 PTG 尺度に残った項目は、1項目を除き第1から3因子までに含まれた項目で占められている。原版の第4因子は〈Spiritual Change〉、第5因子は〈Appreciation of life〉であった。性別移行は、“指定された性別”に従って生きざるを得なかった者達が主体性を獲得し、その主体的決定によって、より本

来的な性自認に沿った生活を回復していくための試行錯誤過程”と言える（西野，2014）。生まれ持った性別によって生きるという一種の宿命を自らの手で変革していく性別違和を有する者は、Spiritual ChangeやAppreciation of lifeのような人智を超えた大いなるものよりも、自身の成長や周囲の他者等のより日常的で身近なものによって自身の肯定的な心理的変容がもたらされたという感覚を抱くのかもしれない。

自己に対する有力感の獲得

性別移行 PTG の〈自己に対する有力感の獲得〉得点に負の影響を与えていたのは、GIS の〈自己一貫的性同一性〉得点および MEIS-TG の〈要性別移行者自己斉一性・連続性〉得点であった。身体的性別とは異なる他方の性別への極めて高い帰属感は、相手に他方の性別として認められたい・扱われたいという気持ちを亢進させ、周囲の他者との対人葛藤や感情衝突や、性別移行が思い描くように渉らないことへの過度な自分卑下を引き起こしかねない（佐々木，2007，2011）。身体的性別とは異なる性別への高い同一性も、高い帰属感と同じ機序によって性別移行 PTG のような肯定的な心理的変容に負の影響を与えている可能性が示唆される。正の影響を与えていたのは、MEIS-TG の〈要性別移行者対自的アイデンティティ〉得点であった。以下、これらの結果を 2 つの観点から考察したい。

自己内の同一性と他者間の同一性 ひとつ目は、〈自己一貫的性同一性〉得点が〈自己に対する有力感の獲得〉得点および〈人間らしい生き方と親しみの再認〉得点に負の影響を与えていたのに対し、〈他者一致的性同一性〉得点はどちらの性別移行 PTG 下位尺度得点にも有意な影響を与えていなかったことである。〈自己一貫的性同一性〉得点と〈自己に対する有力感の獲得〉得点はいずれも GIS の高次下位概念〈一致一貫的性同一性〉を構成しているが、自己の性別に関する同一性が自己内で完結する一貫性なのか、自他間での認識の一致性にまで及ぶのかが異なる。性別移行 PTG という観点から見ると、ある性別への高い同一性が肯定的な心理的変化を抑制するのは、その同一性が自己内で完結している場合に限ると言えよう。

ジェンダー・アイデンティティと自我アイデンティティ ふたつ目は、GIS の〈自己一貫的性同一性〉得点が先述のような負の影響を性別移行 PTG の 2 つの下位尺度得点に与えていたのに対し、MEIS-TG の〈要性別移行者対自的アイデンティティ〉得点は正の影響を与えていたことである。特に興味深いのは性別移行 PTG の〈自己に対する有力感の獲得〉得点についてで、前者がもっとも強い負の関連を示している一方で後者は最も強い

正の関連を示していた。統計的結果からは 2 つの得点が大極的な関係にあると考えられるが、項目内容から類推されるように、両尺度のもととなっている谷（2001）の構成概念に照らすと同じ下位概念を出自としており、同一性がある性別に対するものなのか自我に関するものなのかが異なるに過ぎない。しかし性別違和を有する者にとってこうした概念的相違は非常に大きな意味を持っていることが指摘される。

そもそも〈自己に対する有力感の獲得〉は、PTGI の **New Possibilities** と **Personal Strength** を構成していた項目から成っており、新たな経験に対する開放的態度や人間的強さに関する肯定的変容を捉える概念と言える。これまでに報告されている性別違和を有する者の心理的变化に関する質的研究は、その多くが、性別にこだわらない“自分なりのあり方”を見出すことで心理的安定や全人的な自己肯定が獲得されていくことを示している。性別違和を有する者は、身体的性別と反対の性別で生きることではなく、自己の内面で同一性が感じられるような“自分なりの生き方”の実現を目指すことによって、自己に対する有力感が獲得されるような性別移行を実現していくことができると考えられる。

人間らしい生き方と親しみの再認

〈人間らしい生き方と親しみの再認〉得点に負の影響を与えていたのは、GIS の〈自己一貫的性同一性〉得点と〈社会現実的性同一性〉得点、MEIS-TG の〈要性別移行者自己斉一性・連続性〉得点であった。〈自己に対する有力感の獲得〉得点では負の影響関係が認められなかった〈社会現実的性同一性〉得点は、現実社会のなかで身体的性別とは反対の性別として自分らしく生きられている程度を表す。身体的性別とは反対の性別として自分らしさを発揮できていれば、あるいはその自信があれば、他者や社会に自らの独自のあり方について理解や相互協調を求める必要性は減じる。そのために、他者や社会との親和的にかかわりに関する肯定的な心理変化を経験しにくくなるのかもしれない。

正の影響関係が認められたのは、GIS の〈展望的性同一性〉得点と、MEIS-TG の〈要性別移行者対自的アイデンティティ〉得点および〈要性別移行者対他的アイデンティティ〉得点であった。したがって、自身の内面的同一性と他者との関係性における同一性の双方が〈自分らしい生き方と親しみの再認〉に関する心理的变化に貢献すると考えられる。

心理社会的援助の可能性

外見的性別転換度と性自認に沿った社会生活実現度の 2 つは、〈自己に対する有力感の

獲得)にも〈人間らしい生き方と親しみの再認〉にも関連していなかった。性別移行 PTG は極めて内的な感覚であり、現実的にどのように性別移行が進捗しているかとは関連しないことが明らかになったと言える。

身体的治療(性ホルモン投与等)による外見的变化が得られていない時期の性別違和を有する者の語りから抽出した西野(2013)の“未身体的治療の要性別移行者におけるカミングアウト体験プロセス”でも、“素直な自分らしさの実感”や“‘男・女’のこだわりからの脱却”などが概念化されている。また、具体的な性別移行に進むよりも以前、自分と同じような当事者の存在を知ること等によっても、身体的性別とは合致しない性自認への自己肯定が育まれる(西野, 2013, 2014)。

社会的性別移行の進捗を下支えする心理社会的援助は、身体的治療の補助・補完というような消極的な役割だけでなく、よりよい性別移行を身体的治療とは異なる側面から促進させるもうひとつの主軸としての役割をも果たしうる可能性を秘めていると考えられる。その際は、性別二元論という一種の先入観にこだわらず、その人独自のあり方を協働的に模索していくことで彼ら自身がエンパワメント(empowerment)されるようにかかわる姿勢が不可欠となろう。

4 今後の課題

本研究では、性別移行 PTG 尺度が先行研究で報告されている尺度とは大きく異なる様相を示した。この結果に類似する因子構造を示す集団が存在するのか否か、存在するとすればどのような点が共通しているのか等を探っていくことで、様々な心理的困難に直面する者の心理的可能性をよりよく見出せるかもしれない。また、性別違和を有する者の性自認の特徴や性別違和感の強さ等が、性別を超えた自我アイデンティティの再構築および心理的成長にどのように影響するのかも興味深い。

今後は、こうした研究を積み重ねながら、性別移行を通じた心理的成長に対して高い説明力を持つモデルの生成を目指すことによって、性別違和を有する者の well-being 実現をよりよく促進し得る心理社会的援助の方策と可能性をさらに探究していきたい。

第 8 章 総括的討論

本論文には、文献研究（第 1 章）、質的研究（第 3, 4, 5, 6 章）、質問紙調査研究（第 7 章）という 3 形態で行われた、全 6 つの研究成果がまとめられている。本章では、これら研究の成果と考察、性別違和を有する者への心理社会的援助に関する示唆を再掲しながら整理し、本論文全体によって得られた成果を踏まえた今後の研究課題を展望する。

第 1 節 本論文を構成する研究によって得られた知見

1 性別違和を有する者に関する歴史的見解および先行研究

不遇の歴史 歴史的文献からは、性別違和を有する者は、それが精神医学的見地から取り上げられるようになる遙か昔より、一定数存在していたことがうかがわれた。また、精神医学分野で取り上げられた当初は、“異常性欲”の文脈で捉えられていたこと、日本では“変態性欲”として専門家に認知されていたことがわかった。

米国で盛り上がりを見せた黒人解放運動は、ゲイ解放運動（1960 から 1970 年代）に力を与え、こうした人権運動の流れのなかで、性別違和を有する者も自らの生きる尊厳を主張することができるようになっていった。欧米の性別違和を有する者は、こうした流れのなかで生まれた“トランスジェンダー”と自らを呼ぶことが多い。一方日本では、1960 年代のブルーボーイ事件を発端に、性別適合手術は違法であるとの一部歪曲した見解が世間に認知されてしまったことから、性別違和を有する者が自らの性自認や性別のあり様を表現したり、性自認に沿った生活を送ったりすることができない時代が 1990 年代終盤まで続くこととなった。

日本の特徴的な社会的認知と先行研究 その後、日本初の公の性別適合手術が実施されたことが大きく報道され、2002 年後にはテレビドラマで性同一性障害当事者が大きく取り上げられたこと等により、“性同一性障害”という精神障害のひとつとして社会的認知が

広がった。日本の性別違和を有する者は、“性同一性障害”あるいはその略称“GID”と自称する傾向にある。日本では人権擁護の文脈よりも医学的治療の文脈に重きがあり、性別違和を有する者を取り上げた先行研究も、ほとんどが、身体的治療の適用可否の判断や性同一性障害の鑑別を目的に実施された心理検査の結果等を分析し、性格的・人格的特徴の傾向や心身不調の程度を明らかにしようとするものであった。当人の置かれている社会状況に関心を向け、心理社会的視座から支援・援助を提供することを念頭に置いた研究報告はごく少数にとどまっていた。

2 本論文の基本的発想に関する独創性

こうした先行研究動向に対し、本論文は、性別違和を有する者の性自認に沿った well-being 実現に対して、紆余曲折を経ながら発展してきた医学的治療の成果と限界を正に肯定し、医療とは異なる心理社会的援助の視点を持ち込むことによってその限界を解決に導くという基本的発想を持つ。身体的性転換と社会的性別移行が複合的相乗的に作用することによって“性別移行”がよりよく促進されると考え、性別違和を有する者と彼らを取り巻くコミュニティ環境との適合性や、性別違和を有する者自身がすでに持ち合わせている様々な内的・外的資源をに関心を向け、客観的であることよりも、性別違和を有する者の主観的視点へのコミットを重視している点は、先行研究と大きく異なる本論文の独創性と考えられる。

3 本論文の研究成果

心理社会的葛藤と性別二元論が根強い社会

第3章では、“カミングアウト”を切り口として、FTM/X 自認者の社会適応と非当事者との共生に関する検討を行った。これにより、カミングアウトにまつわる不安は直接的な関係性がある身近な者に対してより強く抱かれること、親へのカミングアウトと友人へのカミングアウトは質的に異なること、FTM/X 自認者は女性として出生した過去から現在へとつながる歴史性を持つ存在を“ありのままの自分”と感じながらも、対他的・対社会的

には“男性”として“埋没”することを望んでいること、性別二元論が深く浸透した社会と性別二元論では捉え切れない性別のあり方を持つことで抱かれる心理社会葛藤に苦悩していること等が示唆された。また、大多数が言及する“埋没”志向の背景には、“男性”への帰属感や性別違和の軽減という積極的動機に加え、“男性”として社会的多数派に同化して社会的スティグマを免れたいという消極的動機があることが考察された。

このことから、単に“男性／女性から女性／男性へ”というように、性別二元論の枠組みに再配置するような考えを前提とした考えでは、性別違和を有する者本人が希望するあり方を十分に捉えることはできないことがわかった。また、“埋没”か“適応”かという適応様式の選択を観点としていては、性別違和を有する者が自認する性別のあり様を十分に捉えることができないことも明らかとなった。

性別二元論に囚われずに生きるための社会変革

第4章に記述した研究では、FTM/X自認者15名の語りに修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA）を適用することで、【従来の適応からの前抜け出し期】【望む性での社会適応模索期】【主体的な社会適応再構築期】の3期からなる、社会適応再構築プロセスを得ることができた。また、〔社会にある性別二元論の枠組み〕〔性別二元論では捉えきれない自分〕の2つの概念間の関係は、{違和感}（第1期）から{相反}（第2期）、そして{内的葛藤}（第3期）へと変化していくことがわかった。FTM/X自認者にとっての“性別にまつわる困難”は解消されはしないが、社会適応再構築プロセスの3期にわたり、その意味合いは変化していくのである。

分析に時間的プロセスを組み込むことによって、〔GIDの特徴である不一致〕を持つことで他者や社会から提示され迫られるものと感じられていた“埋没”か“適応”かという選択肢は、次第に自らの主体的な生き方の選択を説明する一観点に取り込まれていくことがわかった。また、〔社会にある性別二元論の枠組み〕と〔性別二元論では捉えきれない自分〕との不一致を内的葛藤として抱えている【主体的社会的再構築期】にあるFTM/X自認者は、性別を越えた1人の人間として自らの当事者性を肯定的に意味づけて取り込んだり性別二元論に規定された社会に対して働きかけたりすることで、性別に関する一般的な一貫性を持たない者達が“ありのままの自分”で生きられるような社会へと変革する志を有していた。内的葛藤を引き受け、抱えつつも、自らの主体的行動によってその内的葛藤が解放される日に一步一步近づこうとしていく意志を感じ取ることができるだろう。

苦難までも意味づけられていく自分だけの人生

第5章では、F to M/X 性別移行よりも社会的偏見に曝されやすい M to F/X 性別移行に着目し、MTF/X 自認者 16 名の語りを M-GTA にて質的に分析した。これにより、【自問自答】から【苦楽ある私だけの人生】に至るまでの心理的变化を説明する心理社会的アイデンティティ再構築プロセスを得ることができた。性別違和を自覚した頃から丁寧に語りを掬い上げることで、性別違和を有する者にとって、生物学的性によって指定された性別から抜け出していくプロセスが、自らの本来的なかつ根源的存在意義を手にするために必須のプロセスでもあることが動的理論として示されたと言える。

幼少期から自己否定の感覚を強く抱きやすい MTF/X 自認者にとって、自身の未来イメージを得られるような〈モデリング対象の発見〉は、性別移行を自身に引きつけてしていく上での、非常に大きな内面的転機となっていた。彼らの心理社会的アイデンティティが再構築されていく上で最も大きな原動力となっていたのは“艱難から解放された感覚”であった。カミングアウト相手からの承認は、他者からは不可視な性自認への対自的自己肯定を他者との相互関係にも広げていくことを助け、他者からの目にも顕在化される性別移行という具体的現象を自ら推し進めていく原動力を生み出していると考えられる。

最終カテゴリーは〈苦楽ある私だけの人生〉となったが、他者や社会に対して自らを主体的に位置づけ直し、残存する苦悩や苦難を身に受けつつも、自分なりの希望ある未来を描き、心理社会的 well-being を実感している MTF/X 自認者の姿が見出される。

カミングアウト相手に求めることの移り変わり

性別違和を有する者が抱く対他的・対社会的葛藤は、外見上の性別移行がもたらされる以前により強いと考えられる。第6章では、性別違和を有する者 13 名（MTF/X 自認者 6 名、FTM/X 自認者 7 名）から身体的治療による外見的变化をとまなわない時期のカミングアウト体験を聴取し、M-GTA による質的分析を行った。

その結果、【知ってもらうには言うしかない時期】【必要以上は口にしたくない時期】【対話を通して自分らしさを表現する時期】からなる未身体的治療期のカミングアウト体験プロセスが生成された。また、性別違和を有する者が行うカミングアウトの機能は各期に対応した特徴があり、“生きるためのカミングアウト”、“変化を求めるカミングアウト”、“自己表現としてのカミングアウト”のように、性別違和を有する者とカミングアウト相手との関係性によって異なる意味が付与されていることが見出された。

【知ってもらうには言うしかない時期】に見られる“生と死”に係る苦悩は、“このまま（＝指定された性別に沿ったあり方）では生きていけない。だが、本当の自分（＝性自認に沿ったあり方）で生きようとすれば、これまで他者や社会との関係性のなかで形作られてきた自分の社会的死を引き受けねばならない”という、極めて実存的な絶望として理解される。この時期のカミングアウトは、【悟られてはいけないもの】として心中に秘めてきた自らの当事者性や性別違和を相手に吐露する形で行われるため、カミングアウトしたことを相手に否定されなかったことだけでも、一種の成功体験として喜びが抱かれる。

性別違和を有する者とそれを体験的には理解できないカミングアウト相手との間にあ
る心理的隔たりは、【必要以上は口にしたくない時期】に顕在化しやすい。カミングアウト
初期に行われるカミングアウトの相手は、旧友や家族等の親近者であることが多いため、
当人のことを疑いなく指定された性別（“男性／女性”）と思ってきた期間も自然と長くな
る。長い間そうだと思っていた性別認識を、瞬時に、カミングアウトされたように書き換
えることは誰しも容易ではない。一方、決死の覚悟でカミングアウトした当人は、性自認
に沿ったあり方で生きていけるように、先へ先へと進んでいきたいと願う。自身への性別
認識や言動を早々に改めてくれない相手に苛立ちやもどかしさが抱かれるのである。

性別を超越したアイデンティティの獲得と性別移行を経た心理的成長

第7章では、第3、4、5、6章の結果をもとに、(1) well-being の伴う性別移行過程で
はその人独自の本来的なアイデンティティが再構築される、(2) “男性”／“女性”に対す
る同一性の感覚ではなく性別を超越した自我アイデンティティの感覚の強さが性自認に沿
った社会生活の実現度と深く関係する、(3) 性別移行過程に伴う肯定的な心理的変化は、
性別二元論に由来する他者や社会との軋轢や心理社会的葛藤・苦悩から抜け出そうともが
き努めることでよりよく導かれるとの仮説を立て、日本全国の性別違和を有する者に対す
る自己記入式質問紙調査により仮説検証を行った。

性別違和を有する者 267 名から得た有効回答に対する統計的検討の結果から、(a) 過去
から現在まで一貫して揺るぎない性自認を保持しているとの自負が心理的成長に負の影響
を与えること、(b) 現在から未来に向けて展望が開けていることがエンパワメント
(empowerment: 自己の有力化) につながること、(c) 人間らしい生き方と親しみの再認
には、自己内と他者間の両アイデンティティが正の影響を与えることが明らかとなった。

また、性別移行過程に伴う肯定的な心理的変化は、性別移行がどの程度進捗しているか

という現実的变化（外見的性別転換度，性自認に沿った社会生活実現度）から影響を受けない，極めて内的な感覚であることが推測された。

4 研究成果のまとめ

本論文を構成する研究によって明かとなったことを以下にまとめる。(a) 性別違和感を自覚してから性別移行に歩み出すまで，特に幼少期から思春期にかけては，自らが“男であるか，女であるか”が大きな苦悩と自己嫌悪をもたらす，(b) “ありのままの自分”として主体的に生きようとする際，“男性”とも“女性”とも言い切れない自身と社会に既存の性別二元論との齟齬は，内的葛藤として当人の中に内包されていく，(c) 性別違和を有する者にとって，性別移行は本来の当人独自の性自認に沿ったあり方を獲得していくための試行錯誤過程として体験されるものであり，そこで行われる他者や社会との相互協調が心理社会的 well-being の感覚を導いていく，(d) 心理社会的 well-being の実現過程には，生物学的性（身体的性別）とは異なる性別であることに関する，他者からの承認が不可欠となる，(e) 主体的な社会適応や心理社会的アイデンティティの再構築は，性別にまつわる心理社会的葛藤の解消と同義ではない，(f) 決死の覚悟で行う単発的なカミングアウト体験を重ねていくなかで，自らのあり様を表現して伝えていく継続的なカミングアウト（対話）を希望するようになっていく，(g) 出生時の生物学的性と反対の性別に限りなく近づくことではなく，性別を超越した自我アイデンティティの獲得によって，性別移行過程に伴う心理的成長がもたされる。

第2節 性別違和を有する者への心理社会的援助

性別違和を有する者達にとって課題となっている“性別”は、人間の存在の根本をなす要素の1つであることから、性別違和を有すること、すなわち精神障害と捉えることに対しても、様々な見解がある。DSM-5には“性別違和”として記載が残ったが、現在改訂作業を進められているICD-11でどのように記載されるかは性別違和を有する者やその援助・支援に携わっている者にとって大きな関心事となっている。ICD-11ではDSM-5と類似する記載に収まる可能性が高いが、より長期的には、同性愛が精神障害としてみなされなくなったように、性別違和を有することは精神障害ではないと理解されるようになるかもしれない。確かに、性別違和を有するというだけで精神医学的診断を下すような風潮や、指定された性別とは異なる性のあり様で生きる者を一様に医療や支援の対象と捉えるような考えは適当とは言いがたい。

しかし、性別違和を有する者が抱く性別違和感には、その身体に対する嫌悪感・忌避感が含まれている。特に身体が二次性徴を迎える思春期には性別違和感が高じやすく、それは自殺念慮や自殺企図としても現れる。また、現代の先端医療技術を持ってしても、MTF/X自認者が生まれながらの“女性”となることはできないし、同様に、FTM/X自認者が生まれながらの“男性”となることもできない。身体的性別と性自認の食い違いに由来する精神的・心理的苦痛のみならず、様々な心理社会的苦悩・葛藤を抱え得る彼らに対して、心理的援助の必要性が無くなることはないだろう。

表明される訴えと当人独自の性自認への関心

第3章にて記述した事例的検討などからよくわかるように、性別違和を有する者と言っても、その性自認のあり様やその感じ方は個別性が高く、“男性”や“女性”という言葉では端的に表現し難い。しかし、自らの性自認や希望する扱われ方を表明する際には、“‘男性’として”、“‘女性’として”という言葉が用いられやすい。

心理社会的援助を提供しようとする際、当人の訴えに耳を傾けることが重要なのは言うまでもない。しかし同時に、それが当人の性自認や“ありのまま自分”として生きること沿った訴えであるのか、それとも“男・女”という2つの選択肢のうち、より近いものの、あるいは絶対違うものではない方を表明しているのかを注意深くアセスメントする必要があるだろう。

前者の場合、当人の訴えをもとにこれから先どのように性別移行を進めていけるのか、そのためにどんなことが必要になるのかを具体的に話し合っていくことが有用と思われる。

一方、後者の場合には、具体的なことを話し合う以前にまず、当人がどんなことを苦しく感じており、それを軽減していくためにどんなことをしたいと思っているのかを丁寧に聴き取り、言語化して共有し、どのような性別移行を進めていくことが当人の **well-being** につながるのかを考えていく必要がある。性別違和を有する者すべてが、日常生活・社会生活・身体全般に渡る性別移行を不可欠とするわけではない。この段階を踏むことによって、不要なリスクに曝されることを効率よく避け、その人なりの事情や性自認のあり様に沿った性別移行を実現することが可能になる。支援・援助を担う者も、“性別二元論の枠組みへの再配置”ではない、本人に合った性別移行を下支えしていくことができるようになると思われる。

性別移行にまつわる主体的試行錯誤の励まし

性別違和を有する者の生きづらさを心理社会的側面から捉えると、援助・支援の方向性は、彼らの内的な性別違和感ではなく、彼らがどのように社会のなかで生きていくかに関心を向けることが必要になる。改めて違和感の自覚を促すことで得られるものは少ない。特に一定の内的な自己確立が得られた後に行われる“カミングアウト”の背景には、望む性でのあり方に向けた変化への期待があり、障害受容や困難の自覚のような現状の理解よりもさらに一歩、未来に向かって歩み出そうとしている状態にあると理解される。

外見や社会生活などの目に見える具体的変化がともなうため、性別移行を進めていこうとすれば、誰もが、困難や葛藤を覚える事態に身を置くことになり得る。“性別移行”が性自認に沿った心理社会的 **well-being** を実現させるものとなるには、当人が他者や社会の相互協調を主体的に試行錯誤していくことが有益と考えられる。彼らの性別移行に関わることになった援助・支援の提供者に求められるのは、社会に深く浸透している性別二元論に囚われない当人独自のあり方を協働的に模索することを通して、性別を超越した自我アイデンティティの感覚の獲得をエンパワメントすることと言えるだろう。

当人と周囲の調整役としての機能

当人が置かれている状況に合った心理教育も有用と思われる。第 6 章の再掲になるが、《生きるためのカミングアウト》が行われる時期には、当人達が感じている性別に関する

不一致は、自分が他者や社会に対して表現している性別と性自認との間、性自認と周囲の他者が自身に対して持っている性別認識との間にも生じている。支援・援助に携わる者は、性別違和による心理的苦痛と社会との葛藤による心理的苦悩の両者を念頭に置きながら当人の性自認を支持的に肯定し、彼らの“生”を励ます必要がある。その際には、性別違和を有する者であっても、どのような well-being を実現し得るのかについて情報提供したり、自助グループへの参加を促したりすることで、彼がモデリング対象を発見できるようにかかわる必要があると考えられる。

カミングアウトがうまくいくかどうかは相手の反応に依存する部分も大きい。仮にうまくカミングアウトできなかった場合の緩衝材を事前に用意しておく、安全性が高まるだろう。たとえば、一度のカミングアウトですべてが済むわけではなく、カミングアウトは他者に自分のことをわかってもらうための初歩に過ぎず、カミングアウトを重ねることで得られるものもあること等を伝えておけると、自分も相手も責めずに済む。カミングアウトによって得られるだろう望ましい変化はもちろん、それに加えて、当人、カミングアウト相手、そしてその相互関係のなかで生じうる心の動きについて、善し悪しの評価をつけずに心理教育しておくことも価値があろう。

家族の来談が期待できる場合や学校や職場等のコミュニティに参入している場合には、周囲のキーパーソンに性別違和を有する者に特徴的な心理や直面しやすい困難、想定される心理社会的課題等を伝えたり、コンサルテーションを行ったりして、性別違和を有する者を支え励ます体制を協働的に構築していける。ここでの援助・支援に携わる者の役割は、当人とその関係者の関係が良好に保たれるよう、調整役として機能することとなる。

すでに社会の中でエンパワーされており、積極的な心理社会的援助の必要性が低い者ともかかわることがあるかもしれない。その場合には、うまくいったカミングアウトに貢献していた工夫や状況の振り返り、今後の社会生活の展望を具体化・明確化していく話し合い等、当人が持ち合わせている内外の資源や力を引き出しながら、さらなる心理社会的 well-being 実現を下支えしていくような、促進者としてのかかわりが望まれる。

第3節 今後の課題

これまで本邦で行われてきた性別違和を有する者に着目した心理学関連領域の学術研究は、身体的治療による性別転換の発想に根ざしたものが多く、MTFであれば“女性”，FTMであれば“男性”としての生き方を励ますものであったとも捉えられる。実際に身体的治療によって彼らの性別に関する心理的苦痛は軽減し、治療によって外見が変化すれば、社会に適応しやすくなる。“埋没”することも可能になる。これまで積み重ねられてきた研究は決して無駄ではなく、指定された性別と反対の性別への強い帰属感を持つ者などの支援・援助においては、今後も続けられていく必要がある。

一方本論文は、性別二元論という社会的価値観によって抱かれる心理社会的苦悩を取り上げ、社会適応という広い視座に立っていくつかの知見と心理社会的援助への示唆が得られた。医療機関を介した調査を控え、性別違和を有する者の語りを丁寧に掬い上げる質的研究を複数行うことによって、より多様な性自認を持って現実社会に生きる者の声を反映することが可能となったと考えられる。また、性別違和を有する者が直面する困難のみならず、性別移行過程で体験される心理的变化の肯定的側面に関する知見が得られたことも、心理社会的援助の質的向上に寄与することが期待される点で、有意義と言える。

今後の研究課題としては、性別違和を有する者が直面する特有の社会的課題に注目し、性別違和を有する者の生活の場によりコミットした研究知見を得ていくことが挙げられる。具体的には、就職や就業上の困難、在職中の性別移行、戸籍上の婚姻や家族関係を得られないなかでのライフパートナーシップ形成等を取り上げることが意義深いと考える。

引用文献

- American Psychiatric Association (2000). *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fourth Edition, Text Revision; DSM-IV-TR*. Washington D.C. and London, England: American Psychiatric Publishing. (高橋三郎・大野裕・染谷俊幸 (訳) 2004 DSM-IV-TR—精神疾患の診断・統計マニュアル (新訂版) 医学書院.)
- American Psychiatric Association (2013). *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fifth Edition*. Arlington, V. A.: American Psychiatric Publishing.
- Archer, S. L. (1993). Identity in relational contexts: A methodological proposal. J. Kroger (Ed.), *Discussions on ego identity*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum, pp.75-99.
- 浅野美知恵・佐藤禮子 (2003). がん手術後 2 年から 3 年経過した患者とその家族員の社会復帰過程における自分らしさの回復 順天堂医療短期大学紀要, **14**, 13-24.
- Benjamin, H. (1953). Transvestism and transsexualism. *International Journal of Sexology*, **7**, 12-14.
- di Ceglie, D., & Thümmel, E. C. (2006). An Experience of Group Work with Parents of Children and Adolescents with Gender Identity Disorder. *Critical Child Psychology and Psychiatry*, **11**, 387-396.
- Coolidge, F.L., Thede, L., & Young, S.E. (2002). The heritability of gender identity disorder in a child and adolescent twin sample: *Behavior Genetics*, **32**, 251-257.
- Crass, V. C. (1984). Homosexual identity: A concept in need of definition. *Journal of Consulting Psychology*, **24**, 307-310.
- Dhejne, C., Lichtenstein, P., Boman, M., Johansson, V. L., Långström, N., & Landén, M. (2011). Long-Term Follow-Up of Transsexual Persons Understanding Sex Reassignment Surgery: Cohort Study in Sweden. *PLoS ONE*, **6**, e16885. doi:10.1371/journal.pone.0016885.
- 江川哲雄 (2003). 性同一性障害における HTPP の性別反応 近畿大学医学雑誌, **28**, 259-268.
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton & Company. (仁科弥生 (訳) (1977-1980). 幼児期と社会 1, 2 みすず書房)

- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle. Psychological Issues Monograph, Vol. 1.* New York: International Universities Press. (小此木啓吾 (訳編) (1973). 自我同一性 誠信書房)
- Erikson, E. H. (1968). *Identity: Youth and Crisis.* New York: W. W. Norton & Company. (岩瀬庸理 (訳) (1973). アイデンティティ——青年期と危機—— 金沢文庫)
- Glaser, B., & Strauss, A. (1967). *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research.* New York: Aldine Publishing Company. (後藤隆・大出春江・水野節夫 (訳) (1996) データ対話型理論の発見 新曜社)
- Gómez-gil, E., Esteva, I., Almaraz, M. C., Pasaro, E., Segovia, S., & Guillamon, A. (2010). Familiarity of gender identity disorder in non-twin sibling: *Archives of sexual Behavior*, **39**, 546-552.
- Gonen, J. Y. (1971). Negative identity in homosexuals. *Psychoanalytic Review*, **58**, 345-352.
- Green, R., & Money, J. (1960). Incongruous gender role: Nongenital manifestations in prepubertal boys. *Journal of Nervous and Mental Disease*, **131**, 160-168.
- Hammersmith, S. K., & Weinberg, M. S. (1973). Homosexual identity: Commitment, adjustment and significant others. *Sociometry*, **36**, 56-79.
- 針間克己 (2000). 性同一性障害に関する基本的用語及び概念への疑問と意見 (一般) 日本性科学会雑誌, **18**, 19-23.
- Hepp, U., Kraemer, B., Miller, N., & Delsignore, A. (2005). Psychiatric co morbidity in gender identity disorder: *Journal of Psychosomatic Research*, **58**, 259-261.
- 堀田香織 (1998). 男子大学生の同性愛アイデンティティ形成 学生相談研究, **19**, 13-21.
- Josselson, R. (1994). Identity and relatedness in the life cycle. Bosma, H. A., Graafsma, T. L. G., Grotevant, H. D., & de Levita, D. J. (Eds.) *Identity and development: An interdisciplinary approach.* Thousand Oaks, CA: Sage, pp.81-102.
- 梶田叡一 (1998). 意識としての自己——自己意識研究序説—— 金子書房
- 河村洋子・横田康成・亀谷譲 (2006). 脳梁形状を用いたサポートベクターマシンによる心理的「性」の識別法 社団法人電子情報通信学会, **162**, 85-90.
- 河村洋子・横田康成・亀谷譲・竹田寛・松村要 (1995). 性別による脳梁形状の統計的有

- 意差 社団法人電子情報通信学会, **13**, 85-88.
- 金香月 (2007). “らしさ”を求めて——若い在日コリアン女性のライフストーリー——
日本アジア研究 (埼玉大学), **4**, 21-40.
- 木下康仁 (2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実際——質的研究への誘い——
弘文堂
- 児玉恵美 (2009). 性同一性障害の自我境界と自己イメージについて 心理臨床学研究,
27, 230-236.
- 小嶋由香 (2004). 脊髄損傷者の障害受容過程—受傷時の発達段階との関連から— 心理臨床学研究, **22**, 417-428.
- 小嶋由香 (2005). 青年期・成人前期に受傷した脊髄損傷者の障害受容過程とアイデンティティ発達の関連性——障害受容過程にみられる心理社会的危機の分析—— 広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部, **54**, 309-319.
- 康純 (2012). 性同一性障害の概念について 近畿大学臨床心理センター紀要, **5**, 3-10.
- Krafft-Ebing, R., & Blain, D. (1886). *Psychopathia Sexualis: The Classic Study of Deviant Sex* (黒沢良臣 (訳) (1913). 変態性慾心理 大日本文明協會 斎藤光 (編) (2006) 近代日本のセクシュアリティ 2——「性」をめぐる言説の変遷 変態性欲と近代社会—— ゆまに書房)
- 真鍋幸嗣・花田雅憲・上石弘 (2000). 性同一性障害の性差 近畿大学医学雑誌, **25**, 165-169.
- 溝上真一 (2002). アイデンティティ概念に必要な同定確認 (identify) の主体行為——実証的アイデンティティ研究の再検討—— 梶田叡一 (編) 自己意識研究の現在 ナカニシヤ出版 pp.1-28.
- Marcia, J. E. (1966). Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, **3**, 551-558.
- Martin, A. (1982). Learning to hide: The socialization of the gay adolescent. *Adolescent Psychiatry*, **10**, 52-65.
- 百田武司・西亀正之 (2002). 脳卒中患者の回復過程における主観的体験 広島大学保健学ジャーナル, **2**, 41-50.
- Money, J. (1985). Gender History, theory and usage of the term in sexology and its relationships to nature / nurture. *Sex and Material Therapy*, **11**, 71-79.

- 森美加・高橋道子・牛島定信・中山和彦 (2005). 性同一性障害における性役割志向 臨床精神医学, **34**, 951-957.
- 村澤和多里 (2005). E. H. エリクソンと P. L. バーガーによるアイデンティティ論の検討——青年期の理解と援助にむけて—— 作新学院大学人間文化学部紀要, **3**, 1-15.
- 永田彰子・岡本裕子 (2005). 重要な他者との関係を通して構築される関係性発達の検討 教育心理学研究, **53**, 331-343.
- 永田彰子・岡本裕子 (2008). 重要な他者との関係を通して構築された関係性様態の特徴——信頼感および identity との関連—— 教育心理学研究, **56**, 149-159.
- 中塚幹也・江見弥生 (2004). 思春期の性同一性障害症例の社会的, 精神的, 身体的問題点と医学的介入の可能性についての検討 母性衛生, **45**, 278-284.
- 日本精神神経学会性同一性障害に関する委員会 (2006). 性同一性障害に関する診断と治療のガイドライン 第3版 2006年11月18日
(http://www.jspn.or.jp/ktj/ktj_k/pdf_guideline/guideline-no3_2006_11_18.pdf)
(2010年12月30日).
- 日本精神神経学会・性同一性障害に関する委員会 (2012). 性同一性障害に関する診断と治療のガイドライン (第4版). 精神神経学雑誌, **114**, 1250-1266.
- 西野明樹 (2008a). 性同一性障害 (GID) 当事者の語る社会適応のあり方——FTM 及びその周辺群への心理的援助に関する一考察—— 埼玉大学教育学部学位論文 (未公刊).
- 西野明樹 (2008b). 性同一性障害 (GID) 当事者の語る社会適応のあり方——FTM 及びその周辺群への心理的援助に関する一考察—— GID (性同一性障害) 学会雑誌, **1**, 228.
- 西野明樹 (2011). 性同一性障害を自認する当事者の性別移行のなかにみる社会適応再構築プロセス——FTM への半構造化面接から—— コミュニティ心理学研究, **14**, 166-189.
- 西野明樹 (2012a). 性同一性障害の性別移行の中にみるアイデンティティ再構築プロセスについて——半構造化面接による MTF カミングアウト体験の聴取から—— 日本コミュニティ心理学会第15回大会発表プログラム・発表論文集, 24-25.
- 西野明樹 (2012b). 性同一性障害当事者の性別移行のなかにみるアイデンティティ再構築プロセスについて——半構造化面接による MTF カミングアウト体験の聴取から—— 目白大学大学院心理学研究科修士論文 (未公刊)

- 西野明樹 (2013), 未身体的治療での社会的性別移行過程初期における“カミングアウト”とその意味——性別違和を有する者 13 名の語りをもとにしたプロセス理論の生成——, *GID (性同一性障害) 学会雑誌*, **6** (1), 43-54.
- 西野明樹・沢崎達夫 (2013). アイデンティティの本質をめぐる研究の動向と課題——性同一性障害の性別移行を観点として——, *目白大学心理学研究*, **9**, 129-141.
- 西野明樹 (2014). 性別違和を有する者の性別移行過程に見られる心理社会的アイデンティティ再構築プロセス——MTF を自認する当事者 16 名との半構造化面接から——, *コミュニティ心理学研究*, **17** (2), 199-218.
- 西野明樹・沢崎達夫 (2014). 苦境体験における Posttraumatic Growth に関する研究——体験者の主観的意味づけに着目して——, *目白大学心理学研究*, **10**, 11-24.
- 西野明樹・沢崎達夫 (2015). 性別違和を有する者の性別移行と心理的成長に関する研究, *目白大学心理学研究*, **11**, 55-71.
- 岡本裕子 (1997). 中年からの identity 発達の心理学 ナカニシヤ出版
- 岡茂 (1996). 中途障害者の障害受容における自己概念の変化——共同作業所の学習活動から——*京都教育大学紀要*, **89**, 119-129.
- 岡茂・島崎けい子・望月米代 (1996). 中途視覚障害者における価値の転換——「自己」への気づきに視点を当てた共同作業所の取り組みから——*総合リハビリテーション*, **24**, 1191-1194.
- 大前太一 (2007). 中途視覚障害者における障害の受傷から社会復帰にいたるまでの心理的变化のそのプロセスの研究 (I) *奈良大学大学院研究年報*, **12**, 123-130.
- 大前太一 (2009a). 中途視覚障害者における障害の受傷から社会復帰にいたるまでの心理的变化とそのプロセスに関する研究 *奈良大学大学院研究年報*, **14**, 217-219.
- 大前太一 (2009b). 中途視覚障害者における障害の受傷から社会復帰にいたるまでの心理的变化のそのプロセスの研究 (II) *奈良大学大学院研究年報*, **14**, 27-39.
- 大槻修・今井源衛・森下純昭・辛島 (校注) (1992). 新日本古典文学大系 堤中納言物語 とりかへばや物語 岩波書店
- 佐倉智美 (2006). 性同一性障害の社会学 現代書館
- Sánchez, F. J., & Vilain, E. (2009). Collective Self-Esteem as a Coping Resource for Male-to-Female Transsexuals. *Journal of Counseling Psychology*, **56**, 202-209.
- 参議院 (2008). 議案情報 第 169 回国会 議案審議情報 性同一性障害者の性別の取扱

- いの特例に関する法律の一部を改正する法律案 2008年6月18日 〈<http://www.sangiin.go.jp/japanese/joho1/kousei/gian/169/meisai/m16907169021.htm>〉.
- 佐々木 掌子 (2007). トランスジェンダーの性的自己形成に関する研究——ジェンダー・アイデンティティに寄与する要因—— 性研究会議会報, **19**, 24-36.
- 佐々木 掌子 (2011). 性同一性障害当事者におけるジェンダー・アイデンティティを高めるストレス・コーピングスタイル 心理臨床学研究, **29**, 269-280.
- 佐々木 掌子・尾崎 幸謙 (2007). ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成 パーソナリティ研究, **15**, 251-265.
- 宗田 直子・岡本 祐子 (2005). アイデンティティの発達をとらえる際の「個」と「関係性」の概念の検討——「個」尺度と「関係性」尺度作成の試み—— 青年心理学研究, **17**, 27-42.
- 総務省行政管理局 (2004). 法令データ提供システム 2004年9月13日
〈<http://law.e-gov.go.jp/htmldata/H15/H15HO111.html>〉
- Sánchez, F.J., & Vilain, E. (2009). Collective self-esteem as a coping resource for male-to-female transsexuals: *Journal of Counseling Psychology*, **56**, 202-209.
- Stoller, R. J. (1964). A contribution to the study of gender identity. *The International Journal of Psycho-analysis*, **45**, 220-226.
- 杉村 和美 (1998). 青年期におけるアイデンティティの形成——関係性の観点からのとらえ直し—— 発達心理学研究, **9**, 45-55.
- 杉山 貴士 (2006). 性的違和を抱える高校生の自己形成過程——学校文化の持つジェンダー規範・同性愛嫌悪再生産の視点から—— 技術マネジメント研究 (横浜国立大学), **5**, 67-79.
- 荘島 (旧姓 涌井) 幸子 (2006). 「望む性」を生きる自己の語られ方——ある性同一性障害者の場合—— 質的心理学研究, **5**, 27-47.
- 荘島 幸子 (2007). ある性同一性障害者の自己構築プロセスの分析——同一トランスクリプトによる知見の羅生門的生成—— 京都大学教育学部研究科紀要, **53**, 206-219.
- 荘島 幸子 (2008a). トランスジェンダーを生きる当事者と家族——人生イベントの羅生門的語り—— 質的心理学研究, **7**, 204-224.
- 荘島 幸子 (2008b). 「私は性同一性障害者である」という自己物語の再組織化過程——自らを「性同一性障害」と語らなくなったAの事例の質的検討—— パーソナリティ

- 研究, **16**, 265-278.
- 荘島幸子 (2009). ある「性同一性障害」者の心理的・関係構造モデル——くいちがい・つなぎ・はなれの3つの上位モデルの生成—— 京都大学大学院教育学研究科紀要, **55**, 337-350.
- 荘島幸子 (2010). 性別の変更を望む我が子からカミングアウトを受けた母親による経験の語り直し 発達心理学研究, **21**, 83-94.
- 庄野伸幸 (2001). 心理検査からみた性同一性障害 ロールシャッハ研究, **5**, 29-42.
- 丹波めぐみ・大森秀之・人見一彦 (2007). 青年期女性の性同一性障害の2症例——ロールシャッハ・テストとHTPPによる考察—— 近畿大医誌, **32**, 45-55.
- 谷冬彦 (2001). アイデンティティ・ステイタス・パラダイムに対する批判的検討 (I) ——基本的問題—— 神戸大学発達科学部研究紀要, **9**, 31-39.
- Troiden, R. R. (1979). Becoming homosexual: A model of gay identity acquisition. *Psychiatry*, **42**, 362-373.
- Troiden, R. R. (1989). The formation of homosexual identities. *Journal of Homosexuality*, **17**, 43-73.
- 塚田攻 (2006). 性同一性障害の臨床 精神科, **9**, 236-241.
- 都築忠義 (2006). 性同一性障害の心理・社会的問題 精神科, **9**, 242-245
- Udeze, B., Abdelmawla, N., Khoosal, D., & Terry, T. (2008). Psychological functions in male-to-female transsexual people before and after surgery. *Sexual and Relationship Therapy*. **23**, 141-145.
- 梅宮れいか (2005). 性同一性障害 (女→男) における医療環境の問題点 福島学院大学研究紀要, **4**, 41-45.
- 渡部桃子 (2002). トランスジェンダーとは——その歴史と、その可能性—— アメリカ研究, **36**, 75-89.
- Whitbourne, S. K. (1986). *Adult's development* (2nd ed.). New York: Praeger Publishers.
- World Health Organization (2001). International Classification of Functioning, Disability and Health (ICF) (<http://www.who.int/classifications/icf/en/>) (29 March 2010)
- 山根望・名島潤慈 (2006). 性同一性障害 (GID) に関する心理的研究の近年の動向 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, **21**, 231-247.

謝 辞

本論文の構想から執筆に至るまで、目白大学心理学研究科心理学専攻教授の沢崎達夫先生より、的確かつ細やかなご指導を賜りました。研究の推進や論文の執筆等に関する先生とのやりとりは、筆者に大きな安心と活力を授けてくださいました。厚く御礼申し上げます。また、同大学教授の渡邊勉先生、小池眞規子先生、小野寺敦子先生、渋谷昌三先生、庄司正実先生、黒沢幸子先生、東京大学医学系研究科助教の森俊夫先生にも感謝の意を表したいと思います。先生方の率直なご意見やご質問、ご感想等により、本論文の独創性と限界を客観的かつ多角的に知ることができたとふり返っています。

性別違和を有する方々を取り上げた心理学的研究を始めてから、はや 9 年が経ちます。この長い道のりをいつも温かく見守ってくださっているのは、埼玉大学教育学部教授の澤崎俊之先生です。埼玉大学に入学してから 10 余年、弛まぬ敬愛をここに記します。そのほか、埼玉大学教育学部人間発達科学課程（現在は教員養成課程に統合）および目白大学心理学研究科臨床心理学専攻の先生方や同輩・後輩からも、様々な形でご支援ご声援を賜りました。心より感謝しております。

本論文を構成している研究のうち、質的研究では、性別違和を有する 44 名の方が面接調査に協力してくださいました。平時は自ら口にしたいと思わないような過去のつらい体験や苦悩までも話すことを快諾し、貴重な語りを提供してくださったことに深謝し、その勇気に敬意を表します。性別違和を有することで経験することとなった艱難辛苦とそれを凌駕する生きる喜び、生きるために力を尽くすひたむきな想いが、多様な性に寛容な社会実現の礎となっていくことを切に願います。

質問紙調査の実施に際しては、よりよい共生社会の実現に向けて尽力されている日本各地の当事者自助団体ならびに性別違和を有する当事者各位から、絶大なるご協力と力強いご声援を賜りました。各団体名と主な活動地域を列記し、感謝の意を表します。COM らっど（北海道）、スクランブルエッグ（青森県）、岩手レインボー・ネットワーク、性と人権ネットワーク ESTO（秋田県）、一般社団法人 gid.jp 日本性同一性障害と共に生きる人々の会（北東北支部（岩手県）、東京支部、東海支部（愛知県）、関西支部（大阪府）、中国支部（広島県）、九州支部（福岡県、鹿児島県）、沖縄支部、特定非営利活動法人 GIDmedia（東

京都), 特定非営利活動法人 LGBT の家族と友人をつなぐ会 (東京都), 特定非営利活動法人 ReBit (東京都), トランス☆プロジェクト (東京都), FTM マガジン laph, SDG にいがた, レインボー金沢, まんまるの会 (京都府), トランスジェンダー生徒交流会 (京都府), 特定非営利活動法人 Japan GID Friends (大阪府), G-FRONT 関西 (大阪府), れいんぼ一神戸, SAG 徳島, 黒船 CREW GID 長崎, そのほか匿名希望 7 団体。ご活動のさらなるご発展を祈念しております。

性別違和との出会いから得ている最も大きな学びは, “多様性” という名の, 果てのない広がりを持つ豊かさであり, それは “性別” という要素に限らないもののように思われます。様々な社会に生きる人々が各個の独自性を生き活きと発揮し, 誇りを持って輝いていられるような未来の到来を祈っています。大きな “夢” かもしれませんが, これからもその実現に身を捧げ続けていくことを誓い, これで本論文の筆を擱きたいと思えます。

【問1】 あなたのご年齢について、空欄に書き入れて回答してください。

年 齢		歳
-----	--	---

【問2】 あなたの身体的性別について、空欄に書き入れて回答してください。

(ここでいう身体的性別は、あなた出生時に指定された(戸籍上の)性別、性染色体によって判定される性別、あなたの生来的な身体的特徴に反映されている性別 等のことを指しています)

身体的性別	
-------	--

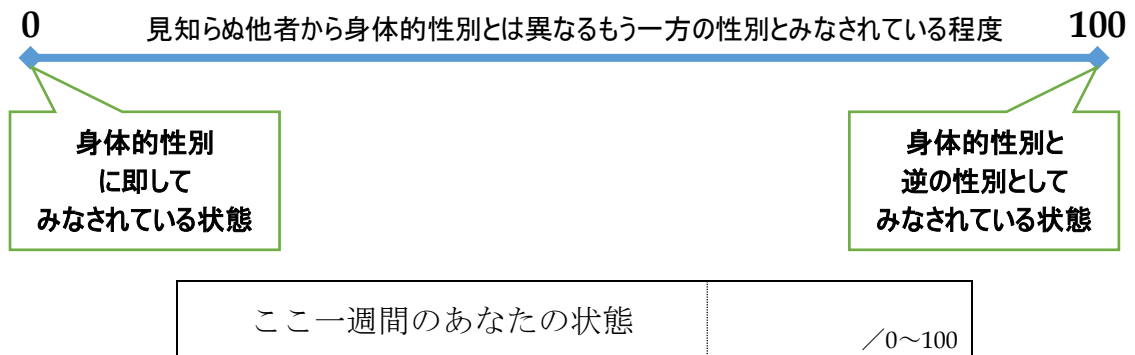
【問3】 あなたは性自認と身体的な性別との不一致(性別違和感)を軽減させるための医学的治療を、どの程度受けていますか。 以下に代表的な治療法をいくつか挙げていますので、 「1. すでに終えている」「2. 現在治療中」「3. 今後受ける予定」 「4. 自分には不要(含 治療中止・治療不可)」のうち、 最も今のあなたの状況にあてはまる数字を選んで ○印をつけて答えてください。	すでに 終えている	現在 治療中	今後 受ける 予定	(治療 中止・ 治療 不可) 自分には 不要
(1) 精神療法(ジェンダー・クリニックの通院等)	1	2	3	4
(2) ホルモン治療(筋肉注射、錠剤、ジェル等の別は不問)	1	2	3	4
【3】から【8】までは身体的性別が「男性」の方におききます。 出生時の身体的性別が「女性」の方は、【9】に進んでください				
(3) 変声術(甲状軟骨形成術)	1	2	3	4
(4) 豊胸術	1	2	3	4
(5) 精巣摘出術	1	2	3	4
(6) 陰茎切除術	1	2	3	4
(7) 造脘術	1	2	3	4
(8) 外陰部形成術	1	2	3	4
【9】から【14】までは身体的性別が「女性」の方におききます。 出生時の身体的性別が「男性」の方は、【問4】に進んでください				
(9) 乳房切除術(通称: 胸オペ)	1	2	3	4
(10) 卵巣摘出術	1	2	3	4
(11) 子宮摘出術	1	2	3	4
(12) 尿道延長術	1	2	3	4
(13) 膣閉鎖術	1	2	3	4
(14) 陰茎形成術	1	2	3	4

【問4】 性別もそれ以外もすべて含めた“あなた自身” についてうかがいます。以下の各項目はどのぐらい 今のあなた自身 にあてはまりますか。 「1. 全くあてはまらない」～「7. 非常にあてはまる」 のなかで、もっともあてはまると思う数字を選び、 ○印をつけて教えてください。		全 く あ て は ま ら な い	ほ と ん ど あ て は ま ら な い	ど ち ら か と い う と あ て は ま ら な い	ど ち ら と も い え な い	ど ち ら か と い う と あ て は ま る	か な り あ て は ま る	非 常 に あ て は ま る
1	自分は周囲の人々に自分のことをよく理解されていると感じる。	1	2	3	4	5	6	7
2	性別移行を始める前の自分をなくしてしまったように感じる。	1	2	3	4	5	6	7
3	自分が何を望んでいるのかわからなくなることがある。	1	2	3	4	5	6	7
4	自分が何をしたいのかよくわからないと感じるときがある。	1	2	3	4	5	6	7
5	現実の社会の中で、自分らしい生活を送れる自信がある。	1	2	3	4	5	6	7
6	いつのまにか自分が自分でなくなってしまうような気がする。	1	2	3	4	5	6	7
7	本当の自分は人には理解されないだろう。	1	2	3	4	5	6	7
8	自分がどうなりたいたのかはっきりしている。	1	2	3	4	5	6	7
9	現実の社会の中で自分の可能性を十分に実現できると思う。	1	2	3	4	5	6	7
10	生来的性別に沿って生きていた頃の自分を過去に置き去りにしてきたような気がする。	1	2	3	4	5	6	7
11	現実の社会の中で、自分らしい生き方ができると思う。	1	2	3	4	5	6	7
12	自分の人生において、自分のすべきことがはっきりしている。	1	2	3	4	5	6	7
13	「生まれてから今までに一貫するような自分はない」と感じることもある。	1	2	3	4	5	6	7
14	今のままでは次第に自分というものの一貫性を失ってってしまうような気がする。	1	2	3	4	5	6	7
15	自分が望んでいるあり方がはっきりしている。	1	2	3	4	5	6	7
16	自分がありのままに能力を発揮できる場所は社会にはないような気がする。	1	2	3	4	5	6	7
17	人に見られている自分と本当の自分は一致しないと感じる。	1	2	3	4	5	6	7
18	自分らしく生きてゆくことは、現実の社会の中では難しいだろうと思う。	1	2	3	4	5	6	7
19	自分のまわりの人々は、本当の私をわかっていないと思う。	1	2	3	4	5	6	7
20	人前での自分は、本当の自分ではないような気がする。	1	2	3	4	5	6	7

【問5】 あなたの社会生活が身体的性別に基づくものから 性自認に沿った性別によるものへと移行していく中で、 以下のような変化はあなたにどのくらい生じましたか。 「0. 全く経験しなかった」～「5. 非常に強く経験した」 までで、あなた自身にもっともあてはまると感じる数字に ○印をつけてごたえてください。		全く 経験 しな かつ た	ほと んど 経験 しな かつ た	あ ま り 経験 しな かつ た	ま あ ま あ 経験 した	強 く 経験 した	非 常 に 強 く 経験 した
1	人生において重要なものの優先順位が変わった	0	1	2	3	4	5
2	自分が生きている価値を改めて考えた	0	1	2	3	4	5
3	新たな事柄に興味を持つようになった	0	1	2	3	4	5
4	自分を信頼する気持ちが持てるようになった	0	1	2	3	4	5
5	神秘的なことへの関心が深まった	0	1	2	3	4	5
6	問題に直面したとき、人を頼りにしてもいいということがわかった	0	1	2	3	4	5
7	新たな自分の生き方が見つかった	0	1	2	3	4	5
8	他の人たちに親密感を持つようになった	0	1	2	3	4	5
9	自分の気持ちを出そうと思えるようになった	0	1	2	3	4	5
10	自分は困難に立ち向かうことができるとわかった	0	1	2	3	4	5
11	自分の人生に対してより良く取り組めるようになった	0	1	2	3	4	5
12	物事の結末を、うまく受け入れられるようになった	0	1	2	3	4	5
13	一日一日を大切に思えるようになった	0	1	2	3	4	5
14	この体験なしにはありえなかったような新たなチャンスに恵まれた	0	1	2	3	4	5
15	他者に対して、より思いやりの気持ちが強くなった	0	1	2	3	4	5
16	今ある人間関係を大切にしようと努力した	0	1	2	3	4	5
17	変化の必要な事柄について、 自ら変えていこうと試してみるようになった	0	1	2	3	4	5
18	宗教的な気持ち（人の力を越えたものを信じる気持ち）が 強くなった	0	1	2	3	4	5
19	思っていたよりも自分は強い人間だということがわかった	0	1	2	3	4	5
20	人間のすばらしさを強く実感した	0	1	2	3	4	5
21	自分が他の人たちを必要としていることがわかった	0	1	2	3	4	5

		全くあてはまらない	ほとんどあてはまらない	どちらかというにあてはまらない	どちらともいえない	どちらかというにあてはまる	かなりあてはまる	非常にあてはまる
【問6】	以下の各項目はどのぐらい 今のあなた自身 にあてはまりますか。 「1. 全くあてはまらない」～「7. 非常にあてはまる」 のなかで、もっともあてはまると思う数字を選び、 ○印をつけて教えてください。							
1	過去において、自分の性別に自信がもてなくなったことがある。	1	2	3	4	5	6	7
2	自分が身体的性別とは異なるもう一方の性別として望んでいることがはっきりしている。	1	2	3	4	5	6	7
3	現実社会の中で、身体的性別とは異なるもう一方の性別として自分らしい生き方ができると思う。	1	2	3	4	5	6	7
4	過去において、自分の性別をなくしてしまったような気がする。	1	2	3	4	5	6	7
5	自分が身体的性別とは異なるもう一方の性別としてどうになりたいのかはっきりしている。	1	2	3	4	5	6	7
6	現実社会の中で、身体的性別とは異なるもう一方の性別として自分らしい生活が送れる自信がある。	1	2	3	4	5	6	7
7	いつからか自分の性別がわからなくなってしまったような気がする。	1	2	3	4	5	6	7
8	自分が身体的性別とは異なるもう一方の性別としてすべきことが、はっきりしている。	1	2	3	4	5	6	7
9	人に見られている自分の性別と本当の自分の性別は一致していないと感じる。	1	2	3	4	5	6	7
10	現実社会の中で、身体的性別とは異なるもう一方の性別として自分の可能性を充分に実現できると思う。	1	2	3	4	5	6	7
11	今のままでは次第に自分の性別がわからなくなっていくような気がする。	1	2	3	4	5	6	7
12	身体的性別とは異なるもう一方の性別としての自分は、人には理解されないだろう。	1	2	3	4	5	6	7
13	身体的性別とは異なるもう一方の性別として自分らしく生きてゆくことは、現実の社会の中では難しいだろうと思う。	1	2	3	4	5	6	7
14	自分の性別に迷いを感じることもある。	1	2	3	4	5	6	7
15	人前での自分の性別は、本当の自分の性別ではないような気がする。	1	2	3	4	5	6	7

【問7】 あなたは現在、見知らぬ他者からどのくらい身体的性別とは異なるもう一方の性別とみなされていますか（身体的性別が男性ならば女性，身体的性別が女性ならば男性）。身体的性別に即してみなされている状態を「0」、身体的性別と逆の性別としてみなされている状態を「100」とし、ここ一週間あまりの自分の状態を示すのに最も適切な数字を「0」～「100」までのなかから選び、空欄に書き入れて回答してください。



【問8】 あなたは現在、どのくらい自分の性自認（必ずしも男・女のどちらかに振り分けられないあなた独自の本来のもの）に沿った日常生活を送れていますか。全く送れていない状態を「0」、完全に送れている状態を「100」とし、ここ一週間あまりの自分の状態を示すのに最も適切な数字を「0」～「100」までのなかから選び、空欄に書き入れて回答してください。

